
閃光のアシュマ 第十三話 美しき世界

高岡 佳史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光のアシユマ 第十三話 美しき世界

【Nコード】

N4548K

【作者名】

高岡 佳史

【あらすじ】

オロは混沌としたアヘイビア大陸、オロ・エバス国に帰ってきた。

そして、新たなマスケド『エルファの騎士団』が……。

一方、イーハンでもクーデターが。

こちらマスケド『クロダの六人衆』が暗躍する。

SF剣戟冒険アドベンチャー、新シリーズオロ編三部作の三、

閃光のアシユマ『第十三話 美しき世界』ただ今参上！

主な登場人物

アシユマ・アトー

本名をアシユマ・アトー・ショアク・アシユオンと言う。
かつて地球を訪れたイムフレールと呼ばれる来訪者の残した人造生命体でもある。

無類の武器、『鬼虎』と言う刀を持つ。

アシユマはその鬼虎の生きたインターフェイスらしい。

『鬼虎』とは万人殺しの妖刀の異名を持つ無と有を行き来する驚異的な武器だ。

日本刀の形を取っている。

剣の腕は当代随一、体術は達人級。

特に刀を良くこなし、並ぶ者の無い程の武術の達人。

剣聖と言っても良い。

年の頃は二十四〜五。

これは生年月日があやふやな為である。

謂れの無い事には敢然と立ち向かい、怒ると何でも真つ二つにする怖い男でもあったが

アーチエルにとっては優しい夫である。

アーチエル・ナヴィア・アトー。

この少女、本名をアーチエル・ナヴィア・アトー・ショアク・アシユオンと言った。

元、レキシタニア王国の第一王女。

破壊の権化、バヴェルの正に鍵であった少女。

今は、愛するアシユマの妻。

と、同時にアシユマが暴走しない為のストッパーでもある。

どこまでも真っ直ぐな、豊かで美しい栗色の髪の毛を持ち、長く密度の高いまつ毛と黒目がちの大きな瞳を持ち合わせた美しい眼は遙か彼方を見つめ、潤って張りのある形の良い薄紅色の唇はきゅつと真一文字に引き締められて、人形の様と形容される程の美形の少女。

凜として、可憐で、儂げで、等とよく形容される。

こちらにもイムフレールの残した生命体。

オルバニアン・マグマイヤー

ノリトレア王家王位継承者第二位であるルーラン・ナル・テルドリニアナがその正体であり、アルステインの義理の弟に当たる。

王位継承者なのだが、今は王位継承権をかなぐり捨てて、武者修行を兼ねた賞金稼ぎとなっている。

刀と銃両方にいい勘働きを發揮し、また、魔導機兵に乗らせれば右に出る者がいない程の操縦センスを見せる。

好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事ははっきり言う性格。

口の悪いのがタマに傷。

戦利眼なる特殊な能力を持つ大剣使いの少女である。

顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れる筈であ

る。

リイナとは喧嘩友達でもある。

アルステイン・エト・テルドリニアナ

ノリトレア王国の国王である。

年の頃は二十七。

頭は切れるが変わり者の王である。

また、国民に善政を敷き人気は高い。

その正体は義賊ダスト・モンキーことヨディ・ヨフルである。

エファール・マーヤ・テルドリニアナ

ノリトレアの王妃である。

未だにアルステインをヨディと呼ぶ。

先のドートネーゼ紛争での英雄の内の一人である。

今では二人の間に子を生している。

息子のアシュオンだ。

これは、アシュマの名からとった物。

アシュオン・ラト・テルドリニアナ

アルステインとエファールの子。

エファール等は目に入れても痛くない程の可愛がり様だそうだ。

キュポア・メロディア・アップルトン

レキシタニア王国の第二王女。

アーチェルの実妹である。

常にお転婆だが、時に弱い部分も見せる。

物事をずばずば言うが、心根は優しい少女である。

最近はそのいう事は減ったが多少我侭な所もある。

最近見合いをし、シュンマ・イーハニアと将来を誓い合う。

今はシュンマと恋を謳歌している。

シュンマ・イーハニア

イーハン国の皇太子。

イーハン国がクーデターで政権を奪われていた時はハルマ・イコナと名乗っていた。

ちなみにイコナは母方の姓である。

魔法に造詣が深く、剣の腕も達者である。

非常に温厚であり、日向を思わせる微笑が印象的な美青年である。
アルステインの実弟でもある。

キュポアと恋仲であり将来を誓い合った仲でもある。

リイナ・アナン

体に似合わず大振りで鉦の様なククリを使う。

その正体はイレギュラーナンバーで戦闘のセンスに関してはもしかしてアシマの次に実力があるかもしれない少女である。

が、今は戦闘の一線からは身を引いている。

戦闘の一線から身を引いた事が悔やまれる所ではある。

それ以外、はっとする様な美少女である。

この少女、二重人格であり、優しい可憐な少女の時もあれば、寡黙でそのくせ口を開けば口が悪く性悪に見える事もあるが性根はとても優しい。

アルミナとは喧嘩友達でもある。

アールヌー国のレンヌ王子とは中々良い仲であるが、その事をからかわれると泣く。

レンヌ・アデュニ

スラリと背が伸び、褐色の肌と相まってエキゾチックな美少年。

アールヌー国の第二王子であるが実質的な後継者。

これは兄のディーヌ・アデュニ第一王子が王位継承権を放棄した為である。

時に喧嘩もするがリイナとはとても仲の良い恋仲にある。

召喚術を得意としている。

ディーヌ・アデュニ

アールヌー国の第一王子。

王位継承権は自ら放棄。

未来を見通せる特殊な力を持っている。

アルルマ・サンファ

アル・プリズンに投獄されていたテレパシストの少女。
アシュマ達と行動を共にする。

ミカ・タキオ

スコラの優等生。

アシュマと同じイーハンのタマン島出身。

アーチエルとは親友関係にある。

ジークフリート・シュヴァイツァーと、言う将来を誓い合った恋人がいる。

非常に他人想いの所がある。

ジークフリート・シュヴァイツァー

アルミナと同じく身の丈程もある大きな剣を遣う。

剣の腕も確かである。

ただ、アルミナ曰くアシュマに輪をかけた寡黙さと無愛想さで周りからは誤解されがちであるが、ミカには優しい彼氏であるらしい。

アン・デボン

元々はアップルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチエルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。

ただし本人はアーチエルのお側にいられるだけで幸せらしい。

アーチエルの姉的存在でもある。

いまは、ガンロクに身も心も捧げている。

アリシアナ・コクレト。

黒龍号のメカニック担当。
程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持っている。
鼻筋の通った中々の美人でもある
良くも悪くも軍人氣質。

ガンロク

本名は誰にも分からない。

身の丈は二メートルを軽く超えるが意外と起用で剣の腕も中々鋭い。

その腕は実質的な師匠のアシユマも認める所である。

ビツシュ・ノマン

アシユマの古い友人。

今はノリトレアの練武館の道場主。

腕は立つ。

フィナ・ノマン

ビツシュ・ノマンの妻。

以前はビツシュの一番弟子だった。

アバヤイ老人

アシユマの道場の師範代。

と、言っても形ばかり。

腕の方は平凡な物。

しかし人格者でそちらの方で師範代に。

イッテツ。

通称「オヤッサン」

本名は不明だ。

現代の名工とも呼ばれる。

常にあ戦的な武器を打ち続ける。

かと思えば、日用的な包丁とかも打っている。

性格は頑固一徹。

何にも妥協を許さない。

アシュマがスコラ移転に伴って、オロ本社から密かにスカウトした。

今では（何故か）王立王宮公園広場の一角に工房を開いている。

ショウマ・イーハニア

イーハンの王。

シュンマの父親。

善王。

カオルコ・イーハニア

イーハンの第一皇女。

シュンマの姉。

ロンギ・ターフリ

ノリトレアの首相。

ダ・アヒ

クーロン共和国政府の外務次官。

オロ・エバス

汎用型電脳装置等の基本OSを作つて財を成し、今では、鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器等も取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、世界をその指で動かせるのではないかと噂される程の人物。

ナナル・エコリコ

オロの愛人。

オロとドートネーゼとのパイプ役。

ドートネーゼ側の人間。

ヨナルト・リング

ノリトレアのクーデターの首魁。

アイル・マフ・テルドリニアナなる幼女を王位に就け、自身は傀儡を操る者として君臨。

シュニク・インジャ

イーハンのクーデターの首魁。

マスクド、クロダの六人衆のマスター。

ヨナルト率いるノリトレアと軍事同盟を結ぶ。

ウフエイトウ

白羊鬼なるを持つ剣を持つマスクド。

エルファの騎士団のリーダー。

同じマスクドのウシャトウの兄。

ギバ

金牛鬼なるウォーハンマーを操るマスクド。

力は強い。

エルファの騎士団の一人。

サイファイ

同じマスクド、ワラシーの双子の兄

双児鬼なる二刀を持つ。

エルファの騎士団の一人。

ワラシー

同じマスクド、サイファイは双子の兄。
双児鬼なる二刀を持つ。

エルファの騎士団の一人。

ウデイガア

巨蟹鬼なる戦斧を持つ。
こちらも力自慢。

マスクド。

エルファの騎士団の一人。

シャケルウ

獅子鬼なる大槍を使う。

エルファの騎士団の一人。

マールー

処女鬼なるレイピアを使う。

エルファの騎士団の一人。

ナトイゲフル

天秤鬼なる金剛棒を使う。
エルファの騎士団の一人。

ウシャトウ

天蝸鬼なる剣を使ってくる。
エルファの騎士団、リーダーのウフエイトウは実兄。

ナイゲル

人馬鬼なる剣と弓矢を使ってくる。
エルファの騎士団の一人。

レトウ

磨羯鬼なる鎌を使ってくる。
エルファの騎士団の一人。

イラ

宝瓶鬼。スモールソードとスモールシールドを使う。
エルファの騎士団の一人。

ウゴグロフ

双魚鬼なる大剣クレイモアを使ってくる。
これも力自慢。

エルファの騎士団の一人。

シシオウ

天餓鬼と言う二刀の忍者刀（直刀）を操る。
マスケドの、クロダの六人衆の頭目。

エヴユ

地餓鬼と言う鎖鎌を操る。
クロダの六人衆の内の一人。

アジャオ

水餓鬼と言う手槍を操る。
クロダの六人衆の内の一人。

オクナフ

火餓鬼と言う大刀を操る。
クロダの六人衆の内の一人。

キエラ

風餓鬼と言う鞭を操る。
女。

クロダの六人衆の内の一人。

ナイシー

金餓鬼と言う鉤爪を使う。
クロダの六人衆の内の一人。

序節 ノリトレアの庭にて……

王宮の一角、星屑のテラスと呼ばれる所で二人の男女が、歓談をしながら茶会を開いていた。

一人は見目麗しい青年で、もう一人は壮年の女性であつた。その青年が口を開く。

「まあ、仕方ないでしょう」

「勝手に決めてしまつても、構わない物でしょうか？」

壮年の女性は不安げである。

カップを手に取る。

「それこそ仕方ないでしょう。あれだけの事をしてのけて、理事でいられないでしょう」

青年もカップを手に取り茶をすする。

カップを置いて壮年の女性の目を見据える。

「そうですね。理事会での結論も一致していますし、あなたが理事長になつて頂ければ、これ程心強い事はないでしょうから」

二人が話しているのは、スコラの理事長オロ・エバスの事だ。

と、なると、この事を話し合っているのはノリトレアの国王であり、理事長代理のアルスティーン・エト・テルドリニアナ。

そしてもう一人は、スコラの校長、ミス・ケリー・サトウ、その人である。

議題はスコラの理事長、オロ・エバスの理事長解任に関して。

彼はスコラの理事会に議題として取り上げられ、理事会一致で理事長の座から追われていた。

原因は先のオロ・エバスによる、様々な事変によるものである。彼は様々な国に侵略行為をしたし、人の命も多数奪っていた。理事長ではいられないのは自明の理である。

そして、オロ・エバス国は依然として存在をしていた。

重役達による合議制を取つて、アヘイビア大陸に君臨していたの

である。

「しかし、オロ理事長……もう理事長ではありませんでしたわね。オロ氏にも困った物ですわね」

ミス・ケリー・サトウが嘆息をつく。

手に持ったカップに目を落とす。

「おや？ 校長にしては御優しい。困ったところでは無いでしょうに。かなり今回は困りましたね。バヴェルまで持ち出して。そして最後はドロンぱあ。ホント今は、何処の空でしょうなあ」

アルステインが手でポーズを作る。

目まで瞑つてみせる。

オロに同情はしていないようだ。

「そうですね。ところで、どうでしょう？ 理事長代理。この際ですからスコラを、ノリトレアに移転すると言うのは。理事会も異論はでないでしょうし」

ミス・ケリー・サトウの提案だ。

今の悪いイメージを払拭したいらしい。

「その点は、もう一度理事会に正式に掛けた方が、良いかもしれないですね。今ここで決めてしまうと、どうしても、裏で全てを決めてしまふと言う様な印象を持たれかねない」

アルステインが一言言い添える。

そのように思われることは本意ではないのかもしれない。

スコラをノリトレアに移転することに賛成だとしても。

アルステインに決断力がないわけではない。

民意を尊重しているのだ。

「そうですね。そうですね」

ミス・ケリー・サトウは、ティーカップを口に運びながら言った。納得したらしい。

「それにしても、アルステイン様。貴方は本当に立派になられて。腰が据わったというか、地に足が付いたというか」

頼もしく思ったらしい。

確かにアルステインは王になり立場も変わった。

それが今のアルステインを形作っているのかもしれない。
善き形で。

「ははは。お褒めに預かり光栄の至り」

アルステインは、少しおどけて、言ってみる。

照れているのである。

アルステインはその性格として褒められると照れるというのが
ある。

今もそうだ。

わざとおどけてみせる。

「そうやっておどける所は、変わりませんね」

ミス・ケリー・サトウは目を細めて微笑む。

アルステインを見つめる。

「校長も相変わらずで」

アルステインも返す。

その時、一人の女性がやって来た。

「あら、校長。いらっしやい」

飾らない言葉で喋り、ミス・ケリー・サトウの来訪を喜ぶ者、アルステインの妻、エファール王妃である。

アルステインの傍らに立つ。

「これは、王妃。お邪魔をしております」

ミス・ケリー・サトウが畏まる。

「あら、王妃だなんていいのよ。エファールで。そう呼んで頂戴な」
気さくだ。

出自は貴族なのだが、構える所がない。
そういうことが嫌いなのである。

「はあ。王妃がそれで、良いのなら」

ミス・ケリー・サトウは気を抜かれる。

一国の王妃だ。

それで良いのかと思う。

「良いの。そちらの方が。で、話は纏まとまったの？ ヨディ」
エファールはアルステインに寄りかかる。

「そうですね。僕がスコラの理事長になりそうです。そしてスコラはノリトレアに移転する事になりそうです」

アルステインが報告する。

エファールにとって内容は少し驚くような内容だ。

「まあ！ そうなの？」

事実エファールは驚いた。

特に理事長の件だ。

エファールはアルステインが理事長など出来るのかと疑問視する。

エファールにとってアルステイン（ヨディ）はおちゃらけ大王なのである。

「ええ」

アルステインはそれを知ってか知らずか涼しい顔で首肯する。
アルステインがそれを望んでいるのかいないのかそれは不明だ。
ただ、担がれただけなのかもしれない。

「何処に？」

エファールの興味はスコラがノリトレアのどこに移転するのに
何処にそんな場所があるのか。

いや、土地ならばあるだろう。

だが、何処に移転するのか、その事に興味がいった。

「今の所、この、王立王宮公園広場の一角が、候補地です。まだ、
完璧に決まった訳じゃ、ありませんがね」

意外な場所を言う。

王宮の目と鼻の先ではないか。

確かに王立王宮公園ならば広大な土地があるだろう。

「あらまあ。随分と近場になった事。何で又？」

エファールは、軽く驚いてみせる。

ただ土地があるだけでは理由にならない。

その理由は何だろう。

「魔導地政学的な物や、東洋風水学的に見て良いのだそうですよ」
理由が言われる。

エファールにとっては馴染みの薄い理由である。

「何？ フースイって？」

特にこの言葉は訊いたことがない。

「都市、住居、建物、墓等の位置の吉凶禍福を決定する為に用いられてきた、氣の流れを、物の位置で制御する思想だそうですよ。ク
ーロン由来ですがね」

アルステインが解説をしてみせる。

「ふうん」

エファールは興味なさげに視線をそらす。

理由には興味がないらしい。

「ま、そういう事です」

アルステインが静かに言う。

「それより私も、お茶を頂こうかしら」

そう言って、エファールは呼び鈴を鳴らした。

その後、アルステインは、理事会の承認を受けて、正式にスコ
ラの理事長になった。

そして、スコラのノリトレアへの移転も、正式に決まった。

設計の段取りも決まり、今では、パイルバンカーの音が、けたた
ましく鳴り響く毎日である。

しかし、その間も生徒には休む暇は無い。

生徒達は校舎が出来るまでの間、野外授業と言う事になった。

勿論その中には、ミカ・タキオや、サクラコ・セタ。

エミル・フォルテにリイナ・アナン、キュポア・メロディア・ア
ツプルトン。

そしてアーチェル・ナヴィア・アトーの顔があった。

公園の大きな木の木陰が落ちる芝生の上で、移動式の黒板を持ち出して、今は魔法学の授業の様だ。

他には、王宮の一部を開放して授業をして、生徒を受け入れもした。

講師は、何と、アシュマ・アトーだ。

「もう、周知の事と思うが、魔力の元は念であり、その念の元は気である。しかし、その気は、東洋気学の言う所の臍^{せいかたんでん}下丹田で、気を錬る事は、あまり知られていない。そこで今日は、気を錬る事から始める」

ホワイトボードに人間の概略図を描き、下腹部の辺りに螺旋を描く。

臍下丹田とは臍の下あたりである。

気はそこで練るのである。

東洋気学の考え方が元にある。

「ええ？ 今更嫌ですわ。そんな泥臭い事」

露骨に嫌がるのは、サクラコだ。

確かに泥臭い。

「何にもまして、基礎と言うのは、大事な事だ。文句言わない。やるぞ」

アシュマは宣言する。

そして実行に移す。

立って腰を落として、呼吸をする。

ただ呼吸をするのではない。

鼻から吸い込んで深く息をして口からゆっくり吐く。

皆はアシュマの真似をするところから始めた。

アシュマ達の授業を、遠くで見る眼があつた。

王宮の外れのテラスであつた。

アルステーンと、エファールである。

「あら、懐かしいわね。ついこの間まで、ああやって授業をしたものね」

エファールが目を細めて言う。
想いを遠く馳せる。

「おや？　今から講師として、復帰してもいいんですよ？　エファさん」

アルステインがエファールに振り返る。

少し挑発の意味合いもある。

揶揄して言っているのだ。

なれるものならなってみろ。

そうにも聞こえる。

「それにしても、随分と自主退学する生徒が出たものね？　予想の外じゃなくって？」

それは事実である。

スコラがアヘイビア大陸からノリトレアに移転するときには多少なりとも自主退学者が出た。

「それは仕方がないですよ。エファさん。元々アヘイビア大陸で設立された施設です。元アヘイビアの生徒が、多数いましたから。そうなるのは当然の帰結です」

スコラは元はアヘイビア連邦共和国のドートネーゼの出資で設立された施設だ。

それが故に入学をした生徒もいるだろう。

だが、様相が一変した。

スコラを辞める生徒が出て仕方が無いことなのかもしれない。

「そうね。そうよね。折角造った仮設住宅が、寂しそうに見えるわね」

辞める生徒の分も計算に入れて宿舎を作った。

それがかなりの数無駄になる。

それを寂しいといったのだ。

「そうですね」

アルステインはそう言ったきり、それ以上は言わなかった。

今も話題に出た仮設住宅は学生寮で、生徒はそこで寝起きをした。仮設住宅は、一棟六人住まいの造りであった。

アヘイビアに、スコラがあつた頃の学生寮と比べれば、雲泥の差だったが、生活には不自由はしなかった。

勿論今の学生寮の方が使い勝手は悪かったが。

そして、生徒の自主退学であるが、アヘイビア系の生徒が多く出た。

アヘイビアと、今言葉に出たが、今は大陸の名として残るばかりで、以前にも語ったが

国名としては、今はオロ・エバス国として成立をしていた。

重役達による合議制で、意思を決定していた。

しかし、以前の様なカリスマは薄れ、今や各地で、反乱の芽が息吹きつつあった。

王宮の一角、花咲きのテラスで、キュポアとシュンマが語り合っていた。

中々良い雰囲気だ。

この二人は見合いをして、お互いの家公認の恋人同士となり、将来を誓い合う仲となっていた。

そこに至るまで色々と紆余曲折があつた。

キュポアは泣く想いまでした。

最愛の人シュンマが死んでしまったかとも思った。

が、現在はこうして在る。

椅子に座り、茶を喫している。

誠に以て目出度い。

「のう、シュンマ。今年は臨海学校とやは、あるのかのう？」

キユポアがカップを口に運びながら言う。
キユポアは臨海学校を体験していない。
興味はある。

だが、スコラ自体が今このような調子である。
臨海学校があるとは疑わしかった。

「うゝん……校舎移転もありますし、難しいんじゃないでしょうか？」

シュンマが頭を捻る。

諸般を鑑みシュンマ自体が疑問を呈している。

「そうか。そうじゃな。わらわもそうではないかと思っておったのじゃ。少しばかり残念じゃのう」

二人が会話している中、新たに二人ばかりやって来て、会話に加わる。

レンヌとリイナだ。

「やあ、こちらにいらしたんですか」

レンヌである。

気さくに声をかける。

「うむ。こちらで茶をしていた」

キユポアが応える。

ちょうど見上げる形となった。

「何の話をしていたのだ？」

リイナが訊く。

リイナはレンヌの隣に来る。

リイナもアーチエルに負けず劣らず背が小さい。

レンヌはここ最近ですらりと背が伸びた。

シュンマと同じ程ある。

かなり身長差はある。

キユポアが見上げるわけだ。

「うむ。今年の臨海学校の事についてじゃ。わらわはまだ臨海学校なるものに、行った事がないでな。一度は、行ってみたいと思っ

ていたのじゃ。ま、来年があるかの」

興味はあるものの、諦めた感がある。

何処か呆けたような感じである。

「でも少し寂しいですね」

シュンマが言う。

シュンマも行つてはみたいと思つていたようだ。

こちら諦めた感がある。

「まあ、仕方なかる」

そこへ現れる、とある人。

スコラの教師アシュマ・アトーである。

元来は一介の剣士である。

非常勤講師のこの人物は今やスコラになくはならない人となつた。

いろいろなことに造詣が深いのだ。

「気落ちしなくて良いぞ。今年もカレーは行つそうだ」

夏の名物飯盒炊爨はんごうすいさんのカレーだ。

スコラの女子はこれに命を賭ける。

カレーを使つて目当ての男子に告白するのだ。

「ほ、本当か？」

キュポアが目を輝かして訊く。

キュポアは喜ぶ。

キュポアの目当ては臨海学校の飯盒炊爨だったからだ。

勿論告白はシュンマに。

「ああ」

アシュマが首肯する。

アシュマの話によれば、今年もカレー、決闘、ナンパ、キャンプ

ファイヤーは行つと言う。

場所は王立王宮公園広場の一角で行うと言う事の様だ。

「しかし、その前には、怖い期末試験がある？」

キュポアはその事に想いを馳せると辟易してきた。

学園に居るのは良い。

友人が居るしシユンマも居る。

その点では楽しい。

だが、学業ともなると頭が痛い思いをする。

決して頭が悪いわけではない。

寧ろ勉学は出来る方ではある。

が、好きではないのだ。

好きではないものが比較的良い成績を残す。

珍しい例である。

「俺はあまり感心せんが、期末試験は無い様だぞ？ 喜べ」

そのキュポアに向かってアシユマが言う。

アシユマは勉学の成果として試験はやったほうが良いとは思っていた。

だが、スコラ自体がこの調子である。色々と都合が悪い部分も出てくるらしい。

今新築の校舎は突貫工事で建設中である。

手抜き工事が怖いがその様な事がない事を祈るばかりである。

「何か棘のある言い方じゃのう」

アシユマは意識はしていなかった。

キュポアの自意識過剰である。

前述のとおりキュポアは勉学が嫌いである。

教師のアシユマがカレーのことを言った。

そこに引け目を感じる。

キュポアはそう言ったのは引け目の裏返しである。

「そうか？」

アシユマはきょとんとしている。

惚けて短く答える。

「おお。そうじゃわい」

キュポアはティーカップを置いて腕を組む。

大威張りで応える。

まるでアシユマを責めているようにも聞こえる。

「あら、アシユマさま。キュポアと何を話してらっしゃるの?」

アーチエルがやって来た。

このアーチエルと言うのは、アシユマの妻で、元レキシタニアの王女だった。

まだ少女と言っても良い美しい女性である。

このスコラの生徒でもある。

「ああ。カレーの話だ」

アシユマがアーチエルに振り向く。

特に前振りは無かったので、

「今晚のおかず? カレーが良いの? アシユマさま」

と、アーチエルは勘違いしてしまう。

アーチエルは至って真面目だ。

本気でそう思う。

「いや、今年は臨海学校自体が無いから、せめてカレーとキャンプファイヤーをするそうだ」

アシユマが軽く説明をする。

「あら、そちらの話?」

アーチエルは得心がいったようだ。

何も今晚のおかずの話ではない。

ちなみにアシユマがアーチエルの料理をスコラで食べようと思うのなら青龍号の中で食べなければならぬ。

アシユマもアーチエルもスコラに居るときはスコラの宿舎に泊まる。

必ずしもそうではないが。

ここだけは特別待遇だ。

「ああ」

アシユマはぶっきら棒に返事をする。

アーチエルは飯盒炊爨のカレーにはもう無縁である。

なにせアシユマに食べさせて、

「美味い」

と、言わせたのだから。

目的は達せられたわけだ。

「期末試験も無いのですよね？ 残念」

アーチエルは妹のキュポアと違って勉強が好きである。

知識欲が貪欲である。

勿論試験も好きだ。

今自分の力だどのあたりにあるのか確かめたいのだ。

勉学の成果も試したい。

それが今期ない。

残念且つ寂しい限りである。

「姉様」

キュポアが姉を咎める。

折角試験がないのである。

水を差して欲しくない。

「あらキュポア？ 嫌なの？」

アーチエルは不思議な顔をする。

アーチエルは妹が勉学が嫌いなことを意外に思った。

自分と姉妹なのだから、てつきり妹も好きなものとはかり思っていた。

「当たり前じゃ」

キュポアは多少機嫌を損ねる。

勉強好きの姉と一緒にされてはかなわない。

「楽しいじゃない？ 勉強」

アーチエルは未だに不思議な思いをする。

何が楽しくないのか。

新しいことが学べるのである。

勉強は楽しいではないか。

「楽しくないわい」

キュポアはきっぱりと否定する。

姉と一緒にして欲しくない。

余計な苦労は背負い込みたくはない。
キュポアは勉強を苦労と思っていた。

「じゃあ、何でスコラにいるの？」

当然の帰結である。

アーチエルは勉強以外の学園生活に頭が回らない。
楽しいことは沢山ある。

アーチエル自体もその恩恵に預っている。
が、思い至らない。

「スコラにいるのは楽しい」

キュポアは大真面目で答える。

「？ 変な子」

アーチエルにとっては勉強が嫌いなのにスコラに居ることが不思議でならなかった。

「変な子言うなあ！」

キュポアが頭にくる。

何もスコラは勉強ばかりする所ではないと言いたげだ。
そんな事を言われるのが心外なのである。

「そんな事よりアーチエル。何か用でも、あつたのか？」

アシユマが途中で口を挟む。

何か訳があつて声をかけたからと思つたからである。

「あつ、そうでした。教えて欲しい所があつて」

どうやら勉強を教えて欲しいらしい。

教科書を持つている。

「どれ？」

アシユマが教科書を覗こうとする。

「あ、もう少し、落ち着いた所で……」

アーチエルが教科書を後ろ手に持つ。

ここではまずいいらしい。

「そうか」

あっけらかんとして言う。

「じゃあ、キュポア。又後でね」

アーチエルがそう言って、二人は去った。

「アーチエル、何で場所を、変えるんだ？」

廊下を歩いていて。

アシュマがアーチエルの瞳を優しく見据える。

「あら、アシュマさま。気の利かない」

アーチエルはすこしおどけてみせる。

「？」

アシュマには何のことが分からない。

「ま、いいです。アシュマさまは、朴念仁なんですから」

キュポアにシュンマ。

リイナにレンヌ。

カップルである。

そつとしておいてやりたかった。

「？」

そここのところの理解はアシュマは少ない。

朴念仁と言われても仕方がない。

「ま、いいです」

アーチエルはその話題に蓋をして閉じてしまった。

これ以上話しても無駄だからである。

夏は盛りの頃を迎え、ノリトレアにも、暑い季節がやって来た。

例年なら臨海学校があるのだが、校舎移転と言う大事業があるので、それは中止。

そして期末試験も中止。

こちらは生徒に、拍手喝采を浴びた。

しかし、生徒会がせめて、カレー、（ナンパ）、（決闘）、キャンプファイヤーは残し、やろうと言う事になった。

キュポアもリイナも、今年は燃えた。

去年、カレーを渡せなかった分、力を込めて作るつもりだった。

何故ならば、カレーの洗礼を受けていないレンヌとシュンマは、建前上スコラの中では『フリー』と言う事になる。

まさかとは思うが、万が一にも自分達意外に『美味い』を言われれば、非常にまずい事になるのだ。

だから、力が入ろうと言うものだ。

そして、イベントの一日目、カレーの飯盒炊爨はんごうすいさんの日がやって来た。

「ここで、理事長からのお言葉を賜ります」

校長のミス・ケリー・サトウが言った。

ここでマイクが理事長のアルスティーンの手に渡る。

「えーでは。夏だ!!」

「おおっ!!」

「カレーだっ!!」

「おおっ!!」

「おっぱいだっ!!」

「おおっ!!」

盛り上がる男子生徒をよそに、女子学生は何を言うのかと呆れていた。

臨海学校ならまだしも、今年は海に行かないのだ。

水着になる訳ではないのだ。

おっぱいもくそも、ないのである。

それにも増してこの盛り上がり様は、一体なんなのだろう？

「諸君！ あれだけの大量のおっぱいが、たった一人の男に全部搔

つ攫われて良い物だろうか？ 否！！ 良い筈が無い！！ おっぱいは、皆等しく平等に分け与えられた物では無いだろうか？ 諸君！！」

アルステイーンは理事長のくせに馬鹿な事を言っている。

ここで言ったった一人の男とはどうやらアシュマのことらしい。どうやらやつかみ半分といったところか。

それだけアシュマがモテるということなのだが。

そこはアルステイーンも男子生徒も面白くない。

「おおっ！！」

そこで男子生徒の大半は同調するわけだ。

さらに言えば何故かアルステイーンは男子生徒の人气が高い。

アルステイーンは男前なのに一部の女子には毛嫌いされている。

助平な為だ。

「そこで諸君！ 私は提案したい！！ 七百ものおっぱいが一人の独裁者、そう、アシュマ・アトーの手に渡る前に……」

ゴン！

突然アルステイーンの後頭部に衝撃が加わる。

途端にアルステイーンは壇上でぐんにやりして、崩れ落ちる。

「何を以前と同じ展開をしているのよ？ 生徒の皆さんは、こんな馬鹿の言う事等忘れて、カレー作りに勤しんで下さい」

以前と同じようにエファールがアルステイーンの後頭部に鉄拳を食らわす。

そして訓示を垂れる。

途端に起こるブーイング。

一部男子生徒には不評のようだ。

「何？ あんた達、私とやろうつての！？ 良いわよ！ 誰から！？ いつでもかかっていらっしやいな！ 相手になってあげるわよ！！」

これまた以前と同じ展開だった。

そして、エファールは同じ様な展開で、アルステイーンを引き摺

って行った。

でも、実の所、勝負をかける女子の中には、水着を着て気を引こうとしている生徒が、いるにはいた。

皆それぞれに、女子の意地と、情熱を賭けた戦いが始まった。

それは、キュポアやリイナも同じであつた。

二人は、各々の想い人の為に、正に命を賭けてカレーを作った。大げさな話ではない。

公認に近い形の交際を続けている二人であつたが、万が一にも他の女子に、『美味い』を言われる事も有り得るのだ。気は抜けない。

二人は別々にカレー作りに没頭した。

今年、アーチエルはアシュマとカップル公認、（と、言うより既にアシュマと夫婦なのだが）と、言う事で、何もなくて言いのだが、愛する夫の為にカレーを作って持つて行った。

正に、愛情込めて、作ったと言っても良い。

しかし、何故かそのアシュマの前には、カレーを持った女子の列が出来ていた。

何故に？

風聞によると、どうやら妾候補を決める事らしい。

冗談ではない。

アーチエルは早速列に並んだ。

アシュマに『美味い』と言わせて、そんな妾だなんだと言う事を吹き飛ばしてしまおうと考えた。

アシュマはうんざりしていた。

妻がいる身なのに、何故こんな事に付き合わされねばならないのか？

散れ散れ、と、言っても並びなおす。
女の情念と言うのは怖い物だと、改めて思い知らされた。
中にはビキニ姿で、カレーを持ってくる女子もいる。
仕方が無いので、カレーを一口ずつ食し始める。
そこで『イマイチ』と言うのだ。
そうしなければ、女子の情念は断ち切れない。
今年も辛い夏がやって来た。

列を律儀に並び、アーチェルの番が来た。
相変わらずアーチェルの作るカレーは美味い。
大抵アーチェルの作る料理は、全て美味しいのだが。
なのでアシュマは安心してアーチェルの作るカレーを食した。
「どうですか？ アシュマさま。美味しいですか？」
少しは不安になる。
自信はあってもそういうものだ。
思わず訊いてしまう。

「ああ。美味い」
アシュマは即答だ。
スプーンでカレーを頬張る。
満足だ。

「アシュマせんせー、今年も美味い出ましたー」
からんからんと、手持ちのベルを鳴らして、鳴子の女子が触れて
回る。

「あゝあ」
と、女子共は落胆して、散って行く。
矢張り妻への愛は絶対なのだと、思い知らされる。
アシュマはアーチェルの頭をなでてやった。
「嬉しい」
アーチェルはそう言ってアシュマに抱き付く。

カレー皿を落としそうになる。

「おほん！」

後ろから咳払いが聞こえる。

アシュマとアーチエルが慌てて、離れて後ろを見る。

背後にはミス・ケリー・サトウが居た。

まずいところを見られたとアシュマは思う。

この様な事をミス・ケリーが見逃すとは思えなかったから。

「アシュマ先生。仲の良い御夫婦だとは存じますが、時と場所と周りへの影響を考えて下さい」

アシュマにしてみれば、また、校長の小言が始まったと思った。嫌な思いをする。

たかが抱きつかれたぐらいで何故小言を言われなければならないのか。

どうでも良いではないかと思う。

が、

「これからは、気をつけて下さい」

と、その一言で、終わってしまった。

アシュマは多少拍子抜けした。

ミス・ケリーらしからぬことだとも思った。

が、まあ、いい。

「アシュマさま」

アーチエルは、却って不安に駆られた様だ。

矢張りミス・ケリーの小言が来るとでも思ったのだろうか。

いつもとは違うその様子。

不安になるのも不思議ではないのかもしれない。

「大丈夫。アーチエル。大事無い」

そう言ってアシュマはアーチエルの手を握ってやる。

アーチエルもアシュマの手を握り返す。

そして見詰め合う。

アーチエルは照れて下を向く。

アシユマはそんなアーチエルを、優しい瞳で見つめていた。

リイナのカレーが出来た様だ。

零さない様に気をつけながら、急いでレンヌの下に持って行く。

既にレンヌの前には、長い列が出来ていた。

仕方なくリイナは、列の最後尾に着いた。

キュポアは上機嫌で、カレーをシュンマの下へと、持って言った。

案の定長い列が出来ていた。

普通なら、キュポアの場合、

「散れ！ 散れ！」

と、蹴散らしたものだ、ここは一種特異な世界。

力任せに行く事も出来ない。

仕方なく自分の番が、来るのを待った。

リイナの番が来た。

腕によりをかけた自慢のカレーだ。

レンヌの目が優しい。

リイナは、胸の動悸を抑える事が、出来なかった。

レンヌが、リイナのカレーを、一口食べる。

「美味しい！ 美味しいよ、リイナ！」

レンヌは本当に美味しそうに、リイナのカレーを食べた。

「レンヌ王子、美味い出ました」

からんからんと手持ちのベルが鳴る。

周りの女子が散ってゆく。

敗れたのだ。

一方キュポアも、その順番が来た。

シュンマの、春を思わせる様な、微笑がそこにあった。

キュポアもリイナと同じ様に、胸の動悸が激しくなった。

「シュ、シュンマ……わ、わらわの作ったカレーじゃ。食してたも
恥じらいながら皿をシュンマに差し出す。

まともに目が見れない。

「はい」

シュンマは喜んで、一口カレーを口に含んだ。

その途端シュンマの顔色が青くなる。

「どうじゃ？ 美味しいである？」

恐る恐る目を見る。

キュポアにしてみればある種の試練だった。

これ乗り越えてスコラでカップルとして認められるのだ。

シュンマを独り占めにしたかった。

「え、ええ。美味しいですね……」

シュンマの額から脂汗が流れる。

微笑んでいるが少し青ざめているようだ。

スプーンを持つ手もわずかに震える。

「シュンマ皇太子、美味しい出ました」

鳴子の女子がベルを鳴らす。

シュンマの周りの女子は散って行った。

「どうじゃ？ 美味しいである？」

シュンマの美味いを聞いて笑みがこぼれる。

味の感想をやたらと聞きたがる。

「え？ ええ」

シュンマの食は、中々進まなかった。

返事も曖昧だ。

微笑んでいるが少しひきつっているようだ。

「どうしたシュンマ。食が進まんじゃないか？」

美味いと言ったのに不思議に思う。

普通なら食が進もうというものが、なかなか食が進まない。

「い、いえ。そんな事は無いですよ」

どうも、シュンマの様子がおかしい。

強張っている。

「なんじゃ。どうしたのじゃ？ 不味いのか？ ちょっとスプーンを貸してみよ」

「い、いやキュポアさん。こ、これは」

と、言ってる側から、キュポアは巧みにシュンマのスプーンを奪い、一口自分の作ったカレーを食してみる。

忽ち自分で、顔が青くなる事が分かる。

「か、辛い！！ 苦い！！ 酸っぱい！！ 不味い！！ なんじゃ

これは！！ 済まぬシュンマ。こんな物を食させて『美味い』と言わさせて、わらわは……」

キュポアは俯いてしまった。

普通ならまず味見をするだろう。

それをしなかったのが失敗のもとだ。

元よりキュポアは料理が得意ではない。

だから味見はしなければならなかったのだ。

が、シュンマに食べさせたい一心で気が急いた。

一刻も早くシュンマの下へ行きたかった。

他の女子にシュンマを取られる焦りもあった。

だから味見をしなかった。

その余裕がなかった。

キュポアは気が落ち込んだ。

「いえ、良いんですよ。キュポアさん。愛する人の作る物なら、何でも美味しいんです」

シュンマはキュポアの目を見て微笑んだ。

要はシュンマはキュポアのことが好きなのである。

その気持ちを伝えたかった。
だからそう言った。

「シュンマ……」

キユポアは感動で、何も言えなくなってしまった。

その夜、敗残兵と化した男子は、皆で集まり、カレーを作って、寂しくそれを食した。

元々、仮設住宅が質素な為、ある種、キャンプに来ている物だと、勘違いを起こさせた。

次の日は自由行動だ。

と、言っても臨海学校とは違い、する事は何も無い。
名目上は。

だが、カレーの救済措置として、『決闘』制度と『ナンパ』が残っていた。

当然、シュンマとレンヌに照準が集まる。

「レンヌ・アデュニ王子！ リイナ・アナンさんを賭けて、決闘を申し込む！」

ここで、リイナがその決闘を禁止すれば、決闘は行われない。

が、リイナは少し意地悪そうに、レンヌがどういう反応を見せるかが、見てみたくなった。

リイナの悪い癖だ。

「この決闘、許します」

リイナがそう言う。

それを受けて、レンヌも堂々とした物で、

「では、始めましょう」

と、言った。

リイナは、ちょっと拍子抜けした。

レンヌが、ちょっと躊躇して困る所を、見てみたかったのである。
「い、行くぞ！」

却って決闘の申込者が困ったようになる。
この者はレンヌを侮っていた。
育ちの良いお坊ちゃんだと思っていたから決闘を申し込むと怯んで負けを言うと思っていたのである。

決闘の申込者が、木刀を構える。

それに対してレンヌは、

『秘めたる聖剣、内より溢れん！

愛するものを、護る為、

両の手、両の目聖剣掴まん！

出でよ聖剣、汝の敵を斬り刻まん！

ヘブンスソード！！』

なんと、ヘブンスソードを召喚してきた。

四行詩版だが。

「な、何だあれは？」

この生徒は、ヘブンスソードを見た事が無いらしい。

大体にして剣が召喚されることに違和感を持たざるをえない。

召喚物は大抵生物だ。

生き物でない剣が召喚されるとはどう言う事が。

しかも見るからに強そうだ。

「ち、畜生！ 召喚なんて汚いぞ！」

実際、この決闘には、ルールが無い。

自分の得意な物で、相手に挑めばよい。

ただし、相手に怪我をさせたり、死亡させたりしてはいけない。

「お、覚えていろよ！」

申込者は、捨て台詞を残して、去って行った。

「なんだ。つまらん」

そう言ったのは、リィナだ。

レンヌの困ったところを見れなくて残念そうだ。

リイナには少し意地悪な所がある。

何故か愛する者の困ったところを見てみたくなる。

サドの気があるのかもしれない。

「リイナ、相手をからかうなんて、良くないよ。今度から止めにしようよ」

別の意味でレンヌが困った顔をする。

相手に気の毒と思ったのだ。

「レンヌ。お前の反応が見てみたかった。ヘブンズソードを出した時点で、拍子抜けしたかな。まあ、アシュマに言わせると、戦わずして勝つというのが、兵法の最たるものらしいからな。あれで良かったのかも知れんが」

リイナはレンヌを見ず、離れた景色をなんとなく見てそう言った。

そしてナンパだ。

際どい格好をした生徒がやたら、アシュマの周りを、うろついている。

確か、カップルになった者には、ナンパの参加資格が、無い筈である。

その禁を破ってまで、アシュマにちょっかいを出すと言うのは、明らかに、『お妾さん』を狙っての事であろう。

アシュマに声をかけてもらうのを、待っているのである。

勿論アシュマに、その気は無い。

その上、そんな女子に纏わりつかれて、鬱陶しかった。

アシュマは助けをアーチエルに求めた。

が、アーチエルが居ない。

アーチエルはどうしたのだろうか？

そのアーチエルも男子に囲まれていた。

ナンパである。

明らかに違反行為である。

しかし、人妻でありながらアーチエルは、それだけの人気を保っていたのである。

しかしこれでは埒が明かないので、ベルもちの女子が周りを囲み、アーチエルを守っていた。

そんな訳でアーチエルも、アシュマに助けを求めて、彷徨っていた。

そして、二人は邂逅し抱き合う。

それは、周りを白けさせ、生徒は散って行った。

その日は朝からキャンプファイヤーの準備が進められていた。

夕闇から夜に差し掛かる頃、薪に火が点り、キャンプファイヤーが始まった。

アシュマとアーチエルは、それを少し離れた所から見ていた。

「以前はああやって、輪に加わり、火を囲んで踊りを踊っていたのね」

アーチエルは懐かしそうに火を眺めていた。

赤々と照らしだされている。

キャンプファイヤーの火は煌々と燃え盛っていた。

火の粉を舞い上がらせる。

「懐かしいのかい？」

それをアシュマが訊いてみる。

「どういう答えが帰ってくるかわからないが、アシュマの問は優しかった。」

「すこし」

アーチエルが言葉少なに答えを返す。

瞳は火を見つめている。

「輪に加わりたいかい？」

アーチエルに訊いてみる。

答えによつては一緒に踊ってもいいと思っている。

まあ、少し照れくさいが。

「すこし……でも、いいの」

アーチエルはアシュマを見て微笑んだ。

アーチエルは去年のダンスで満足だと思っていた。
踊っても良いのだが満足なのだ。

「いいのかい？」

アシュマは念を押す。

本当にいいのかと思う。

「ええ」

アーチエルの答えは一緒だった。

アシュマも微笑み口をつぐむ。

これ以上は言う必要がなかった。

心と心がつながっていた。

キュポアとシュンマ、リィナとレンヌが輪の中に加わっていた。
アシュマとアーチエルの二人は幻想的な輪を見つめていた。

第一節 オロ復権

死亡説も流れたオロ・エバスだが、そのオロが行き成り現れた。それも、現在空位のオロ・エバス国の總統の座に、行き成り復歸した。

それまで空位だった總統の座に、重役達は誰も昇格して就かなかったのは、ひとえにこの為だったのだ。

その時に驚いた事に、總統の復歸を喜んだのは、イーチャイルド一族だった。

彼らは、あらゆるメディアを使い、オロの生来のカリスマ性も手伝って、国民揃ってオロの復歸を喜んだ。

強力な広告宣伝だ。

強力なプロパガンダだった。

「諸君、私がオロ・エバスだ。人は、私が死んだと言う。逃げたとも言つ者もいる。だが私は帰ってきた！ この国を世界の盟主とする為に！ その為には、如何なる敵対勢力も排除する！ また私はその力も持っている！ 国民よ立つ時は今だ！ 国民の一人一人の力を今貸して欲しい！ さすればそれは叶うであろう！」

オロの帰還演説だ。

多くの人がオロの私邸の庭でこの演説を聴いていた。

オロの庭は広い。

一つの市が軽く入る程広大だ。

その庭に人が集まった。

万単位である。

その觀衆が、オロの演説に酔い、熱狂し、涙した。感動し心を動かされた。

帰還演説としてはまずまずの物だろう。

その背後には、国家をまたぐ組織力を持った者の臭いがした。そう、それはドートネーゼと言う名の臭いだった。

そして、彼は帰ってくると共に、ある女性を連れ帰ってきた。

彼女の名はナナル・エコリコと言った。

これまた以前妾を^{そはめ}努めたティシュラと比較しても、遜色ない美貌とスタイルの持ち主だった。

「中々よう御座いました」

ナナルが頭を下げる。

そして上げ微笑む。

オロを褒め称える。

中な妖艶だ。

「うむ。これならば、次のステップに進んでも良からう」

オロが演説台から降りてくる。

そう言って受ける。

満足気だ。

「はい」

ナナルも満足気に首を傾げる。

その長い艶やかな黒髪が流れる。

オロはそれを見て更に満足気に頷く。

復讐の時は来た。

雪辱の時は来た。

アルステインよ待っている。

オロは五体に力をみなぎらせた。

「茶番……か……」

アルステインが、オロの演説中継を見ながら、ぼそりと呟いた。

その呟きは王宮の大理石の壁に虚しく木霊した。

頬杖をついた姿が何処か気だるそうに見えた。

「え？ なに？ ヨデイ？」

側に座っていたエファールが、訊く。

聞き逃したのだ。

エファールもアルスティーンもソファに座っていた。
「いえ。何でもありませんよ」
アルスティーンはテレビモニタをただ見続けていた。

今のところ平和なノリトレア。
気怠い午後。

その王宮に一組の男女がやって来た。

その男女が、何やら王宮の入り口で、衛兵と口論をしていた。

「だから、この城の関係者だと、言っているだろう！」

男が叫ぶ。

怒っている。

信用されていないことに腹を立てているようだ。

「じゃあ、その証拠を出せ！」

衛兵も負けじと叫ぶ。

彼も城の安全を第一に考えなければならない。
当然の主張だ。

「証拠なんかあるか！ アルスティーンを出せ！」

その若い男はノリトレアの王、アルスティーンを呼び捨てにする。
彼にしてみれば親密な仲だから当然と言いたげである。

「国王を呼び捨てにするとは、胡乱うろんな奴」

衛兵にとって見れば逆効果だったようである。

王を名指して呼ぶ事自体不敬に当たる。

その様な者が王に会ったらどうなるか。

断じて通すわけには行かなかった。

それにしても、ちょっとした騒ぎである。

「おう、どうした？」

別の衛兵がやってくる。

騒ぎを聞きつけてやって来たのだ。

ちよっと異常な事態を不審にも思った。

「おお、何か怪しい奴が、国王陛下を呼び捨てにして……」

衛兵が別の衛兵に説明する。

男を怪しい奴と言う。

「呼び捨てつつたつて、兄貴だぜ兄貴！ 良いだろ呼び捨てにしたつて！」

胡乱呼ばわりされたその男は叫んだ。

よりにもよって王を兄と呼ぶ。

ますますもって怪しい。

「何を言う！ 国王陛下を呼び捨てにする等、言語道断！」

衛兵は何があつてもこの男は通すまいと思う。

「アンタが話すと、話がややこしくなるから……」

胡乱呼ばわりされた男に、付いて来た女が、そう言う。
そう。

男の他に女がいたのだ。

「何を言うか、お前も十分怪しいぞ。大体人前で眼帯をつけているなんて、十分怪しい！」

衛兵はその女も捕まえて怪しいと決め込んだ。

怪しい男についてきた女。

怪しいと思われた。

特に眼帯。

風貌で疑われたらしい。

「なにおう？ 眼帯の、何処がいけないのよ！！ こんなに可愛いのに！！ 眼帯取るうか？ 可愛すぎて驚くわよ！？」

女は最初話を穩便にすまそうと思っていた。

だが、話を自分に振られて頭に来た。

もう、話は耳に届かない。

「そんな事はどうでも良い！！ 怪しすぎるぞお前ら！！」

そんな二人を煽り火に油を注ぐ衛兵。

もう頭から怪しい人物と決め込んでいるようだ。

この衛兵もかなり頑固だ。

「何よ！ こいつム力つく!!」

更に頭に血が上る女。

衛兵に罵声を浴びせる。

「お、おい……少しは押さえるよ……」

今度は、胡乱呼ばわりの男が、眼帯女を抑えようとする。

眼帯女が起こった事によって却って冷静になってしまったようである。

さすがにこの状況はまずいと思ったようでもある。

「あんたもあんたよ！ ここまで言われて、黙ってるなんて何よ!」
「？」

眼帯女の怒りの矛先は胡乱な男に向かった。

さっきまで穏便にすまそうと思っていた女は何処に言ってしまったのか。

事態はややこしい事になりつつあった。

「別に黙っちゃいないだろう」

胡乱呼ばわりされた男が反論する。

騒ぎは更に大きくなる。

もう揉め事がこじれてしまっている。

「どうした？ どうした？ 揉め事か？」

衛兵がどんどん集まる。

混乱が広がる。

騒ぎが大きくなる。

手が付けられなくなる。

「お前ら寄るなあ！」

眼帯女が、布に包まれた背の大剣を取り出し、振り回す気配を見せた。

もう頭に来た。

後先を考えていない。

単純なのだ。

「おい、馬鹿！ 止めるこんな所で！」

胡乱呼ばわりされた男が、眼帯女をなだめようとする。

流石にこれだけ集まった人だかりの中でその大きな剣を振り回せば大変なことになる。

人死の一人や二人出るかもしれない。

そうなれば話は更にややこしくなるだけだ。

それだけは避けようという頭が働いた。

「て、抵抗する気か？ 皆、抑えろ！！」

だが、それは無駄に終わり衛兵が眼帯女を抑えようとする。

もう滅茶苦茶だった。

「ま、まて！ 証拠はないが、見せたい物がある！！」

胡乱呼ばわりされた男が、懷に手を伸ばす。

何かを取り出そうというのか。

「おい！ 懷から何か取り出す気だぞ！！ この男も取り押さえろ！！」

危ないものでも取り出されたらと思ったのだろう。

衛兵が大挙する。

混乱は極限まで来た。

「何でそうなる！？」

男はただ単にアルスティーンに会いに來ただけであつた。

それがこんな騒ぎになる。

本意ではなかった。

はつきり言つて災難だった。

誰か何とかしてくれ。

そこに男が通りかかる。

アシュマだ。

「なんだ。オルバニアン。何をやってる？ アルミナもアシュマが二人の名を呼ぶ。

そう。

男はオルバニアン。

女はアルミナ。

オルバニアンに至ってはアルステインの義弟である。

下手をしたらこの衛兵は不敬罪に問われてしまいかもしれない。

「アシュマ殿！ この二人を、ご存知なのですか？」

衛兵がアシュマに向かって訊く。

そこにいた衛兵皆が動きを止める。

「ご存知も何も、かたつぽの男は、ルーラン・ナル・テルドリニア殿下だぞ？ 今はオルバニアン・マグマイヤーと名乗っているがな。女の方はアルミナ・ラ・シア。身元は俺が保障するぞ？」

アシュマが二人の身元を保証した。

それにしても、義弟のオルバニアンが不審を買いアルステインにとって親友にあるにしろ他人のアシュマが信用を得ているのか。

それは近くにスコラがあるから。

アシュマは衛兵にとって顔なじみになっていた。

アシュマが稀代の剣客であることも理由の一つではある。

「えっ！ こ、これは失礼をば……」

兎にも角にも衛兵は非礼を詫びた。

普通ならば重い罪にも問われてしまいかもしれない。

が。

「失礼にも程があるぜ。全く」

オルバニアンが言う。

それで済みます。

それがオルバニアンのさっぱりとしたところである。

「ホントよ」

アルミナも続けて言う。

そのところの気性はオルバニアンと似ている。

「じゃあ、通って構わないよな？」

オルバニアンが了解を訊く。

もう衛兵は不埒な事を働いていなかった。

ルーランなのだ。

不埒な事などしてはいけない。

「はい。失礼致しました」

衛兵が畏まる。

頭を下げる。

道を開ける。

「ま、いいって事よ」

オルバニアンとアルミナは、衛兵の視線の集まる中、その中央を掻き分け、闊歩して行った。

「じゃあ、オルバニアン。俺は授業があるから」

アシユマはそう言って去って行く。

「おう！ 済まん。サンキュー！」

オルバニアンが手を上げて城の中へ入っていく。

オロが、又、自邸の庭で、演説を始めようとしていた。
アルステインは、又もや、その演説のテレビ中継を見ようとしていた。

側にはエファールがいる。

ここはアルステインのプライベートルームだ。

アルステインが、政務から離れ、最もリラックスできる空間だ。

「困ります……この先は王の自室でして……」

城の役人が困っている。

今度はオルバニアンはその身分を理解されているようではある。
だから困る。

王の義弟といえども憚られる事が有るらしい。

「構わねえだろ！ 義兄弟きょうだいなんだからよ！」

声が聞こえてくる。

オルバニアンは声音を大きくする。

だんだん大きくなる。

近づいているようだ。

「幾らルーラン様とは言え、困ります」

役人は困りきっている。

後で叱られるのはその役人なのかもしれない。

オルバニアンはその立場を理解してやっていない。

役人が哀れた。

「うるへい！」

オルバニアンが頭にくる。

つい大声を出す。

元より大きいが。

（うるさいのはお前だよ……）

アルステインは心でそう思った。

いつもいつも、暑苦しい奴だ。

その連れの女も、やかましい。

似た者夫婦とは良く言った物だ。

まだ結婚はしていないが。

「アルステイン！ 入るぞ！」

ドアを開け入ってきた。

オルバニアンである。

「なによ？ けたたましいわねえ」

エファールが言う。

眉をひそめる。

何もそんな大声を出さなくてもいいと思う。

「そんな、エファール姉さん」

アルミナが猫なで声で言う。

一緒についてきたのだ。

「別にアタシャ、アンタの姉じゃないわよ」

エファールが憚然として応える。

もっとエレガントに振舞って欲しい。

ここは王宮なのだ。

騒がしいことは似つかわしくない。

「私がオルバニアンと結婚すれば、そうなるわ」

たしかにそうではある。
だから余計に頭が痛い。

この様な騒がしい義弟と義妹が出来たなら迷惑な事この上ない。
「どちらにしても、けたたましいわねえ。少し静かにしてよ。テレビ、大事な所なんだから」

エファールとアルステインはオロの演説を見ようとしていたのである。

オロはノリトレア、いや、アルステインを敵視している。

そのオロはいずれまたのりとレアを攻めてくるだろう。

その敵を見ておきたいのだ。

勿論それだけではない。

オロにはいろいろな後ろ盾があるように思われる。

それを見極めたいのだ。

「そうそう！ それだよ！ それぞれ。その為に帰ってきたんだよ！」

その為にとはどういう事か？

何故帰ってきたのか？

アルステインは溜息と共に訊く。

「オルバニアン。君は何で帰ってきたのかね？」
と。

これから政情が不安定になるであろうノリトレアにわざわざ帰ってきて何をするつもりなのか。

「おうよ！ それぞれ。オロがあんな演説をしたらう？ 次にやるのは世界征服に決まっていらあな！ その為にノリトレアに帰ってきたのよ！」

アルステインは、中々鋭い、目の付け所が良いと思った。

あながち、外れてはいないとも、思った。

「中々良い所に、目を付けましたね？ オルバニアン」
アルステインが褒める。

「だろ？」

オルバニアンは、鼻高々だ。
そこでソファにどつかと座る。

「しかし、世界征服とは、大風呂敷を広げましたね？」
アルステイーンが目を流す。
ちよつと挑発を試みる。

「そうよ。世界征服なんて、する訳無いじゃない？」
アルミナが少し呆れたように言う。

いや、オロならやりかねない。

アルステイーンは、大真面目にそう思った。
それをオルバニアンは、

「オロなら、やりかねねえぜ！」
得意顔で、そう言った物だった。

考えはアルステイーンと同じようだった。

なにせ少し前はオロはバヴェルを以って世界を混乱に陥れた。
たしかにその線は外せないと思った。

「おっと、始まるみたいですよ？」

アルステイーンが、テレビモニタを見つめながら言う。

テレビモニタには壇上に登るオロの姿が映し出されていた。
時差で向こうは夜だ。

オロの自邸の庭で演説するようだ。

幾つもの照明がオロをライトアップしていた。
「おお！　そうか」

オルバニアンが黙って、テレビモニタを見つめる。

素直に静かにテレビを見る。

単純な奴。

アルステイーンはそう思う。

が、そう言う所は、好ましいと思っていた。

いよいよ、オロの演説が始まる様だ。

『諸君！ 今、世界は脅威にさらされている！ 自らは、技術立国と名乗っている様だが、裏を返せば、その技術力で、世界に脅威を与えると言う事だ。その国とは、ノリトレアである！ ノリトレアが世界を脅かしている！ 現にノリトレアは、未だ王権国家で絶対王政を布いている！ 民主国家ではないのだ！』

オロはいきなりノリトレアを名指して敵視してきた。細かい形容や当回しな表現などない。

ズバリそのものを言ってきた。

どれだけオロがノリトレアを敵視しているかが分かる。

「あいたたた」

アルステイーンは、痛い所を突かれたらしい。

王権国家というところだ。

ノリトレアは民主国家ではない。

絶対君主の居る専制国家と言っている。

勿論その頂点にはアルステイーンがいる。

そのアルステイーンを攻撃しているのだ。

しかも反論できない。

半ばそのとおりだからである。

ノリトレアは民主国家ではない。

ただ、アルステイーンが善政を敷いているだけである。

国政は民のものではないのである。

「オロんとこの国も、似た様なもんじゃねーか」

オルバニアンが茶々を入れる。

オルバニアンは形は民主国家の体をなしながらその実絶対君主の如き振る舞いをするオロを批難しているのである。

そしてやることは何か。

その強大な軍力で敵対勢力を征服するのである。

正義の名のもとに。

始末に終えないと思った。

「こら、いいところなんだから！」

アルミナがオルバニアンを、注意する。
アルミナもオロを注視する。

『この独裁国家がある限り、世界に安寧の時は無い！ 今こそ我々オロ・エバス国が立ち上がる時が来たのだ！ 立てよ国民！ 平和の為に！』

実質的専制国家であるオロ・エバス国がノリトレアを独裁国家と言った。

世界に安寧はないとも言った。

勿論標的をノリトレアに定めているだろう。

「げ！ 奴ら、狙いをこの国に定めてきやがったぜ！！ はあゝ。早目にこの国に帰ってきてて良かったぜ」

オルバニアンが息を吐く。

それにしてもおかしい事を言う。

戦乱が起こるかもしれないこの国に帰ってきてよかったとは。

それはオルバニアン本人もわかっていることだろう。

その事を思つて、アルステイーンは、

「これから戦争でも起こりうる状況なのに、帰つて来て良かったとは、相変わらず変わってますね。オルバニアン」

と、言った。

ほんとうに変わっていると思つた。

「変わりモンなら、あんたにや、敵わねえよ。アルステイーン」
オルバニアンが反論する。

アルステイーンを知るものなら、十人が十人とも変わっていると
言うだろう。

アルステイーンの事を。

伴侶であるエファールでさえそう思う時がある。

だが、当の本人はそうとは思っていない。

それが証拠に、

「お？ 言いましたね？ 牛丼にヨーグルトを掛けて食べる様な人には、言われたくありませんね」

と、言い返した。

言い様がまるで子供である。

これで、あの、剃刀在るステイーンなのか。

疑問に思う。

「なにおう？ あれはヨーグルトの酸味が牛丼にマッチして、美味いんだよ！」

子供なのはオルバニアンも一緒である。

近視眼的になってその事に反論する。

国際政治に話を持ってくれば変わって牛丼に話題が飛ぶ。

この義兄弟はそういう所がある。

「いや、あれは、アタシでも、ちよっと引く」

アルミナが間髪いれずに言う。

「お前までそんな……」

オルバニアンが困った顔をする。

アルミナだけは味方だと思ったのに。

オルバニアンがアルミナを見ていると、

「引きます」

と、重ねて言う。

恋人の立場はどうなるのだ。

そんなことをオルバニアンは思う。

情けない限りだ。

「ちえ。……どうするよ？ アルステイーン。向こうさんはやる気だぜ？」

話題をもとに戻す。

それは、誰が見てもそうだった。

オロ・エバスが、ノリトレアを強く敵視している事は、確実だった。

いつ、宣戦布告しても、可笑しく無い程だった。

何故そこまで、ノリトレアを敵視するのか。

その本音は、オロの演説の中に、見え隠れする。

『技術立国のノリトレアの脅威』

これが本音だろう。

オロ・エバス国の兵器開発力に対抗できる、唯一の国家。
それがノリトレアなのである。

だから、これ程までにプロパガンダ政策を以ってして、国民感情
を一つにまとめ、ノリトレアを倒そうとするのである。

「対策を少し、考えなければなりませんねえ」

アルステインが言う。

人事のように言う。

アルステインには少しそういう癖がある。

「少しかよ！」

オルバニアンが憤る。

それはそうである。

彼にしてみれば、故郷が戦場になるかどうかの、瀬戸際なのであ
る。

「まあ、相手の出方も、見なければなりませんからねえ」

慎重な姿勢をアルステインは見せた。

何故か。

「そんなんで良いのかよ!？」

オルバニアンも疑問に思う。

少し悠長すぎるのではないか。

後手に回らないか。

心配が先行する。

「専守防衛の国ですから」

アルステインは軽くそういった。

それが理由だった。

が、事態は重く見ていた。

夕方、アシユマが、王宮を訪ねる。

用があるのは、アルステインにだ。

用の内容と言うのは勿論、オロの演説だ。

アルステインは、公務繁多と言う事で、少し待たされた。
アシユマが呼ばれた。

「アシユマ君。お待たせ。で、用事はオロかい？」

アシユマが部屋に入るなりそう言う。

アルステインはソファに座ったままだ。

「ああ。どうするつもりだ？」

アシユマがソファに座る。

アルステインの許可も待たずに。

「どうするもこうするも、様子見ですよ」

アルステインはここでも同じ事を言った。

専守防衛の国。

王政をとっている国にしては珍しいのかもしれない。

これは、どんな事も平和裏に解決をするアルステインの理念が入っている。

戦争は悲劇しか産まない。

争いもそうだ。

話し合いで解決できるならばそうした事を優先する。

もしそれでも駄目なら、侵略を受けたときにだけ反撃をする。

それがアルステインの理想だった。

「時間が経てば、不利になるぞ？」

アシユマの言いたいことは分かる。

そうであることもおそらく間違い無いだろう。

「かといって、動けばオロの思う壺です」

専守防衛の国を逆手に取られたということか。

とにかくオロはノリトレアを攻めこむ口実が欲しかったのだらう。

それはおそらく間違いない。

下手には動けないのである。

「上手く封じ込められた訳か」

アシユマが考えこむ顔をする。

アシユマは外堀から埋められているような気がした。いずれ追い込まれた時、アルステインはどうするのだろう。その事が心配だった。

ただ、いざとなったらアシユマはアルステインの手足になろうと思った。

多少の戦力になる自負はある。

その事をちらつかせるだけでも効果があるのではないかと思った。ただ、それは在るステインには言わなかったが。

「そうですね」

アルステインも考えるところはあるのかもしれない。

とにかく平和裏に解決はしたかった。

「何か手はあるのか？」

アシユマが手立てを訊く。

平和裏に解決したいというアルステインの手並みを見てみたいと思った。

「そうですね。一刻も早く、民主共和制に移行する事です」

まずはそこに着手をしてみようと思っっているようだ。

相手に付け入る隙を与えないのが狙いのようだ。

「一応、今も、元老院による共和制じゃないか？ 独裁政治とは違うんじゃないか」

そこををよく知らないアシユマが訊く。

政治体制に関しては安泰なんじゃないかと。

アシユマはそう疑問に思ったわけだ。

「共和制とはいえ、束ねているのはこの僕なんです。それに貴族は選挙で選ばれていませんしね。だから、そこを突かれたんですね。油断でした」

アルステインはそう言って、少し困った顔をした。

つまり、専制君主国家であることは間違いないのである。

オロはそこを突いて来ようと言っているのである。

アルステインはため息を付いた。
結局は後手に回るのである。

その頃、オロ・エバス国は、何をしていたか？

大急ぎで、軍備増強をしていた。

以前から用意はされていたようだ。

仮想敵国は、勿論ノリトレアだ。

巨大な艦艇が、次々と建造されて行く。

最新鋭の魔導機兵が、造られて行く。

殻兵器も開発されていた。

そして、マスクドまでもが、発掘されようとしていた。

使える物は何でも使う。

実利主義のなせる業である。

バヴェルは？

それが、最も気になる所であった。

今回はオロの背後に、ドートネーゼの影が見え隠れする。

その情報はおそらく、オロの元に、もたらされるであろう。

それにしてもドートネーゼである。

彼らは、潰されても潰されても、後から後から、湧いて出てくる。

まるで、押し出される、飴の様だった。

ドートネーゼの新しい最高評議會は、今は、オロの邸宅にいた。

その事から、行方不明の間に、洗脳されたのかもしれない。

いや、むしろドートネーゼと共闘という関係を、築いているのか

も知れなかった。

その最高評議會だが、個室を与えられ、そこに閉じこもった。

食事は三食とも、贅を極めた物だったが、そこからは、出ようと

はしなかった。

また、皆頭からすっぽりとフードを被り、顔の様子を、窺い知る事は出来なかった。

そのドートネーゼと、オロとは、定期的に話し合いが持たれた。その時に、オロはマスクドなり、バヴェルなりの、眠っている位置を、教えてもらっていた。

オロは、自分の執務室にいた。

オロは今、一人で考えていた。

ノリトレアの事だ。

ノリトレアがどうしても邪魔だった。

脅威だった。

滅ばしたいと思った。

それ程、邪魔だったのだ。

ノリトレアが。

ノリトレアの技術力が。

地球上で唯一つ、オロ・エバスの技術力に敵うのは、ノリトレアだからだ。

だから、だ。

ノリトレアが、邪魔なのは。

次に邪魔なのは、クーロン。

そしてノーツ連邦。

どちらも、強力な国力があるくせに、オロ・エバスの……ひいてはドートネーゼの意に、沿わない。

でも、いずれは両国とも、肅清するリストに入っている。

困った事に、ノリトレアとクーロンは、友好な関係を築いている。この二国が更に近付けば、オロにとって、厄介な存在となるだろう。

何と言っても、ノリトレアの技術と頭脳、そして億を超える、クーロンの人材が手を組む事を想像すると、それだけで頭を悩まし、痛くなる程だった。

それだけは、避けねばならなかった。

今の所、有り得ない事だが、ノリトレアとノーツ連邦が、組む事も無いとは限らない。

どちらにしても、警戒しなければならない。

キーはノリトレアだ。ノリトレアさえ何とかすれば、事態は変わるだろう。

オロはそう思っていた。

オロ・エバスは、オロ・エバス社のノリトレア支社、クーロン支社、ノーツ支社、それぞれの支社から社員を引き上げた。

これにはクーロン、ノーツの両政府は頭を捻ったが、ノリトレアの頭脳・アルステインは、なにやらきな臭い物を感じ取っていた。何かの前触れである事を、察知したのである。

オロはノリトレアを一気に攻めるかと思いきや、次にとった行動は……。

西方州連合、つまり、大きな所ではノルブル王国、ドラスティス共和国、レボトミノ連邦共和国、パクスワイ共和国等各国に、強く同盟関係を締結する為、各国遊説に出た。

先ず、この行動に賛辞を送ったのが、レジルデ市国の法皇、ネクロマンシア三世だった。

タイン教を守る、正義の同盟を築く善き事だと。

ネクロマンシア三世はこれを、

「正義と力の象徴。正しき力の同盟だ」

と、各地で公演した。

勿論これには、ドートネーゼの思惑が絡んでいた事に、疑う余地は無かった。

しかし、各国の国民が以前オロが、バヴェルを使って、自国を蹂躪した仕打ちを忘れてはいなかった。

遊説に來たオロには、その国民の冷ややかな視線が、突き刺さった。

先ず訪れたのが、ノルブル王国だ。

この国は王制を取っているものの、民主共和制を取っており現在の元首はエガツサ二世、現在の首相はヴァネル・ホツサ。

議院内閣制である。

オロは首相官邸に招かれた。

そう、幾らその国民に憎まれようと、オロの存在を無下には出来なかったのである。

それは 世界一の軍事大国となった、オロ・エバス国の元首であるオロを、無視出来なかったのだ。

ばかりか、その国民に植え付けられた恐怖は、忘れられてなかったのである。

バヴェルの恐怖を。

ノルブルの国民は、表面は笑って、オロを出迎えた。

心の内では彼を憎んで。

オロも、バヴェルもなしに、全世界を行き成り敵に回して勝てる程、自信家ではなかった。

ただ、味方……戦力が欲しかったのである。

表面上でも。

どうせ、後で、この国も国民も、肅清するのである。

結局、首脳会談の後、オロ・エバス国とノルブル王国とは、軍事同盟を結んだ。

影には、ドートネーゼの影が、チラホラと見え隠れしていた。つまり、ドートネーゼの方面からも、圧力がかった訳だ。

次にオロは、ドラスティス王国に訪問した。
矢張りこの国も、怒りと憎しみを胸に秘め、そして表面上では笑
って、オロを出迎えた。

この国もオロ・エバス国と、同盟を結ばざるを得なかった。
そうしなければ、以前の恐怖が、頭をもたげたからである。

そしてレボトミノ連邦共和国である。

この国は、堂々とオロ・エバス国を非難した。
それは、オロ・エバス国が、まだアヘイビアと名乗っていた頃、
大統領施政府に、アヘイビアの特殊部隊を送り込まれた経緯を持つ。
その為か、半ば受け継がれ、アヘイビア（オロ・エバス）には、
反感を持っていた。

また、バヴエルに蹂躪された経験が無い。
その為、オロに対しては、堂々としていた。

だが、ここに来るまでには、事務次官級の話し合いが行われてい
る筈で、ここに来て、ごたごたする筈が無かった。

だが、レボトミノのテオドル・ブルックドルフ大統領は、徹底
抗戦も辞さず、オロの提案を突っぱねた。

ドートネーゼの根回しもあった筈である。

その上で、この話を蹴った。

国民はテオドル大統領に、拍手喝采を送った。

オロは気分を害し、不機嫌な中、レボトミノ連邦共和国を後にし
た。

パクスワイ共和国に赴いた。

この国は、先の都市国家、レジルデ市国を内包している。
それが幸いしてか、若しくはドートネーゼが裏を引くプロパガン

ダが利いているのか、オロはこの国では割と歓迎された。
友好ムードの漂う中、軍事同盟はスムーズに調印され、そしてオロはこの国を離れた。

その後、ティバゴグ王国、アラウンダ共和国と訪れ、それぞれ軍事同盟を結び、西方州連合を後にした。

しかしそれにしても、オロは今回の遊説で思い知らされたのは、ドートネーゼの底力だ。

各国で軍事同盟を結べたのも、ドートネーゼのおかげだと言っても良い。

オロは改めて、その力に寒気を覚えた。

よくも今まで、敵対行動を取られなかった物だとも思った。

具体的にはイーチャイルドだ。

西方州連合国家群は、主戦力にしる後方支援にしる、何らかの形でイーチャイルドの軍事部門が関わっていた。

圧力を掛けられると、否やは言えなかった。

オロ・エバス社も、歩調を合わせる様に、圧力を掛けた。

オロは一旦自国、オロ・エバス国に帰国した。

オロは、自分では気が付かなかったが、かなり疲労していた。

自室に戻ると、ベッドに横になり、直ぐに眠りに入った。

そのまま一日中、眠り続けた。

起きると、側に、ナナルがいた。

「ずっと側にいたのか？」

オロが口を開く。

「はい」

ナナルがベッドに入りながらオロを見つめる。

「何をしていた？」

オロが訊く。

何をしていたか疑問だったのだろう。

「オロ様が起きるのを、待っていました」

殊勝なことを言う。

可愛く思う。

長い髪がオロに掛かる。

「……欲しいのか？」

オロは直接的だ。

オロはそう言うが、オロが欲望のはけ口を欲しているのだ。

「それもありますが、先ずはお食事をと……」

ナナルはまずはその事を言った。

食事をせねば体に障る。

オロは疲れているのだ。

病に罹って倒れてもしたらナナルも困るのだ。

「……食事は要らん。先ずはお前だな。ナナル」

二人は抱き合い、そのままベッドに倒れこんだ。

オロはそのまま、軽い政務をこなしながら、十日程休んだ。

ナナルを愛しながら。

西方州連合国家群から戻ってきたオロは、支持率が上がっていた。

これも西方州連合国家群で、友好的（半ば強制的で威圧的）な関

係を築けた事による評価だった。

「オロ様？ 次はどうなさるのですか？」

ナナルが訊く。

オロの世界戦略はナナルの興味をひく所ではあった。

ひいてはドートネーゼの世界戦略にもなることだった。
ナナルが訊くわけだ。

「うむ。南アヘイビア大陸諸国を遊説しようかと思っている」
オロが答える。

アヘイビア大陸には南北両大陸があつた。

北アヘイビア大陸は先進国。

南アヘイビア大陸の国々は新興国。

経済面の成長で眼を見張るものがある。

手に入れて損はないだろう。

「南アヘイビア大陸諸国を？」

ナナルは興味をそそられた。

目の付け所が悪く無いと思ったからである。

「うむ。無傷で手に入れられる所は、手に入れておきたい。割と友好的な南アヘイビア大陸の国ならば、そう苦勞もせんだろう」

そして、オロは時を空ける事無く、南アヘイビア大陸へ旅立つて行った。

「拙いなこれは」

アルステイーンは、自分の執務室で、呟いた。

そして執務室の床に視線を落とした。

役人が報告書を持ってきてそれを読んで漏らした言葉である。

「何がマズインだよ？ アルステイーン」

この言葉は、オルバニアンだ。

帰国以来、ずっと、アルステイーンの側に居て、入り浸っている。
今はソファに寝転がっている。

「何でここに入り浸っているんですか？ 気になって、仕事が出来ませんよ！」

アルステイーンは苛々としてペンを置いた。

苛々としているのは実は何もオルバニアンの所為だけでもなかつ

たが。

オロの行動が気になったから。
それが苛つく原因でもあった。

「いゝじゃね〜かよ！ 暇なんだからよ！」

これはオルバニアンの言い分であつた。

アルステイーンの事を考えていない。

彼はのんびりとソファに横たわったままだつた。

「暇なら、スコラに戻ったら、良いじゃないですか」

アルステイーンは困つた顔でさういう。

仕事にならないのだ。

何処かに言つて欲しかった。

「勉強は嫌いなんだよ！ で、何がマズイんだよ？」

また、オルバニアンの言い分だ。

それはともかく

閑話休題拙い理由とは何か。

気になるところである。

「オロです」

手を眼の前に組みながらアルステイーンが言う。

アルステイーンは思うところを言う。

報告書の内容が気になるらしい。

「オロがどうしたつて？」

オルバニアンが訊く。

アルステイーンの事だ。

オロのことで頭を悩ませているのであろう。

何で頭を悩ませているか。

それが気になった。

「外堀から、埋められています」

アルステイーンは漏らす。

オロがいよいよ行動を開始したのだ。

アルステイーンの言葉は本音だつたろう。

「は？」

オルバニアンはそれだけではいまいち理解できていない。

アルスティーンの言葉が足りないのだ。

何が言いたいのかわからない。

「西方州連合が、ほぼオロに籠絡されました。南アヘイビア大陸の国家群も、オロに恭順の意を示しました。これらが結集すると、かなりの大軍になります。それらの矛先がノリトレアに向けられれば……」

アルスティーンの解説が付け加えられる。

外堀から埋められていつているというのはこの事を指したのだ。

オロは着々とノリトレアを攻める準備を進めている。

だがアルスティーンにはそれに対抗し得るだけの手段を持ち合わせていない。

イライラとするところである。

「ただじゃすまねえって事が……。おい、アルスティーン。そうなる前にオロん所を攻めた方が良くないかねえのか？」

オルバニアンもようやくアルスティーンの言葉の意味を理解したようである。

確かに拙い。

戦力を集結しつつオロが襲ってくるかも分からない。

オルバニアンはアルスティーンをせつつく。

「それが出来れば、苦勞はしません」

アルスティーンは肩を落として溜息を吐く。

本当に手がなさそうである。

少し表情が暗い。

「何で出来ねえんだよ？」

いらついで、オルバニアンがアルスティーンに聞く。

何故なにもしないのか。

彼にしてみればなにもしないで手をこまねいているようにも見える。

いらつくのも無理は無い。

「国際世論と言う言葉を、知っていますか？」

アルステインはやはり溜息をつきながらこう答えた。

世界の大半がオロの手に落ちた今、ノリトレアが下手なことをすれば国際社会で孤立しかねない。

それだけでなく、オロに攻撃の口実を与えてしまいかもしれない。世界の大半と戦うことになるのだ。

得策とは言えない。

そのことを言っているのだ。

アルステインが頭を悩ます訳である。

「知ってるよ！」

オルバニアンは少し恥ずかしい思いをしながら、照れ隠しに少し怒ってみせた。

オロは、次に東南海洋連合国家を、訪問する。

諸島、半島群から成る国家だ。

クーロン共和国の南から、南東に伸びて位置する。

ちなみにクーロンはその国名を、その政変の後、クーロン共和国と変えた。

オロは、東南海洋連合国家には、軍事同盟を結ぶには至らなかった。

それはオロにとって厄介な事だった。

幾らオロとドートネーゼといえども、クーロンを自由にすることは出来ない。

何時かは雌雄を決して、戦わねばならない強国なのだ。

しかし、東南海洋連合国家とは経済的な提携を結ぶ事には成功した。

これは、裏を返せば、クーロンを経済的に、封じ込める事が出来る事を意味する。

引いては、ノリトレアを、経済的に封じ込める事を意味する。

事実、東南海洋連合国家は、クーロンをブロックし経済的に追い詰める政策を採った。

クーロンは経済的に追い詰められ始めた。

そしてオロはいよいよ本丸ノリトレアのあらゆる関係、即ち政治的、経済的、軍事的、文化交流、そしてにネットワークを封じ込める手立てに出る。

先ずは、オロが東南海洋連合国家に圧力を掛けて、ノリトレアとの関係を全て断ち切ってブロックした。

次にレボトミノ連邦共和国を除く西方州連合国家群が、政治的・経済的ブロックを掛けてきた。

勿論ノリトレアも黙ってはいず、経済ブロックを掛けて来た国に対し、特にオロ・エバス国に対し、遺憾の意を表した。

レボトミノ連邦共和国や、クーロン共和国もそれに倣った。

だがそこまでだった。

「アルステイン！ 『遺憾の意』 たあ、どういうこった！？ そんな生つちよろい事で良いのか！？」

オルバニアンはアルステインの執務室で忙しくうろつろつとしていた。

かなり苛々としているようだ。

今の言葉もアルステインに半ばあたっているようなものだ。

「オルバニアン。この間も言いましたよね？ さて、僕は何と云ったでしょう？」

未だにアルステインはオルバニアンに教師のような態度を取った。

それもそうである。

ついこの間まで、アルステイーンはオルバニアンをノリトレアの王にしたいくて、自分の持てる知識を惜しげもなくオルバニアンに教え込んでいたのだから。

「『こ、国際世論』?」

オルバニアンは頓狂な顔をして、ついこの間のことを思い出して言ってみた。

「ご名答」

アルステイーンは我が意を得たりと膝を叩く。

それが分かっているなら、もう訊くな。

そんな表情をする。

「こ、国際世論だったって、今だったら、アールヌー国だって、レボトミノだって、クーロンだって、そしてレキシタニアだって、味方してくれるぜ?」

オルバニアンは反論してみる。

味方は居るのである。

孤立はしてはいない。

「それでも過激な行動は、取れませんか?」
指をくるくると回しながらアルステイーンはオルバニアンを見つめる。

楽しそうだ。

オルバニアンも言うものだと思った。

「じゃあ、クーロンと軍事同盟を結ぶってのはどうよ?」

更にオルバニアンが言う。

これにはオルバニアンも自分で名案だと思っていたらしく、得意顔だ。

「良いかもしれません」

アルステイーンは何かを含んだように言う。

それはアルステイーンも考えてはいた。

考えてはいたが……。

「なんだよ？ 『しれませんが』 ってのはよお？」

オルバニアンが憤る。

自分の名案が否定されたようなものだ。

多少の憤りはある。

「畏の可能性あります」

アルステイーンはこう言い出す。

畏とはどう言う事か。

何か含みがある。

「『畏あ』？ どんな畏があるって言うんだよ？」

オルバニアンは興奮して言った。

オルバニアンはそこまでの考えに至っていない。

同盟を組んで戦力の強化が最善の道と考えている。

「まあまあ。興奮しないで」

アルステイーンは興奮するオルバニアンをなだめた。

オルバニアンは不服顔だ。

「まあまあって……で、畏って何だよお？」

不機嫌なままオルバニアンは顔をアルステイーンに向ける。

アルステイーンは一拍置いた後、溜息を吐き、こう喋り始めた。

「もし、同盟が成立すれば、軍事的にオロに対抗するぞ、と、言う

口実を与えてしまいます。今、彼は、恐らくこのノリトレアを焦土

にしたくて、ウズウズしているんじゃないかと僕は想像しています。

それは、絶対避けねばなりません。だから下手に動けないのです」

アルステイーンはこれを恐れていた。

確かにクローンとの同盟は心強い。

だが、今、世界の大半を手にしたオロの前では力が及ばないだろう。

攻められるきっかけを作る訳にはいかない。

「しかし、剣術だって睨み合いは相当きついんだ。いつか隙を出してしまう。そこを突かれたら、一巻の終わりだぜ」

オルバニアンは剣術になぞらえた。

そして、その辛さを言った。
それに耐えられるのか。

オルバニアンはそれが訊きたかった。
「大分政治に明るくなってきましたね。これで私はいつ引退しても
良いぐらいですよ」

アルステイーンがにっこり笑う。

オルバニアンの中の話にだいぶ満足したようだ。
物事の道理が大分分かって来たようだ。

「俺は嫌だぜ。そんなの。……だけどよ、死中に活有りって言っぜ。
アシユマなんかが」

オルバニアンはまだ、クーロンとの同盟にこだわっている。
どちらにせよこのままではジリ貧なのは目に見えているからだ。
アルステイーンのやり方にもどかしさを感じる。

「そうですね。そういう考え方もありますか」

アルステイーンは、飲み物を口に含む。
しばし目を閉じ考える。

だが、矢張りクーロンと同盟を結ぶ気にはなれなかった。
それはあまりに目先のことを考えているようにも思えたからだ。
もっと大局的に見て良い手はないか。

「こんな事で良いのかよ？ 経済封鎖をされて、金も食いモンも閉
ざされて、一番困るのはアルステイーンの言う、民なんじゃないの
か？ クーロンと手を結ぼうぜ。あそこなら食いモンもあるし、市
場だって潤沢だ」

オルバニアンは一端の^{いっばし}ことを言う。

オロに對抗するにはそれしかないと思う。

少しでも戦力を増強する方向に手を伸ばさなければ。
そうしなければこの国は滅んでしまうかもしれない。

「貴方は本当に成長しましたね。オルバニアン」
アルステイーンが目を細める。

「んなこたあ、どうでもいいんだよ」

その頃、オロはどうしていたか。
イーサ教国圏の歴々と、会っていた。
オロ・エバス国との協力関係を、築く為にである。
イーサ教国圏の国々とは、どういう国の集まりか。
それは国教をイーサ教に定める国々で、大きい所では、ズーヌキ共和国、ツハーイ共和国、ハライン王国、エハボイ共和国等となっている。

これにアールヌー教を奉じるアールヌー国を合わせれば、この地域の国々は、大まか抑えた事になる。

そのオロは今、ズーヌキ共和国にいた。

オロはなるべくなら、この地域とは戦火を交えたくは無かった。

だから、なるべくなら、穏便に事を運びたかった。

だが、この周辺の国々は強情だった。

元々、魔導石が潤沢に産出する上、その他の資源も産出する。

資金的には、オロに等頼らなくても、大丈夫だった。

逆に、

「今度来たら、そのそつ首刎ねるぞ！」

と、下手な三文芝居でも、見ているかのような脅し文句で、オロを

脅してきた。

恐れを知らない。

これに、オロは嘆息した。

「これだから、無知な者と言う物は……」

オロはナナルに、零していた。

彼らはオロの力を知らないのだろうか。

彼は今世界の半分を手になれようとしている。

「では、攻めますか？」

ナナルは訊いてみる。

興味のあることだから。

ドートネーゼがこの世に君臨するプロセスだからだ。

「無駄だとは思うが、一応ここいら周辺の国々を、見ておきたい」と、オロはナナルに返答していた。

だが、どの国も返答はほぼ同じで、最後には逆にオロを脅しつけてきた。

オロは最後にアールヌー国に訪問した。

この王子は、未来を見通せる力があるという。

嘘か真かは知らないが。

そして、二人は会談をもつ。

歴史的な一幕と言っても良い。

実はこのアールヌー国、世にその手の天才を数多く輩出し、又、ドートネーゼの信者が非常に多い事で有名でもある。

ちなみに、このドートネーゼ、表向きは宗教法人である。

が、何の神を奉じているかは、表向き分らない。

が、それはともかく、アデュニ王子の祖父王が、当時のアヘイビアから多額の資金と、数多い武器を供与され、このイーサ教国圏の中で唯一アールヌー教を奉じる、アールヌー国を生き残らせ、尚且つ圧倒する力を手に入れた。

それは、今まで、放浪の民と呼ばれたアールヌーの民を導き、数十年前のイーサ教国圏とアールヌーの戦争で次々と戦勝し、今の地位と土地を手に入れた。

これで、今のこの国が形作られた。

それには、当時のアヘイビアの後ろ盾、ひいてはドートネーゼの後押しがあつて、出来た事だった。

話を元に戻そう。

今の政權、つまり、ディーヌ・アデュニ王子は、その手の者を追放した。

徹底的に。

国民は、一時的には、大いに憤慨したが、それも一時的な物だった。

それに、世間からは悟られない様に、追放された者は、その大部分がドートネーゼに入信した。

現政権のデイーヌ・アデュニ王子は、ドートネーゼとは一線を画した。

それは、今までのツケと相まって、厳しい国家運営となったが、その予知能力を最大限に発揮する事によって、何とか国家の呈を成していた。

そして今回の、オロ・エバスとの対談である。

何か因縁めいた物を、感じずにはいられなかった。

「私が来る事にあまり驚きは無い様ですな。デイーヌ王子。矢張り予知ですか？」

オロが尋ねる。

そこところは興味が有ることだった。

予知等と言う事がこの世にあるのか。

「今回は予知と言うより、予測と言った方が良いですかね？」
帰ってきた答えはそれだった。

オロは拍子抜けした。

予知等と言うものは無いのか。

予知でないとしたら大した眼力だ。

「成程。大した卓越眼ですな。噂どおりだ」
ある意味感心する。

予知に匹敵する洞察力がなければできないことも多い。
それに感心したのだ。

オロはこの若者は只者ではないと考えた。

「その様な事を話に來た訳ではないでしょう？」

デイーヌ王子は柔らかく言ったが、事を急いしている様に見えた。
やるべきことは沢山ある。

この国のためにやらなければならない事が。
周りは敵だらけだ。

それにオロも侵攻してきた。

「ほう、焦ってらつしやる」

オロは楽しそうだ。

自分の足下にまた一つ国がひれ伏す。

快感だ。

「ふむ。焦っているのかな？ 僕は。まあ、いい。あまりこの国をほじくり回さないでくださいよ？ オロ殿」

デイー又王子は何か分からないことを言った。

しかしオロは片頬をゆがめる。

何の事かはオロは分かっているようだ。

その証拠に、

「ほう、そこまで分かるとは。と、言う事は、例の『物』は、ここにあるのですかな？」

と、言った。

『物』とは何か。

それはオロにしか分からない。

他に知るものといえば、ナナルとドートネーゼの面々といったところか。

それを知るとはなかなか侮れない。

「さあ？ どうでしょうかね。ただし、他国ではあまりほじくらない方がよい。その国にとつても、私の国にとつても、貴方の国にとつても、何の利益をもたらさないでしょう」

デイー又王子は利益がないといった。

オロは利益を求めてそれを欲している。

真つ向からオロの事を否定した。

「私の前でよく言う」

オロは多少気分を損ねる。

デイー又王子の物言いが小癪に思えた。

全てが思い通りにならぬと気に入らない。

眼の前の青年はそんな男だった。

「しかし、事実だ」

面と向かつてものを言う。

そこがオロには気に入らない。

ディー又王子は気にしない。

いや、寧ろオロに向かつてははっきりものを言っ
てやろうと思っ
ているのかもしれない。

「それも予知ですか？」

オロは嫌な思いをしながら訊いてみる。

予知だったなら変えようがないのかもしれない。

「これは眞理です」

嫌な事を言う。

もつと始末に悪い。

眞理と来た。

ほんとうに小癪だと思つた。

オロは氣分を損ねた。

「ふん。馬鹿馬鹿しい。私は帰る」

オロは席を立ち上がる。

側に居たナナルも立ち上がる。

こちらは表情というものが読めない。

「送つていけませんよ？」

ディー又王子は言い放つ。

視線は冷たい。

会談は芳しい成果を挙げずに終わった。

その言動にオロは、

「構わん！」

と、吐き捨てる。

余程この青年の物言いに腹を立てたようだ。

「あまりこの辺りを蹂躪しない様に。いずれ貴方は困つた事になる」

最後にディー又王子が付け加える。

嫌味も加わっていたかもしれない。

「眞理かい？」

皮肉を込めてオロが訊く。

「予知さ」

とうとうその言葉を吐いた。

「一々癪に障る青年だ！」

オロは帰りのリムジンで、そう喚く。

余程悔しい想いをしたようだ。

オロの言うことに一々反論する。

予知だの真理だのとオロの神経を逆なでする。

「あら？ それは貴方の代名詞では、ないかしら？」

ナナルがそう言う。

癪に障る青年とはオロの事だとナナルは言うのである。

「その口を塞いでやろう」

オロはそれこそ癪に障る。

リムジンの中で顔をナナルに向ける。

その目は嗜虐的な光が宿っていた。

「あら、楽しみにしていいのかしら」

ナナルは笑う。

妖艶な笑いだ。

オロの態度にも少しもひるまない。

「お前も結構減らず口だ」

オロは、そのままリムジンの中で、ナナルをゆっくりと押し倒した。

それは行き成りの事だった。

オロは、アールヌーイ国や周辺諸国を、まず攻めた。

当初、一番初めに狙われると目されていたノリトレアではなく、それはイーサ教国圏の制覇だった。

世界は驚いた。

何故なら、オロは、まずノリトレアから攻めると思っていたからだ。

雲霞うんかの如く湧き起こる、オロ・エバス、西方州連合国防合同軍（オロ連合軍）は、怒濤の如くイーサ教国圏になだれ込んだ。

ズーヌキ共和国、ツハーイ共和国、ハライン王国、エハボイ共和国のイーサ教国圏連合軍。

大小のイーサ教国圏は連合を組んで魔導機兵軍団を形作る。オロも部隊を展開させる。

大部隊だ。

しかし次々部隊を落とされて行くイーサ教国圏各国。

次々占領されて行く国々。

宗教対立と民族対立の垣根を越えて、アールヌー国軍が参戦。

しかし結局は数には勝てず、全滅となる。

オロは地域を支配するにあたり、大義名分を「平和的平定」と、呼んだ。

今まで、アールヌー国や、イーサ教国圏は、世界の火薬庫とまで言われ、誰もが敏感に反応し、腫れ物に触る様に扱ってきたのだが、この男は違った。

宗教対立も民族紛争も皆平らげて、平定してしまったのである。

世界中が、驚かない訳が無い。

世界中は、改めてこの男に、恐怖を感じざるを得なかった。

オロは『元』アールヌー国に代官を置いて、オロ・エバス国の属国とした。

ノリトレアでは、この暴挙に驚いた。

先ず、混乱に陥ったのが、国民だった。

それ程の恐怖を、オロはこの国に与えたのだ。

次は自分達だと。

アルステイーンは、事態を收拾するのに、てんやわんやだった。そんな時、一人の男がアシュマを訪ねる。

アシュマの古い友人、ビッシュ・ノマンがやって来た。

「アシュマはいるかあ？」

ビッシュ・ノマンは、この国の武芸師範で、知らぬ者はいなかった。

門前では、形式的なボディチェックを行い、宮殿の中へ入って行った。

先ず、訪れたのが、アルステイーンの政務室の、控え室だった。ビッシュは直ぐに通され、アルステイーンに謁見した。

「アルステイーン陛下にはご機嫌麗しく……」

ビッシュ・ノマンがアルステイーンに挨拶をする。

アルステイーンが変な顔をする。

ビッシュがそれに気づく。

「まあまあ、そんなかたつ苦しいのは、無しにしましょう。毎日の様に会っている訳ですし」

アルステイーンが手をひらひらさせる。

事実毎日一刻は剣術指南を受けている。

が、アルステイーンの場合腕が卓越しているのでビッシュが教えることは少ない。

アルステイーンは棒を使うが。

もしかすると、アルステイーンはビッシュよりも強いかもしれないかった。

ビッシュはある意味指導しづらい相手を指南しなければならなかった。

それで苦勞をする。

「まあ、陛下なら、そう言うと思いました」

ビッシュはしれつとして言いのけた。

構えられるとこの王は困る。

ある意味気さくなのだ。

それを良くないと思う側近もいるが。

王の威厳というものがある。

だが、アルステイーンはそんな威厳など必要としなかった。

この国に王などいらぬとも思った。

この国の頂点にたつて思う。

この国は国民のものなのである。

「計算されてましたか」

アルステイーンはそう言う。

この変人の王の行動を予測する。

ある程度までは簡単だ。

先程気さくな人物といった。

堅い挨拶なのは好まないところだとは分かる。

だが……。

「そこまでは。しかしこの先は、計算がつきませぬ」

ビッシュが微笑む。

変人の王の深意。

それは誰にも分からないかもしれない。

最愛の妻エファールにも。

義弟のオルバにアンにも。

そしてアシュマにも。

「そこまで、変人かね？ 僕は」

アルステイーンが困った顔をする。

当の本人がそう思っていない。

困ったことである。

「変人で御座りまする」

ビッシュはきっぱり言い張る。

一国の王に向かって。

これは、アルステイーンを信用しきっていないと出ない言葉である。

下々の者には慕われる王ではある。

「そうですか。で、アシユマ君ですか？ 用があるのは？」

ビッシュの言葉を受け流して、アルスティーンが訊く。

後で述べるが大体の用向きは分かっている。

その用向きはアシユマ向きの話だと思っている。

「失礼ですが、陛下でも構いません」

失礼だとは思っていないビッシュがアルスティーンに面と向かって言う。

寧ろ在るステイーンにも聞いて欲しいのかもしれない。

「ふむ。助勢の話ですか？」

用向きの話を言い当てる。

大体分かっていた。

「おや。何故それを」

意外そうな顔をする。

本人は悟られないと思っていた。

根が単純な男である。

読むのは容易い。

「今の国際情勢ですからね。あなたやアシユマ君が、僕に助勢をする事は、貴方の性格を鑑みるにあたり、火を見るより明らかでしかからね」

そこをアルスティーンは解説してみせた。

「計算されてましたか」

ビッシュは言う。

「が、気分は害していない。」

寧ろ嬉しく思う。

王が自分のことを理解してくれている。

それは信頼につながる。

「まあ。いつ来るかと、思っていましたよ」

部屋にノックの音が響いた。

アルスティーンが来たなと表情を変える。

「お？ お茶が来た様ですね？」

アルステインが言う。

どうぞと言い、ドアが開く。

可愛いメイドがティーセットを持ってくる。

「アシュマ君には、僕の方から、話を通しておきます」

勿論助勢の話だ。

「宜しく願ひ申す」

ビッシュとアシュマは友人同士。

その気持ちから出た助勢の話であらう。

ビッシュが直接アシュマに言っても良かったが、アルステインが言つと言っているので任せる気になった。

ビッシュが頭を下げる。

「分かりました。でも良いのですか？」

命に関わる話である。

それで良かったのか。

迷惑ではないのか。

「何がでしょうか？」

何が良いのか分かっていない。

純朴なビッシュの良いところである。

「いえ。良いです。それにしても心強さ百倍です。貴方が来てくれて」

アルステインはその話題には蓋をしてビッシュの心遣いに感謝した。

「王にその様な言葉を頂き、光栄の至りです」

ビッシュは立って感謝で腰を折る。

まるで絵に描いたように。

「だから、硬いですってば」

アルステインは茶をすすりながら、そう言った。

堅苦しいのが嫌いなのは前に述べたとおり。

王らしからぬ言葉で注意をする。

「がははは。失礼。今、アシュマは何処に」

ビッシュは、アルステーンに豪快に笑いながら、訊いた。
「ついでにしまったのだ。」

豪快に笑い飛ばすしかない。

「いま、アシュマ君は、レキソタニアに行っています」
今、アシュマはノリトレアには居ない。

いつ帰ってくるかも分かりにくい。

だから、アルステーンがアシュマに伝えと言ったのだ。

「レキソタニアに？」

ビッシュが訊く。

確かアシュマの妻であるアーチエル元王女の実家だ。

この危険な時に何をしに行っているのか。

「ええ。もう一人の頼りになる仲間を、迎えに行っています」
アルステーンがにんまりとする。

「仲間？」

ビッシュが頓狂な顔をする。

「ええ」

第二節 蘇るマスクド

アシユマは道場に顔を出した。
自宅だ。

「おお。師範。お戻りになられましたか。たしか、戻られるのはもう少し先かと」

そう言ったのは、師範代を勤める老人、アバヤイ老人である。

門弟たちも居る。

皆稽古を止める。

アシユマを見る。

「いい。始めてくれ」

門弟たちが稽古を再開する。

少しはアシユマに稽古を見てもらえるかと思っただが、それはなさそうだ。

残念に思う門弟も少なくない。

「帰って早々なんだが、ガンロクは居るか？」

アシユマがアバヤイ老人に訊く。

女房役のアンも見えない。

「今は山に入っているでしょう」

アバヤイ老人が答える。

ガンロクの生業は山に入ることだ。

「そうか。猪追いか」

ガンロクは山に入って猪を捕まえたり山菜を採ったりして生計を立てている。

今は猪を捕まえに行っているらしい。

ここには居ない。

「待ちますか？」

アバヤイがアシユマに訊く。

アシユマは見所に行く。

「ああ」

見所に座ってアシュマが返事をする。
門下生の稽古を見ている。

いつもなら門下生の細かい仕草まで見ているアシュマだが今日はどこか上の空だった。

オロの事が頭から離れないのだ。

オロが世界を平定する。

それは即ちノリトレアやレキシタニアの滅亡を意味する。

アシュマが戦力に加われればそれも避けられるかも知れない。

だが、しかしそれは今度は敵側の人間の大量死を意味する。

戦争になればそれは仕方が無いことなのかもしれない。

だが、アルステインは躊躇するだろうとアシュマは考える。

アシュマに躊躇いは無い。

だが、アルステインはある。

その差をどう埋めるかを考えていた。

「久々に稽古を、つけてくれませぬか？」

アバヤイ老人がアシュマに声を掛ける。

「うむ。日も高いしな。良かろう」

道場にいた皆は、久々の稽古と聴いて、喜んだ。

今日は特別に順番を切って、師範であるアシュマと、立会い稽古をした。

一通り稽古が終わった後、夕刻も近くなり、稽古も終わり、皆が一息ついた頃、アシュマが口を開いた。

「皆も知つての通り、いま世界は混乱の呈を表している。俺は、微力ではあるが、アルステインに助勢をしようと思う。分かって欲しい」

アシュマは頭を下げた。

悪い師範だと思っていた。

何か事があれば稽古に穴を開ける。

門弟にも迷惑をかける。

その上心配もさせる。

「頭を上げて下さい。師範なら、そういうと思っております。存分にお働きになって下さい」

おお！

と、皆も賛意の声をあげた。

理解のある門弟たちだ。

このままでは世界が滅茶苦茶になる事は皆も知っている。それを防ぐ者はアシュマだと皆思っているのだ。

「ここへの帰参が遅れる事になるぞ？」

アシュマはそれでも良いかと問うている。

時には死んでもう二度と戻れないかもしれない。

そうになった時には二度と弟子たちには教えを伝えてやれない。

「構いませぬ！」

「存分にお働きを！」

「師範にしか、出来ない事で御座りまする！」

皆それぞれにアシュマを応援してくれる。

励ましてくれる。

ありがたい事だった。

「済まぬ。皆。この通りだ」

アシュマは謝意に頭を垂れた。

アシュマの気持ちの表れだった。

「面を上げてくだされ、師範。我等の意見は一緒に御座りまする」
門弟が言う。

そして皆口々にアシュマを励ます。

このようなアシュマが師範で皆誇り高いのだ。

「済まぬ」

アシュマは、そのまま頭を垂れ続けた。

返す言葉がなかった。

「師範……」

その時ガンロクが顔を見せた。

道場に上がる。

アシュマに声を掛ける。

「お師匠……頭を下げて、何をしてるだ？」

ガンロクは不思議に思う。

何か場違いな所に来てしまったかとも思う。

「おお、ガンロク。待っていた」

アシュマが頭を上げる。

ガンロクを見る。

「待っていたって……なんだべ？」

ガンロクは奇妙な顔をして、頭を捻った。

「師匠と一緒に、ノリトレアに？」

ガンロクが頓狂な顔をする。

なんでまたそんな事になったか。

ガンロクは山暮らしが長いので里の情報に疎いところがある。

もしかしたら今世界は大変な事になっている事も知らないかもしれないなかった。

「うむ。駄目か？」

アシュマが腕を組んだまま訊く。

アシュマにしてみれば強力な戦力は一人でも多いほうが良い。

ガンロクは是非欲しい戦力だった。

「駄目に御座りまする」

即答したのは、アンである。

殺気探した時はどこにも居なかったのに、今はガンロクの横に座っている。

何処に行っていたのか。

今では、結婚こそしていないが、ガンロクの妻の風格を見せていた。

そのアンが言うのである。

言葉は重みを持った。

「駄目か」

アシュマが肩を落す。

目を瞑る。

何かを考えているようだ。

「はい」

アンは即答だ。

アンの大事な人をアンは連れ去られるわけにはいかなかった。

とんでもない事である。

「世界はこれから、混迷を極める事になるう。その時、ガンロクの力があれば、どれだけ多くの人が助かるだろう」

アシュマは理を説いた。

しかしそれはアシュマの理屈だったかもしれない。

「それでもガンロクさんが死んでは、何にもなりませぬ。それともアシュマさまは、ガンロクさんに死んで来いと、仰るのです？」

アンは、ぴしゃりと言いつつ放った。

とんでもない事だった。

アンはアシュマの理屈でガンロクが殺されるのは御免だった。

（参ったぞ。これはアーチエル並みの頑固さだ）

アシュマは、人知れず呟いた。

……筈だったが、アンには聞こえていたらしく、

「アシュマさま！」

こうアンに切り替えされた。

アンはアシュマに注意する。

ガンロクを殺されてはかなわないのである。

ところが……。

「アンさん。ワシ、お師匠について行こうかと、思っているだ」

ガンロクがそんな事を言いだした。

ガンロクも何か思うところがあるのだろう。

師匠であるアシュマがガンロクを頼る。

それはきつと何か特別な事。

アシユマが頭を下げているのである。

それがガンロクに言葉を発せさせていた。

「ななな、なんですって!？」

アンは目玉が出る程驚いた。

性格的には大人しいガンロクである。

そのガンロクがそんな事を言うなんて信じられなかった。

「お師匠が頭を下げている。ワシ、行かねばなんねえだ」

ガンロクの意味は固そうだ。

驚くアンを尻目にアシユマを見つめている。

そんなアンは、

「ガ、ガンロクさん!! 何を言いだすの? やめて。そんな事を言うのは。わたくし、貴方に死んでほしくない!!」

と、言い、ガンロクを掴んで揺さぶり始めた。

そんな事をしててもガンロクの意味は変わらなかったが。

アンは泣きそうになる。

「いんや、死なねえ。それだけは信じてくんろ」

アンを見据えてガンロクが言う。

「何処をどう信じろと言うの!？」

ガンロクが死ぬかもしれないのである。

信じたくはなかった。

信じて戦場に送り出したくはなかった。

離れ離れになるのは嫌だった。

「頼む! 行かしてくんろ!」

今度はガンロクが頭を下げる。

アンに向かつて。

それはガンロクの意味が見て取れた。

「ガンロクさんの馬鹿!!」

アンは叫んだ。

立ち上がってアンは一人、走り去ってしまった。

道場から出て行く。

「良いのか？ ガンロク」

アシユマが訊く。

少し申し訳なく思う。

「お師匠らしくないべ。決めた事だべ」

ガンロクが言い切る。

「尤もだ」

その夜、ガンロクの寝所に、アンが密かに訪れた。
もう夜更けだ。

道場の母屋の離れ、アンの部屋の隣に、ガンロクは住む様になっ
ていた。

「ガンロクさん……」

アンが呟く。

入り口の外にアンが佇む。

恥じらいを見せながら。

「……起きているだ」

ガンロクも呟く。

布団から身体を起こす。

「入っても宜しゅう御座いますか？」

アンが恥かしさを我慢してやっと言う。

昼間の事もある。

気まづさもあった。

が、これで一人になってしまいかもしれないと思った時にガンロ
クの下を訪れずにはいられなかった。

「ど、どうぞ」

アンはゆっくり戸を開け中にもぐりこんだ。
後ろ手に戸を閉める。

表情は暗くてよく分からなかった。

だが、何かを思いつめているようだった。

「昼間は、我俣申して、済みませんでした」
声が震えている。

頭を下げているようだ。

よくは分からないが。

「いんや、我俣ではねえと思う」

ガンロクも後ろめたい事が無いとはいえなかった。

ガンロクの我俣でアシュマについて行くようなものだ。

アンには悪いと思っていた。

だから言葉の通りアンの我俣では無いと思っていた。

「ガンロクさん。私、決めました。貴方様についてゆきます」

アンがとんでもない事を言いだした。

「ななな、なんだって!!」

ガンロクは心臓が飛び出るほど驚いた。

ガンロクがアシュマについて行くとすればそれは戦場だ。

アンはそんなところについて行くと言い出したのだ。

そんな場所にアンを連れて行くわけには行かない。

「わたくし、ガンロクさんのいない世界なんて、考えられません」

アンは意地でもついていく気だ。

アンはアシュマへの思いを深く沈めてガンロクを慕うようになった

て、ガンロクの居ない世界等考えられなかった。

それ程愛していたのだ。

ガンロクを。

「駄目だ！ なんねえ！」

ガンロクはそれだけは許す気に離れなかった。

許せばアンの命に関わる。

「いえ。もう決めました。アンの我俣を、許して下さい」

アンは必死になって訴えかける。

ここで拒まれれば今生の別れになるかもしれない。

それは嫌だった。

死ぬも生きるも一緒でありたかった。

「駄目だ。その我侭だけは許せねえ」

ガンロクは勝手な事を言う。

自分に行く。

死ぬかもしれない戦場へ。

そしてアンは残す。

我侭なのはガンロクなのではなかったか。

「なら、ガンロクさんに取り付いて、ガンロクさんを行かせません」

アンは最後の手段に訴えかけた。

アンはガンロクに抱きついた。

振りほどこうかと思えば、振りほどけるのだが、ガンロクにはアンに対して、そこまでの事を、働く気にはなれなかった。

「負けたべ。一緒においで」

負けた。

とうとう負けた。

女の情念に負けた。

ガンロクはアンの随行を許した。

「あ、有難う御座います。ガンロクさん！」

アンはガンロクを抱きしめた。

頬擦りもした。

何故か嬉しかった。

「い、一緒に、ね、寝るだけ？」

ガンロクがアンに言う。

ガンロクはアンの肩を抱いている。

「……はい」

アンは恥じらいながら頷いた。

アシユマ達一行は、次の日の朝、ノリトレアに向かって飛び立った。

話しは少し遡る。

何故、オロは代官をアールヌー国に置いたのか？

イーサ教国圏を睨むのなら、もつと中央にあるツハーイ共和国や、ズーヌキ共和国の方が、睨みが利く筈である。

現に、オロはここに代官を置いた後も、暫くこの地に止まった。何を待っているのか？

答えは、ドートネーゼからもたらされた。

この地に、マスクドが眠っていると言うのである。

オロはこの地にマスクドが眠っていると言うから、先ず手始めに、この地を押さえたのである。

アールヌー国のとある地点、地下数百メートルの地点で、何かを発見した。

マスクドの眠る、カプセルの様だ。

全部で、十三個あった。

以前発掘したマスクドは、全部で七体。

単純に考えれば、ほぼ倍の数である。

地上に持ってきて並べる。

オロは正に小躍りして、喜んだ。

「いつ開く？」

オロが訊く。

子供のようだ。

ナナルが、苦笑いをして、

「さあ、そこまでは……」

と、答えた。

答え様が無いのである。

一分後かもしないし、一年後かもしれない。

一生開かないかもしれない。

ナナルには分からなかった。

「それでは困る！」

オロが怒る。

マスクドが居ないとアシュマ・アトーに対抗できない。

あの圧倒的な力に対抗する為にはマスクドの力がどうしても必要なのである。

オロの世界制圧にも必要だ。

開いて欲しい。

「そう、怒らずに。そのうちに開きまする。そう遠い事ではありませぬ。それまで暫しお待ちを」

取り敢えずはそう言ってなだめるしかない。

ナナルにとってオロはドートネーゼの計画の片棒を担ぐ道具に過ぎないのだから。

「本当だな？」

オロはしつこい。

粘着質の性格だ。

疑り深い。

「はい」

ナナルは嘘を吐く。

顔はにこやかだがいい加減にして欲しいと思っている。

従順なように狡猾な面がある。

勿論それはオロには悟らせない。

そもそも女とはそんな生き物なのかもしれない。

「それでは、次の遺物を発掘するか」

やっとオロの気が変わった。

「そんな、神人様^{かみびと}を遺物等と……」

矢張りナナルが苦笑いをする。

オロは神人を遺物扱いにする。

ただのガラクタぐらいにしか思っていない。

「ティシュラと言い、お前と言い、何故そんな箱にこだわるのだ？ 幾ら無限の知恵が与えられると言っても、その試しが無い」

その証拠にこの言葉だ。

はつきり行つて神人探し等はオロにとって迷惑なものでしかかった。

「今に分かります」

ナナルはそう言った。

その矢先であつた。

マスクドのカプセルが開く。

「おお！ 開いた！」

オロが喜色を示す。

カプセルが開いて、裸体の男が出てきた。

男は暫らくボーっとしていたが、視点が定まるようになると頭を巡らせた。

「誰がこの中のリーダーかな？」

カプセルの中から立ち上がって一人の男が言った。

古ぼけた金属のカプセルをまたがって出てくる。

「わたくしである」

オロが宣言する。

男を見据える。

「あなたがマスターになるのかな」

男が尋ねる。

周りにはオロの兵士が周りを取り囲んでいる。

「そうだ。私はオロ・エバスだ」

オロが名乗りを上げる。

椅子に座つて睥睨へいげいしている。

「そうですか。マイ・マスター。我が名はウフェイトウ。エルファの騎士団の団長を務めています」

ウフェイトウは亜麻色の少しウェーブの掛かった美しい髪の毛と、細い美しい眉を持っていた。

鼻筋は通り、涼しげな瞳を持っていた。

意志は強そうだ。

眼に力がある。

美形と行って良いだろう。

「そうか。早速だが……」

オロが何かを言いかける。

そして今に至る。

今でも発掘現場では、二つ目の神人のバックアップを、発掘している。

ナナルは思う。

もし神人が見付ければ、神人による人類粛清と、携拳と、イムフレレ復活が行われるだろうと。

その時には、オロは何を思うだろう。

そもそも世界にとって、暴拳とも言われたこの侵略劇を、何を思っ
て行っただろう。

それは、オロにしか、分らない。

だがオロにとっては、何かしらの各個たる意思を持って、その行
いをしている様に見えた。

ノリトレアでは、アールヌー国の王子、ディーヌ・アデュニを救
う為、作戦を練っていた。

特に弟である、レンヌ・アデュニ王子の意気込みは、尋常ならぬ
物があった。

そこへ、アシュマがガンロクを連れて帰り、そのまま会議の場に
臨んだ。

その為、アンまでもが、会議の場に出る事になった。

「まあ、アン。貴女どうして？」

アーチエルが言った。

アーチエルも会議に出ていたのだ。

「それよりも、アーチエル。お前こそどうして？」

驚いたのは、アシュマの方だった。

こんな場所こそアーチエルに似つかわしくは無いと思った。

博愛主義のアーチエルにとっては。

「何を仰せになります？ アシュマさま。アーチエルも、ディーヌ様を助けとう御座います故」

アーチエルは不思議な顔をする。

そしてさも当然であるが如く椅子に座る。

そして顔を澄ます。

「……」

アシュマは言葉を失った。

あれ程、血を見るのを嫌がったアーチエルが、進んで戦評定の場に臨むとは……。

その時、アーチエルが言葉を発した。

「あ、別に進んでこの場にいる訳では御座いませんのよ？ わたくしがいないと、皆、過激な方向に話が進んでしまうので、ここでこうして見張っていないと……」

まるで、アシュマの心を読んだ様に、アーチエルが話を取って返す。

アーチエルの理論だ。

アーチエルはアーチエルだった。

博愛主義は捨てていなかった。

「成程」

アシュマは納得した。

進んでこの場に居ないと言ったが、積極的に会議に出ていると思っ

た。

勿論皆の論議が過激な方向に走らないように。

「……で、話は何処まで進んでいるんだ？」

アシュマが訊く。

途中から会議に出席したアシュマには話が見えていない。

「青龍号で、一気に国土の奥深くまで侵入し、電光石火の素早さで、デイーヌ王子をお救い致します」

青龍号のステルス性能を最大限に生かしアールヌー国に侵入する
というものだろう。

作戦は迅速果敢を以って行われるのだろう。

「一気に……デイーヌ王子が何処に居るのか、分かっているのですか？」

アルステインが話に割って入った。

迅速果敢と言っても場所がわからないでは話にならない。

そのところを煮詰めなければならない。

「それは、恐らくアル・プリズンでしょう」

レンヌ王子が口を開く。

「アル・プリズン？」

アルステインがレンヌを見る。

どんな施設なのか。

「前・父王ヌハークが、政治犯用に使っていた監獄です」

おそらくアールヌー建国時に作られた施設だろう。

その頃のアールヌー国は強権的で権力に反抗するものは容赦なく
投獄されたのだろう。

その施設がアル・プリズン。

統治権がデイーヌ王子に移ってからは使われなくなっただけ。

アールヌー国の負の遺産である。

「そこに？」

アルステインが重ねて訊く。

「はい。恐らくは」

レンヌは推測的な表現を使いながらも本音は確信に近かった。

「何処にあります？」

「はい。それは……」

レンヌは、アル・プリズンの詳しい在り処を、話した。

その後、大体の段取りを決めて、評定を終えた。

それまでに、アーチエルは何度が発言をし、なるべくなら人命を尊重して欲しいと訴えた。

だが、それでは後れを取ると、アシュマが主張。少し、アシュマとアーチエルの間に、気まずい物が流れ、そのままお互い席を立った。

しかし、後でアシュマがフォローを入れる。

「今度の作戦の成否は迅速さだ。迅速に行動すれば、それだけ死傷者は減る」

理屈だ。

だが、ある意味核心を突いている。

無駄な行動を省けばそれだけ死傷者は減る。

敵味方問わず。

「然様で御座いますか？」

アーチエルはアシュマを見上げる。

アーチエルはなるべくなら人に死んでほしくなかった。傷ついても欲しくなかった。

アシュマの言葉はアーチエルに期待を持たせた。

「勿論」

アシュマはそう言って、アーチエルの頭をなでてやる。

アーチエルは満足気に微笑む。

アーチエルの喜びの元は勿論人を殺さない事への喜びである。

「もう、アシュマさまはそんな事を言って、このアーチエルを籠絡ろうかくするのですね」

アーチエルの機嫌はもう治っていた。

アーチエルへの気遣いと人を殺めない様にするその気遣いが彼女にとっては嬉しかったのである。

「籠絡とは又難しい言葉を選ぶなあ」

アシュマが少し呆れた顔をする。

「そう言って誤魔化しても駄目です」

アーチエルが微笑んでアシュマの腕を取る。

「誤魔化してなんていないさ」

アシュマが腰を折る。

アーチェルの目線に合わせる。

二人の唇が近付いて行く。

そして重なる。

「いつも同じ手なのね？ アシュマさま？」

口を解いてにつこり微笑む。

ご機嫌のようだ。

「いつもその手に乗るじゃないか？ アーチェル」

アシュマが揶揄する。

「もう」

そう言って二人はまた軽く口付けをする。

「衆目のある所では、はしたのう御座いますぞ？ アーチェル様」

アンがアーチェル達を、^{たしな}窘めた。

サイコ・フライヤー青龍号には、アシュマ、オルバニアン、ガン
ロク、ビッシュ、アルミナ、シュンマ、レンヌ、ジークフリート、
アーチェル、キュポア、リイナ、ミカ、と錚々たるメンバ^{そうそう}ーが乗っ
ていた。

変わりどころではアンだ。

アーチェルと二人で、青龍号のクルーの世話をする事に。

それは二人にとって大切な事。

愛する人のため尽くす事への喜びでもあった。

所で、この作戦にアルステインとエファールは参加していない。
当然である。

もう一国の王と后である。

万が一にも王が倒れれば、この国は混迷を極める。

皆の説得もあつて、アルステイーンは、渋々行くのを取りやめた。

青龍号は、順調に航海をしていた。

途中、オロの軍勢に出会う事なく、アールヌーの近くにまで、たどり着く事が出来た。

そして青龍号のステルス性能と相まって、アールヌーの奥地、アール・プリズンにまで、すんなりと侵入する事が出来た。

そして速やかに展開する、アシユマ達。

レンヌが皆を導く。

途中出くわした兵達は、アシユマが先頭となって、峰に反した鬼虎で、ばしりばしりと敵をなぎ倒して行く。

レンヌが目指しているのは、地位の高い者が収容されている、牢獄のある区画だった。

しかしレンヌも完璧に、このプリズンを把握している訳ではない。途中何箇所か、迷った事もあった。

その時にはアシユマが、ディーヌの気を探って、助けてくれた。

その甲斐もあつてか、目標の場所に着いた様だ。

そこは丸くホールの様に広くて、壁にそれぞれ部屋が穿たれて^{うが}いた。

「兄上、何処ですか!？」

レンヌが叫ぶ。

兄を探す為だ。

「レンヌか? ここだ!」

返事の声が聞こえる。

レンヌが、兄であるディーヌ王子を、見つける。

アシユマが錠前を叩き壊し、ディーヌ王子を助け出す。

「長居は無用だ。行くぞ、レンヌ」

アシユマがレンヌを誘う。

「済まぬ。アシユマ殿」

デイーヌ王子が、礼を言う。

牢の入り口から出てくる。

「その話は、後。今は逃げる事だけを考えて欲しい」
アシユマが言う。

辺りを警戒している。

何処から敵が出てくるか分からないのだ。

「待つて欲しいアシユマ殿。この娘も一緒に連れて行って欲しい」

デイーヌは、隣の牢獄につながれている娘を、連れて行って欲しいと、アシユマに頼み込んだ。

鉄格子の内側に少女が見えた。

黒髪の、美しい少女だった。

「それは構わんが」

そういう言葉とは裏腹に、アシユマの顔には、嫌そうな表情が張り付いていた。

足手まといと思ったからだ。

しかも女の足。

脱出が遅くなる。

「済まぬ。アシユマ殿」

デイーヌは頭を下げる。

アシユマは、隣の牢獄の鍵を叩き壊し、少女を連れ出した。
入り口から少女が出てくる。

「済みません。足手まといになって」

その、救い出された少女は、そう言った。
なんと遠慮がないのだろう。

「誰もそんな事は、言っていない」
アシユマが言う。

顔は少し嫌そうにしていたかもしれない。

「でも、そうお考えなさっています」

その少女は無遠慮に言うてくる。

「？」

アシュマは不思議に思った。
人の心を読む娘。

アシュマは、この娘はテレパシストなのかと考えた。
「はい。お考えのとおり、娘で御座います」

その娘は訊きもしないのにそう答えた。
そしてアシュマ達の後をついてくる。

「デイーヌ。この娘を何故？」
連れて行くのかと、アシュマは思った。

「このテレパシストの能力を、敵に使われたくは無いので」
デイーヌが返す。

確かに心を読み能力があるとしたら、為政者にとっては大きな武器になるだろう。

デイーヌはそれを恐れた。

「そうか。分かった」

アシュマも分かったらしい。

少女を連れていこうと思った。

「悪い人では、なさそうですね？」

突然、その少女は、そう言った。

アシュマは少女を見て振り返った。

「そうではないかもしれないぞ？」

アシュマは顔に皮肉を浮かべて笑った。
わざとに。

「そうでしょうか？ 多少ひねた所はあるかも知れませんが、基本的に良い人です。貴方は」

少女はそう言う。

今度こそアシュマは嫌な顔をした。

少女に心を読まれて嬉しい気がしないのだ。

「名は？」

アシュマは話を強引に切り上げて、少女の名を尋ねた。

「アルルマ・サンファと申します」

アルルマ・サンファと名乗った少女は艶やかな黒髪が目鼻立ちのはっきりした美少女であった。

髪には少しウェーブが掛かっている。

黒いドレスを着ていた。

黒尽くめで喪服を思わせた。

「そうか。では逃げるぞ」

アシュマがアルルマ・サンファを連れる。

「待て！ その狼藉者！」

その時、聞き慣れぬ声が、アシュマ達の上に降り注ぐ。

アシュマが足を止める。

「狼藉者？」

アシュマが首を巡らす。

眼に留まったのは騎士姿の男。

その男が歩いてくる。

「我が主の治める国で、囚人を奪うとは、狼藉者以外の何者でもあるまい？」

見知らぬ騎士姿の者が言う。

言い放ち見据えてくる。

不敵だ。

「狼藉者とは笑わせる。そちらこそ国を奪った篡奪者ではないか」
アシュマが皮肉のある笑いをする。

が、目は笑っていない。

油断なく男を見ている。

「そういう言い方もあるか」

ふむと男が考える。

アシュマは隙あらば斬ろうかとも思ってたがその隙はなかった。

「そうとしか言えまい？ 国を奪い帝位を奪うと言う事は」

そう言い放つ。

その事がなかったら、アシュマもこんな所に出張る必要はなかったのだ。

国を奪われたから悲劇が生まれ、国を奪われたから殺戮が起こる。

「成程。所で其許はアシユマ・アトー殿とお見受け致すが如何？」

騎士姿の男が言う。

アシユマの名前を知っている。

何者か。

「如何にもアシユマ・アトーだが」

アシユマも律儀に返してやる。

何者はかしないが、油断ならない者として映った。

「我が名はウフェイトウ。エルファの騎士団の団長をしている」

その騎士の姿をした男は、ウフェイトウと名乗った。

ただならぬ気配を発している。

「……その気の張り方は覚えがある。マスクドか？」

アシユマが訊く。

そうであるならば少し厄介だ。

アシユマの鬼虎が果たして通用するか。

「如何にもマスクドだ。ザザの所のマスクドを、倒したそうだな？」

そのマスクドの頭目ウフェイトウが訊く。

ウフェイトウはウフェイトウで抜かりなくアシユマを見ている。

「何故それを？」

何処で知り得たのか。

それなりに力がある者が後ろに付いているのか。

「我が主から聞いたでな」

アシユマの問に答える。

そう答えたからには後ろ盾があるということか。

「オロか……」

アシユマにそう言わしめる。

厄介な。

アシユマはそう思う。

なにせマスクドを手に入れた。

アシユマに匹敵する戦力を手に入れたのだから。

「如何にも」

ウフェイトウはニヤリと笑いそこで歩みを止める。

一足一刀の間合いだった。

そして男達が現れる。

これがマスクェだろ。

十二〜三人は居そう。

「お前らも、俺達と戦おうと言うのか？」

アシユマが語りかける。

見渡す。

一癖も二癖もある表情を見せた男達が居る。

「至極当然の事を訊くな？」

ウフェイトウが代表して答える。

戦士たるものが何を言っているのかと思う。

「お互い遺恨がある訳でなし、この戦い避けられぬか？」

そうは言っても油断はしていない。

「主の命があるでな。戦いは避けられぬな」

古代において、この、鬼を持つ者とバヴェル、マスクェの関係は

明らかになっていない。

アシユマとアーチエルは胎児の形であったときには、バヴェルの

前に鬼虎と共に在ったと言う。

矛盾しているのだ。

鬼自体は、鬼虎はアシユマ達二人の前に在ったし、天龍鬼は海底

深く古代の神殿に安置されていた。

それでいて、鬼虎と天龍鬼は『一對の鬼』と表現されていたりする。

る。

そもそも、『鬼』は何本存在するのか。

マスクェの持つ得物は『鬼』では無いのか？

そういえば、ハヤの持つ鬼細鳥は鬼虎にインジェクションした。

マスクェと『鬼』の間には謎が多かった。

「そうか」

アシユマが淡々と呟く。

「では……」

と、ウフェイトウなるマスクドが、言いながら手を掲げると、マスクドが戦闘態勢に入る。

「皆の者、油断なるまいぞ。ザザの所のマスクドを倒した輩だ」
ウフェイトウが、配下のマスクドに、檄を飛ばす。

その時オルバニアンが、割って入る。

「アシユマ。助勢しようか？ アシユマでも、あの人数を相手にするのは、無理だぜ？」

何故か嬉しそうだ。

いつもアシユマばかりが活躍しているという想いがあるのだろう。

「出来るのか？ 相手は手強いぞ？」

アシユマが確かめる。

ただ手強いだけではない。

相手はマスクド。

人間以上の身体能力がある。

「舐めるナイ！ 相手ぐらいは出きるぜ」

オルバニアンは舌なめずりする。

何か策があるのか。

ただ戦いたいだけなのか。

「我等を愚弄するか！？ 人間風情が！」

マスクドの内の一人が言う。

それはそうだろう。

彼らは誇り高いマスクド。

人間風情に戦いを挑まれる等と侮辱以外の何ものでもなかったらう。

「お師匠。こう言う時の為のおら達だべ。そのつもりで、おらを呼んだのじゃねえのけ？」

ガンロクが覚悟を決める。

戦う時が来たのだ。

両の手に大鉈を握り締める。

「そうだな。お前達を信頼してみよう」

アシュマが珍しくそう言う。

何かアシュマにも、感じ入る所があるのか。

「成程。おぬしも手駒を使うのなら、我も手駒を使うぞ?」

と、ウフエイトウが言う。

手を挙げる。

マスクド達が展開する。

「手駒ではない。仲間だ」

アシュマはそこにこだわった。

そう。手駒ではないのである。

彼らは意思を持った人間。

そんな彼らが自らの意思でアシュマに助成する。

仲間だと心底思った。

「そんな事は、どちらでも宜しい。では私は、アシュマと手合わせをしようぞ。他の者、適当に相手を見繕え」

マスクド達は戦えば良い。

戦う事が彼らの存在意義。

そしてそれには最大級の礼儀を尽くす。

それがマスクドと言うものだった。

「適当にとはなんでい! 舐めるな!!」

オルバニアンが激昂した。

適当ということに腹を立てたらしい。

軽くあしらわれたと思ったのだ。

彼にもプライドはある。

剣者としての。

それを傷つけられたと思ったのだ。

「落ち着け、オルバニアン。敵の戦略だ」

アシュマが宥める。

本当に敵の戦略かは分からない。

ただそう言つて落ち着かせただけだ。

実際マスクド達は各々獲物物色し始めた。

「す、すまねえ」

その間にオルバニアンが謝る。

別に謝る必要はないのだが、それで冷静になった。

アシユマはそれを横目で見る。

「なら私は、アシユマと手合わせをしてみよう」

ウフェイトウが、剣を抜いて両手に構える。

アシユマは何も言わず、腰をゆっくり沈めて、居合いの形を取る。その間、マスクドが何体か、オルバニアン達の前に来た。

「私はウシャトウ。いざ尋常に勝負」

オルバニアンを前にして、ウシャトウと名乗る者が立ちはだかつた。

他の者は来ない。

人数は余っているのにである。

兎にも角にもオルバニアンの前にはウシャトウと言う者が来た。

「マスクドつてのは、勝負に関しちや、フェアと言うのはホントらしいな」

オルバニアンが感心する。

勝負の定石としては多人数で戦うほうが有利なはずである。

それをしない。

マスクドの掟と言うか誇りなのだろう。

しかも相手は人間である。

「こんな小物相手に、何人ものマスクドを割くのも、大人気ないだな」

ウシャトウは剣を手に、こう言った。

それはウシャトウの本音だったろう。

まずこんな小物に助勢が入ってはウシャトウの誇りが廃る。

他のものが助勢に入らないと言うより入って欲しくなかった。

「ホントに大人気ないかは、勝負してから決めな？」

オルバニアンがうそぶく。

オルバニアンとて剣士の端くれである。

侮られて良い気はしない。

また勝算でもあるのか。

「言っただけ？」

ウシャトウもオルバニアンを睨む。

人間風情がと思ったのである。

それはマスクドにとって侮辱以外の何ものでもなかった。

「ああ。言っただけ？」

オルバニアンは不敵に笑う。

今日のオルバニアンは、大逸鉄ではなく、逸鉄で以って対峙した。

大逸鉄では隙ができると思ったからである。

「貴様の名は何と言う？」

ウシャトウが訊く。

この小癪な若者の名を知りたくなっただ。

だが、すぐに忘れるだろうとも思ったが。

「オルバニアン・マグマイヤーだ。覚えておきな」

「女同士、仲良くやろうじゃないかい？」

アルミナは女性のマスクドの前に立ちはだかった。

アルミナの方から挑む感があった。

女のマスクドが怪訝な顔をする。

「女だからって舐めてないかい？ あゝ……」

その女のマスクドは言葉に詰まる。

名前を言おうとしているらしい。

が、知らないで言えないでいた。

「アルミナさ。アルミナ・ラ・シア」

アルミナがそれを察知して名乗りを上げる。

女のマスクドがにやりと笑う。

「アルミナって言うのかい？ アタシはマールール。じゃあ、行くよ？」

女のマスクドも名乗りを上げた。

まだ若いように見えた。

マールールは自前のレイピアを手にし言った。

二人は言い合せたように構えをとる。

ガンロクが大兵のマスクドと対峙していた。

背丈は同じ程。

七尺三寸四寸（二メートル二十センチ）ぐらいか。

肉付きも同じような感じだった。

どちらも大男である。

だから、このマスクドはガンロクを選んだかもしれない。

「ウゴグロフだ。これから死に行く者に、名を語っても意味は無いがな」

ウゴグロフと言う名のマスクドが、ガンロクに名乗りを上げた。マスクドとしての礼儀を尽くしたつもりだった。

相手に敬意を表したのである。

これから死にゆく者に。

「ガンロクだ。そう簡単には、殺られはしねえべ」

それに対してガンロクはウゴグロフの言葉に真っ向対抗した。

それは決意だった。

死にはしない。

愛するアンが待っているのである。

「そうか、ガンロクと言うのか……」

ウゴグロフは大振りなクレイモアを握ってガンロクと対峙した。

ジークはその大剣を持って既に敵に斬り掛かっていた。

「おおおオッ！！」

電光石火の斬撃をマスクドに向かって放っていた。

真っ向唐竹割りだ。

身幅のある身の丈ほどもある鉄塊。

その物理エネルギーは凄まじい。

当たればそれは粉々に碎けるか真っ二つに斬り裂かれるだろう。

「遅い！」

だが、そのマスクドは余裕で、ジークの斬撃をかわす。

戦い慣れているようだ。

笑さえ浮かべている。

「なっ！？」

ジークは信じられないようだ。

必殺の斬撃だった筈だ。

ジークに動揺が走る。

「大質量の武器と言う物は、こうやって扱うんだよ」

ジークが地面に突き刺さった剣を引き抜く間に、そのマスクドは巨大な戦斧を、ジークに叩き込んだ。

ジークはすんでの所で、剣を引き抜き、戦斧を受け止めた。

「ほう、これを受け止めるとはなあ。貴様の名は？」

そのマスクドはジークの名に興味を持った。

並の腕ではないと思ったからである。

「言う義理があるのか？」

ジークはそっけない。

戦いの最中にそんな余裕などあるのかと訊きたくなる。

それが怒りに繋がる。

「それは無いがな。俺の名はウディガア。俺は名乗ったぞ？ 貴様の名は？」

矢張りマスクドは礼儀を尽くした。

人間にしては並の腕ではないと判断したからだ。

「ジークフリート……」

ジークは仕方なく答える。

うるさそうだったからである。

彼には礼儀云々はどうでもよかった。

あえてあるとすれば強さを誇示する事。

その点で言えばマスクドに似ている。

「そうか」

ウデイガアは納得して頷く。

そして二人は同時に離れ、間合いを取った。

「さあ、どうする？ ジークフリートとやら。貴様程度の太刀捌きでは、俺に傷一つつける事は出来ないぞ？ どうする？」

ウデイガアがジークを挑発する。

楽しんでるのだ。

戦いを。

その時ジークは、その大剣を、右の車に構え、左肩を異様に前に突き出し、こう呟いた。

「秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改……」

「女性を相手に戦うのは、性に合わないんですが」

レンヌはそう言った。

困った顔をしている。

どうやら誘ったのは女のマスクドらしい。

「あら。お姉さんに、そんな事言っちゃって言いのかしら？ ボク？」

相手のマスクドが妖艶に微笑む。

レンヌが女のマスクドの好みだったらしい。

レンヌ相手に楽しんでいる。

戦いを楽しむマスクドとしては少し違うようである。

「『ボク』じゃありません。レンヌ・アデュニ。これが僕の名前です！」

レンヌは少し憤った。

子供扱いされたと思ったのだ。

男子十六歳を子供と見るか大人と見るかそれは見るものによって違うだろう。

だが、レンヌは怒った。

自分を一人前の人間だと思っていたからだ。

『ボク』とはレンヌにとっては失礼だった。

だから名乗った。

「アデュニ？ ……ン？ ボク、レンヌ・アデュニ第二王子？」

女のマスクドはその名に聞き覚えがあった。

アデュニ家の王子だと聞き及んでいたからだ。

その王子が何故こんな所に居るのか。

「そうですよ。だから僕に免じて、剣を引く事は出来ませんか？

お姉さん」

レンヌは戦いを避けようとした。

いくらマスクドとは言えこの美しい女性を殺したくはなかったのである。

しかし少し甘いのではないか。

女とは言え相手はマスクド。

人間以上の身体能力を持つ者である。

「やつぱり『ボク』ね。それにお姉さんじゃ寂しいわ。私の名前はイラ」

その甘えを見ぬいてマスクド、イラはやはりレンヌを『ボク』と呼んだ。

僕に免じて等と言うところに育ちの良さが伺える。

イラはレンヌを侮って、どう甚振ってやろうかとサディスティックな喜びに興じるのであった。

「それに退く事は出来ないの。主の命令は絶対なの」^{マスター}

いらは残念そうに言う。

マスターの命令がなければこの美少年を玩具に出来るのに、それが出来ないからどう甚振ろつか楽しむのである。

「オロですか？」

レンヌが訊く。

マスターがオロならばさぞかし無慈悲な主人だろう。

それを思ったのである。

「ええ。そうよ」

イラは肯定する。

だが、もはや関係ない。

イラはこの少年をどう弄ぶかだけを考えていた。

「残念です」

そう言つてレンヌは、呪文を唱えだした。

『秘めたる聖剣、内より溢れん！

愛するものを、護る為、

六つの星に、六つの剣、

額に印を表す時に、

両の手、両の目聖剣掴まん！

出でよ聖剣、汝の敵を斬り刻まん！

ヘブンスソード！！』

中空に六本の剣が現れた。

それはこの世の中で最強と謳われた召喚魔法である。

その六本の剣がレンヌを狙う。

「あら？ ヘブンスソードを召喚できるのね？ 大したものだわ」

イラは少し驚いた。

まさかこの時代に、ヘブンスソードを召喚できる者がいようとは思わなかったのである。

それを言うなら、この時代に『鬼』を持つ者がいようとは思わなかった。

シュンマも、マスクドと対峙していた。

シュンマは魔法に精通している魔導士かと思われがちだが、体術や剣術に優れた魔法剣士でもある。

その構えに隙は無かった。

相手のマスクドはこれは中々、と、思った。

そうやって対峙している間に、シュンマは呪文を唱え始めた。

『我は禁忌を見た者、犯したもの。』

我が憎しみは、汝の快楽。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール！！』

「いかん！！」

相手のマスクドは、魔法の及ぶ範囲から身を退いた。

その隙を突いて、シュンマは相手のマスクドに、斬りつけた。

相手のマスクドは、シュンマの剣を受け止めた。

「中々やるな。名は何と言う？」

鎌を鐔迫り合いながらそのマスクドが言う。

シュンマを卓越した技術の持ち主と認めたようだ。

シュンマの名に興味が湧いた。

「相手に名前を尋ねる時は、先ず御自分から名乗られるのが礼儀だ

と、聞き及んだ事がありますか？」

シュンマもなかなか言う。

刀を押し付けながら微笑む。

この状況で微笑んでいられるところが凄い。

「そうだな。失礼した。我が名はマスクドのレトウ。エルファの騎士団のレトウだ。お主は？」

レトウは非礼を詫びた。

マスクドとして礼を失したと思ったのだ。
そして名乗る。

流石はマスクド。

そこところは律儀だ。

そしてシュンマの名を問う。

「シュンマ・イーハニアです」

シュンマも素直に返答する。

礼には礼で返す。

武人の嗜みだ。

「そうか。覚えておこう」

レトウが言葉を発する。

そして最後にビツシュ・ノマンがマスクドと向かい合っていた。
戦いは一進一退を極めていた。
こちらは刀、向こうは金剛棒。
相手が斬り付けばこれを防ぎ、そして反撃を加えて相手に阻まれる。

中々高度な斬り合いだった。

「おい！ ナトイゲフル！ そんな奴、早く殺っちまえよ！」

戦っていない、数名のマスクドが言った。

からかう。

が、実際はそう簡単に行くものではなかった。

人間にしては腕が立つのである。

「うるさい！ 少し黙っている！」

ナトイゲフルと呼ばれたマスクドが大声を出す。

苛ついていた。

すぐにでも倒せる相手だと思ったからだ。

「そうか。お前は、ナトイゲフルと言うのか」

ビツシュ・ノマンが、少し興味を覚えて、思わず呟く。

ビツシュ・ノマンが刀を正眼に構える。

「そうだ。お前の名は？　ここまでの腕だ。只者ではなかるう？」
相手のマスクドが訊く。

ナトイゲフルも相手の名に興味を示す。

「ビツシュ・ノマンだ」

ビツシュが答える。

その間にも油断なく構える。

「お前のその名、覚えておこう」

アシユマとウフェイトウが対峙していた。

ウフェイトウは剣を振りかざし、アシユマを斬り下ろさんとしていた。

一方のアシユマは、居合いの形を取り続けていた。

いま、アシユマは秘剣・流星を使っていた。

奥義『無想活殺』で得た境地を、別の観点から編み出した技だ。

一剣が万剣になり万剣が一剣に帰る。

そしてそれは、どの太刀筋の動きにも対応できる構えの色を、匂わせていた為、逆に太刀筋が読めないとも言えた。

もし仮に、ウフェイトウが一つの太刀筋を読んだとすれば、それは微妙ながら身体の動きに表れ、アシユマはそれを読み、別の太刀筋で攻撃してくる。

また仮にウフェイトウが、どの太刀筋も読まなかった場合、アシユマは得意の抜刀でウフェイトウを撃てば良い。

ウフェイトウが、全ての太刀筋を読もうとした場合、アシユマの太刀筋は変幻自在、無限であるので、全ての予測は不可能なのだ。

「む……」

ウフェイトウは攻めあぐねていた。

アシユマが、これ程までの腕とは、思って無かったのだ。

ウフェイトウは今、動けないでいた。

「ウフェイトウ！ どうした？」

「何、睨めっこしているんだ」

残りのマスクド達が、はやし立てる。

ウフェイトウ程の腕ならばすぐにでも斬れると思ったのだろう。

それが動かない。

不審に思うよりもまず皆が揶揄してみせた。

（何を勝手な事を言う）

ウフェイトウは、心の中で舌打ちをする。

居合だ。

剣の軌跡はそうはない筈。

だが何処から剣が出てくるか読めないのだ。

迂闊には動けない。

（かなりの使い手だぞ。コイツは）

ウフェイトウは、アシュマと、どう戦うか思い悩んだ。

アシュマを倒す方法が、一つはある。

しかしそれは、最後の手段だ。

相抜けだ。

しかし、今、相討ち（相抜けというよりは元来相討ち）の様な手を講ずる訳には、行かない。

戦いは、まだ序盤なのである。

何があるのか、分らない。

ここで死ぬ訳にはいかないのである。

「どうした？ 切っ先に、迷いが見えるぞ？」

アシュマが看破する。

ウフェイトウの心の動きを。

どうするか？

「者供、ここは退くぞ！」

ウフェイトウが皆に下知を下す。

マスクドにとっては屈辱だ。

そうさせるアシュマの腕が卓越していたのだが。

「何!？」

「折角これからだつてのに!」

マスクド達は憤った。

もう戦闘に入っているマスクドも、いるのである。

「退くぞ!」

マスクドにとって、上からの命令は絶対である。

たとえそれがどんな理不尽なことであっても。

「仕方ない、退くか」

戦闘をしていないマスクドが言う。

オルバニアンが、ウシャトウと、斬り結んでいた。
一合、二合と。

そしてウシャトウが、口を開く。

「中々どうして、やるものよ」

それは言外に人間にしてはと言う形容がつく。

それにしても人間にしては戦闘力が高い。

対応力もある。

驚くばかりである。

「アンタもな」

そう言っただけ二人は弾かれたように左右に別れた。

そして、オルバニアンは徐々に刀の切っ先を、天に向かって突き
上げ始めた。

奇妙な構えである。

「?」

ウシャトウが、オルバニアンの構えに、奇異な物を感じる。
身体に、気張った筋肉の緊張は無い。

刀は天を突き、胴はがら空き。

即ち、胴に大きな隙が出来ていた。

が、ウシャトウは、これがオルバニアンの誘いだと思った。

それが証拠に、氣勢は一向に修まる気配を見せず、益々膨れ上がる勢いだ。

二人は爪先で距離を削る様に、少しずつ詰めて行った。
ウシャトウはそれでも、斬って掛かるうかと、思っていた。

どうせマスケドの、念導境界面で、防がれるのだ。

構わないと思った。

「天刀稲妻斬……！」

オルバニアンは静かに言った。

（小賢しい）

それはウシャトウの、偽らざる感想だった。

ウシャトウは、オルバニアンを侮った。

ウシャトウは、剣を八双の構えに持って行き、一気に振り下ろそうとした。

生死の間仕切りは、いとも簡単に踏み越えられた。

ウシャトウは、剣を振り下ろしてきた。

オルバニアンはやや遅れて、刀を振り下ろした様に見えた。

オルバニアンの稲妻の様な斬撃。

ウシャトウは手首に強い衝撃を受けた。

見ると何とウシャトウの手首が斬られていた。

何故？

それは、ウシャトウが油断して、念導境界面を強く張っていないかった事。

オルバニアンが、これまでのアシユマの話から、念導境界面を強力に張っておくに、越した事は無いとの情報。

念に強く反応する魔導石製の武器、逸鉄が、オルバニアンに強い念導境界面と鋭い斬撃を発しさせていた。

「油断だったなオッサン。じゃあとどめだ」

オルバニアンが再び切先を天に向かって伸ばす。

気迫を前に出す。

とどめを刺そうというのだ。

「侮るなよ？ 小僧」

多少油断をしていた様だと、ウシャトウは思った。
今度は油断はしない。

ウシャトウが、

「『天蝸鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を
以って汝の主を癒すべし」

と、唱えて、斬られた手首が、元通りになる。

これでオルバニアンのなしたことは意味を無くした。
マスケドに手傷を負わせるということはなかなか無い。
そのチャンスを失った。

オルバニアンの勝機はなくなっただかに思えた。

「さて、遊びはここまでだ。中々やるな。今度は今までの様にはい
かんぞ？」

オルバニアンはその言葉を聞いて、背中がぞくりとした。

ウシャトウの念導境界面が、強く張られた事を、肌で感じた。
敵の隙が、一分も見受けられなくなった。

まるで別人だ。

その時、

「者供、ここは退くぞ！」

ウフェイトウの皆への下知が聞こえた。

ウシャトウは舌打ちをする。

みすみす勝ちを逃すようなものだからだ。

ウシャトウの体から剣気が消えた。

これには、オルバニアンは、正直助かったと思った。

アルミナはマールールの鋭いレイピアの攻撃に翻弄されて、マ
ールールに圧されて形勢は不利であった。

アルミナは、右目の眼帯をむしり取った。

これでアルミナは、敵の太刀筋が読める様になった。

戦利眼だ。

これは相手の太刀筋がわかる一種の予知能力だ。
それはアルミナの右目に映る。

「このアタシに『戦利眼』を使わせたね？　もうあんたの攻撃は効かないよ？」

アルミナはそう言い放った。

戦利眼に絶対の自信を持っている。

「『戦利眼』？　まあ、いいさ。何を使おうと」

マールールの言葉はそのまま、確かに戦利眼を、アルミナが使っても、戦いにくさは変わりがなかった。

ただ、太刀筋が見える様になったので、危険度は減ったが。

「ち！」

アルミナは舌打ちをした。

しかし、所々、小さな隙が出切るのを、見逃さなかった。
アルミナはそして、ロンリーストライフを振り下ろした。

「オッと危ないねえ。何するんだい」

マールールはすんでの所で、アルミナのロンリーストライフをかわした。

一応戦利眼の恩恵は受けているらしい。
が、会心の一撃とは行かないようだ。

（くっ！やりにくい……）

アルミナはそう思った。

戦利眼を使ってまで相手に一撃を加えられないとなると厄介だ。
ロンリーストライフほどの質量のある武器だ。

当たれば効果があると思われた。

それが叶わない。

その時、

「者供、ここは退くぞ！」

ウフェイトウの声が聞こえた。

「何だい？　これからだつてのに……。命拾いしたね、アンタ。…」

…アルミナと言ったかい？ 次に会うまで、命は預けておくよ。じやあね」

マールは余裕を持って退いた。
アルミナは悔しいが、その通りだと思った。

ガンロクとウゴグロフは、互角の勝負をしていた。

ウゴグロフはガンロクと同等……若しくはそれ以上の、大兵だ。

ウゴグロフがクレイモアで、ガンロクに斬り掛かる。

それをガンロクが、鉈の二刀で、受け止める。

それ程までに、ウゴグロフの一刀は重い。

そして今度は、ガンロクが、三尺を超える大鉈を、ウゴグロフへと、車に回し送り込む。

今度はウゴグロフが、ガンロクの攻撃を身を引いてかわす。

ガンロクの一撃は、かなり鋭い。

それを紙一重でかわす。

そして又、ウゴグロフが、剣を振るう。

一進一退の攻防が、行われていた。

ガンロクは、焦っていた。

ガンロクは、腕は確かだった。

そしてウゴグロフとも、互角の腕前を披露もしていた。

だが、如何せん、実戦経験が少なかった。

それが、ガンロクの焦りを引き出した。

その焦りは、ガンロクを怯ませ、徐々に劣勢へと引きずり込む。

ガンロクは小さな斬り傷が少しずつ増え始めた。

（お、お師匠……アンさん……おら、も、もう駄目かしんねえ……）

「ふ。戦意喪失気味の様だな。貴様それでも戦士か？ みつともない。待ってる。今、楽にしてやる」

ウゴグロフはクレイモアを振り上げた。

（だ、駄目だ！）

ガンロクは絶望感に包まれた。
その時、

「者供、ここは退くぞ！」

ウフェイトウの声が聞こえた。

「ち！ いい所を。命拾いしたな。ガンロクとやら」

ウゴグロフが舌打ちをする。

ウゴグロフは剣を背負い踵を返す。

「う……」

呻くガンロク。

ガンロクは敗北感に打ちのめされた。

ジークは、秘剣を発する機会を、窺っていた。

異様に前に出している左肩は誘いだった。

ウデイガアはそれを誘いと看破した。

誘いと分かっているか迷っていた。

ウデイガアはこの技は剣を車に回す技と踏んだ。

そして、戦斧を縦に斬り付けてきた。

中々鋭い一撃だった。

相手に届く時間はこちらの方が早い筈だった。

が、ジークは振りかぶり重い剣を物ともせず縦に振ってきた。

ウデイガアは肩ばかりを見ていたので振りかぶって来たジークへの間合いを見誤り、戦斧は空を斬った。

頭上からは大剣が襲ってくる。

完全に後の後を取られた形だ。

ウデイガアはその勘働きで、剣を見もせずに、ごろりと横へ転がった。

ジークの剣が今ウデイガアが居た所にめり込んだ。
その時、

「退くぞ！」

と、ウフェイトウの声が聞こえた。

「ち！これからだつてのに……」

ウデイガアは、ウフェイトウの下知に不快感を覚えた。

レンヌはヘブンスソードで、イラを攻撃していた。

だが、イラは、スモールソードとスモールシールドで、ヘブンスソードの剣達を悉く弾き返していた。

それはまるで、舞いを舞っている様にも見えた。

そしてそのまま、レンヌに近付いてくる。

「ア、アンサラー、オールソード、コ、コマンド、アタックー！」
レンヌは焦っていた。

こうまで、ヘブンスソードをかわされたのは初めてで、真っ直ぐとレンヌの方へと歩んできたからであつた。

イラは真っ直ぐ、レンヌの方へやって来る。

「さあ、行くわよ！」

イラが剣と盾を構える。

その顔には酷薄な笑みが浮かんでいる。

（リ、リイナ……！！）

レンヌは、愛しい人の名を、心の中で叫んだ。

絶望感が彼を襲つた。

「退くぞ！」

この時、ウフェイトウの声が聞こえた。

「何よ？ これからだつて時に」

そうは言つても、頭目の言葉は絶対で、逆らえる筈も無かつた。
残念そうな顔をし、

「じゃあ、ボウヤ。また、今度ね」

イラはそう言つて、レンヌの前から去って行つた。

シュンマはレトウに対し、決定的な一撃を与えられずに、苛々としていた。

魔法が決まらない。

魔法に絶対的な自信をもつシュンマにとってこれは焦りを与えることとなった。

そして焦りのまま魔法を唱え始める。

『あまねく炎、火の精霊よ。

汝ら、我が命に従い、

集いて、我が敵を焼き滅ぼすべし。

放て、その手で。

ファイヤーボール!!』

シュンマは魔法を駆使しながら、レトウに対し迫っていた。

しかし、なんとレトウも、

『風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心。

風切る翼、剣とならん。

サイクロンスラッシャー!!』

と、魔法を行使してきた。

シュンマは魔法をかけるのは得意だが、その逆は得意ではない。

シュンマにとって相性の悪い相手だった。

「ち！」

シュンマは、魔法を避けるのに精一杯で、敵に近づけないでいた。

舌打ちをして相手を睨む。

ともすれば、こちらが魔法でやられかねないこの状況で、敵に近付いて一太刀浴びせなければならぬ。

そう、シュンマも皆と同じく、焦っていたのだ。

『幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ。

汝の顔に笑みは無し。

未来永劫繰り返される。

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!!」

シュンマが魔法を唱えた。

これは相手に効果を与えたと思った。

だが、

「ふん！ 甘いわ！」

レトウは自前の武器、大鎌を手前に出すと、稲妻を全てその刃に吸い込んだ。

「なっ！」

シュンマは驚いた。

何と、魔法を吸い込むとは、思ってもいなかったからである。

魔法を防ぐのは大抵アンチスペル、即ちシールドの魔法である。

大鎌で吸い込むとはどういうことなのか。

「さあ、行くぞ。シュンマとやら」

レトウが迫る。

シュンマは焦りを感じた。

敗北を予感したのである。

「退くぞ！」

その時、ウフェイトウの声が、聞こえてきた。

「ち！ いい時に！」

レトウは悪態をついた。

絶好の機会だったのに。

「小僧！ これまでの様だ。次に会える時を、待っているぞ！」

レトウは捨て台詞を吐き、シュンマの前から去る。

ビツシュはナトイゲフルと互角に戦っていた。

お互いが斬り結んでいた。

果敢にもビツシュは、長い棒の間合いの内側に入り込んで、戦っ

ていた。

相手のナトイゲフルも、小器用に棒を巧みに操って戦っていた。双方とも、右に左に武器を操り、相手に細かく傷や打撲を与えていた。

しかし、相手に決定打を与えられずにいた。

双方、苛々としている時に、

「退くぞ！」

と、ウフェイトウの声が聞こえてきた。

「これまでの様だ」

ナトイゲフルが言う。

間合いを外す。

「まで！ ナトイゲフル！ 逃げるのか！？」

ビッシュが叫ぶ。

しかし跡を追うとは思わなかった。

「逃げる？ 助かったのはお前の方だよ！」

ナトイゲフルが薄ら笑いをして言う。

勝ち誇っているのだ。

ウフェイトウの急な下知だった。

かといって、直ぐに「はい」と言える物ではなかった。

誇り高い彼らである。

素直に従えなかった。

が、最後にウフェイトウが、

「我に従え！！」

と、下知を下すと、皆渋々退いて行く。

「皆！ こちらも退くぞ！」

アシュマが叫ぶ。

アシュマも敵が退いてくれて、ホッと一息、付いていたのである。アシュマの秘剣・流星も万能ではない。

あの時、相抜けをされていたならば、敵はともかく、自分も只ではすまなかっただろう。

そういう点では、ホッと一息、と、言う訳だ。

「おう！」

オルバニアンが応ずる。

以下、余人は、それぞれ隙を突いて退いて行く。

帰りは、それ程抵抗らしい抵抗は無かった。

そしてサイコ・フライヤー青龍号に乗り込んで行く。

全員が乗り込んだ所で急発進して行く。

急ぎアールヌーの、戦闘可能圏内から離脱して行く。

「マスケドか。厄介な」

アシュマは、誰にも気付かれる事無く、呟いた。

第三節 動乱の世界

「アシユマ達は怎么样了？」

オロはウフエイトウに言葉をかけていた。そしてアールヌー国の代官府に来ていた。まだ神人を発掘している現場に居たのだ。

「逃げられたか」

オロが続いて言う。

ウフエイトウが俯いている。

そして言葉を発する。

「『逃がし』ました」と。

マスケドとしては言っではいけない事である。

戦いに生き戦いに死す。

戦ってこそマスケド。

そのマスケドが『逃がした』と言っているのだ。

戦いを拒否したにも等しいことにならないか。

「『逃がし』た？ ……だと？」

オロは苛付き、振り向いた。

マスケドにあるまじき言葉だと思ったからである。

許せないと思った。

「はい」

ウフエイトウは、悪びれずもせずと言った。

マスター主人を前にして不遜な態度ではある。

マスケドは主人に対して絶対服従ではないのか。

「何故だ？」

オロは問い詰める。

逃した理由もさることながら、ウフエイトウの態度も気に入らなかったのである。

「あの、アシュマと言う男、余りにも危険と存じたもので」
ウフェイトウがそのまま言う。

それだけでマスクドとしては失格なのではないか。
オロが癪に障る。

「当たり前だ。その為の貴様らだ。それを忘れるな」

多少オロは怒りを覚えたようだ。

オロがウフェイトウを見据えて言う。

でなければ、なんのためのマスクドか。

アシュマに対抗する為なのだ。

それが、危険と存じまして、ときたものだ。

怒りを覚えずには居られない。

「は」

ウフェイトウが畏まる。

彼にとつては何も言えなかった。

彼も怒りを覚えなかった訳ではない。

この様な屈辱を味合わせた男、アシュマ。

許す訳にはいかない。

「それとな。ディーヌ・アデュニ王子を取り逃がした罪、決して軽くは無いぞ？」

オロが更に付け加える。

これにも怒りを覚えていた。

何たる不手際か。

その上あの生意気な青年を逃した事自体怒りを覚えた。

ある意味小さい男である。

だが、怒りが先に立った。

「……」

ウフェイトウは言葉もない。

アシュマを逃した事。

ディーヌ王子を逃した事。

全ては事実なのだ。

マスケドとしては恥すべき事である。

「分かったなら下がれ。私は忙しい」

もうオロはウフェイトウの方を向いていなかった。

正面を向いて腕を組んでいる。

苛立ちと怒りを抑えていた。

「は」

ウフェイトウは、その言葉を発すると、気配も無く消えた。

オロは発掘現場の司令室から、モニタで発掘の様子をつぶさに見ていた。

もう、既に百数十メートルは、掘っているだろう。

こうも何も出てこないとなると、不安になってくる。

オロは、

「ここで本当に、あっているのか？」

等と、スタッフに訊いてみる。

しかし、スタッフに聞いても、分かる筈が無い。

何故ならスタッフも、神人を見た事が無いから。

現地スタッフなのだ。

ただ、この付近から発信されている電波を頼りに、掘り進めているに過ぎないからだ。

そして、この現地スタッフが、オロに反感を持っている。

それがモチベーションに、直結している。

それはそうだろう。

人の家に土足で入り込んで、部屋の中を荒らして、そして強引にその家の主に納まってしまふ。

そんな事が許されるだろうか？

が、オロはそれをやったのけた。

オロは、その事を、分かっているのだろうか？

それとも、分かっている、やっているのだろうか？

だとしたら、質の悪い冗談よりも、笑えないだろう。

さて、神人だが、発掘は進んでいた。

電波が段々と強くなる。

そしてついに掘り当てた。

「やった……」

オロは呟いた。

それだけだった。

ただモニタを見ている。

「やりましたわね！」

オロよりも、ナナルの方が、興奮をしていた。

オロには、何の高揚感も、感動も無かった。

ただ、

（また、でたか）

と、言う程度の『感想』しか、持てなかった。

「これで無限の知恵が、与えられるでしょう」

ナナルが興奮して言う。

本気でそう思っているようだ。

新人は鬼虎と同じく記憶素子だ。

しかもイムフレールの身体情報が入っている。

ドートネーゼの者にとっては神に等しい。

その神が入った箱なのだ。

まさに無限の知恵に等しい。

「そんな物か？ 以前、この『箱』を発掘した時、何の恩恵にも預かれなかったぞ？」

対してオロは呆れ気味だ。

そのとおり。

以前は箱を発掘してお終い。

なんの恩恵にもあずかれなかった。

ナナルの言う通りにしてみたが、オロにとってはマスクド以上の価値があるとは思えなかった。

「今度はそういう事はありませんわ。何せバヴェルを造って頂きますもの。それには大量の魔導石が必要だわ。何とかして下さいな」

ナナルはバヴェルを引き合いに出してきた。
話が急に大きくなった。

「何と！ バヴェルをか！」

オロが驚いた。

なんと話はバヴェル。

まさかそのような事が出来ようとは。

「ええ」

オロにとっては、こちらの方に興味があつたらしく、早速飛びついてきた。

再びあの圧倒的な力を手にする事が出来る。

そのことについて興奮せずに入られなかった。

「おお……」

と、後ろから複数の、感嘆の声が聞こえる。

ドートネーゼ、最高評議会だ。

神人の復活劇を見に来たのだ。

何と、アルヌー国には、オロもいれば、ドートネーゼも来ていたのだ。

ここで彼らに気付いて、一網打尽にすれば、これ以後の戦いも無かったのだ。

しかし、それも分かる筈も無く、アシュマ等は、この国を離れざるを得なかった。

仕方の無い事である。

かみひと神人を奉ずるドートネーゼの目的とは、神人の下、全人類を粛清し神人に蓄えられたイムフレールのデータを実体化し、地球をイムフレールの下に返す事。

また、ドートネーゼの眼鏡に適った現生人類を『携拳』と称し、全人類の粛清から隔離する事をその使命としている。

又、ドートネーゼがバックについている企業には、イーチャイルド社を始め、軍事企業、電腦関連、銀行、不動産、証券等世界の叢そうたる企業が名を連ねている。

ドートネーゼの力の底と言う物が見えない。

それだけに、不気味な物が拭えない。

組織は、表面上、宗教法人いう事になっている。

人材の裾野は広がった。

その神人を、オロは、アヘイビア大陸にあるオロ・エバス国のオロ・エバス社・本社に移送した。

神人からバヴェルの構造図は示された。

オロは早速、バヴェルの建造を、自邸の庭で始めるよう命じた。

自国本社にある力の全て、イーチャイルド社・軍事部門、関係国の企業・軍、イーサ教国圏の豊富な魔導石、全ての技術、全ての資産、全ての資源、全ての人材。

文字通り、全ての力を注ぎ込んで、バヴェルを建造し始めた。急ピッチで。

時間は少し遡る。

そう、丁度アシユマ等が、アールヌーと呼ばれていた国を、脱出した辺りだろうか。

「殿下、大丈夫ですか？」

アーチエルが、デイーヌ王子の所に来て様子を聞く。

青龍号は戦艦に積めるクラスの魔導石を三基置き、それぞれに六人念士が就いていた。

なので、アーチエルが事さら魔導石に触れている必要はないのである。

（が、いざとなれば、アーチエルが魔導石に触れる事もある）

「ええ。大丈夫です」

風呂上りのデイーヌが言った。

牢獄に入れられて、ろくに風呂にも入れてもらえなかった。

生き返った気分だ。

服も新しいものに変えてある。

「冷たい物でも、いかがですか？」

アーチエルが尋ねる。

「有難う。アーチエル様。頂きましょうか」

ディーヌ王子が答える。

やっと一息つけて落ち着いた表情をしている。

素直に頂こうと思った。

「はい」

アーチエルが微笑んで頷く。

キツチンの方へ足を向けて消える。

「兄上、大丈夫でしたか？」

レンヌが兄を気遣ってやって来た。

レンヌとディーヌの兄弟は少し歳が離れている。

レンヌがディーヌに甘えることがよくある。

気遣うと言うよりは不安からくる甘えに感じが似ているとディー

ヌは判じる。

「レンヌ。大丈夫だ」

ディーヌは察して安心させる。

「いえ、拷問とか……」

レンヌは実際に心配をする。

成程、甘えとは少し違うようだ。

「大丈夫だ。それにしても大人びたな？ レンヌ」

ディーヌはレンヌの様子が少し違う事に気がついた。

レンヌは少し成長した。

それが分かったようだ。

「いえ、それ程でも」

レンヌが照れる。

それでも少し嬉しいようだ。

兄に認められたのだ。

嬉しくないわけではない。

「大丈夫ですか？ デイーヌ様」

リイナが機嫌を伺う。

レンヌの兄だ。

いずれは自分の義兄あにになる人である。

気遣う。

「お美しくなれましたね。リイナ。レンヌと仲良くしてましたか？」

デイーヌ王子がリイナも気遣う。

デイーヌから見てもレンヌとリイナは微笑ましい。

「美しくだなんて。嫌ですわ」

リイナは照れて去ってしまった。

この様子なら大丈夫だな。

デイーヌはそう思う。

「はあ。良いお湯でした。有難う御座います」

女性が湯から上がってきた。

パジャマ姿だ。

このパジャマはアーチエルの物だ。

女性はアーチエルよりも少し背が高い。

だからパジャマは少し小さい。

「大丈夫かな？ あゝ……」

アシユマが気遣うが、名前が思い出せない。

先程助け出した少女だ。

中々可愛い顔をしている。

「アルルマ・サンファと申しました。先程」

どうやら、機嫌が悪いらしい。

自分が名乗りを上げたのに、覚えてもらえなかったことに腹を立てているらしい。

そんな事で腹を立てているのか。
変わった少女である。

「どう致しました？ アルルマ様」

アーチエルがご機嫌伺いをする。

アーチエルはちゃんと名前を覚えていたらしい。
そこら辺は記憶力が取り柄のアーチエルである。

「貴女様が、アーチエル様に御座いますわね？」

アルルマ・サンファがアーチエルの名を呼ぶ。

確かまだアーチエルは名乗りを上げていないはずである。

「なぜ、わたくしの名を？」

アーチエルは不思議な顔をした。

「いえ、何となく……」

アルルマは言葉を濁して誤魔化す。

「テレパシストなのですよ。アーチエル様」

ディーヌ王子が言う。

勿論アルルマがである。

アーチエルは納得した顔をする。

「ディーヌ様！」

アルルマは怒った。

警戒されるのを嫌ったからである。

「アルルマ様。そうお怒りにならずに……」

アーチエルに警戒する気配は無い。

やさしく声をかける。

それはアルルマにも分かった。

「そうですね。御免なさい」

アルルマは安心した様子だった。

椅子に座って落ち着く。

「あの、お二人はどういったご関係で？」

アーチエルはアルルマとディーヌの関係を訊いているのだ。

他意はない。

ただ、アル・プリズンから逃げ出す時にわざわざ一緒に助け出す
ほどののだ。

興味が湧いた。

「縁戚ですわ。従兄妹です」

アルルマがそう答える。

「え？ そんな話、僕は知りませんよ？ 兄上」

レンヌが隣で困惑して言う。

初耳なのだ。

「それはそうだ。父上と私の間での秘密だからな」

デイーヌ王子が事もなげに言い切る。

デイーヌとアルルマは知己だったようだ。

古くからの馴染みらしい。

「何故？」

レンヌはそう訊きたがる。

そんな大事な事を何故自分にも話してくれなかったのか。

「それはわたくしがテレパシストだからです」

今度はアルルマ・サンファが答える。

幸か不幸かレンヌにはその手の能力が備わっていない。

それが故に知らせなくても良いという頭が働いたようだ。

「テレパシスト……それが何故？」

更にレンヌが訊く。

自分だけ除け者にされたような気分になる。

訳はありそうだ。

「政争の具に使われるのを怖れるあまりに、貴方の父王……叔父上様がわたくしを修道院に……」

確かに相手の思考を読み解いたり、相手の頭の中に自分の思考を送ったりする能力があれば、政治的には大変強力な武器にはなる。それが自分の武器になればよいが、それが敵側の武器になればどれほど恐ろしいか。

デイーヌやレンヌの父王ヌークはそうした。

強権を持ってこの国を維持した人である。

自分の武器になるよりも、相手の武器になることを恐れた。

「そうでしたか」

レンヌは同情した。

自分の能力ゆえに閉ざされた生活を送る。

それは辛い事だったろう。

「あら、同情は不要ですよ？ それに、あまりわたくしとお話してますと、あのお方がお怒りになられますわよ？ 下心は無い事を、ちゃんと仰って」

アルルマが指し示した先には、怒り顔のリイナがいた。

普段は冷静沈着で冷めたリイナだが、ことレンヌの女性関係になると格気を発する。

アルルマは早速自分の能力を発揮して、それを指摘した。

「り、リイナ！ ち、違うんだ……これは」

レンヌはリイナが格気持ちだということを知っている。

レンヌは狼狽えた。

「ま、許して差し上げましょ？ 下心は無いみたいだし」

リイナが半ば怒りながら、レンヌを許した。

そうして、アシュマ達は、機体をノリトレアに滑り込ませて行く。

アルステイーンは不機嫌だった。

しぶしぶ承知したとはいえ、やはり自分が除け者になった事を不機嫌に思っただ。

玉座に斜めに座り、ぷい、と横を向き拗ねている。

今、アシュマ達は王の謁見の間に居た。

何故か平伏している者は居ない。

「可愛い方ですね。アルステイーン様って」

アルルマが思わず口を滑らす。

思考を思わず読んでしまったのだ。

こういう事があるから敬遠される。

「可愛いって何よ……って、キミ、誰？」

アルステインが頓狂な声を出す。

可愛いと言われて更に不機嫌になるが、アルルマの存在を認めてそれを忘れた。

可愛い少女に目が行く。

「これは申し送れました。わたくしはアルルマ・サンファ。アールヌーの眷族^{けんぞく}に御座います」

アルルマがドレスの裾を持って頭を下げる。

このドレスもアーチェルの物だ。

少しきつい。

「そうですか。ご苦勞をなさった様だ。ゆっくりなさって下さい」
アルステインがアルルマにやさしく声をかける。

そんな苦勞をしたと言う事を知っているわけでもないのにそう言う。

推測したのだ。

「有難う存じます。陛下」

アルルマが再び頭を下げる。

それを察知したのだ。

優しい心配りに。

アルルマはこういう人物に好感をもった。

「さて、ディーヌ王子。貴方もお辛かったでしょうね。大丈夫ですか？」

アルステインが話を転じる。

ディーヌに言葉をかける。

聞けば投獄されていたという。

辛かったろう。

「これは、陛下。お氣遣い、恐縮の至りに存じます」
ディーヌも頭を下げる。

技術大国ノリトレアの王だ。

恐縮もする。

「いえ。恐縮しなくて良いですから。貴方もゆっくり休んで下さい」
アルステインが手をひらひらとさせる。

アルステインは相手にこう恐縮されたりするのを極端に嫌う。
同じ人間なのだから普通に話したいのだ。

「有り難き幸せ」

デイー又は思わず固い言葉を使ってしまった。

「カタイですよデイー又王子……ま、しょうがないでしょうけど」
アルステインが嘆息して言い直す。

「それもそうですね」

デイー又が突然態度を豹変させた。

はたとアルステインの人物に気が付いたのだ。

「そうそう、それぞれ。もう、やれば出来るじゃん」

アルステインもにんまり笑う。

これで良いと思ったのだ。

「貴方、それは崩れすぎ」

玉座の隣にある、王妃の座に座るその人。

エファール・マーマ・テルドリニアナが言う。

王の威厳というものに疑問を持つ。

貴族出身のこの王妃はそここのところのけじめはしっかり持ちたい
と思っている。

「崩れすぎかな？」

アルステインがエファールの方を向いて頓狂な顔をする。

アルステインは権威など糞食らえと思っている所がある。

権威ゆえ人は平伏もしたくないのに平伏する。

人の本音が聞けない。

「そうよ。崩れすぎ」

エファールがさも当然のごとく言う。

アルステインは妙な顔をした。

それはさて置き、と、言った感じで、

「所でアシユマ君、何かご報告、ある？」

そうアルステインは言う。

こちらのほうが重要だった。

相手はオロだ。

何をしでかすか分からない。

「マスケドが現れた。多分バヴェルも発掘しているかもしれない。

……神人もな」

アシユマは淡々とした口調で話す。

重要なことを。

「マスケドですか……それは厄介な」

アルステインの興味はマスケドに行った。

バヴェルに関しては未確認だから今は訊かなかった。

とにかくはマスケドだ。

アシユマに匹敵するかもしれない戦力である。

無視はできない。

「厄介だがフェアな戦い方をしていたな。俺達で捌いていたのは、8人のマスケド。それに対し、まだ向うには4〜5人余裕があった。あの戦力を投入されていたら、先ず間違いなくこつちが、やられていたろうな」

オルバニアンがそう言った。

マスケドの掟と名誉によるものだと思われる。

意外なことに彼らはその事に関してはフェアだった。

ただ、狩りを楽しむといった風でもあるようだ。

狩りの獲物を横取りされたくないといった感じた。

それが真相に近いかもしれない。

「武器が必要だな」

アシユマがぼそりと言う。

マスケドにはアシユマの鬼虎でさえ効かないのだ。

普通の武器では歯がたたないだろう。

「武器？」

オルバニアンが怪訝な顔をする。

アシュマの言っていることが瞬時に理解が出来なかったのだ。

「ああ。イツテツの親父さんに、幾つか打ってもらおう」

アシュマがオルバニアンの方を向く。

そしてにやと笑う。

「来てるんかい!!」

オルバニアンが驚く。

イツテツの親父はスコラ移転と共にオロ・エバス社から籍を抜きノリトレアに来ていた。

小屋を立て工房を開いている……らしい。

「ああ。駄目か？」

アシュマが目丸くする。

アシュマは何故オルバニアンがそんなに驚くのか不思議でならなかった。

悪いことではないではないか。

「駄目じゃねえケドよあ……あのオッサン、苦手なんだよなあ……」
驚く原因はこれだった。

オルバニアンの態度に皆が湧く。

「冗談ではなく、武器を新しくした方が良い者がいるな」

アシュマが言っただけを見た。

「それで、俺んどこに来た訳だ」

アシュマが来たのはイツテツの工房。

スコラが移転したのと一緒にノリトレアに移転した。
長屋のような掘っ立て小屋だった。

「まあ、オヤッサン。面倒を見てやってくれないか？」

アシュマが後ろ手に頭をかきながら頼み込む。

イツテツの親父が変な顔をする。

困っているのだ。

「『面倒』、『面倒』っておめえの場合は、本当に『面倒』なんだよなあ……」

そう言っ腕を組む。

本当に面倒くさそうな顔をする。

「まあ、まあ、オヤツサン。こんど、いいサケ持って行くからアシユマはそう囁いた。

酒で釣っているのだ。

その伝手はあるらしい。

「まあ、しょうがねえなあ……で、何をしてもらいてえんだ？」
イツテツの親父はやつとその気になったようだ。
注文を訊く。

「それじゃ、注文としては……」
アシユマが語りだす。

「暗殺の真似事をしろと仰るのか！ マスター！」
叫び声が部屋中に響く。

「真似事ではない。そのものだ」
オロの政務室でオロと、マスケド、エルファの騎士団団長、ウフエイトウが話し合っていた。

いや、オロが命令を下していた。
汚れ仕事だった。

マスケドにとっては。

「出来ません！ その様な卑しい仕事は。われらは誇り高きマスケド、エルファの騎士団です！」

マスケドとしてはそのような汚れ仕事はしたくはなかった。
マスケドの誇りに傷がつく。

正々堂々がマスケドの信条だからだ。

「マスターの命は、従えないと？」

オロはマスケドのマスターとしての立場を生かした。

いや。

悪用したといって良いか。

とにかくその権限を最大限に発揮した。

「うつ！ くつ……」

ウフェイトウにとってはこれほどの屈辱はなかったろう。

ウフェイトウは唇を咬み、握りこぶしを作って、この屈辱に耐えていた。

オロはそんな事にはお構いなく、

「やるのか？ やらないのか？ どっちなんだ」と、迫った。

オロが、ウフェイトウに迫っている仕事は、レボトミノ連邦共和国の、テオドル大統領の暗殺だ。

オロは、マスクドの事を、まるで鳥の雛だな、と思っていた。

カプセルを開けてみて、始めに見た者をマスターとみなす。

これが善人ならまだ良し。

しかし、これは善き人でない場合は？

オロはそんなたわいも無い事を考えながら、ウフェイトウの答えを待っていた。

「分かりました」

ウフェイトウは、従わざるを得なかった。

それが、マスクドの掟だからである。

マスクドにとって、マスターの命は、絶対であった。

いや、それよりも絶対的なのは、マスクドの掟なのだ。

それに、背く訳には行かなかった。

何故ならば、それがマスクドの、存在意義だからである。

ウフェイトウは、オロに訊く。

「必要な情報を、教えていただきたい」と。

屈辱に耐えながら。

オロは、

「それはこちらから、後で必要な情報を提供しよう。今日は、まずその事だけを頭の片隅においておけば良い。部下の説得にも、時間が掛かるだろうしな」

そう伝えた。

オロもマスケドの有り様については知ってはいるようだ。でなければあのようにウフェイトウに命令できない。

「いえ、それはありませんが……」

ウフェイトウにとってマスターの命は絶対。

他のマスケドにとってウフェイトウの命は絶対。

逆らう者など居ない筈である。

「まあ、良い。下がれ」

オロは鬱陶しそうに手を振りウフェイトウを下がらせた。

「ははっ」

ウフェイトウは屈辱を胸に秘め、その場を立ち去った。

オロは、レボトミノのテオドールを、小賢しく思っていた。

自分の意にそぐわない者は、全て気に入らなかった。

その全てを潰したかった。

レボトミノ連邦を力に任せて、征服しても良かったが、しかしいずれこの国を、この手に入れて戦力になる物を、わざわざ削ると言うのも愚かしい。

問題なのは、その国にいる頂点、テオドールなのだ。

テオドールさえ殺せば良い。

オロは、そういう結論に達した。

だが、テオドール『だけ』を殺すと言うのは、一般の兵には難しい。

そこで、エルファの騎士団の、出番となる訳だ。

多少の銃弾は勿論、魔導機兵クラスの攻撃なら、意にも介さないだろう。

攻撃力は勿論、問題は無かるう。
そう言う事だった。

黒いサイコ・フライヤーに、エルファの騎士団が乗り込む。

黒いと言う事は、ステルス仕様なのか。

ハッチが閉まる。

嫌な静けさが漂う中、一人が口を開く。

「なあ、ウフェイトウ兄貴よう。何で俺らがこんな、糞仕事をしなきゃ、なんねえ？」

ウシャトウというマスクドが訊く。

不満顔だ。

それは皆も一緒だった。

「今更聞くな。弟よ。マスターの指示だ」

ウフェイトウが答える。

想いは皆と一緒だ。

だが、マスクドの掟がある。

「そうかい」

ウシャトウが吐き捨てる。

快く思っていないのだ。

それは分かる。

自分も同じ想いだからだ。

「みな、今回の目標の顔は、覚えたか？」

それを飲み込んでウフェイトウが皆の顔を見回す。

皆も不満顔だったが、掟には逆らえない。

「ああ」

皆が頷く。

不承不承。

「抵抗する奴はどうするんだ？ 兄貴？」
ウシャトウが訊く。

そこまで相手にしては面倒臭いということだ。

「なるべくなら殺すな。ただし作戦は迅速を極めなければならない。その為の障害となり得る様なら、斬って捨てて構わん」

ウフェイトウは、ここでエルファの騎士団……マスクドとしての、非情な部分の顔を見せた。

黒いサイコ・フライヤーは、夜陰に溶け込み、静かに空を滑空して行く。

黒いサイコ・フライヤーは、レボトミノの警戒網をすり抜け、大統領府に降り立った。

エルファの騎士団が素早く展開して行く。

すぐさま、防御の兵達が展開してくるが、すぐさまエルファの騎士団の連中は、敵兵を両断して大統領官邸へ、そして中枢へと向かう。

「大統領起きて下さい！ 敵です！」

側近が大統領を起こす。

緊急事態だ。

いくら何でも大統領の寝所に側近が起こしに来ることなどまず有り得ない。

その在り得ないことが起こっている。

「敵だと？」

テオドル・ブルツクドルフ大統領は、ベッドから飛び起きながら、服を着替えた。

着替えてはいるが事態は理解できていない。

敵とはなんなのか？

「はい。もう、もう無茶苦茶です。やたらめったら、斬りまくつてます」

側近が事態を伝えた。

が、側近もそこまでの情報しか掴めていない。

兎に角賊が近くまで押し寄せていることだけは確かなようだ。

（アシユマ・アトーか？）

大統領は始め、アシユマがやって来たのかと思った。

この様な無茶なことをしのけることが可能な人間を他に思いつかなかった。

そして側近に訊いてみる。

「どこの国の者か？」

と。

許されざるべき暴挙だ。

「分かりません。どこの国の者かも、何もかも」

側近はそう言うしかない。

本当に分らないのだ。

何処の国のもので何処の勢力の者か。

（もしかして、オロか？）

テオドールは、そうとも考えた。

寧ろ、そちらの方が、合理的だと思つた。

しかし、こうも行き成り登場して、部隊を展開させ、あっさり中

枢にまで侵入できる敵とは、一体何者か？

「さあ、大統領こちらへ」

テオドールが、脱出口へ誘われる。

その時、轟音と共に壁が崩れ、テオドールの行く手に立ちはだかる男が一人。

「貴様あー！」

テオドールの側近が、斬りかかって行く。

だが、側近は、その男に、一刀両断にされてしまった。

それは鮮烈な光景だった。

テオドールの様な素人目にさえ、剣の達人と分かる程だった。

「君は誰かね？」

テオドールが尋ねる。

意外と落ち着いている。

が、死は覚悟した。

「私はエルファの騎士団団長、ウフェイトウと言う。テオドール・ブルックドルフ大統領とお見受けいたす。如何？」

その男はウフェイトウだった。

全身に返り血を浴びて凄惨な感じがした。

その視線は冷静で冷ややかだ。

なんの感情の起伏も見られない。

「如何にも私が、テオドールだ」

テオドールは素直に言葉を返した。

立ち居振る舞いに怯えた様子はない。

「意外と動じていないな。我が主に楯突くだけの事はある」

ウフェイトウが言葉を吐く。

見上げたものだと思った。

この様な状態に置かれて全く動じていない。

「オロか？」

テオドールは主と呼ばれた者の正体を訊いた。

半分は確信だった。

ここまでの事をするのはオロぐらいしか居ないと思ったのだ。

「如何にも」

隠すでもなくウフェイトウは言う。

「ここへ来た目的は、私の命か？」

そしてテオドールは訊く。

もう一つの確信を。

ここにこの様な者を送り込んでくるとすれば、それは自分の命を害するぐらいしか理由が見つからない。

「そうだ」

ウフェイトウは冷たく言い放つ。

テオドールにとっては驚くべき事ではなかった。

矢張り心を決めた。

「分かった。私の命はくれてやろう。その代わりもうこれ以上無駄

な血は流さんでくれ」

テオドールは交換条件を出した。

自分の命は顧みない。

その代わりに他の者の命を奪うなど言うのだ。

「ほう、自分の命と引き換えに、部下の命を守れと言うのか。中々肝が据わっているな。気に入った！ その申し出、引き受けよう」

そして、ウフェイトウが指笛を、ひゅっ、と吹いた。

人が動いて行く気配がする。

どうやら行動に移したようだ。

「約束は守った。今度はお前の命を頂こうか」

ウフェイトウがテオドールを冷たく見る。

が、その人物には感服した。

中々ここ迄出来る者は居はしない。

「分かった。好きにするが良い」

テオドールは目を瞑る。

立派な立ち姿だった。

「益々以って気に入った。殺すには惜しい」

ウフェイトウが初めて感情を見せる。

ニヤリと笑ったのだ。

「最早これまで。後は頼む。アシュマ・アトー！」

テオドールは最期にアシュマに言葉を残す。

ウフェイトウの剣は、鈍く肉を断つ音を残して、振り下ろされた。

一夜経って、レボトミノ連邦共和国の、テオドール・ブルックドルフ大統領が暗殺されたニュースが、世界中を駆け巡った。

正にショックが、世界中を回ったと言える。

が、どの勢力が、この暴挙を行ったか、分からずじまいだった。

この中、ノリトレア王国とレキシタニア王国が、被疑者不明のまま遺憾の意を表す、抗議声明を出した。

そのレボトミノ連邦共和国では、ベンノ・アードラースヘルム副大統領が、臨時に大統領に格上げされた。

そのベンノ大統領には、ドートネーゼの後盾があった。
勿論、秘密裏に。

「なあ、アルステイン。やったのはあの、ナントカ騎士団の奴らに決まっているんだ！ オロんとこの！ 何でそれを言わないんだよ！」

オルバニアンが、口角泡を飛ばして訴えていた。

ここは、ノリトレアの王宮市の、王宮、王の執務室である。

アルステインが困ったような、鬱陶しそうな、そんな顔をして、オルバニアンのお話を聞いていた。

「おい、聞いているのかよ！ アルス……」

この時点でアルステインは、物憂げに右手を上げて、

「オルバニアン、静かにしなさい」

と、言った。

「……」

オルバニアンは一瞬言葉を失った。

アルステインが、これ程、思い悩んでいる光景を見るのは、久しぶりだったからである。

それはそうであろう。

国交を封じられ、経済を封じられ、物流を封じられ、ノリトレアは国全体が疲弊し、精神的にも物質的にも、耐えうる限界が来ていた。

その様な話の中、おとないを入れてきた者がいた。

ヨナルト・リングと言う。

防衛庁長官だ。

「陛下。この間の話は、考えておいて、頂けましたかな？」

そのヨナルト・リングが言葉を発する。

この間の話というのは何だろう。

思わず、

「話？」

と、オルバニアンが言う。

「陛下。誰ですか？ この胡乱な輩は？」

ヨナルト・リングが胡散臭そうにオルバニアンを見る。

何故この様な男が王宮に居るのか。

まずもって話を聞かれたくない。

何処かに行つて欲しかった。

「ウロン？ ウロンってなんだ？ メロンの仲間か？」

オルバニアンが頓珍漢なことを言う。

言葉を知らないのも何だが、この様に素直な反応をするのは好ましい。

アルステイーンはそう思っていた。

「胡乱と言うのはですね、アヤシイって事ですよ」

それはさて置き、言葉の説明をする。

「あ、怪しい？ この俺が？ お前の方こそ怪しいじゃねえかよ！
！」

オルバニアンがヨナルトを指さして言う。

怪しい者呼ばわりされたことになり怒りを覚えたようだ。

「陛下。この男は、誰なんですか？」

ヨナルト・リングが嫌そうな顔をする。

これから王に大切な話があるというのにこの男はなんなのか。
「一応僕の義弟と、言う事になりますかね？」
おとこ

アルステイーンは無表情に言う。

ヨナルト・リングに対して感情というものを表していない。

アルステイーンはこの防衛庁長官に対してあまり良い感情を持っていない。

一国の王が個人的な感情を部下に持つというのは良きにつけ悪きにつけあまり歓迎すべきことではないのだが、アルスティーンはそういう感情を持ってしまった。

その理由は後述する。

「……では、ルーラン殿下で？」

ところでヨナルト・リングだが急に慇懃な態度をオルバニアンに見せる。

少し嫌らしい。

まあ、王族に対してなのだから仕方が無いのかもしれない。

「おうよ。ルーランでい！」

オルバニアンは腕を組んで威張ってみせる。

が、あまり似合っていない。

元々オルバニアンは王族としての生活をしたことがないのだから仕方が無い。

ただ、変な威圧感だけがある。

「こ、これは失礼をば……」

その威圧感に気圧されたのか、ヨナルト・リングは畏まる。

オルバニアンはうんうんと頷いている。

「ところで陛下二人きりでお話を」

ヨナルトがアルスティーンの耳元に近づいて囁く。

アルスティーンは良い気はしなかった。

オルバニアンもそうである。

「俺は邪魔者かい！」

そう思っただけである。

慇懃に振舞っただけで仕草がオルバニアンを除け者にしようとしている。

オルバニアンは大いに憤慨した。

「まあ、一寸席を外して下さい。オルバニアン」

アルスティーンが、申し訳なさに言う。

何か含むものがあるのだろう。

でなければ、こうは言わない。

「ちっ！」

オルバニアンは、渋々執務室を後にする。

「アルステイン陛下。ヨナルト・リング、ここにオロ・エバス国に戦端を開く事を、具申致しまする」

ヨナルト・リングはアルステインの前で畏まって言った。

これが、アルステインが、防衛庁長官ヨナルト・リングに対して良くない感情を持つ理由である。

好戦派なのである。

今戦えば、民がいかなる被害に合うか分かっていない。

たとえ、オロ・エバス国がノリトレアを滅ぼそうと躍起になって戦を仕掛けようとしてもだ。

もしかしたら戦争は避けられないかもしれない。

そう思っているものも少なくないかもしれない。

そうだとしてもアルステインはこちらから戦争を仕掛けるようなことは避けるべきだと思っている。

まずは、それこそオロの狙い通りであるし、何よりも国民の命を天秤にかけられないと思っているからである。

そしてヨナルトは国民の命を軽視する傾向にある。

そんなヨナルトの提案に対して、

「却下」

アルステインは有無をいわず即断する。

ヨナルトはしばし言葉を失う。

あまりにも綺麗な拒否の返事に一瞬思考が止まった。

「へ、陛下、まだ話の内容も何もお話しては……」

ヨナルトは気を取り直し説明を加えようとした。

「却下」

だが、アルステインはこれまた話を閉じる。

ヨナルトの話は聞く気がない。

戦争を始めることしか考えていないからだ。
そんな話には付き合わない。

「な、何故？」

ヨナルトは困った顔になる。

頭から拒否をされては困るのである。

アルステインが見かねて話します。

「我が国はあくまで平和的な外交と対話で、話の解決を図る事を旨とします。戦争等とは以ての外。今回、この話は私の胸にしまっておく故、今日はこのまま帰るが良い」

アルステインは話し終わるとそっぽを向いた。

拒否の姿勢である。

「しかし！」

ヨナルトが食い下がる。

「くどい」

アルステインがヨナルトを見据えて言葉を発した。

アルステインの低い、良く通る声に、ヨナルトは寒気を覚えた。
た。

そういえば、確かこの男は、曲がりなりにも、イルドリアの武道大会で次席を治めた強者。

気迫で、相手を追い詰める等、造作も無い筈。

ヨナルトは、そんな事を考えながら、震える手足を、何とか気力で押さえつけていた。

「……は。分かりました。今日の所は下がります」

辛うじてそれだけは言った。

諦めてはいなかった。

ヨナルトはヨナルトで戦わなければいけないと思っている。

「おんなじ内容だったら、明日も明後日もありませんよ。防衛省長官殿。我が国は専守防衛。攻撃されない限り、武力を行使する事はありませんよ？」

アルスティーンはとどめを指した。
戦争の話なら聞かない。
そう言っているのだ。

「……」

ヨナルト・リングは無言のまま、部屋を出た。

次の日アシュマは、イッテツの工房を訪れた。

イッテツに打ってもらった武器を、受け取りに来たのだ。

「オヤツサン、いるかい？」

アシュマは工房に入った。

熱気が辺りを包んだ。

金属を熱している熱気だ。

イッテツ達職人はこの熱気の中働く。

アシュマ達の武器を打ってもらう。

アシュマにとっては頭の下がる思いである。

「ああ、ヒヨッコか。入って来い」

イッテツの親父にとっては、アシュマでさえ『ヒヨッコ』である。

これぞ、職人気質と言ったところか。

命令口調だ。

「御免。どうだい出来ているかい？」

そんな命令口調もアシュマには効かない。

アシュマもアシュマで遠慮がない。

いわば二人は気心があつた仲なのである。

「つたりめーよ。おめえ、俺を誰だと思ってやがる？ イッテツ様だぞ？」

相変わらず威張っている。

悪気はない。

前に書いたが職人気質なのである。

「そうか。じゃあ、貰って行くよ」

アシュマは武器を包んだ包を担いで出ていこうとする。
その包みも大荷物だ。

背の丈ほどもある金属の塊である。
重いだろう。

だが、アシュマは苦にもしない。

だが、問題は別にあつた。

「まっただ！ 金は？」

代金の支払である。

イッテツも慈善事業で刀を打っているのではない。
商売なのである。

「おっと、そうだった」

アシュマは忘れていた金を取り出した。

アタツシケースが二つある。

「合計、金一億八千万！ 耳を揃えて置いて行きな。行つておくが
ビター分も、まからないぞ」

イッテツの親父が言い張る。

言つたとおり少しもまかりそうにない。

楽しそうだ。

「じゃあ、代金として金二億を置いて行く。余分の二千万は俺の謝
意と酒代だ。いつも済まん。オヤツサン」

これはアシュマの心付けだ。

「そうか。じゃあ、その分は、遠慮なく貰つておく」

アシュマは、金二億の入つたアタツシケースを、置いた。

イッテツの親父はアタツシケースを手元に引きこむ。

そして後ろに無造作に置く。

「じゃあ、武器は貰つて行く」

アシュマは再び武器を担いだ。

「ああ」

イッテツの親父が返事をする。

アシュマは武器を持って帰つた。

王宮に戻ってきたアシュマは、王宮の庭で武器を広げた。
まずオルバニアンが来て、

「おお！ 俺の大逸鉄！ ちゃんとメンテされて帰ってきたかあ？」
手に取った。

引きぬいて刀身を見てみる。

青味がかった刀身が煌めいている。

普通だったら懷紙を口に含むところだ。

次にアルミナがやって来て、

「ああ、私のロンリーストライフ。別れていて寂しかったのよ？」
と、頬擦りを始めた。

ガンロクがやって来て、自分の武器を手に取った。

三尺もある大鉈だ。

その大鉈は更に尺が伸びて、三尺半となった。

「ん！ これなら使い易いべ」

ガンロクは満足顔だ。

ビッシュ・ノマンも自分の刀を見て満足げだ。

ジークフリートは自分の剣、シルベルン・シュトウルムを無言で
見つめている。

「どうしたの？ ジーク」

ミカが訊く。

ジークフリートはミカを見て、

「いや、使い易い物なのかと、思ってな」

と、言ってみる。

疑っているのだ。

「振ってみたら？」

ミカが何気に言ってみる。

「……そうしてみる」

素直にもこのひねくれ者はミカの意見を受け入れた。

ジークは庭を少し入り込み周りに人がいない事を確かめると、自分の身長より少し低い豪剣を振り始めた。

意外に腕に掛かる負荷が少ない。

その上丈夫で斬れそうだ。

「……悪くない」

満足そうだ。

「そう。良かった」

そんなジークを見てミカが微笑む。

矢張り満足しているのだ。

ジークに惚れきっているこの少女はジークが喜べば自分も喜んだ。

「……」

微笑むミカを見てジークフリートが黙る。

視線は腰へ。

腰の武器を見ている。

「どうしたのジーク？」

ミカがたじろぐ。

顔を見るならともかく（と、言っても顔を見つめられるのも困りものだが）腰のあたり、微妙なあたりばかり見つめられては照れて困ってしまう。

「ミカのは？」

ジークはミカの武器のことを言っているのだ。

矢張りイツテツの親父に新調してもらったレイピアを腰から提げていた。

「ああ、私のレイピアはお守りみたいな物。役には立たないわ」

役に立たないとは言ってみたものの、イツテツの親父がいい加減なものを作るわけではない。

丈夫で切れ味の良い細身の剣だった。

非力なミカでも扱い易い物の筈だった。

ジークフリートは納得が行かないようである。

いっそ自分が振り回してみようかとも思ったが、趣味でないので

それはやらなかった。

いつまでも腰に視線を落としておく訳にはいかない。

視線を向こうに巡らせた。

向こうではシュンマとキュポアが会話をしていた。

「どうなのじゃ？ シュンマ。その刀の具合は？」

キュポアが訊く。

シュンマの武器は刀のようだ。

少し身幅が細身で反りが少ない。

近頃都などで見かける若者の形ばかりの流行している細身の刀を意識したわけではないだろうが、重厚な造りの鬼虎と比べて華奢ではある。

「ええ。とても良い刀だと思います。手に吸い付きます。重さも丁度良い具合で」

だが、シュンマは気に入ったようである。

予めアシマが皆の希望を訊いておいたのだ。

シュンマの意見も取り入れられたようである。

「斬れ味はどうなのじゃ？」

肝心要のことをキュポアは訊いた。

特にマスクドを斬れなければ意味が無いのである。

シュンマの刀は念によく反応する魔導石の結晶で出来ている。

それに魔導石は鉄より硬い。

「そればかりは試し斬りをしないと……」

シュンマが困った。

今は斬るものがない。

試し斬り用の巻藁もない。

試したくても試せないのだ。

「さよか……」

そうだろうなとキュポアも思う。

夜。

自邸で、ヨナルト・リングは、部下と思われる男と話をした。

「如何でしたか？」

部下と思しき男がヨナルトに伺いを立てる。

ヨナルトは豪華な椅子に座り、部下と思しき男は直立不動である。この部下が、軍関係の者なのか、ヨナルト個人の秘書なのかそれは不明だった。

ただ、防衛庁長官似までなった男の部下であるのだから有能なのか。

ただ、ヨナルトが閣僚の中にあつて有能なのかどうかは分からない。

開戦一辺倒の論者だから有能ではないのかもしれない。

「駄目だ。話しにならない」

そのヨナルトが吐き捨てる。

かなり機嫌は悪いようだ。

原因はアルステインである。

アルステインが彼、ヨナルトの話を聞かないから不機嫌なのである。

加えて言うならば非開戦派。

ヨナルトとは真つ向話がぶつかる。

「では？」

と、部下が訊く。

ヨナルトが何かを言うのを待っているようにも見える。

「各部隊の部隊長を私の私邸に集める。私邸に来られない者には箝口令を敷き監視を付ける！ 各省庁に睨みを利かせろ！ 各大臣は至急私の私邸に連行して来い」

ヨナルトが穏やかならぬことを言う。

何をしようというのか。

これではまるで……。

「ではいいいよ？ 私は待つておりました！ あの能天気な王が…

……」

部下がにわかに喜びを表す。

アルステイーンを能天気といって憚らない。

「言葉は要らぬ！ 行動しろ！」

ヨナルトが叱咤する。

「はっ！」

部下は一礼しドアから慌てて出ていく。

「……おのれアルステイーンめ！」

ヨナルトはなにか良からぬことを考えていた。

「……私の施政が間違っているのか……」

王宮、アルステイーンの居間。

アルステイーンが思い悩んでいる頃、軍部が暗躍している事を、

彼は知らなかった。

闇の胎動。

軍部が蠢いていた。

密かに放送局を占拠し、各省庁を占拠した。

この頃になって、やっとアルステイーンに一報が入る。

ヨナルト・リングに、謀反の疑いあり、と。

「しまった！ そこまで考えていたか。僕とした事が迂闊^{うかつ}だった」

アルステイーンは次の行動をどうするか考えた。

そしてオルバニアンが、アルステイーンの下にやってくる。

こうなると出来ることは限られてくる。

「大丈夫か？ アルステイーン？」

オルバニアンが義兄を想う。

ヨナルトはクーデターを起こしている。

そうなると思えなければいけないのが、アルステイーンの生命。

ヨナルトはアルステイーンと反りが合わなかったようだから（と、

あとで聞いたのだが）余計にそれを心配せねばならぬ。

「オルバニアンですか。やられました。まさかヨナルトが、クーデターまで考えていたとは」

矢張り能天気な王、アルスティーンは今頃そんな事を言う。顔もにこにことしている。

馬鹿なのか。

「そんな事はどうでも良いよ！　どうするんだよ！？」

オルバニアンが思わず怒る。

殺気も言ったがやれることは限られてくる。

あまりにも後手に回りすぎた。

「逃げます」

アルスティーンがこともなげに言う。

あまりにもあっさり言うので、

「はあ？」

と、頓狂にオルバニアンが訊き返す。

一瞬間き違えをしたのかと思う。

「ここまで用意周到にやられているとなれば、逃げるしか手はありません。悪戯に兵を動かし、血を流したくはありません」

逃げられるだけましである。

逃げられないとなれば目も当てられない。

大昔の武将で部下に謀反をされ焼け死んだ者がいたと言う。

その者よりかはましである。

「だけどよお」

オルバニアンは納得が行かないようだ。

敵に後ろを見せて逃げるのが嫌なのだ。

こちらは少しも悪いことをしていない。

何故逃げなければならぬのか。

「今、動いても、勝ち目は無い、と、言っているのです！」

アルスティーンはそこを指摘する。

オルバニアンの考えていることなどお見通しだ。

「うっ！」

オルバニアンは言葉に詰まった。

アルステインの言うこともわかる。

今動いても勝ち目はない。

「僕は、エファさんの所に行ってきます。あなたはアシュマ君の所に行つて……」

アルステインはオルバニアンに面と向かつて言う。

その時、

「取り急ぎご報告申し上げます！ ヨナルト・リング、宮殿を取り囲み攻撃の構え！」

伝令がやつて来てそう言った。

「急ぎなさい。オルバニアン」

アルステインがオルバニアンに言う。

「分かった」

オルバニアンは頷き去つて行つた。

「アルステインは大丈夫か？」

アシュマが、宮殿の廊下を、歩きながらオルバニアンに訊く。
歩きながら鬼虎を改める。

異常はない。

「ああ、今の所はな」

オルバニアンが答える。

アシュマと、オルバニアンの後ろには、アーチェル以下、ガンロクやミカ、アルミナ等が付き従っていた。

勿論スコラの移転についてきた、サクラコ・セタの事も忘れてはいない。

アシュマ・ファミリー勢ぞろいである。

「アルステインは今、何処に居るんだ？」

アシュマが訊く。

孤立しているのかと思うと少し不安になる。

「おい、アシュマよう。お前さんが持っている、その文明の利器は一体何でい？」

オルバニアンがアシュマの皮のジャケットの内ポケットに入っている物を指さして言う。

携帯端末だ。

これだからアシュマは。

少しは者の使いようを覚えて欲しい。

オルバニアンはそう思う。

しかも時が時だ。

少しは頭を使って欲しい。

「ん？ 携帯端末？」

アシュマはあまり使ったことのない機械を取り出す。

アシュマは語学は達者なのに機会にすこぶる弱い。

「だろ？」

オルバニアンが同意を求める。

そして半ば呆れる。

「そうか」

アシュマは携帯端末を開き、アルスティーンに連絡を付けてみる。

『はい。アルスティーン』

数コールの後アルスティーンが出た。

元気そうだ。

少し安心する。

「アシュマだ」

と、名乗りをあげる。

『はい。何でしょう？』

能天気な答えが帰ってくる。

まだこの様な反応が出ているという事は安心して良いと言う事か。

「今、何処だ？」

訊きたいことを訊く。

大事な事だ。

『もう直ぐ青龍号に着きます』

脱出は順調ということか。

「そうか。分かった。こちらにも直ぐに着く。そうしたら脱出だ」
アシュマが段取りを確認する。

『では』

と、アルステインが連絡を切る。

「どうだった？ アルステインは」
オルバニアンが訊く。

「うむ。もう直ぐ、青龍号に着くそうだ」

まずは安心できそうだ。

青龍号につくという。

声音も落ち着いている。

慌てた様子もない。

ま、何があるかは分からないが。

「アシュマ君」

アルステインが声を掛ける。

青龍号の格納庫だ。

追手は来ていないようだ。

「アルステイン！」

アシュマも返答をする。

追手は来ていないみたいだが周りを確認してみる。

そして、アルステインとアシュマはお互いを確認した。

アシュマは他のエファール、アシュオン、サーナリア、フェリア、
モニハも確認した。

「さあ、逃げましょうか」

アルステインが軽く言う。

まるで何処かへ出かけるように。

自分の立場にはあまり気がついていないみたいだ。

他人事のようである。

「でもヨディ。何処へ？」

エファールが訊く。

あまりに軽い夫の反応に疑問を感じる。

果たして一緒に脱出を試みて大丈夫なのか。

聞けば相手はクーデターを起こした者だと言う。

用意周到なのではないか。

それなのに夫のこの反応。

心配をしてしまう。

「とりあえず、王宮市からは、脱出しましょう」

アルステインは行き先は決めなかった。

まずは脱出が眼目であると考えているのだ。

アルステインの軽い反応は皆を不安にさせない為である。

が、却って心配をかけてしまったようだ。

サイコ・フライヤー青龍号は、王宮から飛び出し、夜の闇の中へ

消えて行った。

ヨナルト・リングは、王宮を包囲はしたものの、突入するタイミ

ングを、逸してしまった様だった。

アルステインは笑っていた。

アルステインは、今頃になって悔しがるヨナルトの顔を想像す

ると、可笑しくて堪らなかったのだ。

「まさか宮廷内にサイコ・フライヤーを隠しているとは、用意周到な奴。流石は剃刀アルステインと言った所か」

ヨナルト・リングはそう言った。

アルステインにしてみれば、別に隠していた訳でも、何でもない。

ただ、いつでも飛べる様に、側に置いていただけだ。

整備のメカニクマンや、補給帳簿等を、注意深く観察してみれ

ば、すぐさま分かる事である。

要は、ヨナルトの注意力不足と言う奴で、別にアルスティーンがその事で、『剃刀』の異名を持ってこられても、本人にとっては甚だ迷惑と言ったものだ。

その後の王宮市には戒厳令が布かれ、一時的に統治権が軍に移行された。

その為、民間人等は、夜間の外出が禁止される等、不便な生活を強いられる事になった。

勿論それは、スコラにまで及び、潜在的戦力を奪われた。

ドートネーゼは、今回のノリトレアのクーデターに関して、概ね好感触を得ている様だ。

これで、幾らでも、突つつき易くなったと思っている。

ヨナルト・リングは経済的封鎖の首魁として、これを行っていたオロ・エバス国に対し、宣戦布告を用意しているという。

これには、ドートネーゼやオロは、逆に小躍りして喜んだ。

わざわざこちらから、大層な大義名分を考えて、攻め込む必要がなくなっただけである。

向こうが、勝手に攻めてくるのだ。

こちらは、それを迎え撃てばよい。

しかし、オロ・エバス国の国民が今ひとつ、戦争に関して、興味を引かない。

多少の厭戦気分も湧いている様だ。

「……成程。国民が戦争に関しては過敏になっているという訳か。何かよい策は無いか？ ナナル」

オロが美しい側女に声を掛ける。

この女は知恵者でもある。

オロは馬鹿な女は要らなかったし、ナナルはそう言う女でもない。理知的でいてなおかつ官能的だ。

オロの好みに合っていた。

「相手から、仕掛けさせるとするのは、如何でしょうか？」

そのナナルが意見を言う。

それはオロも考えていたことだ。

仕掛けさせるのは良い。

だが、自国に被る被害を考えていた。

「それは簡単だが……ただ仕掛けさせると言っても……」

オロが考える。

仕掛けさせるのは良いのだ。

相手がその気だから。

「妙案が御座います」

ナナルがにこりとして言う。

何かを考えているようだ。

「妙案？」

オロが不思議な顔をする。

ヨナルトは、何とアルステインも見も知らずの、アイル・マフ・テルドリニアナ（三歳・女）なる幼子を王位に就け、臨時に新しい内閣を組閣。

首相はアルプト・エイブス。

自らは統合幕僚長となり、又、アイル・マフ・テルドリニアナの後見人として治まった。

皮肉にもこのアルプト・エイブスなる人物が、ノリトレアの初代首相と言う事になった。

これで、一応、文民統制の形を取った。

勿論、ヨナルトの、傀儡政権である。

これにはドートネーゼは多少驚いたが、それはそれで、それまでだった。

責めどころは幾らでもあるのだ。

それも『これから』……。

そんな中、レキシタニア王国の、エースティー・イーニア・アツブルトンは、ノリトレアのクーデターを強く非難し、直ちにアルステイーンに、政権を返上する事を強く求めた。

また、それを国際社会の中で強く訴えた。

ノリトレア軍の空母、ングーイがレイフ諸島ウング島のオロ・エバス軍基地を目指していた。

ウング島の軍事基地には、オロ・エバス軍の艦船・魔導機兵群が多数駐留していた。

そこへ、ノリトレア王国よりオロ・エバス国へ一報が入る。

それはオロ・エバス国への、宣戦布告だった。

それと同時に、一斉にオロ・エバス軍の軍港へ、魔導機兵軍による奇襲攻撃が開始された。

機体は全てステルス仕様だったので、事前に作戦行動を察知する事は、不可能だった。

ノリトレア軍は、爆撃のし放題だった。

結果は大成功。

オロ・エバス軍は、壊滅的な打撃を受けた。

表面的には。

このノリトレアの奇襲攻撃は、実は、オロ・エバス側は、事前に察知していた。

その上で、ノリトレアに奇襲させた。

いや、紀州を誘導していた節がある。

これが、ナナルの考えだった。

奇襲を受けたのは全て、老朽艦・旧型魔導機兵だ。

だが、オロ・エバス国の軍にとっては、打撃には違いなかった。

この卑怯なる事件によって、オロ・エバス国の国民は、厭戦気味だった国論が、徹底抗戦へと振れるのは、当然の帰結だった。

勿論、国内世論を厭戦から徹底抗戦へと誘導したのは、イーチャイルドを筆頭とするドートネーゼの息の掛かった企業の、プロパガンダが功を奏したのは、言うまでも無い。

オロ・エバス社を含めて。

オロ・エバス国軍は速やかに軍の再編を進めた。

ところで一方、クーロン共和国。

こちらの国も、経済的、物資的、国交的に遮断をされて、かなり逼迫された状況に置かれてきた。

何とか、内需喚起で、経済を成長させてきたが、矢張り苦しい事には、変わりがなかった。

そしてとうとう追い詰められて、クーロン政府はオロ・エバス国と対話する様にと、何とか道筋を求めた来た。

しかしそれも叶わず、とうとう追い詰められて、クーロン政府もオロ・エバス国に宣戦を布告するに至った。

ちなみに、ここに至るまでに、リン・シャオリン国家主席は、「もう駄目よ！ やってられないわ！」

と、切れたとか、切れなかったとか、まことしやかに囁かれている。

ただ、クーロン共和国の、リン・シャオリン以下首脳部は、アルステイーンが首脳部にいないノリトレア王国とは距離を置いた。

ノリトレアの隣国イーハンに、不穏な空気が流れる。
軍部が、なにやら暗躍しているのだ。

イーハンを治める、シヨウマ・イーハニアが気付いた時には、もう遅かった。

イーハンにも、クーデターの波が襲ったのである。

王宮に兵が押し寄せ、シヨウマを取り囲み捕らえた。

カオルコ王女は、辛うじて脱出に成功する。

シヨウマが、注意を自分に向けさせ様と、派手な動きを見せたからだ。

いかにも脱出する気配を見せたのである。

勿論、シヨウマは逃げるつもり等、全く無かった。

娘を逃がすが為の手であつた。

そしてシヨウマは捕らえられた。

その後、シヨウマは、ある政治犯が捕えられている獄へと連れてこられた。

その人物とは、シュニク・インジャ、その人であつた。

以前イーハン国でクーデターを起こした人物である。

そのシュニク・インジャがシヨウマ・イーハニアを見下ろす。

「久しぶりよの。シヨウマ・イーハニア。安心するが良い。これからのイーハンはこの儂が治めるに。くはっ！ くはははははっ！」

獄から解き放されて、シュニク・インジャが笑う。

軍部を影から操っていたのはどうやらシュニク・インジャらしい。獄に繋がれていたとは言え、いや、だからこそ軍部を動かすとは大した力を持っている。

シュニク・インジャは、その信奉者により、助け出されたのだ。

「お前が治めるとなれば、民が泣くだろうよ」

シヨウマが言い返す。

確かに力は持っているのかもしれない。

しかしこの男ならば権力を振りかざし独裁に走るだろう。

その時苦しむのは国民である。

「そうなるかどうかは、これからのワシの施政を、見てからにしてもらおうかの？ くふふ」

この男は自らの治世を優れたものと考えているのか。独裁などしないというのか。

なら、なぜクーデター等と言う方法をとったのか。

国民のためならこの様な方法を取らなくても良かったろうに。結局は権力が欲しいのだ。

「シヨウマ・イーハニアを獄に入れよ！」

シュニク・インジャが自らを獄から出した者に命を下す。

この時、シヨウマは自分の身柄が、シュンマを封じる為に利用されるのを嫌い、隠し持っていた短刀で自らの腹を掻き斬った。

シュニク・インジャはすぐさま王位に就き、ノリトレアの施政を支持、ノリトレアとの同盟を模索した。

そうしたイーハンの動きを、ノリトレアは好感。

すぐさま、軍事同盟を結ぶ事になった。

シュニク・インジャは、前回クーデターの時には、オロ・エバスの後ろ盾があったが、今回は敵。

しかし、その代わりと言っては何だが、今回はノリトレアのヨナルト・リングが、後ろ盾につく格好となった。

すぐさまシュニク、ノリトレア陣営で、参戦を表明する。

ドートネーゼにしてみれば、してやったり、願ったり叶ったりだった。

すぐさま、二人は会って会談をする。

会談が漏れ聞こえてきた所によると……。

「これで安泰ですな」

「そうですな」

「あっはっはっ」

と、話していた様だ。

本当にそう思っているのなら、アルスティーンなら、
「馬鹿」

と、言っただろう。

だが、シュニクには一つの切り札があった。

前回の事変の時に、シュニクはある古文書を手に入れていた。
それは……。

シュニクはいま、イーハンのとある山中に居た。
墳墓の様にも見える。

その山に、横穴を掘って、中に進んでいた。

「本当にここなのか？」

シュニクは穴の中で側近の者に、訊いた。

側近は学者のようで、古文書を片手に、

「はい。確かにここで御座います」

と、言った。

何が確かに此処なのか。

穴は横穴。

崩れ落ちないように補強しながら進んでいる。

「その書物、信用なるのか」

シュニクはだんだん怪しくなつて訊いてみる。

もしその書物に書かれている事が本当ならシュニクは絶大なる力
を持つことになる。

しかしそれは本当ならば、だ。

「分かりません」

学者は無慈悲な答えを返す。

「なっ……」

シュニクは、言葉を失った。

学者は学者で確かな確信があるわけではない。
ただ、古文書に従っただけである。

「ただ、シヨウマの書庫の奥深くに、封印されていた物ですから、あなたが偽りとも思えませぬ」

そうは付け加えたが。

これで幾らか安心感を覚えたのか、シュニクは、

「そうか」

と、呟いた。

しばらく掘り進む。

何も出てこない。

時間だけが過ぎる。

焦りが募る。

これで正解なのかと。

その時、

「部屋が出てきましたあ！」

と、叫ぶ声が聞こえる。

「！」

俄にシュニクの表情が変わる。

喜びとも驚きとも取れない表情だ。

何やら複雑だ。

「シュニク様」

学者は素直に喜びを表している。

これで目的のものは見つかったも同然、とても思っているのだろうか。

目的の『もの』。

そう、その目的の『もの』が絶大な力を与えてくれる筈であった。

「分かっておる！ 行つて見る」

少し興奮の体である。

シュニク・インジヤは通路の奥、突き当りの小部屋へと向かった。

そこには六つのカプセルが並べてあった。

「これか！ マスケドこれが真素剣奴！！」

これが、正にシュニクの、切り札だったのだ。

絶大なる力の源。

アシユマに匹敵する力。

まさにシュニク・インジャの力の源となりそうだった。

間髪入れず、ぷしゅっ、と、空気の抜ける様な音がして、カプセルが開いてゆく。

「おお！」

髯面のシュニクが、歓喜の声をあげる。

蓋が開ききる。

中には男五人の女一人が居た。

皆裸だった。

一人、男が目覚める。

「……お前が、マスターなのか？」

そう、言った。

シュニクが、

「そうだ。ワシが、お前達の新しい主ぞ！」

そう、宣言していた。

男はシュニクを見つめると、その後跪いた。

「そうですか。我等はクロダの六人衆。マスターの手となり脚となり、粉骨砕身働く事を誓いまする」

頭を垂れシュニクに誓いを立てる。

他のマスクド立ちも同様に跪く。

「うむ、うむ」

シュニクは満足げに頷いた。

イーハンから、辛くも脱出したカオルコ・イーハニア。

カオルコは、何処に行ったのか？

カオルコは密かに、シュンマと携帯端末を通じて、ノリトレアのある場所で、待ち合わせた。

王宮市の外れだ。

道の両側に、街路樹が植えられている。

護衛としてアシュマ、オルバニアン、アルミナ、ガンロクがついて来た。

こちら側は、フードを頭から被っていた。

革製で黒いフードだった。

そして向こう側から、矢張り黒いフードを着ている、女性らしき人が、こちら側に歩いてきた。

「今日は良い日和ですね。ピクニックに最適だ」

シュンマがフード越しに声を掛ける。

向こうは女性のようなだ。

今は曇天。

けして良い天気ではない。

何かの合図のようなだ。

「でも、午後からは、天気が崩れるみたいですよ？」

相手の女性はこう返してきた。

「ね、姉さんかい？」

どうやら、予定の返事が帰ってきたようだ。

シュンマが相手の正体を訊く。

「シュ、シュンマ……？」

お互いは被っていたフードを外した。

フードの下からシュンマの顔とカオルコの顔が現れる。

カオルコの瞳は潤んでさえいる。

辛い想いをしたようだ。

「ね、姉さん！」

「シュンマ！」

二人の姉弟は、人目も憚らず抱き合った。

「良かったね。シュンマ王子、カオルコ王女」

アルミナが感無量となった。

フードを取って指で目を拭う。

「本当に良かったのかな？」

何処からか、声が響いてくる。
道の両脇にある街路樹は大木だ。
人の視界を遮る。

「誰だ！」

オルバニアンが叫ぶ。

「われ等か……」

矢張り、黒いフードを着けた者が六人、木々の間から現れた。

「姉さん、これは？」

シユンマが驚き、思わず尋ねる。

「し、知らないわ……わ、わたくしは」

カオルコが狼狽える。

これはどういう事なのか。

「付けられた。そういう事か」

アシユマがぼそりと呟く。

この者たちはカオルコを泳がせて、アシユマ達の下へ導かせたら
しい。

「お前ら、一体何者だ！」

オルバニアンが叫ぶ。

フードの男らしき人間が、

「我等か……我等は！」

フードを着た者達が、一斉にそれを脱ぎ捨てる。

「我等はクロダの六人衆……マスクドだ！」

即ちシユニク・インジャのマスクドである。

以前の恨みからか、それとも事前に脅威を排除しようというのか。
シユニク・インジャはアシユマ達を亡き者にしようと考えた。

「また、マスクドかッ！ いい加減にして欲しいぜ！」

オルバニアンが再び叫ぶ。

総何度もマスクドと相手はしてられない。

こちらの命の危機である。

オルバニアンが叫びたくのも分かるうというものだ。

「お前達の事は知っている。ザザの所のマスクドと、戦ったそうだな？」

頭目らしき男が言い放つ。

かなり筋骨隆々としている。

「今はエルファの騎士団つて所とも、戦っているけどな!!」

律儀にもオルバニアンが応える。

「ほう、ウフェイトウの所とも、戦っているのか？」

このマスクドの頭目はウフェイトウを知っているようだ。

マスクドは横の繋がりでもあるのか。

「ああ」

これも律儀に答えてやる。

「所でアシュマつてのは、どいつだ？」

別の男が話す。

マスクドの目的はアシュマのようだ。

シュニクの脅威になりそうな者である。

叩いておきたいのだろう。

「俺だが？ 何か用か？」

アシュマが一步前へ出る。

オルバニアン達には手を出させないつもりである。

「一手、手合わせ願いたい」

頭目とは違う男が言う。

腰には太刀を帯びていた。

刀ではない。

太刀である。

「……よかるう」

アシュマが応える。

男達は向き合った。

「お前の名は？」

アシュマが問うた。

「俺か？ 俺は火餓鬼のオクナフ。と、言っても無駄だがな……も

う直ぐ……」

「お前が死ぬからか？」

アシュマが揶揄してみせる。

これはアシュマの手である。

相手の冷静さを欠く心理戦である。

「何！？」

頭に来てオクナフは、大刀を取り出した。

「見りゃ、まだ青二才じゃねえか。ザザは何で、こいつにやられたんだ？ ロシもいただろうに」

オクナフは文句をいう。

アシュマを舐めている。

頭に来て冷静さは欠いたままだ。

「……」

アシュマはもう黙っている。

相手を冷静に観察している。

「なんでい、びびって声もでねえか？」

オクナフは片頬を歪めて笑っている。

アシュマは既に居合に腰を落とし、左手の親指で鯉口を切つて、鬼虎の柄に軽く右手を置いた。

「能書きはもう済んだか？」

アシュマがまた揶揄をする。

「！！ この、若造が！！」

オクナフは更に頭にくる。

「落ち着け！ オクナフ！ 奴の手だ！」

頭目と目される男が叫んだ。

オクナフがからだをビクリと振るわせる。

「お、おう……そ、そうだなシシオウ……」

オクナフが声を震わせる。

シシオウと言う男を恐れているらしい。

アシュマは、シシオウと呼ばれた男に注目した。

アシユマはそのシシオウが、このマスクドの集団の頭目と見た。

「おら！ 注意がこつちに向いていないぜ！」

オクナフの大刀がアシユマの頭上から襲う。

（殺った！）

オクナフは勝利を確信した。

ザザの所のマスクドを、壊滅に追い込んだ男、アシユマ・アトー。その男を殺ったとなれば、格が上がる。

一瞬その想いが、オクナフの頭によぎる。

だがアシユマはその大刀の軌道を、紙一重でかわす。

直後、アシユマは鬼虎を鞘走らせ、閃光を生んだ。

オクナフは首根を斬られ、刎ね飛んだ。

「……！！」

そこにいるマスクド全員が驚いた。

まさか、マスクドたる者が、こうまであっさりと敗北するとは、思わなかったからだ。

ただの一太刀。

一太刀なのだ。

「まだ、やるか？」

アシユマが言う。

アシユマが血振りをくれる。

後ろでは首根を断たれたオクナフが血を噴き出している。

「シシオウ！ こうまで子馬鹿にされて戦わないなんて無いぜ！」

鎖鎌を持った別の男が言う。

悔しそうだ。

「言っな！」

シシオウと呼ばれた男が制する。

確固たる意思が見える。

他の者とは何処か違う。

「シシオウ！」

鎖鎌の男が叫ぶ。

「……分かった。お前達がそこまで言うのなら、戦ってもよい。ただし、アシュマは俺が当たる。お前達は他の者の殲滅に当たれ!!」
シシオウが命令をする。

「シシオウ!」

「反問は許さん!!」

毅然としてシシオウが叫ぶ。

シシオウと呼ばれる頭目は、アシュマの目の前に、ゆっくりと進み出た。

「さて、尋常に勝負と行こうか？ アシュマ・アトー」
腕を組んでアシュマを睨む。

「シシオウ……と、言ったか？」

アシュマも言葉を返す。

クロダの六人衆から一目置かれるシシオウを前にして臆した様子はまるでない。

「ああ。クロダの六人衆の、頭を張っている」

シシオウと呼ばれるマスクドが言う。

「もう、五人衆だな」

アシュマが揶揄する。

「そうだな」

シシオウが応ずる。

アシュマのその手には乗らないようである。

「俺はエヴュ。お前は？」

鎖鎌を持った男が、分銅を回しながら、オルバニアンに訊く。
少し不満顔である。

本当はアシュマを殺りたかった。

なのにこんな若造を相手にする羽目になった。

それでも他の者より少しかマシそうである。

だから一応名前を訊いた。

「俺の名前はオルバニアン。オルバニアン・マグマイヤー！ 覚えておきな！」

オルバニアンは名乗りを上げた。
アシュマと同じく居合に腰を落とす。

オルバニアンにしては珍しい。

「ふん！ 直ぐに忘れる事になるだろうよ」

エヴュは鼻で笑って相手にしない。

この若造がと、いう頭があるのである。

マスケドのプライドというものもある。

相手は唯の人間なのだから。

「言ったな？ 直ぐに後悔する事になるぜ？」

オルバニアンも不敵に笑う。

今はその形をなしていないが、オルバニアンには必殺技天刀稲妻斬がある。

オルバニアンはちょっとした自信を持っている。

それがこの言葉になって現れた。

「そうかい？」

エヴュはそう言うと同時に、分銅を投げてきた。

少し頭に來たのだ。

「ち！」

オルバニアンは舌打ちと共に逸鉄を引き抜き、分銅を跳ね除けた。
と、同時にエヴュは、オルバニアンに、鎌で斬りかかって來た。

オルバニアンは返す刀で、上段から斬りかかった。

宙空で互いの得物が火花を散らす。

「なかなかやるじゃないか？ 小僧」

エヴュは最初の一撃で勝負が決まると思っていたのだ。

オルバニアンの持っている得物もそうだが、エヴュの分銅をはじき飛ばす技と言い、余勢を駆って斬りつける様といい、中々のものだ。

人間にしては驚嘆に値する。

「そうかい？ この間合いじゃ、分銅は使えまい」

オルバニアンは憎まれ口を叩く。

確かにこの距離では分銅は使えない。

「しかし、この間合いは、こっちの鎌に、有利な間合いだが？」

こう近づいては刀も思うように振り回せない。

マスケドの念導境界面だ。

普通の斬撃では歯が立たない。

「くっ……」

オルバニアンは言葉に詰まる。

「お前の相手はこの俺だ」

その男はアルミナと対峙しそう言った。

わざわざマスケドが立会を名乗った。

ありがたく思えと言わんばかりである。

「あ、そう」

アルミナが興味なさそうに言う。

興味が無いと言うよりはわざと無視をした。

この様に上から物を見るような男は鼻につくのである。

嫌いなタイプの人間……いや、男だった。

「けっ！ 只の人間が！」

マスケドも人間を相手にするので相手を馬鹿にしていた。

元来マスケドはイムフレールの残した生命体、即ちアシユマ等を

研究して作られた者達である。

対アシユマ用の兵器であるといっても良い。

過去、何体イムフレールの残した生命体かとはわからない。

が、マスケドはそのような存在である。

過去のイレギュラー・ナンバーの様なものである。

人間など相手にしてられないのである。

「只の人間だなんていわないでよ！ アタシだって名前があるんだ

から！」

アルミナはとうとう頭に来た。

あまりの相手の態度に堪忍袋の緒が切れた。

大体マスケドだからといってどんな態度を取るのか。

あんまりではないか。

「そうかい。じゃあ、俺も名乗らなきゃならんな。俺はアジャオ。水餓鬼のアジャオ」

アジャオはそう言つて長槍を構えた。

変にまともな答えを送つて返した。

かと言つて、狼狽えはしない。

その余裕はない。

何故なら、相手の構えに隙がなかったからだ。

「アタシはアルミナ。アルミナ・ラ・シア。じゃあ、行くよ？」

アルミナも名乗りを上げる。

せめて宣言だけはしておきたかった。

アルミナは右目の眼帯をむしり取り戦利眼を開いた。

そして、ロンリーストライフを構えた。

アジャオは長槍を構えて、隙を伺っていた。

しかし、隙は見出せなかった。

アジャオは長槍を繰り出し、誘いを掛けてみた。

長槍は軽く弾かれて軌道を曲げられた。

アジャオに僅かな隙が出来る。

そこをすかさず、アルミナが剣を振り下ろした。

それをアジャオが避ける。

「この戦利眼から逃れる術は無いよ！」

アルミナが戦利眼を誇つて言う。

「そうか、戦利眼を持っているのか」

アジャオは戦利眼を知っているようだった。

戦利眼と言う能力はそんな古代からある能力なのか。

「戦利眼を知っているのかい？」

アルミナが驚く。

「ああ」

その後二人は膠着状態に陥る。

ガンロクとマスクドが睨み合っていた。

ガンロクは三尺半の大鉈、相手のマスクドは大振りの鉤爪。

お互いに隙を見出せないでいた。

マスクドが口を開く。

「お前の名は？」

マスクドがガンロクに名を訊いた。

マスクドの方から名を訊くのは珍しい。

マスクドにはマスクドのプライドと言うものがあるのは先程言った通り。

その様な理由があるから珍しいのだ。

「ガンロクだべ」

ガンロクは油断なく言った。

人間には呼吸というものがある。

吸う時、吐く時、それぞれ隙が出来る。

喋る事も呼吸のうちだ。

だから油断無く言う必要がある。

「ガンロクと言うのか。俺はナイシー。お前程の腕の持ち主は、そうはいない。それはこの睨みあいでも良く分かる。どうだ？ 我等の仲間にならんか？ さすれば、今よりも強くなれるぞ？」

人間がマスクドになどなれるものなのか。

お笑い種だと思った。

まともに取り合わないほうが良いと思った。

「御免だべ」

ガンロクがそう応える。

「そうか。それは残念」

ナイシーはその言葉が終わると同時に、ガンロクに斬り掛かった。

女のマスクドが、鞭を撓らせながら、言葉を発し始めた。

「あら、中々美形。アタシ好み。どう？　ボウヤ。私の愛人にならない？」

女のマスクドがにつこり微笑みながら言う。

これはこれで中々美形のマスクドだ。

その美形のマスクドが笑うと凄惨な顔になる。

「済みません。美しい方のお誘いに乗りたいのは山々ですが、わたくしには大切なお方が御座います故、そのお方を裏切る訳には参りません」

シユンマも言い返す。

大切な方というのはキュポアの事だ。

「あら、そう。なら、死になさい。勿体無いけど。最後に名前を教えて頂戴」

淡々となんの感情もなく女のマスクドが言った。

ただ、勿体無いと言うのは本音だったろうか。

後で玩具にでもしようと思ったのだらう。

シユンマも中々美形だったからだ。

せめて最期に名前ぐらいは聞きたいと思った。

「シユンマといいます。貴女は？」

律儀にシユンマは名を返す。

そして相手のマスクドの名を訊く。

「キエラ」

女のマスクドが返し鞭をしならせる。

「そうですか。では参ります」

シユンマが納得すると刀を抜いて正眼に構えた。

アシユマは鬼虎を納刀し腰を落とした。

居合いで、勝負を決しようとした。

その佇まいは、ゆらゆらとたなびく柳の枝のようで、相手にはどこか実体が見えない。

「う……む……」

シシオウは攻めあぐねていた。

隙がある様でそれが無く、実体の無いアシユマは、どこか別世界の住人の様に思われた。

（これはいかん。成程、ザザとロシが破れる筈だ）

シシオウはそう思った。

それ程までにアシユマは使い手だったのだ。

（しかし、この私の念導境界面が破れるかな？）

シシオウは直刀の二刀を振りかぶって、アシユマに迫った。

アシユマは迷わず刀を抜き、シシオウの胸を撫で斬った。

が、アシユマの鬼虎は、シシオウの念導境界面を通らず、逆に隙を作ってしまった。

シシオウは迷わずアシユマの背に直刀を送り込んだ。

が、シシオウの直刀は空を斬った。

間違いなくそこにアシユマの体があるのに。

その直後、背に衝撃が疾る。

アシユマだ。

「秘剣・空蝉……」

アシユマはぼそりと呟いた。

秘剣『空蝉』はそこに気配と念を置いてくる技だ。

実体は気配を消し掻き消える。

つまり残像を残してくるのだ。

「見事な技だ」

シシオウが感嘆する。

自分に二度も斬撃を送る。それだけでも称賛に値する。

「邪剣だがな。が、俺にはそれが相応しいらしい。だが斬れなんだ」

アシユマはシシオウを切れなかったことを残念がった。
相手は強敵、マスクェだ。

二度目があるかどうかは分からなかった。

「ふ、未恐ろしい奴。どうだ、我等の仲間にならんか？」

シシオウはアシユマの底しれぬ実力に驚嘆した。

斬るのは惜しいと判断したのか仲間に誘う。

「御免蒙る」

考える間もなく断る。

アシユマは誰の手先かは知らないが、人を付けておいて襲うような輩とは交わりたとは思わなかった。

「そうか……では又来る。者供！ 退くぞ！」

シシオウは残念そうに呟く。

そして配下の者に声を掛ける。

今は決着を付ける時ではないと判断したのだろう。

「ち！ 退くんかい！」

エヴユが叫ぶ。

残念そうだ。

オルバニアンを見て、

「小僧、命拾いしたな。又来るぞ」

そう言った。

罅迫り合いからオルバニアンを蹴り込み離れた。

「もう来なくて良いぜ」

オルバニアンが叫ぶ。

そしてそれぞれのマスクェも去って行った。

「まるで嵐だな」

オルバニアンが言う。

多少辟易としている。

突然やってきて突然に帰る。

そして迷惑なこと甚だしい。

「全くね」

アルミナが相槌を打つ。

彼女も同じような感想を持っていた。

そして、

「今日は、顔見せ程度だったって、訳ね」と、呟く。

アシュマ一行は、カオルコを連れてアジトへと帰って行った。
勿論、尾行に気を配って。

オロはいよいよ、ノーツ連邦にまで、その魔の手を伸ばしてきた。
オロは、ノーツ連邦に対して、経済的圧力を掛けて来た。

ノーツ連邦は、すぐさま追い詰められた。

ノーツ連邦内では、直ぐに物資が底を付き、政情が不安定になった。

かといって、ノリトレアやイーハン、そしてクーロンとは手を結ぶ気は無いらしい。

そしてオロは、世界に対してその手を伸ばしてきた。

第四節 奪回

アルステイーン達は、ファソーイ家の別邸……と、言っても、民家と変わらないが、その別邸の地下に潜んでいた。

まだ、ノリトレア国内に潜んでいたのだ。

正に、地下に潜むと言う表現が、的を得ていた。

地下には居住施設があり、かつまた、大規模な軍事施設が有った。アルステイーンは、ここで反撃のチャンスを探っていた。

先ずは、ヨナルトを倒し、国政に返り咲く事。

そして、世界各国と和平交渉をする事。

この二点を目標としていた。

しかし、アルステイーンには、危惧する点があった。

つい先日、ノリトレア国軍の奇襲作戦が成功したといっても、今の政府の軍司令部では国力の差も考えずに、遮二無二戦う事ばかりを考えている様だ。

(これではノリトレアは滅んでしまう)

アルステイーンは、焦っていた。

アルステイーンは、カオルコの脱出を喜んだ。

二人は再会を果たした。

アルステイーンは椅子に座っており、カオルコは跪いていた。

民家のような家屋である。

玉座という訳にはいかないが。

その様な位置づけになる様だ。

「兄上……」

カオルコはアルステイーンを見て言葉をつまらせる。

色々と胸に去来するものがあつたのだろう。

感極まれりと言ったところか。

父親も死んでいる。

「カオルコ……」

アルステインも妹を見ている。

こちらも掛ける言葉を失っている。

椅子から離れてカオルコに歩み寄る。

「お久しぶり御座います」

カオルコが声を振り絞って言った。

声が震えている。

「うむ。苦勞をした様だな」

アルステインがカオルコの肩に手をかける。

珍しく真面目だ。

妹のことを気遣う。

「いえ。その様な事は……」

実妹である。

喜ばない筈がない。

アルステインの気遣いに感謝しながらも謙遜する。

「姉上。よくぞご無事で……」

シユンマも姉を気遣う。

あのマスクドの戦闘をくぐり抜けたのである。

まずは喜ぶべきことと言ったほうが良いだろう。

「有難う。シユンマ」

カオルコが返す。

そして、同時に父である、シヨウマの悲報も報告をした。

悲しむべき事だがいわねばならなかった。

「父上が……」

これには、アルステインも大層悲しい想いをした。

アルステインは八歳の折にイーハン国からノリトレア王国に養

子としてやって来た。

父の想い出は少ない。

だが、実父であることには代わりない。

「父上……」

勿論、シュンマも悲しい想いをした。

唇を噛み締め俯く。

シュニク・インジャを憎くも思った。

「シュンマよ。カオルコよ。今は嘆く時ではない。民の為に動く時だ。父上もそう願っている筈だ」

アルステイーンが悲しみを乗り越えてそう言う。

「はい。兄上……」

シュンマもそれに返す。

幾ら潜んでいるとはいえ、アジトの維持や物資の不足等は発生する。

これを、回避する為に、時々散発的にノリトレアの軍事基地より、物資を盗んできた。

そして、今夜も補給物資を奪う為、王宮市外れの軍事基地の倉庫を、襲おうといていた。

作戦の企画立案はアルステイーンだった。

が、実際には作戦に加わる事は無かった。

そこで、アルステイーンはこう言った。

「また、僕だけのけ者かい？ いい加減にしておくれよ」と。

結局、アルステイーンは後方に控えて、指揮を取る役に徹する事に。

王妃エファールに止められることは目に見えていたから。

「市民には、被害は及ぼさない事」

これは、アルステイーンの厳命である。

「アシュマさま気をつけてね？ マスクドがいるんでしょ？ 危な

いと思つたら、逃げて帰ってきてね?」

アーチエルがアシュマを気遣う。

マスクドは油断ならない相手である。

アーチエルはアシュマが心配でならなかった。

アシュマは冷静なようで時々無茶なことをする。

こちらの予想の範疇外のことをしてくる。

命に関わるような事も何度かあった。

それが心配なのである。

「俺だけ?」

アシュマが少し、意地悪を言ってみる。

「勿論、他の人も。もう、アシュマさまの意地悪。皆さんも、どうかご無事に帰ってきて下さいね?」

アーチエルが少し怒ったような顔になる。

アシュマだけを心配しているわけではない。

勿論皆の事も心配している。

皆は笑いながらも頷く。

「シュンマ、無事に帰ってくるのじゃぞ? 今回わらわ達は、作戦に参加出来ないが、心はいつもシュンマと共にあるからな? 分かっただな?」

キュポアがシュンマに想いを伝える。

キュポアはシュンマの手を握っている。

「ちゃんと帰ってきますよ。今までちゃんと帰ってきましたし、これからもちゃんと帰ってきますよ」

シュンマがキュポアに言葉を返す。

につこりと微笑む。

その向こうでは、

「レンヌ。私は……。私はお前を前線に立たせたくはない」

と、リイナが俯いて言う。

心配をしているのだろう。

レンヌはヘブンス・ソードと言う強力無比な召喚魔法を操れる。

が、身体能力は人並だ。

特筆する所がない。

敵の中にはマスクドが居るかも知れない。
だから心配するのだ。

「大丈夫だよ。リイナ。僕はちゃんと帰って来るよ」
レンヌが返す。

リイナにすれば根拠のない言葉に聞こえる。
しかし頷くしかない。

「あなた。ちゃんと帰ってきてね。おなかの中の子供の為に」
ビッシュの妻となったフィナ・ノマンがビッシュに言う。

元の名前はフィナ・エマル。
ビッシュの弟子だった少女だ。

今ではお腹の中にビッシュの子供を宿している。

「ああ、分かっているさ。必ず帰ってくる。おなかの子供の為に」
ビッシュがそう言う。

子供のためにも生きて帰ってくる決意である。

「ガンロクさん。お願い。行かないで……」

アンがガンロクを引き止める。

ガンロクは人がいいところがある。

そこを付け込まれないとも限らない。

「大丈夫だべ。おらだけ行かない訳には行かないべ」

ガンロクが、アンを抱き寄せる。

アンは目に涙を浮かべている。

「ガンロクさん……」

アンが必死にしがみつく。

「ジーク。必ず戻ってきてね？ 死んじゃ駄目よ！ わかった？
約束よ？」

ミカがジークフリートに面と向かって言葉を話している。

真剣な顔をしてさっきから同じ事を何度も言っている。

「分かっている」

ジークフリートはうんざりした様子で手を振った。

そんな様子を見たミカは、

「死んだら一生恨むからね？」

と、ジークフリートを見据えて言った。

少し頭に来ているらしい。

話しぐらいまともに聞いて欲しいと思っている。

「言ってる事が支離滅裂だぞ？ ミカ」

ジークフリートが呆れる。

皆が皆それぞれの別れをした。

補給物資強奪班が、王宮市外れの、軍事基地に来た。

現場指揮者は、王直属親衛隊隊長のオフヴ。

アシュマ達は、その配下となった。

アシュマが現場指揮者になるかと思いきや、アシュマはオフヴの配下になった。

アシュマは、元々一剣士としての才はある。

が、それが現場指揮能力に直結しているかといえば、必ずしもそういう訳ではない。

現場指揮官として才のある者が、部隊を率いる。

それがオフヴと言う訳だ。

合理的な帰結である。

そして、皆、配置に着く。

アシュマとジーク、オルバニアンとアルミナ、レンヌとシュンマ、ガンロクとビツシュ。

そして、一般の兵士達。

オフヴの連絡を待つて、突入をする所だった。

「よし……そろそろ頃合だな……全班突入！」

各班で壁を爆破したり、鉄格子を切ったりして、突入口が出来た。兵達が突入して行く。

だが、様子がおかしかった。
反撃が全く無かった。

疑問に思いながら、軍基地の中央へ進んで行く。

「オフヴ殿。おかしい。どうも誘われている様な気がする」

アシユマが、オフヴに言う。

どうもおかしい。

反応がなさすぎるのだ。

「アシユマ殿。あなたもそう思うか」

オフヴも同じ事を考えていたらしい。

様子がおかしい。

「ああ」

アシユマは返事をする。

「ここは、撤退した方が、良さそうですね」

オフヴがそう言う。

その時だった。

「動くな！」

その声が響き渡ったのは。

「しまった！ 罠か！」

オフヴが叫ぶ。

多数の敵兵が、アシユマ達を取り囲む。

そして彼らが現れる。

「一瞥以来だなアシユマ」

アシユマの名を口にした男。

それは……、

「シシオウ……クロダの六人衆か！」

だった。

「如何にも」

シシオウがにやりと笑う。

シシオウを中心にクロダの六人衆が左右に広がる。

「クロダの六人衆はノリトレアのマスクドなのか？」

アシュマが質問する。

「少し違うな。元々はイーハンの出自よ。おっと喋りすぎだな。さて、ここらで死んでもらうとするか」

そう言つて、シシオウは手を上げた。

合図を受けて、敵兵が雪崩を打って、攻めて来た。

アシュマは、敵兵とて、元は同じノリトレアの兵。

それを傷付けろのを善しとせず、鬼虎を峰に反し、ばしりばしりと打ち据え始めた。

「流石は鬼を持つ者。他の者とは、一枚も二枚も腕が違う」

シシオウがアシュマに、向けて言葉を発した。

アシュマの卓越した剣技を称えているのである。

「……」

アシュマは無言を決める。

別に褒めてもらいたいわけではない。

仲間になり得た者を打ち据えているのである。

気分が良いわけではない。

そう言われて却って気分が悪くなった。

「では、この間の遺恨、晴らさせて貰おうか」

シシオウが、直刀を抜く。

一泊おいた後、アシュマに斬り掛かる。

他のマスクedom、それぞれ前回因縁のあった者に、斬り掛かって行く。

シシオウが、アシュマに、上から直刀を打ち下ろす。

アシュマはそれを紙一重でかわし、鬼虎を車に回す。

それをシシオウがもう片方の直刀で凌ぐ。

そう、シシオウは、直刀の二刀を操っているのだ。

動きを止められたアシュマに、シシオウの直刀が、頭上から見舞われる。

アシュマは少し下がり、寸余の見切りでそれをかわす。

「一寸の見切りか。達人でも中々出来ない事だぞ？ それは。この

時代に蘇って良かったぞ！　この様な好敵手にめぐり合えるとはな
！」

シシオウは嬉しそうである。

戦うことがマスケドの意義。

その、マスケドの力を存分に発揮させてくれる者。

その様なものと巡り会ったことがマスケドにとつては最大の喜び。
もし、神というものがいるとすれば、その者に感謝せねばなるま
い。

「そうか。『ありがたき幸せ』、とでも言えば良いのか？」

アシュマが揶揄する。

対してアシュマは迷惑そうである。

「そうよ！　そういう事よ！」

シシオウが二刀で左右の袈裟から斬り掛かってきた。

アシュマは尚もそれを避け、その間に素早く納刀する。

アシュマの周りでは、もう、乱戦模様だ。敵味方入り混じって、
斬り合いをしている。

だが、流石にアルスティーンの親衛隊で、構成された者達だ。

数で圧して来た敵兵を、物とせず、圧倒し始めた。

いままで、直刀を振り回してきたシシオウも、その動きを止めた。
アシュマのその佇まいに、隙を見出す事が、出来なかったからで
ある。

下手には動けない。

「むう……」

シシオウは唸^{うな}った。

間合いは十分に取られていた。

だが、シシオウは攻めあぐねていた。

その時だった。

アシュマは、不意に跳ぶ様に間合いを詰め、鬼虎を横に薙いで来
た。

「！！」

シシオウは虚を突かれ、驚いた。

その攻撃を何とか凌いだのも、シシオウも非凡な腕の持ち主である事を、示していた。

二人共構え直す。

「アシュマ殿！ 大丈夫か！？」

オフヴが尋ねる。

「大丈夫だが、手が離せん！」

アシュマはシシオウに向かいながら答えている。

視線も動かせない。

緊迫したやり取りの中なのだ。

「撤退します！ 大丈夫ですか？」

オフヴが重ねて問う。

なんなら手助けしそうな勢いである。

「俺は構わん。他の奴らに訊いてくれ」

アシュマが言い放つ。

他の相手はしてられない。

その余裕が無い。

それだけ手ごわい相手なのだ。

シシオウは。

「皆、大丈夫です。逃げました。後はアシュマ殿だけです」

「そうか。分かった！」

アシュマは隙を見せずに後退る。

「！ 逃げるか、アシュマ！」

シシオウが叫ぶ。

「勝負は預ける！ シシオウ！」

アシュマは徐々に後退り、そして走り去った。

「シシオウ。お前も仕留めし切れなかったか」

エヴユが近づいてきて言う。

「お前もか。エヴユ」

シシオウが返す。

「ああ。他の者もそうだ。奴ら普通の人間のくせして、戦闘能力が物凄く高い。始末に終えないぜ、全く」

「そうか……」

シシオウが呟く。

アシユマ達は、上手く脱出した。

この事態は、ノリトレアのヨナルト・リングが、アルステイーン等をテロリストとして非難した。

それに対して、アルステイーン王は、

「クーデターを起こして、不当な政権を取った者に、言われる筋合いは無い」

と、声明を出した。

が、アルステイーンは苦悩した。

あながち間違いでは、ないのである。

同じ国民、同じ民族、同胞はらからなのである。

それが、血を流しあう。

これ程悲しい事があるうか。

アルステイーンは、これからの戦略を考えさせられた。

「アルステイーン、もう、圧して出るしかない！」

オルバニアンが、作戦会議の場で叫ぶ。

焦っているのだ。

でなければ叫ばない。

「待っていたって、ジリ貧だ！ アルステイーン、ここはもう動くしかない！！」

オルバニアンがアルステイーンに迫る。

「……………」

アルステイーンは黙ったままだ。

目を瞑って背もたれに寄りかかっている。

「アルステインー!!」

「オルバニアン、少し黙りさい」

「これが黙っていられるか!!」

「黙りなさい。いま、考え中です」

「アルステインー!」

「さて、オルバニアン。我等の暴発……それが敵の手筋かも知れん。それに乗る訳に行くまい?」

アシユマが口を挟む。

その時アルステインの目が開く。

「……うん。敢えてその手に乗ってみるのも、面白いかもしれませんね?」

アルステインが何か閃いた様だ。

言葉を発する。

「では、今、戦いの狼煙を上げると?」

アシユマが訊く。

意外だった。

取敢えずは訊いてみることに。

「そういう事ですね。今はまだ僕達には少し余裕がある。それは敵も知っているでしょう。今、暴発するとは敵も考えません」

「成程。上手くすれば、敵の裏をかけるかも知れないと?」

「ええ。ファソーイ公、今動かせる兵は、幾つあります?」

アルステインがファソーイ公に言葉をかける。

「はっ。我が軍魔導機兵七百、歩兵、二千五百。ミフシーヨ公の魔導機兵五百、歩兵、二千……」

ファソーイ公が説明を加えていく。

「魔導機兵八千に、剣士が三万二千人、兵士が約六万か。これは以前と変わらん」

アルステインが感想を言う。

以前というのはアルステインがガルマインに対して反旗を翻し

た時のことである。

あの時も自分の勢力の魔導機兵軍が約八千だった。

「は」

ファソーイ公が頭を下げる。

「ただ現地戦力が、魔導機兵二千に剣士が約八千。これも以前と変わらず……。そしてヨナルトの戦力と言えば、魔導機兵三万二千……」

ここでアルステイーンは再考を始める。

再び目を閉じる。

「はぁ」

ファソーイ公は少し呆れる。

「さて。これで、どのような作戦を立てるか……」

アルステイーンは呟く。

着想はいいのだがその後が続かない。

先程呆れたファソーイ公が更に呆れる。

これで勝てるのか。

「アルステイーン様……」

ファソーイ公は言葉を失い、アルステイーンを見る。

「陽動を掛けてみます」

アルステイーンは、ぼそりと呟く。

そして目を見開く。

「陽動？」

オルバニアンが聞き返す。

そしてアルステイーンが、口を開く。

「地方戦力を一箇所に集めて、王宮市を攻める様に見せかけます。敵兵の注意をそちらに逸らす訳ですね。そして敵兵が居なくなつた所で……」

「成程、そこで奇襲をかける訳だ」

「そつ言う事　さて、その上で細かい段取りですが……」

その夜。

ノリトレアの各地で、反乱が起こった。

それらは一箇所に集まる気配を示し、その後、王宮市を目指すと
思われた。

王宮では、ヨナルト・リングが起きだし、発令所に出向く。

「どうなっておる？」

苛立っている。

いま、アルステーンが攻めて来る筈は無いのだ。
その『筈』がヨナルト・リングを苛立たせていた。

「はっ。地方の各有力貴族が反乱を起こしまして、今一箇所に集結
中です」

側近がそう答える。

ヨナルトノ怒った横顔を見て、おどおどとしている。

「ここに向かってくるな」

ヨナルトが呟く。

下唇を噛み締めている。

怒っているのだ。

小癪な若造と思っているのだ。

しかしこれで終わりだと思った。

剃刀アルステーンの行動を呼んだと思っているのだ。

「は？」

側近が思わず訊き返す。

「魔導機兵二万五千を以って、これを討伐せよ！」

ヨナルトが側近に命令する。

勝った。

これで勝った。

アルステーンは終わった。

「はっ！」

側近が引き下がる。

ヨナルトの魔導機兵部隊二万五千は直接、敵地方部隊を目指して飛んだ。

「二万五千か……。少々少ないな」

アルステインが呟く。

ここは、ファソーイ公の別邸にある発令所。

敵は……。ヨナルトはこちらの手に引っかけたはくれた。しかし、もう少し引きつけてくれればと思う。そうすればこちらの戦闘が楽になる。

「ここは、アシュマ君の出番かな？」

思わず、アルステインが呟いてしまう。

その言葉を聞いたアーチエルが、

「アシュマさまですと、敵を全滅に追い込んでしまいます。明らかに、大量殺戮になります。何とかしていただければ……」
と、言う。

アーチエルの博愛主義だ。

アルステインは尤もだと思いながら、

「はぁ。仕方ないですね。電撃作戦と行きますか。各部隊に通達。これから所定の位置を速やかに抑えよ。行動開始！」

と、命を下していく。

「了解。各部隊は……」

オペレーターが復唱し命令を伝えて行く。

「さて、私も行きますか」

アルステインが椅子から立ち上がる。

立てかけてある棒を掴む。

形だけかと思われた戦装束が役に立つのか？

「アルステイン様も行きますので？」

アーチエルが驚く。

王自ら先陣を切ろうというのか。

勇ましいことだ。

エファールはどう思っているのだろうか？

「アーチエル様も出るのに、私がのうのうと椅子に座っている訳には、行きませんからね」

アルステイーンはそう言ってアーチエルにウィンクしてみせる。

「まあ！」

アーチエルは呆れて声を出す。

アシュマとアルステイーン、エファール、ガンロクは、王宮へ。

オルバニアンとアルミナは防衛庁。

レンヌは、国営放送局。

シュンマは、内務省。

ジークフリートは、外務省。

ビッシュは、警視庁。

皆、兵を引き連れて、国の要所要所を押さえて行く。

各魔導機兵も割り振りをされて、各要所の抑えに回った。

アーチエル、ミカ、キュポア、リイナは後方に回り、負傷兵の手当ての用意をしていた。

アシュマ達は兵を引き連れて、王宮の正門へとやって来た。

正門には衛兵が居る。

「アシュマ君。あれを何とかしないと、いけませんね」

アルステイーンが言う。

なるべくなら殺したくない。

かと言って知らせられるのも拙い。

「任せろ」

アシュマが返す。

アシュマは、ゆっくりと正門に、近付いて行った。

そして姿が、闇夜に溶けて行く。

「朧霞だ……」

アルステインが呟く。

正門では、アシュマが消えたその姿で、ばしりばしりと、兵を倒して行く。

アシュマの姿が、不意に現れ、手招きをする。

アルステインを始め、兵達が正門の中へ入って行く。

今回の作戦は、迅速を以って旨とするので、皆、雪崩を打って、王宮に攻め入って行く。

その先頭を切るのは、アシュマである。

出てくる敵を、ことごとく倒して行く。

「ヨナルト様！ 王宮内に敵多数。真っ直ぐこの発令所を目指して、向かってきます！」

オペレーターが叫ぶ。

この事態に動転している。

「何！？ 何故、そんな事態になった！？」

ヨナルトが驚く。

こんな事態は想定外だ。

その事態に困惑している。

「わ、分かりません」

オペレーターに理由を聞かれても分かる訳がない。

矢張り困惑するばかりである。

「王宮市内各地で、敵勢力が蜂起！ 国営放送局、内務省、外務省、防衛省、警視庁等、各要所が攻め落とされています」

別のオペレーターが、悲鳴を上げる。

最早どうしようもない。

「何？ 何故こうも、あっさりと落とされる？」

そう言ってももう遅い。

アルステインの作戦勝ちだ。

地方に兵を追いやったのだ。

「どうやら、この蜂起を歓迎している向きがある様です」

王宮市の市民のことだ。

市民がアルステインの蜂起を喜んでいるのだ。

今や、ヨナルトの軍勢は総崩れになって敗走を始めている。

「ぐぬぬ……」

ここに、いかにヨナルトのクーデターが、国民に支持されていないか、この面からも分かる。

最早進退を決めるしかない。

「ワシは脱出する」

ヨナルトが言い出す。

もうそれしかないのだ。

今は自分の命が大事なのだ。

「は、はい？」

オペレーターは我が耳を疑った。

指揮官がまず最初に逃げ出そうとする。

そのような者を信じられるだろうか。

そうなった組織は脆い。

「まずはワシの護衛隊を呼び、脱出路を確保。脱出用サイコ・フレイヤーまで、ワシを誘導！ その間の時間は稼げよ！」

ヨナルトが側近の者に言い捨てる。

まずは順当な司令だろう。

が、心証は良くないだろう。

「は、はっ！」

側近の者が頭を下げる。

「おのれアルステイン……地方蜂起は困ったか！ こんな時にクロダの六人衆が居ないとは！ 何を考えておるのだ、シュニク殿は！」

アシユマ達が王宮に攻め入った時、ヨナルト・リングは、アシユ

マ達の追及の手を逃れて、逃げ去った。

発令所はもぬけの殻だった。

ヨナルト・リングの行方も分からない。

「逃げ足の速い奴……」

アルステインが呟く。

ある種アルステインは呆けた。

呆けて辺りを見回した。

肩透かしを食らったような気分である。

が、まあ、同族同士で殺し合わなくてよかったのであろう。

「あら、それは人の事言えないんじゃない？ ダストモンキーさん？」

エファールが揶揄する。

腕組みをして横目を流してくる。

端からアルステインの出陣には反対であったのだ。

寧ろ戦闘がなくてよかったぐらいである。

「やだなあ。エファさん」

アルステインは戦装束のエファールに向かって言う。

無責任に笑ってごまかす。

「あら、ホントの事じゃない？」

少し怒ってみせる。

「たはは」

更に笑ってごまかす。

この数日間のクーデター劇は、早くも崩れ去った。

アルステインは改めて、政権を奪取する事に成功した。

早速アルステインは議会を開き、その場で声明を発表。

王制を国政から切り離す事とした。

ただし、王制は残す。

そして、議院内閣制は存続する。

その為の憲法も改正する。

国内外の政情が安定してから総選挙を行うと発表。

各大臣をアルステインが任命して行く。

首相も任命した。

悪く言えば、アルステインの、傀儡政権だとも言える。

幸いな事に、国民は、アルステインの復権を、喜んでいる。

それだけは、不幸中の幸いだった。

「オロ・エバス国との戦端は開かれてしまったが、何とか打開の道を探って欲しい」

アルステインがロンギ・ターフリ首相に言った言葉である。

ノリトレアは、何とか和平交渉を進めるべく、あらゆる手を尽くした。

だが、オロ・エバス国、オロの言葉は……。

「聞く耳を持たず。攻撃あるのみ」
だった。

加えてオロ・エバス国と西方州連合側は、無条件降伏を迫ってくる。

これを飲んでしまう訳には行かない。

降伏すれば、ドートネーゼの息の掛かった各国軍隊が、祖国の土を踏みにじる様にやって来るだろう。

それだけは避けねばならなかった。

詰まる所、有利な条件で戦争を終わらせられるよう、戦いを続けねばならなかった。

そして、それを終らせなければならなかった。

それは非常に困難な事であり、難しい事であった。

が、やらなければ、ならなかった。

和平交渉は、引き続き暗中模索のまま、続けられた。

リン・シャオリン率いるクーロン共和国政府は、今回のアルステーンによる、政権奪回を好感し、ロンギ政権に接触を図ってきた。リンはノリトレアと軍事同盟を結ぶ為、使者をノリトレアに送ってきた。

ダ・アヒ外務次官の来訪である。

そしてロンギ・ターフリ首相との、会談を持った。

後日、ダ・アヒ外務次官と、ロンギ・ターフリ首相は、

「ノリトレア王国、クーロン共和国は本日同盟関係に相成った」と発表。

正式に軍事同盟を結んだ。

その後、ダ・アヒ外務次官は、アルステーンとも会食。その際に出た言葉が、

「これで、ますます、世界からは敵視されますね」

とは、アルステーン。

「は、はは……」

苦笑するダ・アヒ外務次官。

「しかし、これで良かったのかも知れませんね」

ロンギ首相は、

「ノリトレアは、現政権のイーハンとは軍事同盟を破棄すると、一方的に通達。」

イーハン国はこれに反発。

すぐさま、ノリトレアに対して宣戦を布告する。

しかし……。

「兄上。では、行つて参ります」

シュンマが意気込む。

国盗りだ。

しかも、自国に復権する戦いだ。

意気込むのも無理は無い。

「あんまり、気負い込まぬよう。でないと失敗しますよ?」

アルステインがシュンマを諭す。

シュンマが意気込むこのパターンは失敗する可能性が高いとアルステインは見た。

実弟だがそこは冷めた見方をしていた。

「ですが……」

シュンマが言い返そうとする。

何としても、シュニク・インジャを倒し政権を奪回せねばならない。

それが、民のためだと思っている。

シュニク・インジャの下では民は圧政を強いられるだけだ。

それがシュンマの焦りの元となっていた。

「まあ、気持ちは分かります。行つてらっしゃい。魔導機兵二万を貸し与えましょう。これでシュニク・インジャを討伐してらっしゃい」

そう。

シュンマの気持ちもわからないではない。

アルステインも為政者の一人だ。

為政者としての気持ちも分かっているつもりだ。

「はい!」

シュンマは、アルステインに魔導機兵二万を貸し与えられて、シュニク・インジャに反旗を翻した。

勿論、アシュマ達も一緒である。

「宜しくな。シュンマ」

アシュマがシュンマの肩を軽く叩く。

シュンマが笑みを返して頭を下げる。

頼りに思っているのだ。

アシュマを。

アシュマの能力はある種想像を超える。

その力を頼りに思っているのだ。

「わらわも一緒に行くぞえ。大船に乗った気で行くがよい」

キュポアもシュンマの肩を叩く。

シュンマを元気づけるように微笑む。

「アシュマさん……キュポアさん……」

シュンマは感無量となった。

「さあ、行こうか」

アシュマが言う。

格納庫から青龍号に乗り込む。

「はい！」

シュンマが応える。

そう、シュンマ・イーハニア王子が、クーデター政権に挑むのだ。

慌てたのは、ヨナルト・リングである。

アシュマ達が、自分を追いかけて来たものと、思ったからである。

サイコ・フライヤー青龍号に、魔導機兵二万が、ノリトレアとイ

ーハンの国境を越えた。

迎えるはイーハンの魔導機兵、二万二千。

数では互角である。

しかし、こちらには最終兵器、鬼虎を持つ、アシュマ・アトーが居る。

アーチエルへの必死の説得の後、アシュマはその力を行使する許しを得て、ゴンドラの上に乗った。

何故アシュマが、アーチエルへ説得を行ったかと言うと、極端なまでの平和主義であるアーチエルを前に、アシュマのその能力ちからの行使を許されるが為である。

ともすれば、アシュマの能力は、一人で敵戦力を全滅させかねない。
それはアーチエルにしてみれば、オーバーキル以上の何物でもな

い。

アシュマは、イーハンの魔導機兵の前に立ちほだかり、鯉口を切った。

その鯉口から、眩い光りが、漏れ出している。

アシュマは居合い腰に落とし、一気に水平に鬼虎を引き抜いた。無数の光の条が、魔導機兵に向かって行く。

が、その光の条は、艦隊の直前で、弾かれてしまった。

「！」

アシュマは驚いた。

こんな事は、神人がアヘイビアの艦隊を守った時以来だからである。

こんな事が出来るのは他には、マスケドぐらいな物である。
(クロダの六人衆か?)

アシュマは心の中で呟く。

嫌な予感がする。

「アシュマは居るか!?!」

誰かがアシュマの名を呼ぶ。

周りを見回す。

「その声はシシオウか!?!」

アシュマが叫ぶ。

「如何にも」

シシオウが返答する。

クロダの六人衆の半数が此処に来ている。

「俺の攻撃を弾いたのも、お前か!?!」

アシュマの気弾の攻撃のことである。

こんなこと、アシュマの攻撃を弾くことなど誰にも出来る事ではない。

いまではマスケドぐらいなものである。

「如何にも。さあ、アシュマ。いざ戦わん!」

シシオウが吼える。

戦いに生きる男、シシオウ。

アシュマと戦うことでその存在意義を果たせる。

「今は、貴様に構っている暇は無い。次の機会にしてくれ」

アシュマはそれどころではない。

まずは、シュニク・インジャの戦力を削らなければならない。

「何を馬鹿な事を……」

シシオウは戦う気である。

アシュマのその言動を取り合わなかった。

戦う気であるのだ。

『我が飛ぶのは暗雲の空。

戦の女神を犯してもぎ取る。

その背の羽根は既に漆黒。

我が背に添えて我が羽根に。

そして散るかなこのわが身。

禁忌を犯して我が翼となれ。

ウイング!!』

対してアシュマはウイングを唱えた。

一人でどこかへ行こうとする。

「今は一人にしてくれ」

アシュマはシシオウに言い捨てる。

構っている暇等無いのだ。

「どこに行く!? アシュマよ」

シシオウが慌てる。

逃げられては戦えない。

「貴様の念導境界面を抜けて、魔導機兵を落す」

アシュマがやろうとしていることを話す。

話すこと自体に義理はないのだが。

「無駄だな」

シシオウが指摘する。

「何？」

アシユマが振り向いてシシオウを睨む。

無駄だと言われて、はいそうですかと言えるほど人間はできていない。

無視しても良いのだが、事はイーハンの命運にかかわることである。

そう無視もできない。

「念導境界面を張っているのは、我だけではない、と言う事よ」
シシオウが種明かしをする。

アシユマの攻撃を防げる者は他にも居るという事を言っているのだ。

「くっ！」

アシユマは唇を咬む。

これではアシユマは手詰まりだ。

味方が有利に働かない。

それはどういう事を意味するか。

戦力が同等な分だけ無駄な消耗戦をするということだ。

「飛べるのは、アシユマ一人だけか？」

シシオウが訊く。

何の事を言っているのか。

「そうだが？」

アシユマが言う。

アシユマは不思議な気持ちになる。

「ち！ 楽しめるのはシシオウ一人かい！」

キエラが言う。

不服そうだ。

「どついう事だ？」

アシユマが訊く。

未だに何の事を言っているのか分からない。

「つまりは『飛ぶ』事もできない奴を倒しても、なんの称号も得られないって事さ」

これはマスクドの誇りというやつらしい。

強者と戦って勝ちを得ること。

これがマスクドの本懐である。

これが叶わなければマスクドの存在価値がなくなる。

彼らはそう考えている。

戦うことこそが意義なのである。

「貴様らの『趣味』に、付き合うつもりはない」

アシユマはそのマスクドの存在意義そのものを『趣味』と切り捨てた。

確かにアシユマも剣者だ。

強者と戦うことに意義は見出す。

が、それを至上とはしないし、仲間を称号の対象にもされたくない。

アシユマはマスクドの存在意義に疑問を持ったのだ。

「しゅ、『趣味』だと!? 貴様!! 我等の名誉を馬鹿にするかあ!!!」

キエラは馬鹿にされたと思って怒りに我を忘れる。

マスクドの名誉に関しては、マスクドの掟の中にも入っている。

まずそれを第一に考えるのだ。

それを汚された。

『趣味』等と言う俗な言葉で貶められた。

許されざるべきことである。

「下らん!」

なおもアシユマは吐き捨てる。

マスクドの掟に等付き合ってやる義理はないのだ。

大切なことは他にある。

「おのれ! そこへ直れ! くびり殺してやる!」

キエラという女のマスクドはかなりの激情型のようである。

アシユマの言葉に一々反応する。

「さてよ、キエラ。シシオウが居る限り、アシユマはシシオウの獲

物だぜ」

エヴユが言う。

これもマスクドの掟の一つだ。

マスクドは誰かを狙ったらそのマスクドが死なない限り、他のマスクドがその誰かに勝負を挑むことができない。

今は、アシユマという『得物』はシシオウのものだった。

「俺は獲物なのか」

アシユマが言う。

呆れる。

辟易する。

マスクドの勝負は、確かに勝負は勝負なのだが、何処か狩りの意味合いを持っている。

相手にされた者は堪ったものではない。

結局マスクドは相手を下に見ているのだ。

「そうだ」

シシオウが言う。

差も当然の事の如く。

「そんなものは、御免蒙る」

アシユマが断りを入れる。

まさに、そんな『趣味』に付き合ってやる義理はないのだ。

「我と戦え、アシユマ・アトー！！」

シシオウが迫る。

「俺はこれでも忙しい」

アシユマが気だるく言う。

「行くぞ！ いざ！」

「せっかちな奴」

アシユマは素早く納刀し、居合いの形を取った。

対するシシオウも何と、居合いの形を取った。

アシユマとシシオウの眼下では、魔導機兵が戦っていた。予想通り消耗戦の体をなし始めている。

「行くぞ！！」

先に動いたのはシシオウだった。

アシユマは静かに、佇んでいるだけだった。

そして、ゆっくり、ゆっくり動き出す。

だが実際には物凄いスピードだった。

動きが余りにも滑らかだった為、ゆっくりに見えたのである。

先に抜いたのは、シシオウである。

だが、抜いてからの刀速は、アシユマの方が上だった。

アシユマは、その閃光のごとき太刀筋で、何とシシオウの右手首を刎ね斬った。

「くっ！」

シシオウは右手首を押さえ、

「『天餓鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

癒しの言葉を唱えた。

シシオウは千切れた右手が癒された。

不思議な力で繋がれたのである。

「今回は私の負けだ。今回はこのまま帰る」

シシオウは渋面を作りながら言葉を発する。

負けを認めたくないのだ。

負けはマスクドにとって恥である。

恥は死よりも忌むべき事だ。

「シシオウ！ それでは、マスターの命が果たせなくなる！」

エヴユが叫ぶ。

マスターとはシュニク・インジャの事である。

シュニクもアシユマの抹殺なしでは勝ちを得ないということを分かっているらしい。

「我がアシユマに勝てんでは、意味がない」

シシオウが零す。

どうやらクロダの六人衆ではシシオウが一番の遣い手らしい。

そのシシオウが勝てなければ他のマスクドでも勝てないという事になる。

「では、去れ」

アシュマが言う。

「貴様も、去る事になりそうだぞ？」

シシオウが皮肉を浴びせる。

魔導機兵の戦いでは、双方とも消耗戦の体を表していた。
乱戦模様だ。

「これはいかん」

アシュマは青龍号に、立ち戻る。

シシオウのことなど無視だ。

シシオウは黙ってそれを見送った。

右腕をさする。

「我らも帰るとするか」

シシオウが言った。

シュンマは泣く泣くノリトレアに戻り、祖国を奪還する事が、敵わなかった。

シュンマは格納庫の床に座り込み寂しそうに俯いた。

キユポアが隣に座りシュンマを慰めた。

「駄目だ。僕は。用兵の才能がない。せめて兄上か、ルー・ウィロ
ン様位用兵が巧みなら、今頃は本殿本丸を落として、シュニク・イ
ンジャを追い詰められたものを」

シュンマから出る言葉は自分を責める言葉だ。
責任を感じている。

シュニク・インジャを追い詰められなかった事。

多くの将兵を死なせてしまった事。

自国民も悪戯に死に追いやってしまっや事。

すべて自分が悪い。

すべて自分が至らなかったせいだ。

シュンマはすっかり肩を落としてしまった。

キュポアは横でおろおろするばかりだ。

「あれは誰がやっても、消耗戦にしかならんよ」

と、言ったのは、何と噂の人物、ルー・ウィロンだった。

何故かルー・ウィロンがそこに居た。

何故居るのかは分からない。

「ルー・ウィロン……！」

シュンマがルーを見上げる。

ルー・ウィロンは、油くさい青龍号の格納庫で、シュンマとキュポアで、二人で居る所へ、ひょっこりと現れた。

「お、おぬし……」

言葉に詰まったのはキュポアだ。

ルーの出現に驚き、シュンマの対応には狼狽え、自分はどうしてもいいか分からなかった。

「オツと邪魔だったかな？ ま、老人の独り言だ。あれは仮にワシが戦っても、同じ結果にしかならなかったろう」

ルー・ウィロンは無表情に言う。

ただ、そこで言葉を発しているという形を取った。独り言のつもりらしい。

だが、言葉の意味合いはシュンマに向けていた。

「ルー・ウィロン……」

シュンマも言葉を失っていた。

ルー・ウィロンに何と云って言葉を返せばいいのか。

感謝するべきなのか、頭をさげるべきなのか。

どちらか迷っている間に、

「ではな」

と、ルー・ウィロンは手をひらひらとさせ、格納庫から出て行った。

後に残されたのはシュンマとキュポア。

二人は向い合って視線を合わす。
何を話していいのか。

不意にキュポアは視線を外し、
「あー、もう！ わらわがシュンマを慰めて、ポイントを挙げよう
と思ったのに！」

と、怒り始めてしまった。

自分がシュンマに何も言えなかったから余計に腹が立つ。

「いいえ。キュポアさん。あなたが居てくれて良かったです」
シュンマはキュポアを見つめて話す。

キュポアは照れながら、

「す、少しくらいなら、甘えてもいいぞえ」

と、逆に俯いてしまった。

「では、お言葉に甘えて」

シュンマはゆっくりと、キュポアに抱きついた。

柔らかい感触だった。

それはシュンマに安心を与えた。

「それにしても、あの親父、何処から湧いて出たんじゃ？ 一体今
まで何処に……？」

キュポアはそう呟いてみせる。

その呟きはシュンマに聞こえたかどうか。

アルスティーンは、クーロンに、魔導機兵用のステルス技術を提
供した。

技術協力、技術提携、とか言う奴である。

勿論、見返りに、大量生産の暁には、ノリトレアの危機に際して、
無条件に救援に来てくれる事を約束させた。

約束させたとすると語弊があるが、要は、

「危なくなったら、助けに来てね」

と言う、アルスティーンのいつもの言葉である。

アルステインは、茶目つ気を見せてみたのである。
それはアルステインと、リン・シャオリンの仲だから、出来る
芸当でもあった。

勿論、暗にアシマを、一晩自分の褥しとねに呼びつける事も、話し合
われたが、そちらの方の合意は、どうなったかは定かではない。

それから、クーロンの軍需工場はフル稼働だ。
ラインの総取替えも加わって、正にクーロンの軍需工場は、蜂の
巣を突付いた様な騒ぎになった。

この事態を、オロ・エバス軍が聞きつけられない訳が無い。
アルステインはそう認識した。

そこで、アルステインはアベニ・ローを呼んだ。

「若。何で御座るかな？」

ノリトレアの間者と言うよりは、アルステインお付きの間者と
言う色合いが濃いこの老人は、齡二十八歳の青年王を捕まえて『若』
と呼ぶ。

もう、若はないだろうと苦笑を漏らしつつ、

「ああ、爺。オロ・エバス国に行ってくれないかな？」

と、言う。

「それは構わんで御座るが……」
言葉を濁す。

アベニは困った顔をしている。

「『御座るが』？ もう忍びとしては限界か？」

アルステインが揶揄する。

老人なのだ。

そろそろ引退も考える歳でもある。

「誰がそんな事を！ ワシはまだまだ現役ですぞい！」

老人の頑固さか、アベニはムキになって怒る。

そこが老人たる所以なのだと、アルステインは考えた。

また苦笑しながらアルステインは、

「もう、寄る年波には、敵わないんだから」と、諭す。

「何を申す！ 若！」

あくまで老人扱いするアルステインに反発しながらアベニが声音を大きくする。

背の低い老人が怒る姿は何やら可愛い物を感じるが、老人は至って真面目に言っている。

「そろそろ現役を、ムラサキに渡したら？」

アルステインはアベニを呼びつけておいて、からかったりする。実際ムラサキはかなり重宝しているようである。

「何の！ 子娘ごときに後れを取るアベニでは御座いませんぞ？」
そう言うアベニも優秀な間者ではある。

まずなにより、朧霞を使えるところが凄い。

アシュマ以外で使えるのはアベニだけだ。
間者としての能力を倍加してくれる。

身体能力も大したものである。

とても老人とは思われない。

「わかった。わかった。じゃあ、爺に頼むよ。でも、ムラサキは使
うんだろ？」

アルステインが折れた。

これ以上老人をからかっても得るものはないし、第一、話が先に進まない。

「それはそれで御座る」

何故か、ここで老人は開き直る。
訳がわからない。

「では、オロ・エバス国の動向を……」
アルステインはアベニに命を下す。

クーロンの軍需工場を狙って、オロ・エバス国軍と、西方州連合国軍の連合軍……以下これを連合軍と呼ぶ……が侵攻してきた。

先ずは、お得意のミサイル空爆だ。

巡航ミサイルで、ピンポイントに狙いを定めてくる。

その攻撃にレーザーの様な正確さで、反撃をする者が居た。

アシユマである。

アシユマは、これには苦勞をした。

アシユマは、機械では無いのである。

例えば相手が、念導境界面を張る……即ち、念なり気なりを発する者であれば、念じるだけで、アシユマの気弾の攻撃は、当り易いのである。

だが、相手は只のミサイル。

念も気も発しない。

それを狙って、何発も当てるのである。

かなり気が消耗した。

しかし、何故アシユマが居るのか？

それは、アルステインが予め、それを察知していたからである。情報源は、勿論アベニ爺から、もたらされた物であった。

次に来たのは、魔導機兵の大群である。

荷物に爆弾を山と抱えている。

しかし、それを阻止しにノリトレアの部隊がやって来た。

勿論クーロンの魔導機兵もやってくる。

指揮をするのは『あの』ルー・ウィロン。

大群だ。

クーロン・ノリトレア軍は、爆弾を落とされる前に、攻撃を始めた。

連合軍の魔導機兵の動きは、鈍い。

重い爆弾を抱えているからだ。

次々と魔導機兵が落とされて行く。

勿論、爆弾を抱えているので、誘爆が酷い。

連合軍の魔導機兵は、一発も爆弾を落さないまま、帰投して行った。

何故、爆弾を落さなかったのか？

それは、そこが、爆撃ポイントではないからだ。

クーロン・ノリトレア軍は、追い討ちを掛けるべく、帰投して行った軍を追いかけて、敵の艦隊へとたどり着いた。かなりの大艦隊だ。

しかしこちらは大勢力。

連合軍が、反撃の為、魔導機兵を投入して来た。

そこへ到着する、クーロン・ノリトレア統合軍艦隊。

以下これを統合軍と呼ぶ事にする。

乱戦模様になる。

そこへ投入される、アシュマ。

敵の気を察知して、気弾を放とうと言うのだ。

こちらの方が、先程よりも、はるかに楽で良い。

と、行っても、この万を超える敵味方の中から、敵の気だけを察知して攻撃するのだから、その気の消耗と言うものは計り知れない。

ただ、アシュマの場合、気の変わりに、平行宇宙からエネルギーを補給できる。

なので、アシュマは気の補給が容易だ。

主に相手は魔導機兵だ。

アシュマは鬼虎に気を集め始めた。

「アシュマ！ 待たれよ！」

そう言い、そこに現れたのは、ウフェイトウ率いるマスクド、エルファの騎士団である。

アシュマはいつもいいところでマスクドに邪魔をされる。

理屈はある。

鬼虎に気を集める。

それも膨大な量だ。

それは強烈な気配を放つと同じ事だ。

マスクドはそれを察知してやって来るのだ。

「邪魔をするな」

アシュマが睨む。

これを放てないと、味方に被害が及ぶ。

それは時間が経つと共に増大する。

そうなる前に手を打ちたいのだ。

それなのに。

「お主にそれを放たれると、少々厄介な事になるでの」

ウフェイトウはウフェイトウで理屈があるらしい。

マスクドの掟。

マスターの命。

プライド。

勝負。

色々あろう。

「それはそちらの都合。俺は放つぞ？」

アシュマが言い放つ。

そうしないと味方が危ないのは前述の通り。

「放つても良いが、意味は無いぞ？」

ウフェイトウが頬を歪める。

この時点で勝ち誇っているかのような。

少なくとも有利に立っていると思っているようである。

「お前と言い、シシオウと言い、どうしてこう……」

アシュマが呆れて頭を振る。

「ほう？ シシオウか。クロダの六人衆、蘇っていたか」

ウフェイトウは意外な顔をする。

クロダの六人衆とも戦っているとは驚きである。

先に得物を横取りされかねない。

マスクドの集団同士での決まり事はない。

「もう、五人衆だがな」

アシュマが揶揄する。

正直言つてマスクドにはもうウンザリなのである。

「それをやつてのけたのは、貴様か？ アシユマ」

一応ウフェイトウが訊く。

マスクドを倒すということは大変なことなのだ。

彼らにとつては。

「一応、そういう事になるな」

アシユマはしれつとして答える。

マスクドの掟には興味がない。

「他の者はどうした。貴様みたいに飛べないのか？」

ウフェイトウはシシオウと同じ事を訊く。

要は飛ぶ事すら出来ない者を倒しても称号にはならないといつとだ。

「ああ」

アシユマは答えてやる。

これで、マスクドの標的から外れてくれればと思う。

「ああ、情けなや。そんな奴らが我らの敵とは」

サイファイが嘆く。

たかが人間風情と思っているのだろう。

「なあ、ウフェイトウ、アシユマと勝負させてはくれぬか？」

サイファイ直々にウフェイトウに懇願する。

「アシユマは強敵だぞ？ 我とて、手を出せなんだ。お前程度の腕では、アシユマの足元にも及ばん」

ウフェイトウは取り合わない。

どうやらエルファの騎士団の一番の遣い手はウフェイトウということにでもなるうか。

「なんと言つ言い様。それは無かるう？ 頼む。アシユマと手合わせをさせてくれ」

サイファイが頭を下げる。

マスクドが頭をさげるのだ。

只事ではない。

「しかし……」

ウフェイトウが迷う。

マスクドの掟にしたがうならば、アシュマはウフェイトウの得物である。

それを知っていて頭を下げるのである。

「頼む」

サイファイが更に頼み込む。

「死ぬぞ？」

ウフェイトウが念を押す。

「それも本望」

「ならば良からう」

ウフェイトウが許しを与えた。

「兄者！」

何と、ワラシーが叫ぶ。

サイファイとワラシーは兄弟の様だ。

この叫びにはいろんな意味が内包されていよう。

兄妹としての心配もある。

マスクドの掟を破ってまでの兄の行動に異を唱える意味もある。

もしくは自分がアシュマと戦いたいと思っているのかもしれない。

「兄者、それは無からう！ 死ぬかも知れんのだぞ？」

ワラシーは情けない声を上げた。

「怖気づいたか、ワラシー。それもマスクドの本懐と知れ」

兄のサイファイが叱咤する。

「しかし」

ワラシーは後が続かない。

「話し中済まんが、早くしてくれ。俺はこれでも忙しい」

アシュマが、気だるそうに言う。

何度も言うがアシュマはマスクドの『趣味』に付き合う気はないのだ。

「わかった。アシュマ、手合わせ願おう」

サイファイが言う。

そして大小の刀を抜き放った。

それに対してアシュマは、居合いの形を取る。

二人は空中で対峙した。

アシュマは秘剣・流星を使った。

サイファイは、

（これは……）

と、思った。

どう動いても斬られそうだと、思ったのである。

（ウフェイトウが一目置く訳だ）

とも思った。

アシュマは佇んだままだ。

「行くぞ！」

サイファイが、二刀を左右に回しながら、アシュマに襲い掛かってきた。

アシュマは臆しもせずに、前にすべりた。

そして、秘剣・流星の名に恥じぬ、煌く光芒の中で、鞘から刀身が走り、サイファイの腹を存分に薙ぎ斬った。

そして二人は振り向く。

その際に、アシュマは振り向きざま、サイファイの首を斬り落とした。

一瞬の早業だった。

（まさか、アシュマがここまでの腕とは……）

ウフェイトウは内心驚愕した。

連合軍の艦隊が引き上げて行く。

それを見てウフェイトウが言う。

「アシュマ。これでは気が済まん。付き合え。お前の仲間と共に付いて来い」

部下が殺されたのだ。

怒りも覚えよう。

許しては置けない。

「断わる」

アシュマはウフェイトウの要求を呑まなかった。
にべもない。

マスケドの感情に付き合う気もない。

「何だと？」

ウフェイトウの顔が引きつく。

マスケドの理論から言えば在り得ないことだった。

勝負は呑むもの。

戦いは受けるもの。

正々堂々とは勝負する。

得物を横取りされないために。

それが『断る』。

信じられない言葉だった。

「自分の仲間が危険に晒されるのに、そんな目に合わせる馬鹿が何処に居る？」

これがアシュマの答えだった。

マスケドの理論に付き合う義理はないのだ。

しかし、その時、魔導機兵が二機近付いてきた。

『アシュマ！ 付き合っても良いぜ！』

オルバニアンの声だ。

『アシュマ！ アタシも良いわよ！』

こちらはアルミナの声だ。

「お前らには関係ない！ 来るな！！」

アシュマは叫んだ！

折角仲間を危険から遠ざけようとしているのにこれでは意味がなくなるではないか。

『関係なくは無いだろ？』

オルバニアンは、魔導機兵を地上に降ろしながら、拡声器で訴えてきた。

幸いにして艦隊戦は、統合軍艦隊が圧している様だ。
かなり優勢みたいだ。

続いて、アルミナも地上に降りてきた。

「お前らに敵う相手では無いぞ!？」

アシュマは叫びっぱなしだ。

「そんな事やって見なけりや、分かんねえだろう?」

オルバニアンが魔導機兵から降りてきた。

腰には逸鉄を佩びている。

アルミナも続いてきた。

アシュマも仕方なく地上に降りた。

「こんな、空も飛べない奴らに……」

ウシャトウは、しぶしぶオルバニアンらに付き従って、地上に降りてきた。

マスケド達も、それに続く。

「確かあの男は、俺の獲物だったな?」

マスケドのウシャトウが言う。

ウシャトウの獲物はオルバニアンだ。

ウシャトウはエルファの騎士団の団長ウフェイトウの弟だ。

舎弟格なのか、実弟なのかは分からない。

「じゃあ、あの女は私の獲物ね」

マールールと呼ばれる女が言う。

周りにいる者はニヤニヤ薄笑いを浮かべながら、その光景を眺めているばかりである。

「オルバニ……」

アシュマがそう言いかけると、

「アシュマ、貴様の相手はこの俺だ」

ウフェイトウがアシュマの前に立ちはだかる。

「……ウフェイトウ」

アシュマは仕方なく構えをとる。

裏・閃光一刀・崩しの構えだ。

「ほう。その様な構えをとるか」

ウフェイトウが目を見張っていた。

一方オルバニアンと、アルミナも、構えをとって、敵と対峙していた。

「行くぜ。相棒」

「ほいな。相棒」

オルバニアンとアルミナは、お互い呼び合った。

その言葉が呼び水となって、ウシャトウとマールールが飛び出した。

『紛う事なき汝らの』

『紛う事なき汝らの』

『誓いたてたる信条は』

『誓いたてたる信条は』

『天の神に伝わりたもう』

『天の神に伝わりたもう』

『悪鬼に対する天罰の』

『悪鬼に対する天罰の』

『怒りをそこに打ち秘めん』

『怒りをそこに打ち秘めん』

『聖なる光よ剣とならん』

『聖なる光よ剣とならん』

『マジックブレイド！』

『マジックブレイド！』

オルバニアンとアルミナの二人は同時にマジックブレイドを唱えた。

剣が光り輝く。

「マジックブレイドだと？ まさか？」

その呪文にウシャトウは怯んだ。

呪文の威力は知っている様だ。

まさか、こんな奴等が、マジックブレイドを使ってくるなんて、

思ってもみなかつたろう。

飛べもしない奴らに。

そこに隙が出来た。

オルバニアンはその隙を、見逃さなかった。

オルバニアン大得意の、大上段の構えから、一気に刀を振り下ろした。

恐怖から、ウシャトウは剣を、頭上に掲げて防御する。

が、オルバニアンの逸鉄は、ウシャトウの剣を叩き折って尚、ウシャトウの頭蓋を斬り割った。

頭蓋を縦に割り斬られれば、たとえマスクドと言えども、自分を癒す言葉は発せないであろう。

「ウ、ウシャトウ!!」

ウフエイトウとマールールは同時に叫んだ。

まるで、アルミナが存在を忘れたかの様に。

それは、マスクドにとつて、ありえない光景だった。

たった一人の人間が、マスクドを倒したのだ。

そこに油断と隙が出来た。

「隙あり!!」

アルミナが叫ぶ。

その時、一瞬の隙を突いて、アルミナのロンリーストライフが、

マールールの頭蓋を横に斬り割った。

マールールは脳漿のしょうを撒き散らしながら、倒れた。

「マールール!!」

これは、その場を見ていた、他のマスクドの悲鳴だ。

オルバニアンとアルミナは、体力を使い果たして、その場にへたり込んだ。

「ウフエイトウ! コイツは俺に殺らしてくれ!」

「いや、俺だ!」

「じゃあ、この女は俺に殺らしてくれ!」

次々と名乗りを上げるマスクド達。

「そうはせん！」

アシュマが前に立ちはだかる。

「己は、何処を見ている？」

ウフェイトウが、横一文字に斬ってきた。

アシュマはその攻撃を、一寸の見切りで避ける。

ウフェイトウに、隙ができる。

が、アシュマは、それを無視した。

今は、周りのマスクド達に、気を張っていた。

勿論、ウフェイトウに対してでも、ある。

「……仕方ない。者供、今回は我々の完敗だ。退くぞ」

ウフェイトウの言葉である。

マスクドが人間に負けたのである。

屈辱的だがこれ以上の負け方はない。

負けということを嫌というほど思い知らされた。

「ウフェイトウ！」

ナティゲフルが声をあげる。

負けを認めたままでいいのか。

このまま負けたままでいいのか。

引き下がって良いのか。

「団長の命令は、絶対である！」

ウフェイトウが断じる。

声をあげる者が、居なくなった。

「では、また再戦の時まで」

ウフェイトウが再戦を予告する。

「二度と来るな」

アシュマが言う。

嫌なのだ。

アシュマ自体はいい。

いくらでも戦いようはある。

問題なのは仲間が危険に晒されることだ。

「では退散する。者供、行くぞ！」

ウフェイトウが号令をかける。

皆、ウィングを唱えて飛んで去って行く。

「大丈夫か二人とも」

アシュマが二人の方へ近寄る。

「ああ。へろへろだがな」

オルバニアンが、息も絶え絶えに言う。

力を消耗しておかしくないだろう。

マジックブレイドを使ったのだ。

気がだいぶ消耗した筈である。

「待っている。今、気を注入してやる」

アシュマは親指、人差し指、そして中指で形を作ると、淡い光がそこに溜まる。

その気の塊をオルバニアン、アルミナの順に額に注入して行つた。

「無茶な事を」

困つたような顔をしてアシュマは二人に言う。

「……だが……良くやつた」

アシュマが続けて言った。

流石にアーチェーるのように頭はさすらなかった、が気分としてはそんなところだった。

「へへへへへへ」

二人はにんまりする。

マスケドに勝った事が余程嬉しかったのだろう。

これでは中身はマスケドと同じような考え方だな。

アシュマは苦笑しながら、

「さあ。帰ろう」

と、促した。

「ああ」

「うん」

オルバニアンとアルミナはにっこり微笑んで立ち上がった。

統合軍艦隊は、連合軍艦隊の追撃に、入っている様だ。
三人は青龍号に帰って行った。

今回の対戦は、統合軍が、連合軍に大勝した。
と、言う事は（当たり前だが）連合軍が、統合軍に大敗北を喫した事になる。

オロの館では、ドートネーゼが、膝詰め談判で、オロに話を聞きに来た。

「オロ殿。今回の戦はどうした事かな？」

ドートネーゼ、最高評議会委員の一人が詰め寄る。
明らかに批判をしてきている。

「『どうした』とは？」

オロが受け流す。

一々聞いていられないのである。

「我が軍の、大敗の事である」

「責任は、誰が取るのかな？」

「それよりも、この大敗の原因は何なのだ？」

委員たちが矢継ぎ早に訊く。

誰が誰だか分らない。

皆頭からフードを被っている。

個性のない連中である。

これで、ドートネーゼと言う組織の頂点に君臨しているのだから
驚く。

「わかった、わかった。全て私が悪いのだろうか？　そう言いたければ、そう言え」

オロが辟易して言う。

一勝一敗に一々一喜一憂してられない。

「いや、そうは言っておらぬ」

何が言いたいのか。

意見がはっきりしない。

「次に勝つには、どうしたらよいのかを、訊いておる」

要は勝ちたいのだ。

負けは認められない。

そう言う事か。

「そうか。それには、アルステインと、ルー・ウィロンが、死ぬ事が大前提だな」

オロは冗談のつもりで、そう言った。

今までは、特にアルステインには幾度も邪魔な想いをした。

その彼を除くために戦争も仕掛けた。

「そうか。なら、マスクドに、そう命令するが良い。必ずやその二名を、倒してくるであろう」

ドートネーゼ、最高評議会の一人が言う。

「そうか。そういう手もあったか」

オロは感心して言う。

そう言えば以前にマスクドのザザにも命を下したこともあった。

その手を使えばよかったのだ。

「まあ、それはそれとして、今回ののは小手調べ。大体の実力はわかった」

オロは続けて言う。

次は勝つと言いたいのだろう。

「なんと、そう言うか」

最高評議会のうちの一人が喜ぶ。

ドートネーゼとしては敵対する勢力は早く一掃して人類を滅亡に導きイムフレールの復活を成し遂げたいところだ。

「ああ。言った。早く艦隊を再建して、魔導機兵を補充しなければな」

オロは気だるそうに言った。

一々この得体の知れぬ者達に付き合っている暇はないのだ。

と、言うことは、オロはオロで何か目的があって世界を平らげよ

うとしているのか。

その目的とは一体？

「よし。我らも力を貸そうぞ。はよう、世界を平らげてくれ」
最高評議会が喜々とする。

「分かった。安心せよ」

「ノリトレアに出向いて、アルスティーンとルー・ウィロンを暗殺してくるのだ」

オロはウフェイトウにそう言った。

周りにドートネーゼ最高評議会委員は居ない。
だが、ウフェイトウは、あまり乗り気でない。
顔を俯ける。

「どうした？ ウフェイトウ」

オロは、乗り気に見えない理由を、訊こうとする。
マスクドはマスターの命令に絶対な筈だ。
それ自体がマスクドの掟だからだ。

「アシュマです。マイマスター。」

ウフェイトウが重々しく口を開く。

「アシュマ？ アシュマがどうかしたのか？」

オロが不思議な顔をする。

「アシュマが強いのです」

ウフェイトウはマスクドにあるまじき事を言った。

強者と戦ってこそそのマスクド。

ウフェイトウがそのマスクドの存在意義に反することを言った。

「そんな事は当たり前だ。甘ったれた事を言うな」

オロが吐き捨てる。

アシュマが強いのはオロも知っている。

今さら何を言うのか。

アシュマに対してこそそのマスク度として蘇らせたのだ。

そんな事では困る。

「そう言いつつもりはありませんが、アシュマは強い。強すぎます。奴は最強の部類に入るでしょう」

明らかにウフェイトウは怯えている。

周りに部下が居ないから良いようなものの、マスクドとしては最低なことを言っている。

「そんな事も分かっていて。だが、それを倒してこそそのマスクドではなかったのか？」

オロがマスクドの存在意義を説いてみせる。

少しはマスクドの有り様というものを学習しているようである。

「申し訳なく思っております」

ウフェイトウが頭を垂れる。

「何とかならんか」

オロが冷たく言い放つ。

オロはこういうところには情を掛けない。

アシュマと刺し違えて死んでもいいと考える。

それだけで大した利益になるとも考えている。

邪魔な者、アシュマ・アトー。

彼奴さえ居なければ。

「マイ・マスター。私はアシュマと戦って見て、アシュマは並々ならぬ相手と見ました」

明らかに怯えている。

負けを考えている。

「少し、甘いのではないのか？ ウフェイトウ」

オロはウフェイトウのその甘さを指摘した。

聞いていて虫酸が走る。

甘ったれた男は大嫌いだ。

仕事をろくにもしない。

そんな男はクビにしたいぐらいだ。

が、それもできないところに歯がゆさを感じる。

「そうかもしれませぬ。アシュマを倒す為には、全員で掛からなければ、駄目かもしれませぬ」

アシュマを倒すにはマスクドの掟をかなぐり捨てなければならぬい。

ウフエイトウはそういうことを言った。

「今頃、そんな事を言っているのか？　だから甘いといっているのだ！」

オロは怒った。

その勢いで席を立つ。

「いざとなれば、マイ・マスター。艦隊と別行動を取らなければならぬかもしれませぬ」

まだそんな事を言っている。

オロはその言葉を訊いて腹が立った。

アシュマを倒すには手段を選ぶと言っている。

それがまだ分かっていない。

「当たり前だ。アシュマを何とかしなければ、我々の勝利は無い。全く手ぬるい」

アルステインの執務室。

シュンマがアルステインの前に居る。

少しそわそわしている。

アルステインは執務室の椅子に座っている。

「兄上、そろそろ祖国の民の事が気になります。シュニクが国民を苦しめているかと思うと……」

シュンマが、アルステインに相談を持ちかけた。

焦りが見える。

以前は引き分けた。

が、それではいけない。

国をシュニクから開放できない。

勝たねばならぬのだ。

「焦るな……と、言う方が無理ですかね。確かにそろそろ、シユニクやヨナルトを討伐しないといけませんね」

アルステインも考えこむ。

ノリトレア王国にとってイーハン国は喉元に刺さった魚の小骨。

小さくとも取るのに厄介だ。

しかも痛い。

何とかする必要はあった。

「兄上！ それでは……」

シユンマが喜色を見せる。

今度こそ国をシユニクから開放できる。

「うむ。兵を出しましょう。今回はクーロンの艦隊も手伝ってくれ
るであろうから、以前よりは、楽な戦いが出るでしょう。それに
今回は、あの親父が出張ってくるであろうから、頭を悩ます事は無
いと思いますよ？」

アルステインは、くつくつと笑いを抑える。

「あの親父？」

シユンマが頭を捻る。

誰のことだろう。

「ルー・ウィロンですよ」

「ああ……」

ルー・ウィロンもアルステインに掛かれば親父扱いになるらしい。

「はつくしよいー！」

ルー・ウィロンはくしゃみをした。
端をすする。

「どうしたい？ オツちゃん」

オルバニアンだ。

城内の一室。

オルバニアンやアルミナと一緒に、ルー・ウィロンとサケを飲み交わしていた。

「大丈夫？ ルーさん」

アルミナがルー・ウィロンに訊いた。

「うゝむ。また、誰かが噂をしている様な……」

再びアルステインの執務室。

「でも作戦は練らないと、いけないかも知れないですね」
アルステインが言う。

そしてアルステインの灰色の脳細胞が働き始めた

「そうですね。前は正面から行き過ぎました。アシュマ様にも、頼りにすぎっていました」

シュンマが反省する。

確かにアシュマに頼りすぎると前回みたいにマスクドに出張られたら酷い目に遭う。

それは分かった。

「成程。今回は大丈夫だと思いますよ。用兵の天才ですからね。ルー・ウィロンは」

アルステインが返事を返す。

アルステインの楽天かぶりが現れた。

「何が『今回は大丈夫』だ。アルステイン」

扉が開いて現れたのは、ルー・ウィロンだ。

ルー・ウィロンにかかるアルステインも呼び捨てにされる。
犬猿の仲なのだ。

二人は。

「げ！ ルーのオツちゃん」

思わずアルステインが漏らす。
拙いという顔をする。

「何が、『げ!』だ。何が。やっぱりワシの噂をしておったか!
このペテン師め!」

扉から玉座までの赤いカーペットの上を歩きながらアルステインをなじる。

ルー・ウィロンは王をペテン師扱いだ。

實際人を煙にまくペテン師だと思っている。

「やだなあ。ペテン師だなんて」

アルステインが手を後ろ頭に持って行って照れる。

誰も褒めていない。

「で、何の話をしている?」

ルーが訊く。

ただの話ではないと思った。

シユンマ王子と王、アルステインが話しあっているのである。

「イーハンを、攻略する話ですね」

だが、アルステインは軽く話す。

「イーハンか。うむ。正面から行っては行かん。何とか各個撃破に持ち込まないと。あれを持ち出すか」

ルー・ウィロンが何かをぶつぶつ喋る。

「『あれ』?」

シユンマが頭を捻る。

「そう。あれで敵を四つに分断する。アシユマ殿が居れば、尚更なのじゃが、敵のマスクドがどう動くかわからんからの。あまり当てには出来ん」

前回はそれで敵と混戦に持ち込まれた。

ぜんてつ前轍を踏む訳にはいかない。

「そうですね」

アルステインが頷く。

「では、早速動く事にしましょう。『陛下』」

皮肉を込めてルー・ウィロンが行こうとする。

それをアルステインが、

「あ、難しい注文だけれど、なるべく敵の艦は落さないで。敵の旗艦だけを狙って。イーハンの艦隊は丸々こちらの陣営に組み込みたいから」

と、注文をつける。

「出来る限り頑張ってみましょう？」

ルーはこれまた皮肉たつぷりに言ってみせる。

そして、クーロン、ノリトレア統合軍艦隊が出撃して行く。

空中要塞、イボラス、ビニラ、ビムラーの三要塞を引き連れて。

元はイーハンの要塞だった物だ。

それが、イーハンの攻略をするとは、皮肉なものだ。

ルー・ウィロンが言った『あれ』とはこれの事らしい。

その空中要塞だが、改修工事が行われていた。

脚の遅さを改良した。

今まで余りにも遅すぎたのは、ある意味致命的になる事もあった。しかし脚を速くしたといっても、艦隊に付いて行くだけの速さは無い。

艦隊の方が要塞の方に脚を合わせた。

イーハンの警戒ラインに、手が届く距離になってきた。

艦隊の隊形を整える。

統合軍艦隊の最前線に要塞を並べて、統合軍艦隊自体は、錐の隊形を取った。

イーハンは、横一文字の隊形を取った。

どうやら、真ん中に、イーハン艦隊の旗艦が、居る物と思われる。艦隊双方、隊形を整えて、いよいよ戦端が開かれる。

イーハン艦隊が、先ず一斉に魔導砲を放った。

だがそのエネルギーの束はその艦隊の前で電光に変換され、ある

一点に向かつて集まって行つた。

その一点には、アシュマが居た。

そして、その事の事実が、ある者達の指標となった。

ある者達とは、マスクド、クロダの六人衆である。

アシュマを見つけ、クロダの六人衆がそこに集まる。

アシュマの前に、彼らが集まつた。

「クロダの六人衆か」

アシュマが呟く。

うんざりだ。

「また会つたな」

クロダの六人衆頭目のシシオウが言う。

嬉しそうだ。

「俺は、会いたく無かつたがな」

アシュマが応える。

「ではやるか」

シシオウが直刀を抜く。

やる気のようにだ。

「御免蒙る」

それをアシュマはにべもなく拒否をする。

「何だと？ 怖気づいたか？」

相手が戦わない気なら、それを倒してもなんの称号も得られない。

それでは困るのだ。

「何故、我らは戦わねばならん？」

アシュマは事の根本をついてきた。

マスクドにとっては存在意義の根本を考えさせられることになる。

「今更何を言う！ オクナフを殺された！ 奴の仇を取らねばなら

ん！」

シシオウはそこに理屈を持ってきた。

マスクドの根本理念は置いてきて。

「それはそちらの勝手。俺は身を守つたに過ぎん」

アシユマはそう言った。

「男らしく無い奴。さあ、我と戦え！」

アシユマの言い様にシシオウが怒る。

マスケド云々の話ではない。

男としてらしくないと思ったのである。

「……仕方ない……」

アシユマは鬼虎を抜き、右手にだらりと下げて、シシオウに対峙した。

地擦りの構えとも言つ。

シシオウは肩に担ぐ様な八双崩しの構えをとった。

シシオウはアシユマの構えを見ても、侮る様な態度は取らなかった。

それは、今のアシユマが最も肉体の緊張が解かれた状態の自然体で、そこから繰り出させる技は、鋭い一撃を秘めていると判断したからだ。

「どうした？ シシオウ？ 敵は隙だらけだぞ？ 何故斬り付けない？」

ナイシーと言うマスケドが言った。

アシユマのことを全く理解していない。

（何を言うか。これが、奴の誘いだと、何故分からん？）

シシオウはその様に考えていた。

だが、傍から見れば、全くの隙だらけに見えた。

「来ないのか？ ならばこちらから行くぞ？」

アシユマはそう言った。

同時にシシオウはその言葉に緊張を覚えた。

アシユマは一瞬の内に、生死の間仕切りを切って迫ってきた。

そしてアシユマの右手一本による、鬼虎の下からの攻撃は鋭く、軌跡が光芒となって現れた。

シシオウは直刀の二刀を以ってして、^{はさみ}鋏の様に交差させ、アシユマの攻撃を防いだ。

「二刀と言うのは便利な物だな」

アシュマは、シシオウを揶揄した。

「おのれ！ 愚弄するか！」

シシオウは片方の直刀で、鬼虎を抑えながら、もう片方の直刀でアシュマを襲ってきた。

アシュマは鬼虎を引き抜くと同時に、その刀を弾き、シシオウは空いた直刀でアシュマの下半身を襲った。

弾いた鬼虎で、アシュマは下半身を襲ってきた直刀を、更に弾く。シシオウは、二刀で攻撃し始めた。

無言で。

アシュマも無言で、直刀を裁き始めた。

「シシオウ。調子良いじゃねーか！」

アジャオと呼ばれるマスクドが言う。

だが、何故かシシオウには、余裕が無かった。

彼は考えていた。

この連携攻撃が終わると同時に、アシュマは動き出す。

その隙を見逃さずに。

だから、シシオウは恐怖に駆られながら、攻撃を繰り返していた。アシュマは余裕で、攻撃を凌いでいる様にも見える。

それがシシオウを焦らせた。

実際のアシュマはどうだったか。

アシュマも苦しかった。

いつかできる隙を見逃すまいと、必死に食らいつきながら、シシオウの獅子奮迅の攻撃をかわしていた。

余裕等無かったのだ。

この状態では秘剣・流星どころか、他の秘剣も使えなかった。その余裕も無かった。

シシオウは息が切れた。

ずっと無酸素運動で、動き続けてきたのである。

一瞬ではあるが呼吸をした。

アシユマは、その隙を、見逃さなかった。

呼吸で、シシオウの動きに、一瞬の遅滞が起こったのである。

アシユマはなるべく小さく、素早く、鬼虎で斬りつけた。

剣速を上げる為である。

その結果、シシオウの肩口を打ち据えた。

今度は、アシユマの攻撃の番である。

滑らかで、遅滞の無い、舞う様な攻撃だ。

マスクドの誰もが、シシオウの敗北を感じた。

その時である。

キエラと呼ばれる女性のマスクドが、横合いから割って入った。

武器は鞭である。

アシユマはその鞭を、無意識の内に弾いていた。

次に割って入ったのは、アジャオである。

槍でアシユマを襲ってきた。

アシユマはやはり、それを弾いていた。

「皆、やめよ！ これは、マスクドの掟に則った、正式な試合である！ 割って入るでない！」

シシオウが皆を叱る。

皆の動きが止まる。

アシユマも事の次第を見守っている。

「シシオウ……」

アジャオが呟く。

「今回は我の負けだ。潔く去ろう」

シシオウが言う。

「そんな事はどうでもいい。二度と来るな」

アシユマが言い放つ。

「また会おう」

シシオウはそっくり残して、後を去った。

アシユマの居なくなつた、統合軍の艦隊はどうなつたか。
イーハン艦隊は皮肉にもノリトレアに接收されたイボラス、ビニ
ラ、ビムラーに艦隊を四分割される。

イーハンの艦隊旗艦は、ノリトレアの艦隊が取り巻いていた。
イーハン艦隊は戦意を失つて降伏をした。

これで、このまま本国が降伏すれば、この艦隊は温存されたまま、
クーロン、ノリトレア統合軍に組み入れられる可能性が出てくる。

そしてアシユマは、一旦青龍号に戻る。

イーハンの、政治の府を、攻め落とす為だ。

今回アシユマは陽動に回る。

シュンマ等本隊は『脱出路』からシュニク、ヨナルト両名に迫る。
その『脱出路』はシュンマがよく知っている。

先ず先ず青龍号が『脱出路』の『脱出口』に降り、シュンマ達を
吐き出す。

「皆さん！ 行きます！」

シュンマは、気合を入れた。

少し気負っている。

「あんまり気合入れすぎて、ポカするなよ？」

オルバニアンが、からかい半分で言う。

本音はシュンマのことを心配しているのだ。
なにせ義弟なのだから。

「そうですね。皆さん、リラックスして、行きましょう」

シュンマが、その態度を豹変させる。

「どっちなんだよ？ おい」

オルバニアンが聞いてくる。

意外と冷静らしいと判断する。

「じゃあ、気合半分、リラックス半分で」
シュンマがにこりと微笑む。

「おいおい……」

結局苦笑したのは、オルバニアンの方だった。

そしてその後、青龍号は、アシユマを政治の府の前に降ろす。
アシユマは陽動なのだ。

「アシユマさま。お気を付けて……」

アーチエルが両手をあわせて祈るようにアシユマに声を掛ける。
アシユマは危険な危険な陽動の任務に当たる。

攻撃が集中する。

「分かった」

アシユマが優しく返す。

「ん」

別れ際にアーチエルが、アシユマに軽くキスをしてくる。

口を解いて、

「大丈夫。死にはしない」

アシユマが言う。

「はい。でも……」

アーチエルは何か言いたげだ。

「分かっている。無駄な血は、なるべく出さない様にしよう」

アシユマはアーチエルの事を分かっている。

博愛主義のアーチエルの言いたい事はそれだった。

勿論アシユマのことを愛しているし心配もしている。

だからこそアシユマに無駄な血を流させたくないのである。

「済みません。我僂ばかり言いました。有難う御座います」

アーチエルが頭を下げる。

「いや。では行って来る」

「ご自愛を」

またアーチエルがキスをして、アシユマは出て行く。

そしてアシユマは、政治の府の前に降り立った。

そして雄叫びを上げる。

周りからは、ばらばらと兵士達が集まってくる。

アシュマは鬼虎を引き抜いて、峰に反した。

「さあ！ 来い！」

アシュマは叫んだ。

その頃、施政府の執務室では、ヨナルト・リングとシュニク・インジャが居た。

そして、その前に居たのは、クロダの六人衆だった。

「アシュマが出張ってきた。もう駄目かも知れん」

そう言ったのは、ヨナルトである。

顔は蒼白である。

「何を言う。ここにはマスクド共が居るではないか！ …… シシオウ！ お前達がアシュマを生かしておくから、こんな事になる！！ お前達はここを死守するのだ。いいな！？ ワシらはここを脱出する」

マスクド達に向かって非情な事を言うのはシュニクだ。

マスターの命は絶対である。

逆らえない。

「お言葉ですがマスター。あのアシュマと言う男……一筋縄ではいきません」

その言葉を言ったのは、ナイシーだった。

シシオウが目で制す。

「そんな事は分かっておる！ だが、お前らは、マスクドだろう？

アシュマを倒して来い」

シュニクがなお命を下す。

シシオウが目で部下を制し出陣しようとする。

「いや、我等もここまでだ。私はここで腹を斬る」

ヨナルトは、そう言い放った。

シシオウが振り返る。

「何を言いだす！？　どうかしてしまったのか！？」

シュニクは驚きうろたえる。

「シュニクよ。お前は逃げるがよい。私はここで果てる」

ヨナルトは観念したらしい。

その場に胡坐を掻いて座ってしまった。

「分かった。ヨナルト。好きにするが良い。ワシは逃げてみせようぞ。これが、今生の別れぞ」

シュニクがヨナルトに言う。

感無量になる。

「うむ」

ヨナルトが頷く。

「マイ・マスター、シュニク。我らはヨナルト氏の気概に触れ、得る物がありました。我ら、もう一度アシュマと戦ってみせましょうぞ」

シシオウが言う。

闘志に火がついたようだ。

「そうか。頼むぞ」

シュニクが言う。

「シシオウよ頼みたい事がある」

ヨナルトがシシオウに言う。

死に際に際して何を頼むのか。

「何ですか？　ヨナルト殿」

シシオウが歩み寄る。

「介錯を頼みたい」

これだった。

介錯を頼む。

「！　……拙者で良ければ」

シシオウが驚く。

これはヨナルトがアシュマに討たれるというのではなく、自ら腹

を斬るということだ。

「シシオウ殿しかおらぬ」

ヨナルトが頭を下げる。

「嗚呼、この時を以って、なんと云う誉かな。分かりました。介錯
仕ります」

シシオウは感銘を受けた。

名誉なことだった。

「では頼む」

ヨナルトが改めて頭を下げる。

「は」

シシオウは短く応えて、直刀を抜く。

ヨナルトは腹を開く。

短刀を持ち、ヨナルトは、腹に短刀を突き立てた。

「まだまだ……！！」

ヨナルトは腹を短刀で、右に掻っ斬って行く。

シシオウがそれを眺める。

「ま、まだまだ……」

ヨナルトは耐えている。

「お、お願い申す……」

ヨナルトは呻いた……。

間髪いれず、シシオウが直刀を振り下ろした。

ヨナルトの首は、皮一枚で繋がっており、ヨナルトの腕が抱え込む様に、頭が垂れた。

シユンマ達は、『脱出路』を順調に逆走していた。

途中、散発的に敵に遭遇する物の、その時は、オルバニアンのバルカン砲が火を噴いた。

勿論脚を狙ってである。

『脱出路』の『入り口』に、シユンマ達が出た。

それは丁度、シュニクが脱出する、寸前だった。

部屋は、前面がガラス張りの、割と開けた造りだった。

「シュニク！」

シュンマが叫ぶ。

「シュンマ！ この様な時に限って！ マスケット達よ！ 今だ！
今こそ戦う時だ！」

シュニクが命を下す。

マスケット達が展開する。

勢ぞろいだ。

「確かシュンマと言ったわね？ あなたの相手はこのアタシ」

そう言ったのは、キエラと呼ばれる女性のマスケットだ。

男勝りなこの助成のマスケットはシュンマのことが痛く気に入って
いたようだった。

そして鞭を持って、シュンマに対峙した。

「シュンマ！」

オルバニアンが叫ぶ。

「おっと。お前の相手はこの俺だ。忘れたとは言わせないぜ」

エヴユが、鎖鎌の分銅を振り回しながら、にやつく。

「女。お前の相手はこの俺だ。覚えているだろうな？」

アジャオは先程の槍を持ってアルミナに対峙した。

それに対してアルミナは、

「アタシもこないだは、消化不良だったんだ。決着を付けるぞ？」

そう言った。

「そうか。そうであっただか。一人に付き一人のマスケットが着いて
いるって訳だか」

ガンロクが言った。

「そういう訳だ」

ナイシーが鉤爪を持って言う。

マスケットの掟だった。

「シュニクが逃げますよ！」

レンヌが言う。

「俺達で奴を追うんだ！」

ジークフリートが叫ぶ。

「おう！」

ビツシュが受ける。

三人はシュニクを追った。

シシオウは手を出さなかった。

アシュマが居なかったからである。

シシオウは腕を組んで、動静を見守った。

オルバニアンは、エヴユと対峙していた。

オルバニアンの鞘の内には、逸鉄があった。

かつて、アシュマとイツテツが、打った逸品だ。

オルバニアンは、柄に軽く手を置き腰を落とし、居合いの構えをとった。

エヴユは分銅を回し続けている。

（こ奴は、上段の構えが得意だったな。と言う事は、刀を抜ききつても、攻撃する手段があるという事だな？）

エヴユは回していた分銅を、オルバニアンに投げつけた。

オルバニアンは、それを避ける。

（に、しても居合いとは、鎖鎌にとって相性が悪かるうに）

エヴユは、分銅を投げ続ける。

オルバニアンは、避け続ける。

確かに相性は悪かった。

居合いと鎖鎌。

いわば静と動。

一度刀を抜けば、居合いはその効力を失う。

それを防ぐには、一刀目で相手を屠^{ほふ}るか、連続技を繋げて、動き回るかしかないのである。

オルバニアンは、何を思っているのか。

オルバニアンは、何かをぶつぶつ呟いていた。

エヴユが分銅を引き寄せる。

エヴユは右手に持った鎌に意識が行っていなかった。

分銅で相手を叩く事にしか意識が行っていなかったのである。

オルバニアンは巧みに分銅を避け続ける。

エヴユは段々と苛々とし始めていた。

正常な判断力を失いつつあった。

この若造が、と言う想いが、そうさせていたのである。

エヴユは分銅を、思いつきり引いた。

その時、オルバニアンは、突然飛び出した。

一気に間合いを詰めて、逸鉄を引き抜いた。

その時に、

『マジックブレイド！』

と、叫んだ。

オルバニアンは首を狙ったが、エヴユが咄嗟に引いた鎖鎌の鎖で狙いはそれで、鎖は千切れて、切っ先はエヴユの胸の表皮を斜めに斬り裂いた。

「く、くそ……だ、駄目だったか……」

オルバニアンは、がっくり、膝を付き力尽きた。

「このガキ……くそ！ 危ねえじゃねえか！ 今の内にとどめを……」

……

アルミナは、少しやりにくそうだった。

相手は、間合いのある槍。

アルミナは大剣を持つが故、動作が大きい。

それを、遠間から素早い突きで攻撃してくる槍は、大剣の天敵といえた。

アルミナは、右目の眼帯をむしりとり、八双に剣を立てた。

そして何かを、ぶつぶつと唱え始めた。
アジャオは、何かの気味悪さを覚えて、槍で突いて牽制をし始めた。

そこは戦利眼を持つアルミナである。
軽く槍をかわす。

アルミナの動きが止まった。

何かを、覚悟した様にも見える。

アルミナは俄かに剣を振り下ろし、

『マジックブレイド!!』

と、唱えた。

「！」

アジャオは、体を開いて剣をかわし、そして槍を突き上げた。

アルミナも、それは予想していたらしく、槍を叩き斬る。

が……。

アルミナは力尽きた様に、うずくまる。

「う……」

アルミナが呻く。

「マジックブレイドか……あれは気を大量に使うからな。今の内に殺しておくか」

アジャオが槍の穂先をアルミナにつける。

ガンロクとナイシーが、激しく斬り結んでいた。

お互い、二つの武器で、戦い続けていた。

一瞬の隙を突いて、ガンロクがナイシーを、袈裟に斬りつける。
が、ガンロクの鉋は、ナイシーを傷つける事は、出来なかった。

「ちいいっ！」

ガンロクが悪態をついた。

「くくく。念導境界面で、差がついたな」

互いに互角に見えても、傷は、明らかに、ガンロクの方に増えて

行った。

そしてシュンマである。

シュンマの相手キエラは、鞭で以ってシュンマを甚振る様に、攻撃していた。

「アンタ、可愛いわねえ。どう？ もう一度言っわ。アタシの愛人にならない？ それなら、アンタの命を救ってあげてもいいわ？」

キエラがシュンマを誘う。

「済みません。重ねて言います。僕の愛する人は、一人と決めていますので」

シュンマも言う。

「別に愛なんて無くてもいいのよ？」

「御免蒙ります」

「あら、そう！」

キエラの鞭が、レンヌの顔を襲う。

可愛さ余って憎さ百倍。

思わず鞭の先が行ったのだろう。

「危ないですね。止めて下さい」

シュンマが睨む。

「あら、御免なさい？ 貴方が言う事を聞かないものだから、つい顔に鞭が行ってしまったみたい」

「そうですか」

そう言って、シュンマは呪文を唱え始めた。

『我は禁忌を見た者、犯したもの。』

我が憎しみは、汝の快樂。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール！！」

「！！」

キエラが、今の今まで居た所に、黒い塊が現れた。

「なんて恐ろしい子。危ない事を」

キエラが再び鞭を振るう。

「くっ！」

シュンマが窮地に陥る。

皆、窮地に陥った。

万事休すかと思われたその時に、空から、窓ガラスを割って、飛び込んできた者がいた。

皆が視線を、そちらに持つて行くと、アシュマが居た。

アシュマはその場を一瞥しただけで、状況が分かった。

「俺の仲間に、何をするかあっ！！」

アシュマが一喝した！！

窓ガラスが悉く割れて、カーテンが千切れた。

「アシュマよ！ 来たか！ 我との勝負をつけるか？」

シシオウが初めて前に出る。

直刀の二刀を抜く。

「今の俺は機嫌が悪い。死ぬぞ。良いのか？」

アシュマも闘志を見せる。

マスケドの理論とは少し違うようだ。

仲間の危機。

これを救おうとしているようにも見える。

元来はこういう男ではなかった。

自分さえ良ければ良かった。

それを変えたのはアーチエルである。

愛する女の博愛主義が少し伝染ったのである。

「行かねばなるまい？ 会ってしまったのだから」

シシオウは両手を広げた構えを、アシユマは居合いの構えをとっていた。

アシユマがいつに無い圧力を、シシオウに掛けていた。

シシオウはその圧力に耐え切れず、アシユマに突っ込んで行った。

その時何かが煌いて、吹っ飛んだ物があった。

吹っ飛んだのはシシオウの腕だった。

煌いたのはアシユマの鬼虎である。

「次は無いぞ？」

アシユマが凄んで言った。

並の男の脅しではない。

数々の修羅場をくぐり抜けたアシユマの言葉である。

重みが違った。

「うつ……！！」

シシオウが言葉をなくす。

「仲間を引き連れて帰れ！！」

今まで優勢だったのである。

それを帰れ等とは、リーダーとしては、言えない事だった。

「言えぬか？　ならば皆、斬って棄てるまで。それでも良いか！？」

マスケド達がアシユマの剣幕に圧されて何も出来ないで居た。

「三度は言わぬぞ？　帰れ！！」

帰る所等、何処にも無かった。

ここがクロダの六人衆の本拠地だったからである。

しかし、

「……皆の者。退散するぞ」

そう、言わざるを得なかった。

シシオウが、斬り飛ばされた自分の腕を拾って、皆を促す。

他の者も、アシユマに気圧されて、その場を立ち去る。

「皆、大丈夫か？」

見ると、オルバニアンとアルミナの消耗が、激しい。

「また、お前らか」

アシュマは呆れ顔だがどこか優しい。

オルバニアンとアルミナに気を注入すると、レンヌ、ジーク、そしてビツシュが居ない事に気が付く。

「レンヌは？」

アシュマが誰とも無く訊いた。

「いま、レンヌさん達はシュニクを追っています」と、シュンマが言う。

「そうか。ならば、俺はそれを追う」

アシュマが言い置く。

「アシュマ、俺達も行くぜ……」

オルバニアンが立ち上がる。

疲労し切っているのに大したものだ。

「よせ。無茶をするな。シュンマ。どの道を行けば良い？」

アシュマがオルバニアンとシュンマに言葉をかける。

「あそこの暖炉の中です」

シュンマが指さす。

「そうか。分かった」

アシュマは鬼虎を一旦納刀する。

『我が飛ぶのは暗雲の空。』

戦の女神を犯してもぎ取る。

その背の羽根は既に漆黒。

我が背に添えて我が羽根に。

そして散るかなこのわが身。

禁忌を犯して我が翼となれ。

ウイング……！』

アシュマは魔法ウイングを唱え、暖炉の穴から通路を進んだ。

レンヌの気を追い、右へ左へ。

そして『出口』へと、たどり着いた。

そこにはレンヌ達が居た。

だが、そこでは戦闘は、行われていなかった。

「どうした？ 逃げられたのか？」

アシュマはレンヌに訊く。

「サイコ・フライヤーが隠してあった」

代わりにジークフリートが答える。

「そうか」

アシュマも短く応える。

「よし。帰ろう」

「え？ しかし……」

レンヌが言い淀む。

「言いたい事は分かる。が、落ち着いて考える事もたまには必要だ」

「……はい」

レンヌは何か釈然としない様だ。

全員が、無事に青龍号に、戻ってきた。

アーチエルが、

「本当によくもまあ、戻っていらっしやいました。善き事です。ア

ーチエルは嬉しゅう御座います」

皆に言った。

シュンマが第一声で、アーチエルに、

「間接的にはありますが、ヨナルトを討ち果たすしか仕方がありませんでした」

そう釈明。

「分かっております。お気になさらずに」

と、アーチエルが言い、レンヌが、

「シュニクには逃げられてしまいました」

そう言うつと、

「それも仕方ありません」

そう言った。

アーチエルは二人に寛容で、ただただ皆の帰還と無事を喜んだ。

それを見ていて、キュポアとリイナは多少悋気を覚えた。
が、嬉しい事には、変わり無い。
すぐさまそれぞれ腕を組んで、話を始めた。

第五節 混戦

シユンマはすぐさま即位し、亡くなった父王の代わりに、政権をシユニク・インジャから奪還した。

シユンマは王となった。

シユンマは国家体制を改めるべく、識者を集めて会議を連日の様にした。

その時に先ず、シユンマが行った事は、ノリトレアとの同盟だった。

アシュマは国勢が一段楽したと見たのか、オルバニアン、アルミナ、ジークフリート、ガンロク、レンヌ、ビツシュ、そしてシユンマ王に禁呪ウイングとブースト、マジックブレイドを教えた。

ただ、シユンマに関しては問題が幾つか。

その一、シユンマは王になり、前線で戦う事に差し障りがある事。その二、差し障りがあるにも拘らず、実は既に、ブーストとウイングを習得済みであった事。

この事だった。

だが、意外と好戦的なこの王は、これらの禁呪を覚えるのに貪欲だった。

ところで、この事に関してアーチエルは、『ご立腹』だった。

烈火のごとく、と言う表現を使ってもよい。

これ以上皆を、危険な目に合わせて、どうするのか？

と、言う事だった。

しかし、アシュマは、こうでもしないと、却って危ないと言った。これが原因で二人にしては喧嘩をし、暫くお互い口を利かない日々が続いたが、意外な事でアーチエルとアシュマは仲違いが治った。アシュマが、

「アーチエル。腹がすいた。何か欲しい」

そう言い、アーチエルも、その時は何も考えずに、つい、

「はい。今何か作ります故、暫しお待ちを」

そう、言ってしまった事である。

二人ともそこで、喧嘩していたのを思い出し、妙な雰囲気になったが、どちらとも無く笑い出したので、この争いは立ち消えとなった。

ただし、アーチエルは、魔法を覚えさせるのは良いが、安全を必ず確保させる事を、アシユマに確約させた。

オロ・エバス連合軍が進軍していた。

勿論目標はノリトレアだ。

多数の巨艦を引き連れて、一際大きな艦には、オロ・エバス総統が乗っていた。

旗艦アプラスである。

そしてそれ以上に大きいのが、空中要塞である。

オロの旗艦アプラスが、全長一キロメートル程なのに対して、直径は三キロメートル。

かつてのリスパダハルの巨艦、ヘルガギルテと同等の規模である。攻撃力もほぼ同等だ。

規模はバヴェルには、遠く及ばないが。

それでもオロは、それを六基も連れて来た。

名前は一番艦から順にコール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガツサ、と、それぞれ言う。

ノリトレアが接收した、イボラス、ビニラ、ビムラーの各要塞とほぼ同じ規模である。

勿論、これらの要塞を牽制する為に、連合軍の六要塞を引き連れてきた訳である。

だけでなく、牽制を通り抜けて、ノリトレア軍に圧力を掛けられ

る。

それに加えてこの大艦隊。

これだけでも、ノリトレア統合軍には、相当の圧力の筈だった。ここまでしておいて、オロは、

「先ずは、小手調べと行こうじゃないか？」

と、言ったという。

このノリトレア軍に、クーロン軍、イーハン軍が加わって、ノリトレア統合軍となった。

それでも、艦隊数ではやや劣り、魔導機兵数でも劣った。

「アシユマ・アトーを、如何に抑えるかが鍵だな」

オロは、そう呟くと、

「その辺は大丈夫なのだろうな？ ウフェイトウ」と、振り向いて言った。

「はい。マスター」

ウフェイトウが、そこに跪いていた。

「頼むぞ。この戦い、勝つかどうかはおまえ達に掛かっている……と、行っても小手調べだかな。くくく」

小手調べと言っても、オロは勝つ気でいた。

「は」

ウフェイトウが、頭を垂れた。

今回もノリトレア統合軍の指揮を取るのは、ルー・ウィロンである。

また、イーハン軍のシュンマ王が前線に立って、出撃する事になった。

意外と勝気な王である。

艦隊戦が始まる。

今回は双方とも、最初から魔導砲を打ち合う様な、愚はしなかった。

魔導砲は大量の念を使う。

双方とも強大で強力な、念導境界面を張れる者がいるのだ。

無駄な事は、しない方が良かった。

案の定、双方とも砲撃が通じなかった。

アシュマは、青龍号のゴンドラの上で、鬼虎の柄に右手を乗せながら、気を鍛っていた。

鯉口が切られ、光があふれ出す。

もしかして、敵方の念導境界面を、貫き通せるかもしれないと思っただからだ。

アシュマが鬼虎を引き抜こうとしたその時、

「それを放たれる訳にはいかな」

頭上から声が聞こえてきた。

ウフェイトウである。

「それでも放つ」

アシュマも言う。

何度も阻まれてきた。

そのたびに味方が窮地に陥った。

そうなる訳にはいかない。

「放つても無駄だと思うがな」

ウフェイトウが言い捨てる。

「ならば、マスクドを全て倒し放つまで」

アシュマが闘志を見せる。

「我らに向かってよく言う」

周りには、ウフェイトウを中心に、マスクド達が宙に浮かんでいた。

「ちよつとまったあ!!」

アシユマの背後から声が聞こえた。

オルバニアンを筆頭に、七人の勇士が現れた。皆、魔法ウィングで、宙に浮いている。

王になった、シュンマもいる。

この頃になって、双方砲撃が当る様になる。

念導境界面を張る者が双方居なくなつたからだ。

「ウフェイトウ！ アシユマの野郎は俺に殺らせてくれ！！」

ワラシーが言った。

「駄目だ。お前では、敵わんだろう」

ウフェイトウは許可を出さない。

部下をこれ以上失う訳にはいかないのである。

「やらせてくれ！ 兄者の仇を討たせてくれ！！」

ワラシーが頭を下げる。

「駄目だ！！」

それでもウフェイトウは許可を出さない。

「殺らせてくれ！ 頼む！！」

ワラシーが懇願する。

「……………」

ウフェイトウは暫し沈黙した。

「どうした？ 来ないのか？」

アシユマが挑発する。

「もう我慢ならん！ 俺は行くぞ」

ワラシーが突っ込む。

それが戦いの合図だった。

それぞれ、オルバニアンにはナイゲルが、アルミナにはシャケルウが、ガンロクにはウゴグロフが、ジークにはウデイガアが、レンヌにはイラが、シュンマにはレトウが、ビツシュにはナトイゲフルが戦いに臨んだ。

皆、それぞれ以前に遺恨があつた者が戦つた。だが、オルバニアンとアルミナは……。

「確か、オルバニアンと言ったな？」

ナイゲルと呼ばれるマスクドが声を掛ける。

実は、マスクドが人間に声を掛ける事自体、忌むべき事だった。それが態度に出ていた。

「ああ、それがどうした？」

オルバニアンが言い捨てる。

「ウシャトウの仇を討たせてもらおうか……と、言っても元来これはウフェイトウの台詞だな」

マスクドの掟の上に更に仇と言う言葉がついた。

「何故？」

オルバニアンが訊く。

仇とは妙な話だ。

事情を知らないオルバニアンはそう思う。

「ウフェイトウはウシャトウの兄者だからな」

ナイゲルがその内情を話す。

「ふん……」

オルバニアンは興味がなさそうだった。

オルバニアンはどちらかと言うとマスクドに性格に近い。

強い者と戦いたいのである。

だからといって全てを捧げて他のものを犠牲にしているわけではない。

そこがマスクドと決定的に違うところである。

「ちなみに我はナイゲル。人馬鬼のナイゲル」

ナイゲルが名乗りを上げる。

「どっちでも言いや。早く来いよ」

オルバニアンは相手の名前には興味がないのか。

「ふん！ 今に吠え面かくなよ？」

ナイゲルが片頬を歪める。

そして、アルミナはシャケルウと呼ばれるマスクドと対峙していた。

「貴様の相手はこの俺がする」

「ふん！ アンタが二番手かい。ま、いいさ。おいで」
アルミナがロンリーストラライフを八双に構える。

「アシュマ！ 行くぞー！」

ワラシーが叫ぶ。

が、叫んだは良いが、その場でぴたりと動きを止めた。
攻めどころが見付からないのだ。

力を抜いて自然体。

隙がある様で隙が無い。

何処にどう攻めても、返し技が来る気がする。

完璧にアシュマに、飲み込まれている。

ワラシーは、全く動けなくなった。

「どうした？ 来ないのか？ 最初の勢いは何処へ行った？」

アシュマが挑発する。

しかし……。

「う……」

ワラシーが呻く。

動けない。

「奴の挑発だ！ 乗るな、ワラシーー！！」

ウフェイトウが叫ぶ。

「どうした？ 兄の仇を、討つんじやなかったのか？」

更に挑発するアシュマ。

アシュマは戦いを好む性格ではない。

だが、いざ戦いになると非情になるところがあった。

だからといって卑怯な手を使っわけでもない。

剣鬼。

これがアシュマに合う形容である。

「くそっー！！」

ワラシーが叫びながら、アシュマに向かって突っ込んだ。

「ば、馬鹿者！」

再びウフェイトウが、叫び声をあげる。

間合いを詰め、ワラシーが迫る。

二刀を振り下ろし、アシュマに詰める。

アシュマは体を右に開き、居合いから左腕を飛ばし、そして鬼虎を返す刀宜しく、振り下ろし、右腕を斬り飛ばした。

「ああっ！」

ワラシーは驚いた様で、両腕から自慢の双児鬼が落ちて行くのを、ただただ、見ていた。

「ワラシー！！ 次が来るぞー！！」

ウフェイトウが注意を喚起する。

しかし、今の攻撃で、ワラシーは呆けた様になって、ゆっくりウフェイトウに振り向いた。

「馬鹿！」

ウフェイトウが叫ぶ。

アシュマはその隙を見逃さず、ワラシーの首を刎ねてしまった。

「ワラシー！！ …… おのれ、アシュマ」

ウフェイトウは、アシュマを憎しみのこもった目で見た。

他を見ると、皆善戦している。

ウフェイトウが怒っている最中に、アシュマは一瞬の内に、気の塊を鬼虎に作った。

ワラシーとの戦いの間に、気を鍛っていたのだ。

ウフェイトウは驚いた。

これには、迂闊にも、気が付かなかった。

その隙に、アシュマは鬼虎を振りきった。

幾線條の光の条が、オロ・エバス連合軍の艦隊へと、吸い込まれて行った。

「しまった！」

ウフェイトウが嘆いても、遅かった。

光の条は、連合軍の艦艇を、幾つも沈めて行った。

流石に、アシュマの気の練り方が不十分だったのか、敵艦艇の三分の二程は無傷だった。

また、連合軍の各要塞、コール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガツサ、六要塞は落ちる事は無かった。

「ち！ 不十分だったか！」

アシュマは悪態をつく。

「皆の者、退くぞ！ ここにいてもアシュマの気弾に艦隊が危険に晒されるだけだ！」

ウフェイトウが配下の者に下知を下す。

「ウフェイトウ！ そりゃ無いぜ！」

ナイゲルと呼ばれるマスクドが不満をぶつける。

「退くのだ！！」

ウフェイトウが怒る。

他の者は、隙を見せない様にゆっくりとオルバニアン等から離れて行く。

「おい！ 帰って来いよ！ 斬ってやるぜ！？」

オルバニアンがナイゲルを挑発する。

「貴様こそこっちへ来い！ すぐさま斬り刻んでやるぞ？ それとも、怖くて来られないか？ たすけてー、たすけてー、まー………
つか？」

ナイゲルが逆襲する。

「何だと！？」

オルバニアンの頭に血が上る。

「止めとけ。オルバニアン。奴の手だ」

アシュマが止める。

「お、おう……」

オルバニアンが冷静さを取り戻す。

アシュマはウフェイトウ達が、飛び去った方向を眺めていた。
が、いつまでもそうしている訳にも行かないので、アシュマ達は

青龍号へと戻って行った。

アシユマはそこから、定期的に気弾を撃って、ウフェイトウ達の念導境界面を弱くしてやらなければならない。

そうしなければ、こちらの艦隊の攻撃は出来ない。

思ったとおり、念導境界面をオーバーフローしてやれば、こちらの攻撃は通用する様だ。

だが、それも数える程度で、中々決定打と言う物が出なかった。それでもオロは、

「多少被害が出たな。今日の所は、これまでにしておくか」と、言い、徐々に艦隊を後退させた。

「助かった……のか？」

珍しくルー・ウィロンは、弱気な事を呟いた。

この人物はめつたにそういうところを見せない。

見せてはならないのだ。

それがカリスマというものだ。

「助かれば、それで良いでは、ありませぬか？」

アーチエルが隣でにっこり微笑む。

連合軍は、コール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガッサの六要塞を、ノリトレアの牽制の為に置いていった。

修理はそこで行われながら。

オロは、

「まだ、決戦の時ではない」

と、言いながら、オロ・エバス国へ帰って行った。

他の国々の艦隊も、自国へと帰って行った。

オロは館に着いて自室で寛いでいた。

ナナル・エコリコがやって来て、こういった。

「このような中途半端な戦い様で、大丈夫なのですか？ サバンナ大統領の二の舞になりはしないのですか？」

それに対し、オロは

「まだ決戦の時ではない」
重ねて言ったと言う。

オロ・エバス国では今、軍需景気で湧いていた。
国内が潤っている。

次々に軍艦、魔導機兵、各種兵器群が造られて、配備されて行く。
これによりオロの人気は鰻上りだ。

この事はアベニにより、アルスティーンの知る所となった。
アルスティーンは、

「このままでは幾ら同盟のクローンの人海戦術があるとしても、オロは恐らく次々と要所要所に軍を配備させて行くだろう。そうなくては厄介な事になるな」

と、言ったという。

再び話をオロの視点に戻そう。

「安心しろ。ただ今超高空爆撃部隊を用意してある。これ程超高空かつ超高精度の爆撃を出来る艇は、我がオロ・エバス国にしかない。宮殿に一発お見舞いして見せよう」

オロが自信を見せる。

「そう？ それならいいけれど？」
ナナルが言う。

少し皮肉が混じっている。

「疑うのか？」
「いいえ」

しかしこれも、アベニにより、アルスティーンの耳に入った。

超高空爆撃部隊はレイフ諸島ウング島のオロ・エバス軍基地を後にした。

その超高空爆撃機は、その名をドラゴン^{トンボ}フライと言った。そして、一路、ノリトレアへ。

この事はすでにアルスティーンの耳に入っている。

「どうするんだよ！ アルスティーン！」

オルバニアンが狼狽え、喚く。

「どうにかしましょうか。オルバニアン」

アルスティーンは、いたって平穏だ。

何か策があるのか。

「どうにかしましょうかって、だから、どうするんだよ!？」

オルバニアンは更に喚く。

「だから、ここはオルバニアン、『君』に、何とかしてもらいましょう」

アルスティーンがオルバニアンを見る。

「はあ？」

オルバニアンは事態が良く飲み込めていない。

アルスティーンはオルバニアンに頼っているのだ。

「だから、オルバニアンに魔導機兵に乗ってもらい、その爆撃機を粉碎してもらいましょう」

アルスティーンが説明をする。

「はあ？ アルスティーン。寝言は寝てから言ってくれ。魔導機兵がそんな超高空からやって来る爆撃機に、対処できる訳無いだろう？」

魔導機兵は飛べるもののそんな超高空に対応していない。

魔導機兵乗りの常識だ。

「まあ、まあ。ここは専門家に来てもらいましょう」

アルスティーンはなだめすかしてそう言う。

「専門家？」

オルバニアンが頭を捻る。

「アリシアナ・コクレト技術少尉をここへ」

アルステインは、あのアリシアナを呼んだ。
階級は上がって少尉になった。

「そうだ、アルミナさんも呼ばないと」

アルステインは、続けて言った。

「アリシアナ・コクレト少尉、出頭致しました」

程なくアリシアナがやって来た。

「お久しぶりで御座います。オルバニアン様」

アリシアナが頭を下げる。

今はツナギの作業服ではなく、ノリトレア国軍の制服を着ていた。
美人であるアリシアナは制服を着ると得も言われぬ色気を放った。
これでも人妻。

エファール王妃とそう年齢も違わない。

四歳になる子供アリサも居る。

「おお！ アリシアナさん！ アシユマじゃねえが、『様』付けされるこそばゆいな」

オルバニアンが照れて言う。

「何、鼻の下を、だらしなく伸ばしているのよ！」
アルミナだ。

呼ばれて早々、何をするのかと思えばこの光景。
少し惱^{りんき}気を起こしている様だ。

「おお、アルミナ！」

オルバニアンは大袈裟に言う。

「『おお、アルミナ』じゃ無いわよ！ この唐変木」

アルミナはオルバニアンの言葉に、ご立腹の様だ。

アルミナは何故かアリシアナとオルバニアンの関係に嫉妬することが多い。

それだけアリシアナが美人なのだが、オルバニアンも魔導機兵を使う関係上アリシアナに気軽に声を掛ける。

「で、なに？」

「ご立腹なままアルミナが訊く。

少し嫉妬も入っている。

「アルミナさん。これからオルバニアンと共に、オロの超高空爆撃部隊を撃破して下さい」

アルステインが言う。

いつもの様に軽く。

「超高空ってどの位なのよ？」

何故自分が行かなければいけないのか。

そんな自分が行かなければいけない程なのか。

兎に角どの位なのか。

「超高空です」

アルステインはそれしか言わない。

「約五万フィートです」

そう言ったのはアリシアナだ。

「五万！」

アルミナは驚いた。

が……、

「五万フィートって何メートル？」

と、オルバニアン。

メートル法に慣れているものには馴染みが薄い。

「一フィートが三十、四八センチメートルだから……」

アルステインだ。

よく知っている。

「約一万五千メートルですね」

アリシアナが言う。

「冷静に言っな！ 十五キロだろ！ それ！ 空気あんのか！？ 空気！！！」

オルバニアンが絶叫する。

「今度の機体はコクピット内は与圧されています。パイロットスーツもあります。大丈夫です」

アリシアナが説明する。

「俺はパイロットスーツは着ない主義なの！」

オルバニアンがわがまを言う。

あの物々しい装備が嫌いなのだ。

「そうなんですよ。いままでどうやってGに耐えていたのか、不思議なんですよ」

アリシアナが首をひねる。

「根性だ！ 根性！」

オルバニアンはそう主張するが……。

「ああは言ってますけど、念導境界面の能力ちからなんですよ」

アルステインが言う。

「そーなの？ アタシも今まで、根性だと思ってた」

アルミナもそう言う。

「何？ 俺達に魔導機兵に乗って、その超高空爆撃機とやらを、落として来いってか」

オルバニアンが確認する。

「さっきからそう言っています」

「あたしは、聞いていない」

アルミナは不機嫌そうだ。

「なんでプラズマキャノンやレールガンで迎撃しないんだよ？」

オルバニアンが不服を言う。

行って来なければならぬ者の気持ちも考えて欲しい。

「相手もステルス化されていて、良く照準が合わないのですよ」

「ち！ 技術の進歩って奴にも、困ったもんだぜ」

オルバニアンが悪態をつく。

「まあ、それとして、アリシアナさん。二人に魔導機兵の仕様に関して、教えてあげて下さい」

「はい」

その、魔導機兵の名前はリカインジュと言った。
ステルス機能も付いている。

勿論高高度まで昇る事も出来る。

と言うより、それに特化した機体だ。

慣熟訓練もそこそこに、早速、オルバニアンとアルミナは、リカインジュに乗り、迎撃に向かった。

アシュマが、アルステインの元にやってくる。

「オルバニアンとアルミナが、出かけたそうだな」

アシュマが言う。

「ええ。今は遙か遠くの、空ですよ」

アルステインが応える。

「流石に俺でも、そんな高くは上れないからな。……上空五万フィートか……」

アシュマの魔法ウィングにも限界はあるのだ。

速度。

高度。

万能ではない。

「相手のマスクドも、そうでしょう」

アルステインが指摘する。

「その点では安心だな」

アシュマが応じる。

「ええ」

今、オルバニアンとアルミナは、上空五万フィートの空にいた。

そろそろ、オロ・エバス国のドラゴンフライ部隊と、接触の筈だ。

オルバニアンはアルミナと会話する。

無線だ。

「そろそろ、接触の予定時刻だな」

オルバニアンだ。

接触の予定といっても相手もステルスである。

レーダーに映るわけではない。

あくまでアベニ爺のもたらした情報に頼っているのである。

「そうね」

アルミナはそっけなく応える。

そっけなく聞こえるだけで周りに集中しているのだ。

「全く技術の進歩つてのには、恐れ入るぜ」

オルバニアンも周りに目を配らせる。

「そうね。結局は、目視しか無いのよね？」

それは相手も同じだった。

敵の存在を知るには、目視しかないのである。

そして敵の見張りが、オルバニアン等を見つける。

「てっ、敵機発見！ 一時の方向！ あれは……ま、魔導機兵だ！」

「なに？ 寝言を言うな。こんな超高空に、魔導機兵が昇れる訳が

……」

もう一人の見張りも、オルバニアン達を、見つけた様である。

それからドラゴンフライ部隊は、蜂の巣を突付いた様な状態にな

る。

迎撃の砲台が競り上がり、オルバニアン達に照準を付ける。

そして発砲。

狙いはめちやくちゃ。

とにかく、弾幕を張って、オルバニアン達を近付くのを防いでい

る様だ。

が、量産型と違って、オルバニアン達の機体はカスタム機である。

装甲はぶ厚く出来ている。

その上、オルバニアンとアルミナ機は、魔法シールドで守られていた。

ちよつとやそつとの攻撃ではビクともしないだろう。

「オルバニアン！ もう、落として良いの？」

「ああ！ 行きたきや行きな！ 俺も行かして貰うぜ！」

オルバニアンはお馴染み三十ミリバルカン砲を手に持ち、斉射し始めた。

相手は大物だ。

面白い様に弾が当たって行く。

「我々は聞いていないぞ！ こんな高度を飛べる魔導機兵がいるなんて！」

忽ちドラゴンフライは爆発して炎上、そして堕ちて行く。

アルミナも大剣を持って、ドラゴンフライの翼を、斬って行く。

ドラゴンフライは、次々と墮とされて行く。

正にオルバニアンとアルミナの、独壇場だった。

ドラゴンフライは、悉く墮とされて、部隊は全滅した。

「やったね！ オルバニアン！」

「ああ。さあ！ 帰投しようぜ！」

「ええ！」

二人は、皆の待つ、ノリトレアの宮殿へと帰投した。

二機のリカインジュを整備班に引渡し、二人は王宮に帰ってきた。
「オルバニアン様、アルミナさん、お帰りなさいまし。ようこそ無事で」

二人をアーチェルが出迎えた。

「先ずは、アルスティーン様へご報告下さい。その上で、大広間においで下さいまし」

「あ、ああ」

オルバニアンは、何が待っているのかと思いながら、アルスティーンに報告の為、政務室へと向かった。

「何！？ 失敗したと！？」

オロは、驚きを隠せなかった。

絶対に破られる事は、無いと思ったからだ。

「どうしてやられた？ アシユマか？」

オロが部下に訊く。

一瞬そんな事ができるのはあしゅまかと思ったからだ。

「は。それが魔導機兵によるもので……」

「魔導機兵か……おのれアルステインめ！ 恐るべしノリトレアの技術力。矢張り、倒すべきはノリトレア、そしてアルステインか！」

オロが齒噛みをする。

「よくやりましたね。オルバニアン。そして、アルミナさん。細かい報告は後回しにして戦勝祝いの祝賀会に出ましょう」

アルステインが、会話の口火を切る。

「祝賀会か。何かこそばゆいな」

オルバニアンが照れる。

普段は熱血漢でお調子者の青年は意外と照れ屋な部分がある。

根は素朴で好青年なのだろう。

「まあ、いいじゃない。祝ってくれるんだからサ」

アルミナがオルバニアンの腕をとって喜ぶ。

「ま、そりゃそーだ」

先程アーチエルに言われた通り、大広間に通された二人。

既にパーティーの準備は整っており、後は音頭を取って開始するだけだった。

アルステインがグラスを手に傾ける。

そこからアルステインのスピーチが長かった。

かれこれ十五分は立っただろうか。

オルバニアンはじりじりとし、

「アルステイーン！ もういいからさあ！ 早く食わしてくれよ！」
そして切れた。

「わ、分かりました。では、細かい事は抜きにして、乾杯！」

「乾杯！」

今回は立食パーティーだ。

皆、皿に各々、好きな食べ物を、盛り付けて行く。

オルバニアンは飲んで食って、飲んで食ってと、大忙しだった。
アルミナも負けていなかった。

彼女も負けじと食べていた。

数日後、クーロンのリン・シャオリンが、アルステイーンに連絡を入れてくる。

このクーロンの美しい女傑は、どうやら、昨今のオロ・エバス国の隆盛について、アルステイーンと話をしている様だ。

クーロンの人海戦術を上回る勢いで、軍備を増強している。

これに関して意見を交換する為、電話で会話をしていた。

直接会談だ。

「仕方ありませんね。一つ手が無くは、無いです」

アルステイーンがそう言う。

『本当ネ？ そんな手があるネ？』

「時間稼ぎにしか、ありませんがね」

『この際それはどうでもいいネ！ その手に乗るネ！ 教えるネ、その手を！』

リンはアルステイーンにせがんだ。

ある意味かなり追い詰められているようだ。

「オロ・エバス国の西部の海岸近くに、工業地帯がありますよね？」
アルステイーンが説明を始める。

『うん、あるネ』

リンが相槌を入れる。

「このオロ・エバス国の、集積回路の軍需工場を、破壊するんですよ。ここを叩けばいわばオロ・エバスは、頭脳を破壊されたのと同じ事。暫くは何も出来ないでしょう」

『成程ネ！』

リンが手を叩く。

「ここを叩けば、オロ・エバス国は立ち直るのに、数年は掛かるでしょう。その間に和平工作が出来れば……」

アルステインは未だ和平への道を諦めてはいなかった。

平和への道を探っていたのだ。

『まだ、そんな甘い事を言ってるネ！？ 叩く時には徹底的に叩く

！ 兵法の極意ネ！』

「誰の兵法ですか？」

『私のネ！』

「と、言う訳で、隠密的意味合いもあるので、今回は青龍号一機のみでの、行動となります。何か質問はありますか？」

アルステインが言う。

アルステインの前にはアシュマ以下、皆が揃っていた。

ここは、アルステインの公務の場。

政務室だ。

「徹底的に、破壊しても構いませんよね？ 兄上」

シュンマが珍しく過激な事を訊く。

言葉は穏やかだが、好戦的なこの王は、ある意味容赦しなかった。

「いや、必要最低限にして下さい」

アルステインが答える。

ここでアルステインとシュンマが、意見を違える。

「しかし兄上、ここで徹底的に叩けば、和平交渉も有利に運ぶのではないのでしょうか？」

理屈だ。

だが、アルステインは……。

「それでは、オロ・エバス国の、罪の無い人々の生活にまで、被害が及びます」

相手国の住民の事を心配した。

「兄上、そんな甘い事では、勝てる戦も勝てませんぞ？ 必要最低限等と言っては、敵の回復は早くなります」

シュンマは身内には優しいが敵には手厳しい。

言葉の穏やかさがそれを隠しているが。

「うゝむ。駄目ですね。認められません」

アルステインは拒否をする。

相手も人間なのだ。

「兄上……アシュマさん！ アシュマさんも、何か言ってやって下さい」

シュンマがアシュマに意見を求めてきた。

「俺か？」

アシュマが自分を指差す。

何処か頓狂な顔をしている。

政治向きな話は苦手なのだ。

「はい！」

シュンマはアシュマに自分よりの言葉を期待していた。

「ま、俺は徹底的に叩くのも悪くないとは思うが……」

「思うが？」

一瞬期待する。

「アルステインの意向に沿おうと思っている」

アシュマもアルステインの意見に賛成をした。

「アシュマさん！」

シュンマが怖い顔をする

「決まりだ」

アシュマが断じた。

しょうがないだろうという顔をする。

「……………」
シュンマも黙ってしまった。

青龍号が発進した。

オロ・エバス国の工業地帯……特に集積回路の工場を破壊する為に。

青龍号が、オロ・エバス国の工業地帯にやって来た。

青龍号が、その腹に溜め込んだ大量の爆弾を、吐き出して行く。

オルバニアンとアルミナも、魔導機兵で工場を破壊して行く。

この光景を見て、アーチエルは涙した。

ここの工場員達は、何の罪も無い人達である。

その民間人が、なんの謂われなく、死んで行く。

その光景に涙するのである。

アシュマも破壊に一役買った。

気弾を、辺り一面に放ったのである。

「全滅ではありませんが……全滅ではありませんが……（さ）惨過（さ）ぎます」
アーチエルは涙を流した。

この攻撃で、オロ・エバス国は、大層打撃を受けた。

「アシュマさま。こう言う戦の世が無くなれば、良いのですが……」
アーチエルはそう言っ、涙を落とした。

「おのれ！ アルステイン！ やってくれたな！ 者供準備せい！
ノリトレアに攻め込むのだ！」

オロはそう吼えた。

ここはオロの政務室だ。

周りの者は、びっくりして振り返る。

「オロ様。そう興奮なさっては」

ナナルがオロを抑える。

オロに寄り添う。

密着していると言っても良い。

「興奮等は、してはおらん！」

そういうオロは、明らかに怒り心頭となっていた。
怒って椅子から立ち上がる。

「ここは起死回生を図って、ノリトレアに……！！」

「オロ様！」

ナナルは、オロの口を塞ぐ様に、キスをした。

オロは驚いた。

一瞬何が起こったか分からなかった。

だが、これで少し、落ち着きを取り戻した。

「ナナル……」

オロがナナルの名を呼ぶ。

オロはナナルがこんな事をする女だとは思っていなかった。
黙って見ているかと思った。

「オロ様……落ち着きまして？」

ナナルはあくまでオロの事を案じているように見えるが、その実はドートネーゼの利益のことしか考えていない。

今もそうだ。

傍目ではオロの事を慮って諫めたように見える。

だが本音は違った。

闇雲に攻めてはドートネーゼの戦力が損耗する。

それを止めたのだ。

「ああ。だが、ノリトレアに攻め込む事には、変わりはないぞ？」

オロはそうは言った。

宿敵アルステインとアシュマに打撃を与えなければならない。

そうでなければ気が収まらない。

「それはそれでよう御座います。でも今は、落ち着きなさって下さい」

ナナルは優しく言う。

オロの方にそつと手をおいて椅子に座らせる。

「うむ。よかるう……そうだ！ エルファの騎士団を使おう」
オロが思いつく。

それでやつと落ち着く。

君主らしくなる。

「それがよう御座います」

ナナルが頭を下げる。

オロの見えない所でほくそ笑む。

自分が踊らされているとも知らずに。

「誰ぞ？ 誰ぞある？」

オロが玉座に座つて声を張り上げる。

広い部屋に声が響き渡る。

「はっ！ 何か御用で？」

側近の者が、すぐさま寄つて来て、頭を垂れて用を聞く。

「ウフェイトウを呼べ」

オロが横柄に言いつける。

君主気取りだ。

だが、中々堂に入っている。

「ははっ」

側近の者が慇懃に頭を下げそして下がる。

暫くして、ウフェイトウがやつて来る。

「お呼びですか？ マイ・マスター」

ウフェイトウが頭を下げる。

何故か嫌な予感がした。

ナナル・エコリコは側でほくそ笑んでいる。

同じドートネーゼの組織の一員でありながらマスクドを軽んじている所がある。

ウフェイトウはこの女が気に入らなかった。

「うむ。ノリトレアに行つて貰いたい」

オロが命じる。

その視線は冷たい。

まるで物を見る目だ。

マスクドを人間として扱っていないかのような。

尤もマスクドも人間扱いされては迷惑なのだろうが。

「ノリトレアに……」

ウフェイトウが言葉を失う。

嫌な予感が増大する。

「そうだ。そして、アルスティーンの命を取って来るのだ」

嫌な予感が増大した。

また、汚れ仕事だ。

この様な仕事にもマスクドを使うとは、ウフェイトウはいたく自尊心を傷つけられた。

「……………」

そして黙る。

この様な汚れ仕事ははっきり言ってやりたくない。

自分はマスクド。

誇り高き者だ。

「嫌か？ 又この様な汚れ仕事は、嫌か？」

オロが訊いてみる。

勿論否やは言わせないが。

オロはマスターなのだ。

そしてマスターの命令は絶対。

「いえ……」

そう答えてウフェイトウは甘んじて命を受けた。

たとえ汚れ仕事だとしてもやらねばならない。

マスターの命に従う事。

それがマスクドの掟だから。

「ならば良い。期待しているぞ？ ウフェイトウ」

オロは、ウフェイトウにそう言った。

本当に期待しているかはわからない。
物を見るような視線は相変わらずだ。

「必ずやご期待に沿えるよう、致します」
ウフェイトウはそう言うしかない。

慇懃に頭を垂れる。

「マスクドは、期待を裏切るのが得意だからな。前のザザやロシが
そうだった」

ロシが皮肉を浴びせる。

この言葉からわかるように必ずしもウフェイトウに期待している
わけではないのだ。

この言葉にウフェイトウは反発を覚えた。

比較されたことにプライドを傷つけられた。

「ザザとは違います。マイ・マスター」

そして思わずこの言葉が出た。

頭を上げオロを見る。

オロはその視線を見返し、

「言葉ではなく行動で示せ」

と、言い放った。

なんの思いやりも、なんのねぎらいもない、冷たい言葉だった。

この様な者をマスターに頂いたマスクドは不幸だったのかもしれない。

最早道具。

人格を持ったものとして扱われなかった。

「は……」

ウフェイトウが頭を垂れる。

歯噛みをしながら。

その夜、全く気配を出さずに、黒いサイコ・フライヤーが、ノリ
トレアの王宮広場の真ん中へ、滑る様にして降り立った。

中から人が出てくる。

そいつらは、迷う事なく王宮へと、向かって行った。

この異変に、最初に気付いたのは、アシュマだった。

彼は青龍号で寝ていたのだが、気配の無い気配……言っなれば不自然な無の気配を察知して、起き上がったのだ。

「アシュマさま。如何なされました？」

隣で寝ていたアーチエルが目を覚ます。

「アーチエル、アルステインの所へ行け。そしてこう言え。マスケドが来た。オルバニアン等もたたき起こせ！ 事態は急を要する！ 急げ！」

アシュマはアーチエルに矢継ぎ早に言う。

「はっ、はい！」

アーチエルはこの言葉でいっぺんに目が覚めた。

アシュマは簡潔に要点をアーチエルに述べると、自身はズボンを穿き靴を履き、上半身は裸のまま、鬼虎を左手に持ち外へ出た。

青龍号は王宮の直ぐ側に停めてある。

アシュマは王宮の衛兵に顔が利くからそのまま王宮内に入る。

ウフェイトウ等は通路を進んでいた。

通路を抜け庭に出る。

広場だ。

その前に誰かが立ちはだかっている。

アシュマだった。

ウフェイトウ達はぎくりとした。

こんなにも早く、アシュマ・アトーに出会うとは、思っていなかったからである。

正に意中の外の事であった。

「ここから先は誰も通さん！」

アシュマが言い放った。

それは、アシュマの殺気そのもので、八人の内七人いるエルファの騎士団の団員を震え上がらせるには、充分な程であった。

除外されたマスクドは、勿論エルファの騎士団団長のウフェイトウだった。

彼のみが、アシュマの恐怖の洗礼から、逃れ得た。

「皆の者！ 怯むな！ 怯んだら負けぞ！」

ウフェイトウが、皆を鼓舞する。

アシュマはマスクドの掟など無視をする。

一人で此処に居るもの全員を倒そうとするだろう。

その時、アシュマの気に飲み込まれたものは確実に死が訪れる。

「ここへ来るとは、不埒千万！ さあ、誰から俺に斬られたい？ 名乗りを上げて、出るが良い！」

ウフェイトウの思った通りアシュマは全員を斬る気だ。

油断なく辺りに気を配っている。

一人も逃すまいと。

「おのれ！ アシュマめ！ 何という傲岸不遜な言い様！ 許す訳には参らぬぞ！」

ウフェイトウが怒りを顔おもてにして言う。

マスクドを前にいい度胸だ。

ここでアシュマの思い通りにしたらマスクドの名が廃る。

「ウフェイトウか。頭目自ら名乗り出るとは、お前の部下達も不甲斐なし。マスクドの名を棄てよ！」

アシュマが挑発する。

戦ってこそそのマスクドと聞いた。

そのマスクドが戦いに名乗りを挙げない。

そういう意味が含まれていた。

「何！？」

ナトイゲフルが、怒りの色をなす。

そこにいるマスクド達が皆、色めきたつ。

これをアシュマはわざとしていた。

マスクドの目をアシュマに向けさせる為だ。

その間に、アルステイーン等が逃げうる時間を稼ぐ為だ。そして、遅れてオルバニアン等が王宮広場に出てきた。

「どうだ？　オルバニアン。アルステイーンは逃げたか？」

アシュマが質問をする。

視線はマスクドの方を油断なく見ている。

「ああ。今、逃げた所だ」

オルバニアンが答える。

「そうか。よくやった」

アシュマがオルバニアンを労う。

ここで初めてウフェイトウは、アシュマの真意に気付く。

アシュマはアルステイーンを逃がすためわざと視線を自分に向けさせたのだ。

「おのれえ！　アシュマめ！　謀ったなあ！！」

ウフェイトウは怒りを覚える。

誇り高いマスクドを謀るなど言語道断。

死に値する。

「時には多少は俺も知恵を出す。悪いか？」

アシュマが悪びれずに言う。

大体にして夜更けに忍び込んで人の命を奪おうと言う輩達だ。多少の戦略があってもいいだろう。

真正面からぶつかる必要はないのだ。

「おのれ！　すでに言葉も無いわ！　潔く、ここで死ね！」

しかしウフェイトウは謀られた事に怒りを覚える。

誇り高いマスクドが謀られたのだ。

彼らの論理では怒って当然なのだろう。

「さて？　そう、上手く行くかな？」

ここで、アシュマは、一つの誤算をしていた。

普段の者ならば、怒りに我を忘れて、正常な判断力を失い、そして自滅するのだが、ウフェイトウは違った。

怒る事により、却って頭の芯が冷え、怒っていても冷静になり、又、怒る事によって、いつもより高い戦闘能力を持つ事になった。

「行くぞー！アシュマー！！」

ウフェイトウは剣を振るって来た。

それが、戦闘開始の合図となった。

オルバニアン等とマスケド共が戦闘を開始する。

「ぬー」

ウフェイトウの鋭い打ち込みに、アシュマは思わず受け止めた。いつもと違う。

「うむむ……」

思わずアシュマが唸る。

他の者も、苦戦を強いられている様だ。

アシュマは、鬼虎でウフェイトウをいなし、体を入れ替え、ウフェイトウの背を打つ。

ウフェイトウは、背を割られた。

が、ウフェイトウも剣を車に回し、アシュマの腹部を斬り割った。

「くっ！」

「『天餓鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

ウフェイトウが、呪文の様に言葉を発すると、背中中の傷が塞がって行く。

そしてアシュマは……。

『聖なる契約を交わし者達よ、

聴けよ、汝らの魂は救われん。

見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。

ヒーリングオール！！』

と、傷を癒していた。

なんと魔法だ。

「なんだ、貴様。癒しの手を、他人に渡しているのか？」

ウフェイトウが驚く。

鬼を持つものは自分で癒せる筈なのに。
それをしない。

「大きなお世話だ」

アシュマは、大きく気を落としていた。

無限に供給できる筈の気は、ウフェイトウを斬る為に使っていた。
流石にマスクド達の頭目だけあって、斬るには相当の気が要った。
その上でのヒーリングオールである。

それなりの気が、必要な筈である。

ウフェイトウは、勝ったと思った。

ウフェイトウの気は、まだ充溢しており、相手を威圧するのに、
充分な程だったからである。

それに対し、アシュマは構えを下段に取った。

ウフェイトウはその時、一気呵成に攻め込むのをやめた。

例のアシュマの秘剣・流星を、そこに見たからである。

秘剣・流星は、何も居合いの技ではない。

その時の心の有り様、即ち『位』なのだ。

じりとした、時間が流れる。

ウフェイトウに焦りが生じる。

が、相手に回復させる時間を、与えてはならない。

ウフェイトウは前へ出た。

そう、相抜け覚悟で。

アシュマも、ウフェイトウが、その覚悟で迫ってきているのを承
知で、前へ出た。

生死の間仕切りを越える。

アシュマは、ウフェイトウの股下から斬り上げる。

ウフェイトウは、アシュマの心臓を真っ直ぐに貫いた。

ウフェイトウはアシュマの鬼虎に、股下から下腹部までを、斬り
割られていた。

「『天餓鬼』よ……汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力

を以って汝の主を癒すべし……」

最後の力を振り絞って、ウフェイトウが呟く。

それに対しアシュマは、心臓を貫かれ、

「かはっ！ ぐっ！ がっ！」

と、もがき苦しんでいた。

『聖なる契約を交わし者達よ、

聴けよ、汝らの魂は救われん。

見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。

ヒーリングオール……』

辛うじてアシュマが魔法を唱える。

が、言葉に力がない。

ウフェイトウは、大分アシュマの気力が落ちてきていると、判断した。

（勝てる！ これならば勝てる）

ウフェイトウは、その勝利を確信した。

そしてウフェイトウが一步前へ進んだその時、周りの空気が一変した事に、ウフェイトウは気づいた。

気が……周りにあるありとあらゆる物の気が、アシュマに向かって流れ込んでいる。

そんな気がした。

今までの秘剣・流星とも違う、何か。

それが、アシュマを包み込んでいる。

そんな気がした。

そして、ウフェイトウの剣士としての勘が、危険を告げていた。アシュマは今、周りの物の……森羅万象全ての物と、一体化していた。

一剣が万剣になり、万剣が一剣に帰る。

アシュマは奥義、無想活殺を発現せんとしていた。

「み、皆の者！ てっ、撤退じゃあー！」

ウフェイトウが叫ぶ。

アシュマの無想活殺がウフェイトウを怯えさせていた。
マスケドの誇りもあったものではない。

「何!？」

「何故だ、ウフェイトウ!」

中には、戦いを有利に進めている者も、いたのだろう。
不満の声が上がる。

「いいから退くのだ! 全滅するぞ!？」

ウフェイトウが声を張り上げる。

怯んでいる。

「どうしたのだ? ウフェイトウよ!」

ウフェイトウの異様な様子に皆が驚く。

「いいから退くぞ!」

ウフェイトウの、命令は絶対だ。

逆らう者等、誰も居ない。

「アシュマよ。さらばだ。また来る」

ウフェイトウが台詞を残す。

「……………」

アシュマは無言だ。

話す余裕が無い。

ウフェイトウ達は去って行った。

「……うぐっ! かはっ! げほっ! げほげほっ!」

ウフェイトウが居なくなつた途端、アシュマは咳き込んだ。

そこまで、アシュマは追い込まれていた。

また、弱つてもいた。

「アシュマさま!!」

アーチエルが駆け寄る。

「大丈夫に御座いますか?」

アーチエルが心配そうにアシュマに寄り添う。

泣きそうだ。

アシュマは力なく微笑み、

「俺は大丈夫だ。他の皆を見てやってくれ」と、言った。

「まずはアシュマさまです」

アーチエルが鬼虎に手をかざす。

アシュマが淡い燐光に包まれる。

アシュマが癒えた証拠だ。

それでも覇気がない。

疲れているのだ。

それだけ消耗したのだ。

皆は肩で息をしている。

幸いにも重傷者はいない様だ。

アーチエルやミカ等が手当てをして行く。

アシュマが呟く。

「ウフエイトウ……油断ならない奴」と。

「こんな暗殺めいた事を、許しておくのかよ？ アルステイン！」

オルバニアンが、居間で声高に言った。

そこには寛いだアルステインとオルバニアン等が居た。

皆は手当てを受けて、居間で一息ついている所で、オルバニアンが言った言葉である。

「別に許す訳では……」

アルステインは言葉に詰まっていた。

どう対処しようか迷っていたのだ。

国際舞台に議題を載せるか、それとも……。

「歯切れ悪いなあ……」

オルバニアンが呆れる。

いつもの剃刀アルステインは何処へ行ったのか。

こういう時こそ軽く決めてみせて欲しい。

「仕方ないですよ。証拠じみた物が無い以上、オロを糾弾する事は、事実上無理ですからね」

言って、アルステインは頭を悩ます。

まず、マスケドの存在を世に証明すること。

次に、マスケドとオロの繋がりを証明すること。

難しい。

「んな事言ったってよオ……」

オルバニアンは納得が行かないようだ。

命まで狙われたのだ。

それは納得が行かないだろう。

「僕も納得できぬ物が、ありますがね。まあ、出来うる限りの事は、やってみましょう」

アルステインがそう言って、その場は収まった。

アルステインは自ら、国元連へと赴いた。

外務大臣等を差し向けてもよかったが、護衛が居る。

その時に、アシュマが護衛に就いた場合、アルステインの身边が危つくなる。

なので、アルステインが国元連へ赴いた方が良からうという事で、アルステインはアシュマ等と共にこの地へ赴いた。

そこでアルステインは、オロ・エバス国による暗殺事件について、遺憾の意を表し、その上で、ノリトレアに対する経済封鎖、経済制裁を解除する事を要求。

その上で、和平交渉のテーブルに着く事を訴えた。

それに対してオロ・エバス国は、その事に関しては、全くの事実無根であるとし、逆に我が国を貶める謀略だと決め付けた。

そしてその上で、形ばかりの民主政治、その実、独裁国家のノリトレアとでは、話にならないとして、交渉のテーブルにも着こうと

しなかった。

アルステイーンは、国元連本部近くのホテルに、泊まった。
アシュマ達は護衛として、アルステイーンの泊まったホテルと、
同じホテルに泊まった。

黒い一団は、闇夜がまぎれてやってきた。

それがアルステイーンを狙っているのは、容易に想像できた。
今回も最初に気付いたのは、アシュマだった。

一種異様な気配を、感じたからだ。

このどす黒く、血の臭いのする気配は……。

素早くアシュマは、皆を起こした。

「なんだよう。アシュマあ。まだ眠いよう」

オルバニアンが布団を頭から被る。

寝ぼけているのだ。

「何を言っている！ アルステイーンの危機だぞ！」

アシュマは皆を引っ張る様にして起こし、アルステイーンの寝室
に入って、陣取った。

皆も一緒になって陣取る。

敵はすぐそこまで来ている。

それが分かる。

気配を隠そうともしない。

余程自信があるのか。

「アシュマ君、何もここまで……」

アルステイーンが言いかけた所で、敵が窓からガラスを破って、
入ってきた。

ガラスが部屋に散乱する。

入ってきたのは……。

「シシオウ！ クロダの六人衆か！」

クロダの六人衆が、その場から展開する。

「アシュマか！ 勝負！」

シシオウが叫ぶ。

その一言が呼び水となって、皆が一斉に乱戦となった。

シシオウにはアシュマー一人で良いが、エヴユにはオルバニアン、アジャオにはアルミナとジーク、ナイシーにはガンロクとビッシュが、キエラにはシュンマとレンヌがそれぞれいた。

「おのれ！ 卑怯だぞ！？ 二人がかりで！」

そう叫んだのはキエラだった。

彼女は鞭を振るおうとすると、レンヌのヘブンスソードが唸り、動きを止めるとシュンマの魔法が襲ってくる。

上手い連携攻撃の、見本といえた。

「二人がかりは許して下さい。これもハンデです」
シュンマが言う。

何しろ人間以上の身体能力を持つマスケドと戦うのである。

二人がかりでも足りないくらいだった。

「それにしては、ちょっと厳しいわね！」

キエラが返す。

そして鞭を唸らせる。

そこへレンヌのヘブンスソードが襲い掛かる。

「コマンド、オールソード！ 六剣乱舞！！」

召喚された魔法の剣（つるぎ）が舞い踊る。

しなる鞭を弾いていく。

「おのれ小癪な！」

キエラが苛つく。

小賢しいのだ。

襲い掛かる剣を弾く為、動きを止めたキエラに、シュンマが、

『我は禁忌を見た者、犯したもの。』

我が憎しみは、汝の快樂。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール!!」

魔法、ブラックホールをお見舞いした。

「ぎゃっ!!」

それは見事に決まり、彼女を重力の坩堝へ落す。

そして止めはレンヌの、

「コマンド、オールソード! 孤剣静寂!」

だった。

一本の剣が目にも留まらぬ早業で、キエラの首を刎ねてしまった。

「キエラ!」

シシオウが叫ぶ。

「おのれ、アシュマ卑怯なり!」

「済まん。ハンデだと思ってくれ」

アシュマが言う。

そして、シュンマとレンヌの二人はそれぞれオルバニアンとアル

ミナの援護に回る。

多勢に無勢。

マスクド達はたまらず、及び腰になる。

そしてマスクド達が、次々と、細かく切り刻まれる所を見て、シ

シオウが、

「者供! 今宵はここまでとする! 退くぞ!」

と、言うまでになった。

シシオウは卑怯だとも思った。

これはマスクドのする戦いではない。

「アシュマよ、これからは我らも戦い方を変えるぞ! そのつもり

でいる!」

シシオウは、捨て台詞を吐いて、出て行った。

アシュマ達はマスクドの論理に付き合ってやる義理がない。

だが、マスクド達が戦い方を変えてきたら……。

その時はどうするのだろう。

「僕も見ているだけでなく、戦えばよかった……」

アルステインは、ぼろりと本音を、口に出してしまった。
ただ守られるだけの王は王ではないと思っている。

王は皆を守る存在だ。

故に先陣を切らねばならない。

そう思っただけで言えた言葉だった。

「アナタっ！ 何を言い出すのよ、もう！ 貴方は王なのよ？ みんなの頭脳なのよ？ 貴方が倒れたら何にもならないじゃない！！ もう、バカ！」

エファールは言葉遣い等気にもせず、アルステインを罵倒していた。

アルステインの言葉にある意味逆上した。

愛する人が居なくなってしまうたらその時はどうなるのか。

想像しただけで気が狂いそうになる。

それはパートナーがいる者は皆そういう気持ちだったろうが。

エファールが代弁しているようなものかもしれない。

「もう、ばかあ。貴方が死んだら、誰が悲しむと思っているのよう

……」

そして、エファールは泣き出してしまった。

ベッドの上にへたり込む。

顔を俯け両手で覆う。

「済みませんでした。エファールさん。貴女を悲しませてしまった様だ」

アルステインはやさしく声を掛ける。

エファールは泣きながら、

「ほんとに全くそうよ！ ばか」

アルステインに大声を出していた。

「僕はエファールさんのおかげで、『ばか』になってしまった様です
すね……」

アルステイーンは嘆息する。

「あたしの所為じゃないでしょう!？」

エファールは怒りから、周りにある物を、アルステイーンに、投げつけ始めた。

「アルステイーン。部屋を変えるぞ。この部屋では寝られまい?」

アシュマがそんな事には構わずに淡々と言う。

アルステイーンとエファールの痴話喧嘩など目に入らないようだった。

アーチエルがアシュマの袖を引っ張る。

少し遠慮しろということなのだろうが、気にしない。

「ああ、そうですね。もう、こう言う事を想定して部屋を取ってます」

色んな物をぶつけられながら、アルステイーンが言う。

その言葉にエファールが余計に怒ってものを投げる。

「流石だな。手回しが早い」

アシュマが感心する。

エファールがアルステイーンに物を投げるのは目に入っていない。

「いえいえ。常識ですよ」

「ふむ」

アシュマが頷く。

今、アルステイーンが国元連にいて、ノリトレアにはルー・ウィロンがいる。

オロは、この事に、機会を見た。

二人の連携が、見られないからである。

一般にアルステイーンとルーは、犬猿の仲だと言われているが、(事実そういう面はあるが) 事、戦時に関しては、お互いを認め合い、お互いを信じ、お互いを尊敬した関係であった。

作戦作りに関してもそうである。

ルーが作戦の素案を作り、アルステインが意見を言い、煮詰めて、最終的な物を作り上げて戦いに臨む。

そっという関係が続けてきた。

が、今はそれが出来ない。

距離が、アルステインと、ルー・ウィロンを分断していた。

この事が、オロを突き動かした。

起死回生とばかりに、ノリトレアに攻め込もうと言うのである。

しかし、これが軽率だった事を思い知らされる事になる。

アルステインはこの事を予期し、青龍号に乗りつけ、オロ艦隊が通るであろうコースに、予め待つて伏せていた。

そして、ノリトレア統合軍艦隊が、オロの連合軍艦隊を待ち伏せた。

正に、アルステインの、読み勝ちである。

それはオロ連合艦隊が、戦線が延びきった状態で、その合流地点に来たのと、待ち伏せて充分な鶴翼の陣で、戦いに臨むノリトレア統合軍とでは、勝負が見えていた。

戦いが始まる。

久しぶりに艦隊を指揮するのは、あのアルステインである。

だが、砲撃をしても、こちらの攻撃が、相手の艦隊に届いていない。

「こりゃ、アシュマ君の出番かな？」

アルステインが呟く。

おそらく相手はマスケットである。

アシュマにしか対処できないと思ったのである。

「アルステイン様！」

アーチエルが耳ざとく、聞き咎める。

アーチエルも同じ事を考えている。

だが、それではいつもの危ないことはアシュマに任せるの論法に従うことになる。

許せないことだった。

「ああ、済みません。アーチエル様。でもアシュマ君は出る気ですよ?」

アルステインはしれつとして言う。

そう言うアシュマを見てみるとゴンドラに乗って出撃する様だ。

アーチエルはびっくりした。

「あつ、アシュマさま!」

アーチエルが慌ててアシュマの下に走り寄る。

アーチエルが袖を引っ張る。

アシュマがアーチエルを見る。

「アーチエル。大丈夫だ。直ぐ戻ってくる」

アシュマが優しい目をする。

アシュマがアーチエルに近づいていく。

ゴンドラでキスを交わす二人。

もう何度目だろう。

こうやって、愛しい人を送り出すのは。

その度にアーチエルは泣きたい様な感情に、胸を掻きむしられる。

アシュマはその度に、申し訳ない様な気持ちになる。

「行ってくる」

アシュマが言う。

「行つてらっしゃいまし」

アーチエルは、切なくも愛する夫を見送る。

アシュマは、ゴンドラに乗って、機上の人になった。

アシュマは鬼虎に気を集め、一気に引き抜く。

幾線条もの光の条が、オロの艦隊に向けて放たれる。

艦隊の直前で、アシュマの気弾が弾かれる。

矢張りアシュマの攻撃も、通じない。

が、そこで敵の念導境界面のキャパシティが、オーバーフローするの、ノリトレア統合軍の砲撃があたる様になる。

徐々に落ち始める、オロ艦隊。

アシュマが再び刀身に気を集め始める。

「正にお前がいると、厄介だな」

頭の上から、言葉が浴びせかけられる。

ウフェイトウだ。

他の団員達もいる。

「良いのか？ こんな所にいて？」

アシュマが訊く。

「艦隊の護衛か？ 構わん」

ウフェイトウはアシュマ討伐の許可をオロからもらってある。

艦隊との行動を別にすることも許可をもらってある。

アシュマに集中して良いのだ。

「オロの命令は絶対なんだろう？」

アシュマはそれを知らない。

オロの命令とは艦隊の護衛だと思っている。

「オロ様自体は、途中で帰られた。艦隊も随時撤退する。こんな所で無駄に戦力を削がれるのも癪に障られる様だ。だから私は、お前と十分に決着を付けられる。この間見せられた、剣の正体も気になるしな」

ウフェイトウの言った剣の正体。

それは、

（無想活殺の事だな？）

アシュマは、そう思った。

だが、秘奥義を、そう何度も見せる訳には行かない。

アシュマは秘剣・流星で対峙する事に決めた。

他の七人のマスクド達は、アシュマとウフェイトウの戦いを見ていた。

が、オルバニアン、アルミナ、シュンマ、レンヌ、ジークフリート、ビツシュ、ガンロク等が魔法、ウィングで飛んできた。

「おお！ やって来たか我が標的よ」

ナイゲルと呼ばれるマスクドが、オルバニアンに向けて吐いた言葉だ。

あくまでオルバニアンを始めとする人間は標的とされた獲物だった。

「何を言ってやがる。天敵の間違いだろ？」

オルバニアンが揶揄する。

獲物と言われた反発もある。

「人間風情が、何を言ってやがる」

ナイゲルが言い返す。

マスクドにしてみれば、獲物が何を言っているのかという感がある。

人間は獲物なのである。

自分達と対等に話し合える立場にはないのである。

「その人間風情に、苦勞しているのは何処の誰だよ？」

オルバニアンが指摘する。

確かにマスクド達がオルバニアン達に撃退された事も事実である。

「何を言うか！ この小童こわっぼが！」

ナイゲルがオルバニアンに向かって叫ぶ。

その言葉をを合図に、各所で戦いが始まった。

あたりは正に、乱撃の様相を見せていた。

その中で、一つの組が、静けさを保っていた。

アシュマとウフェイトウである。

ウフェイトウが、剣を抜いているのに対して、アシュマの鬼虎はまだ鞘のうちにあった。

ウフェイトウは、前回の戦いで、自らは傷つきつつも、秘剣・流星に関して恐れを抱かなくなっていた。

相打ち覚悟で戦えば、こちらの方が有利なのだと悟ったからだ。

もう、ウフェイトウは、脳天からの真っ向唐竹割しか、頭に無かった。

アシュマは秘剣・流星でその事が分かったが、よけられる物ではない事を悟った。

その上で、秘剣・流星を使ってウフェイトウの首根を断つか。

しかし、アシユマは、この場で死ぬ訳にはいかない。

ここに、アーチエルが居ないから、復活ができないからだ。

アシユマは迷った。

それが剣に現れる。

「どうした？ 迷いが見えるぞ？ 死に臆したか？ アシユマ・ア
トーよ」

ウフエイトウが^{かさ}高に懸かる。

勝ちと思った。

迷いの者に対して勝ちを得ないはずがない。

「臆する事もあるうよ。人ならばな」

アシユマはそう言った。

しかしアシユマはオリジナルナンバーと呼ばれる人造人間。
イムフレーレに創られた者。

それがアシユマ。

「人というか。自分をして、人というか。笑い話にもならん」
それをウフエイトウが笑う。

アシユマの出自を知っているのか。

「笑わば、笑え」

そして、依然アシユマは迷っていた。

秘奥義、無想活殺を使うかどうか。

いまは、秘剣・流星を見切られかけている。

そして以前は秘奥義を使って逃げられた。

そして、もし秘奥義まで見切られたならば、アシユマに勝ちは無
くなるのではないか？

その様な事が頭をよぎる。

「参るぞ」

アシユマはウフエイトウのその言葉で迷いを捨てた。

今ここで、秘奥義を使わねば、命が断たれる。

アシユマは秘奥義、無想活殺を使った。

一剣が万剣となり、万剣が一剣に帰る。

明鏡止水、無想剣。

周りの物と一体となり自らを同化させる。

無想の一刀が相手を屠る。

故にアシュマ最強の技と言えた。

最早、位と言っていいだろう。

この境地に達する者は、中々居ない。

一瞬にして周りの雰囲気が変わる。

ウフェイトウはそう思った。

回りの様子が変わると分かったただけ、それだけでも達人級だ。

普通の者には、それが分からない。

ウフェイトウは、何かが起こると直感した。

ウフェイトウの勘が、何かが危険だと察知させた。

味方の艦艇は全て安全圏に逃げた。

これ以上ここに居る意味もない。

「皆の者！ 引き上げじゃあー！」

ウフェイトウが叫ぶ。

「何だ！ ウフェイトウ！ あと少しだったのに！」

ナイゲルが愚痴を言う。

ナイゲルはオルバニアンと対戦していた。

罅迫り合いをしている。

「ここに居れば、アシュマが皆を食ろうてしまう」

ウフェイトウは危機感に苛まれていた。

それも普通の危機感ではない。

最大級の危機感だ。

今のアシュマはその様な状態だった。

「それは言いすぎだ。ウフェイトウよ！」

ギバが言う。

分かっている者は疑う。

アシュマの恐ろしさに。

「嘘だと思う者はアシュマと戦ってみよ」

ウフェイトウが憤る。

「いいのか？」

ギバが本気に取る。

アシュマと戦うまたとない機会だ。

「冗談だ。本気にとるな。だが、アシュマが皆を食らうてしまうのは、間違いない」

ウフェイトウが前言を撤回する。

仲間を想つての事だ。

「冗談では済まされねえぜ！ マスケドが、一度言つた言葉だ！！引つ込みはつかねえぜ！！」

ギバがウフェイトウに迫る。

マスケドの誇りにかけて戦おうとしている。

「ギバ……死ぬぞ！？」

ウフェイトウが忠告をする。

ウフェイトウは止めようとする。

ギバの腕ではアシュマに敵わないだろう。

「それも悪くねえ！ 太く短く！ それもまた人生！ かなり豪快な性格の様だ。

自分の生き死には感知していないようである。

「さあ、いざ戦わん！ アシュマとやら」

そしてギバなるマスケドはアシュマに振り向く。

ウォーハンマーをぶら下げている。

「ウフェイトウの言つた通りだ。死ぬぞ？」

アシュマも同じ事を言う。

まず、負ける気がしない。

アシュマにとっては小者だ。

「口より腕を動かせ！ もう戦いは始まっている！」

そう言つてギバはウォーハンマーを振り回す。

かなりの強力きつうりきの様だ。

アシュマは秘剣・流星を使った。

ギバは途端に動けなくなった。

アシュマは、ただそこに佇んでいた。隙がある様で隙が無い。

動けば斬られる。

そんな錯覚に、囚われた。

だが、事実には思えた。

(アシュマと言う者は、ここまで使う奴なのか)

ギバはそう思った。

「どうした？ そのハンマーは飾りか？」

アシュマは、ギバを挑発する。

「おのれ！ 小僧！ 言わせておけば！！」

今の一言で、ギバは冷静な判断力を失った。

「待て、ギバ！ 奴の誘いだ」

ウフェイトウが指摘する。

しかしギバは突進した。

アシュマは居合いから、鬼虎を抜いた。

ギバは胴を存分に撫で斬られ、激痛に歪んだ顔をこちらに振り向かせ、そして頭蓋を水平に斬り割られた。

「ギバ……」

ウフェイトウは、残念そうに呟いた。

皆暫く無言のままだった。

あまりにもアシュマの手並みが鮮やかなので、何も言えないのだ。「ウフェイトウの言う事だ。あの通り嘘ではない。ギバの事は残念だが、帰ろう」

レトウというマスクドが、声を出す。

そして、マスクド達は、去って行った。

「本当に恐ろしい奴らだぜ。まったく、もう。途中でアシュマと戦っている様な錯覚に陥るぜ。強すぎて」

オルバニアンがばやいた。

オルバニアン等にとっては、マスクドは強敵だ。

アシュマは、マスクの飛び去った方向を、見ていた。

第六節 迷いのアシユマ

オロは、バヴェルが出来上がるまでの『繋ぎ』として、殻兵器の製造に乗り出した。

長らくオロは、殻兵器を製造できないで居たが、アヘイビア崩壊後、その技術者がオロ・エバス国に大量に入り込んできた。

これが為に、オロ・エバス国は、殻兵器の実現化に成功した。だが、これを兵器とするのには、致命的な弱点が露呈した。殻兵器には脳核を必要とする。

それが、人間の生身の脳でも、クローンの脳でも。

その脳核がミサイルなり、砲弾なりに詰め込まれたとする。問題はここからだ。

その、脳核が詰め込まれた砲弾なり、ミサイルの発射の時の加速度に、耐えられないのだ。

それが故、只の爆弾を作る事になった。

だが、それが馬鹿にならない。

一旦、空港なり港なりが、検閲をすり抜けると、これはもう大変だ。

少し大きめの電子ジャーの様な物が、都市を一つ丸ごと、占拠出来るのだ。

こう言う事態になると、大変だろう。

街はパニックになり、大混乱に陥るだろう。

それがもし、王宮市で起こったなら？

クリスタルパレス

都市機能は麻痺し、それは全国へと波及するだろう。

いざとなったら爆発させても良い。

これを受けて、オロは殻兵器の量産化を始めた。

ほぼ全て、爆弾型の殻兵器だ。

出来上がりのはやはやの殻兵器を持って、海原に行く事になった。行く事になったのは、勿論マスケド……エルファの騎士団を率い

るウフェイトウ、そして以下七名のマスク達だった。

途中までは船で、そこから先はボートで海岸線を目指す、エルフアの騎士団。

夜の闇に隠れる様に、ノリトレアの浜に近付いて行った。

そして殻兵器を持って、浜から上がった。

「誰かに見られてるって事は、ねえよな？」

シャケルウが、周りを見ながら言う。

辺りは暗い。

波の音だけが響いている。

「何ビビッてんのさ！ 男だろ？」

紅一点、イラが言う。

マールは死んでしまったから、女性はいら唯一人になる。

「別に、ビビッてななかねえよ！」

シャケルウが返す。

からかわれて頭に來たのだ。

声大きい。

「無駄口を叩いてないで、行くぞ！」

ウフェイトウが、皆を引き締めた。

時間は少し、さかのぼ遡る。

マスク達が來た事を感知した人間がいた。

デューヌ・アデュニ王子である。

それを、アルステインに忠告しに、王宮にやって來た。

デューヌは、直ぐに通された。

そして、アルステインの前で言う。

「ノリトレアに殻兵器が持ち込まれた」と。

「それは本当ですか？ アデュニ王子」
アルステインが尋ねる。

事実であれば由々しき事態だ。

オロの手のものだろうか。

やるとすればマスクドか。

「おそらくは。東の浜……そうですね……マクリイナの浜辺りに上陸するでしょう」

ディーヌ王子がその不思議な感応力で答える。

マクリイナと言えば首都王宮市に程近い。
クリスタルパレス

「刻限は？」

アルステイーンは訊く。

大事な事だ。

近い場所に上陸するということは時間が決め手だからだ。

「もうそろそろ……」

ディーヌ王子がばつが悪そうに言う。

時間はない。

予知が役に立たないかもしれないのだ。

「そ、それでは、間に合わないのでは？」

アルステイーンが思わず零す。

対策の打ち用がないのではないか。

「済みません。使えない予知で」

アデュニ王子は、自らに嘆息した。

アルステイーンは慌てて、

「いえ、それはそれで、重要な情報ですから
と、慰める。

それが却って気を削ぐ事になり、

「済みません」

と、ディーヌ王子は小さくなる。

「で、王子、その者達は何者ですか？ まさか……」

アルステイーンが危惧する。

「ええ。そのまさかです。エルファの騎士団……マスクドです」
アルステイーンの危惧は当たってしまった。

マスクドが来るとなると、少し厄介だ。

「その目的は？」

アルステインが訊く。

「この王宮の破壊です」

「ふわぁあああつ。まだ眠みーぜ」

オルバニアンは眠そうだ。

まだ朝には程遠い。

眠っているところを起こされたのだ。

いつも眠いところを起こされているような気がする。

「あんだよ、こんな時間に呼び出しやがって」

ここは王宮、アルステインの施政室だ。

執務室とも言う。

皆集まっている。

「殻兵器を持って、エルファの騎士団が来ます」

アルステインが言う。

「あん？」

オルバニアンが呆けた顔をする。

「だから、殻兵器を持って、エルファの騎士団が来ます」

アルステインが丁寧に教える。

「……………」

「……………」

「あんだって!？」

オルバニアンが訊き返す。

「だから、エルファの騎士団ですよ」

何度もあるステインが同じ事を言う。

「あんだって!？」

耳に手を当てる。

「だからエルファの……………」

「んな事あ分かっているよ！！ 最近あいつらとばっか戦ってねえか！？ 命がけなんだぜ！？ こちとら！！」

オルバニアンが喚いた。

憤ったのだ。

話は尤もだ。

マスクドと戦っているのである。

「オルバニアン、とり合えず話の先を聞きましょう？」

アルミナが言う。

このままでは話が続かないのである。

「うんな事、言っただってよう……」

オルバニアンが困った顔をする。

「いいから！」

アルミナが目を瞑って怒る。

「お、おう……」

オルバニアンが気圧される。

「では行きます。エルファの騎士団は今から二時間程前、マクルイナの砂浜からこの国に侵入。殻兵器を持って、この宮殿を目指しています」

アルステインが説明をする。

マクルイナから二時間経ったということはもう王宮の近くまで来ているということだが。

「その情報は、何処から出たのじゃ？」

キュポアが何気に訊く。

「デイーヌ・アデュニ王子の予知です」

アルステインが説明を重ねる。

「成程。で、その先の予知は、どうなっておるのじゃ？」

「見えないそうです」

「……え？」

「見えないそうです」

「なんじゃ！ それでは駄目ではないか？」

キュポアが声音を高くする。

役立たずとも思っているのだろうか。

「そんな事は無いと思いますよ？ キュポアさん」
シユンマが優しく諭す。

「何故じゃ？ シユンマ」

キュポアは納得が行かない。

敵は上陸している。

二時間も前に。

しかも首都の目の前に。

殻兵器を持つて。

間に合わないではないか。

「この国に殻兵器が持ち込まれたか、持ち込まれていないか。敵は誰だかが分かっているだけでも、その分だけこちらに有益に、事が働きます」

シユンマは丁寧にキュポアに説明を加えていく。

「そうなのかのう？」

未だにキュポアは納得が行かない。

不安要素だらけだ。

「まあ、いい。どうしたらいい？ アルステイン」

そんなキュポアをよそに、アシユマが質問をする。

横でキュポアが嫌な顔をする。

「もう直ぐ、宮殿の大広間にマスクド達が来ます。そこを拠点にする為にです」

アルステインが情報を開示する。

専らディーヌ王子の受け売りだが。

「バカか？ 何で拠点なんか作る必要があるんだ？」

オルバニアンが頭を捻る。

「攻め手の中心を、決めたかったんでしょね。殻兵器を置く場所の」

アルステインは腕を組んで考える。

目を瞑る。

「はん！ 何が攻め手の中心だい！ 賊のくせして」

殺人集団風情が何を言うのか。

マスケドも、オルバニアンに掛ければこついう事になるのかもしれない。

「じゃあ、早速待ち伏せしましょうか？」

頭の切り替えも早くシュンマが言う。

「あんた、良いのかい？ 王族のくせして……」

オルバニアンが言う。

先日、シュンマは略式だが王になった。

もう、国のトップなのである。

もしものがあれば国は大混乱である。

しかも敵はあのマスケド。

命を失う可能性が高い。

そんな男が戦おうというのである。

指摘されて当然だった。

「ああ、そうだった。僕はもう、手出しできなかったんだ。ああ、あのレトウとか言う人と決着が付けられなかった事が心残りです」

好戦的なこの王は残念がってみせる。

実兄のアルステーンと違って、元々几帳面な性格なのだろう。

何かやり残しがあると気になるのかもしれない。

「シュンマ！ お主はそんな事を言っ……！」

キュポアが怒ってみせる。

座がどつと沸く。

本人は不本意だ。

心配しているのである。

それをみんなして笑うとは何事か。

「それを言うなら、レンヌも王族だぞ？ しかも次期王位を継ぐ身だ」

リイナが言う。

ディーヌ王子が王位継承権を放棄した今、アールヌー国の王位を継ぐのはレンヌと言う事になる。

戦線に出す訳にはいかないと言いたいのだろう。

「リ、リイナ！ いま、そんな事を言わなくても……」

レンヌが慌てる。

レンヌは今戦線を離れることに気後れしていた。

申し訳ないと思っているのだ。

「そうだなあ。レンヌも戦線に引っぱり出すのは危険と言う訳か」
アシュマが言う。

そして考えこむように腕を組む。

「そ、そんなアシュマさん……」

レンヌがおろおろとアシュマに手を伸ばす。

その時シュンマが、

「僕の役目、引き継いでくれませんか？ アシュマ様？」
と、願い出た。

「うむ。仕方なかる」

と、アシュマが言う。

すると仕方なさげに、

「アシュマさん僕の方も宜しくお願いします」
と、レンヌも言う。

矢張り心残りのようだ。

「二人とも殊勝で宜しい」

アシュマが頷く。

すると今度は、アーチエルが、

「また、アシュマさまは、危ない事を背負い込んで！」
と、怒る。

また、座がどつと沸く。

矢張りアーチエルも不本意だ。

皆をして笑うとは何事か。

危ない目に遭うのはいつもアシュマだ。
そう思う。

「まあ、リラックスするのはここまでとして、ここからは気を引き締めて行くぞ？」

アシュマが場を引き締める。

ここでは、皆が忘れている。

本人ですら忘れている。

そう。

オルバニアンもまた王族である事を。

エルファの騎士団が、王宮の前に現れた。

マスケド達だ。

人気は無い。

王宮の大広間までは、道筋が多少複雑になる。

が、マスケド達には、関係ない。

魔法ウィングで、ひとつ飛びだ。

だがおかしいのは、その反応だ。

いや、言葉を変えよう。

反応がなさ過ぎるのだ。

ウフェイトウは、嫌な予感がした。

が、ここまで来た以上、やるしか無いのである。

何せこちらは、殻兵器を持っているのである。

下手に手出しは出来ない筈である。

そうこうしているうちに、宮殿の大広間がある建物の前に来た。

扉が大きい。

その扉を開いて、大広間の中心に進む。

妙な気配がする。

「どうした？ ウフェイトウ？」

レトウが訊く。

ウフェイトウの様子がおかしい。
黙って辺りを見回している。

「いや、何か妙な気配がする……」

ウフェイトウが歩みを止める。

そしてやはりあたりを見回す。

気になるらしい。

「臆病風に吹かれたか？ ウフェイトウ？」

レトウが揶揄する。

怯える頭目についていつて良いのか。

疑問がわく。

「そうでは無い。お前達は感じぬのか？ この気配」

ウフェイトウが妙なことを言い出す。

気配？

気配など感じぬ。

レトウはそう思う。

「いや……？」

レトウは気配など感じなかった。

ウフェイトウが臆病風に吹かれているだけだと思っていた。

「そうか、それならば……」

ウフェイトウが言いかけたところで、

「いんや、その感じ、間違っちゃアいねエぜ」

と、声が聞こえてきた。

「何だと？」

今、入ってきた扉と、マスクド達を遮る様に、立ちはだかったの

は、オルバニアンとアルミナだった。

「き、貴様ら……」

一斉に注目が集まる。

「自分達が強いと思って、気配に気付かねえたあ、ちったあ、甘くはねえか？」

オルバニアンが伝法に話す。

マスクド達の油断を指摘する。

「おのれ、言いたいだけ言いおつて……」

ナイシーが怒りの声を上げる。

「もつと言つて欲しいか？」

オルバニアンが挑発する。

「人間風情が……」

それが本音だったろう。

ただの人間ごときに馬鹿にされていい気はしない。

我らは誇り高きマスクドだ。

人間とは違うのだ。

「その人間に、いつも退散させられている奴らの、言つ事か？」

オルバニアンが指摘する。

マスクドが人間に圧されている。

認められないことだった。

「お前に追いつ返されている訳じゃあねえぜ？ あのアシユマとか言う『鬼を持つ者』に、追いつ返されているだけだ！」

ナイシーが言い返す。

人間ごときに追いつ返されたらと会つてはマスクドの立つ瀬がない。言い訳が欲しかったのだ。

「んだとう？」

オルバニアンは憤った。

その時アシユマ以下全員が揃った。

シユンマとレンヌはいなかったが。

「オルバニアン、冷静になれ」

アシユマが言う。

相手の手に乗るなと言いたいのだろう。

オルバニアンは慚然とした表情で黙った。

「おや？ 今日は、あの小僧がいないな？」
と、レトウ。

「『あの小僧』？ シユンマの事か？」

オルバニアンが言う。

「そういえば、こっちの坊やもないよ？」
イラも言う。

「こっちの坊や？ レンヌの事か？」

オルバニアンがわざわざ応えてやる。

「ああ。そうそう。その坊やよ」

イラが反応する。

「今日は二人とも欠席だぜ？」

「け、欠席？」

イラが目を丸くする。

戦う相手が居ない。

マスケドとしては存在価値を失ってしまう。

「ああ。欠席」

オルバニアンは澄ました顔で言う。

「なんで？」

「そりゃあ……」

「オルバニアン！ 言わなくて言いの！」

アルミナが注意する。

いう必要はないのだ。

オルバニアンは人がよすぎる。

アルミナは呆れた顔をする。

「あ、そうか。ま、俺一人いれば、大丈夫だって事さ」

オルバニアンが胸を張る。

「ウフェイトウ。この通りだ。相手がなくなった。アシユマと戦わしてくれ」

レトウが頼み込む。

「それは駄目だ。レトウ。掟に反する。今回は見学でもしている」
ウフェイトウがそれを禁ずる。

もうこれ以上アシユマの犠牲になって団員が死ぬところを見たくはなかった。

それほど団員とアシュマの腕の差は歴然としている。
敵わないのだ。

「俺は無視かい!!」

オルバニアンが怒る。

「ギバ等は戦ったではないか!」

一方でレトウも怒る。

武を重んじるマスクドとしては強い者と戦いたいのは仕方が無い
ことだった。

それを禁じられたのだ。

反応としては分からなくはない。

「だからこそだ。もうこれ以上優秀なマスクドを、失う訳にはいか
ん!」

ウフェイトウは依然として団員の戦いを拒否する。

「もう終わったか?」

アシュマが問う。

「ああ。終わった」

ウフェイトウが答える。

「そうか」

アシュマが気だるそうに言う。

「待て。今回お前達は手が出せない。何故なら……」

ウフェイトウはこれで優位にたとうとしていた。

ところが……、

「殻兵器があるからか……」

アシュマが指摘する。

多少、ウフェイトウの顔色が変わる。

が、優位であることには代わりがないと思い、

「我々とアシュマ、お前は平気だろうが、他の者は一たまりもある
まい」

と、言い張った。

マスクドは殻兵器の光から逃れ得ることができるとでも言うのか。

ウフエイトウはその事を匂わせた。

「卑怯だぞ！ マスケドは正々堂々と戦う事を、旨とするんじゃないやなかつたのかよ！？」

オルバニアンが叫ぶ。

「これは戦略だ。卑怯等と言う物ではない」

ウフエイトウは、さも当然の様に言う。

いや、そう言わざるを得なかつたのかもしれない。

誇り高き者と呼ばれる彼らがこんな事をするには言い訳が必要だつたのだらう。

「それでも、マスケドかよっ！」

痛いところをつく。

ウフエイトウの顔色が変わる。

「……………」

ウフエイトウが黙る。

「正々堂々と戦えッ！！」

オルバニアンがとどめを刺す。

「よかるう」

ウフエイトウが応える。

「ではお前との戦いは、我とだな」

オルバニアンの前に、ナイゲルが剣を抜き、立ちはだかる。

「確かオルバニアンと言つたな」

ナイゲルがオルバニアンを見据える。

「そつちこそ、確かナイゲルと言つたな。もうそろそろ、お前との対戦も飽きたぜ」

オルバニアンも逸鉄を抜く。

「それはこちらの台詞よっ！」

ナイゲルは剣を上から振り上げてきた。

それをオルバニアンが逸鉄で受け止める。

そのまま鏢迫り合いを行う二人。

「いつもながら見事な刀だ。その刀でなければ、刀ごとへし折って、

我が『人馬鬼』をお前の頭蓋に、叩き込めるものを」

罅迫り合いのままナイゲルが言う。

罅迫り合いはオルバニアンにとって分が悪い。

地の力が違うのだ。

押し込まれる。

「おいおい、見事なのは刀だけかよ？ ……俺の腕も認めてくれよ」

それでも耐えてオルバニアンが言う。

「……そうだな。それは否定はせん！」

そう言ってナイゲルは脚でオルバニアンの腹部を蹴ってきた。

「ぐっ！」

よろけたオルバニアンに上段からの攻撃が迫ってきた。

「舐める……なあっ！！」

オルバニアンは、上段からのナイゲルの斬撃をかわして、胴を抜いた。

だが、ナイゲルの強力な念導境界面に阻まれて、ナイゲルを斬る事は出来なかった。

「ち！」

オルバニアンは悪態をついた。

二人は振り向いて対峙した。

距離は遠間。

徐々に間合いを詰める

「俺の胴を抜くとはな……初めてだ。このような相手に出会ったのは。嬉しいぞ、オルバニアンとやら」

ナイゲルがにやりと笑う。

マスケドの本懐だ。

オルバニアンは強い。

剣技だけで言ったら自分に匹敵する。

幸せだと思った。

そして、惜しいとも思った。

相手はただの人間なのだ。

「へん！ 上段から、物を言う様な事しやがって、今に吠え面かくなよ」

オルバニアンは反骨精神が出た。

オルバニアンはそういう所がある。

変に威張っている者。

人を見下す者。

そう言う人間……この場合人間ではないが、そういう者に反発を覚えるのだ。

「負け犬の遠吠えの様な事を言う」

そう言っただけでナイゲルが片頬を歪める。

実際そう思っている。

最後に勝つのはマスクド、このナイゲル様だとも思っているのであらう。

人間ごときに負けるはずがない。

「負け犬の遠吠えかどうかは、直ぐに分かるぜ」

そしてオルバニアンは何事かをぶつぶつと呟き始めた。

「マジックブレイドか？ 俺には効かんぞ？」

ナイゲルはオルバニアンにそう言い放つ。

オルバニアンは呟きを止めた。

「一体何を出すのやら」

ナイゲルはじりと、間合いを詰めた。

オルバニアンも、間合いを爪先で刻む様に、詰める。

構えはナイゲルが八双、オルバニアンが上段の構え。

「天刀稲妻斬……！」

オルバニアンは、そう呟いた。

逸鉄の剣先が天を衝く。

極端な上段の構えだ。

胴がから空きである。

「それがお前の、必殺の技か」

ナイゲルが言う。

そしてゆつくりと、剣を右の脇構えに移して行つた。
間合いが一足一刀の、間合いになつた時……。

「ブースト！」

オルバニアンが叫んだ。

「ブーストだと!!」

ナイゲルが、矢張り叫ぶ。

「マジックブレイド!!」

「!!」

オルバニアンは、二つの呪文を唱えていて、最後のトリガーキー
ワードを止めていたのだ。

超高速のマジックブレイド。

咄嗟の事で、幾らマスケドでも、対応できなかった。

「うがあっ!!」

ナイゲルは袈裟に斬られた。

血が吹き出す。

「うつ、ぐっ……見事だ……」

ナイゲルが瀕死になりながらも言葉をかける。

それはマスケドであるが故の生命力だった。

「はあ、はあ、はあ……」

オルバニアンに気はもうない。

「……気力を使い果たしたか……俺も……」

そう言つてナイゲルが、回復しようとしたその時、オルバニアン
が馬乗りになつて、ナイゲルの首をねじ斬ろうとした。

袈裟に着られたナイゲルは、気力をまだ回復していなかったの
である。

「ぐひゅる! ぐぶっ! やめ……ごぶっ!!」

オルバニアンは返り血を真つ赤に浴びながらナイゲルの首をねじ
斬つた。

「首、取つたりい!!」

オルバニアンが叫ぶ。

一瞬皆の動きが止まる。

が、次の瞬間から、又、斬り合いが始まった。

周りは混戦模様だ。

「ええい！ これでは埒があかん！ 殻兵器用意！」

ウフェイトウが叫ぶ。

「アンタ卑怯よ！ 自分が負けそうになると、殻兵器なんか取り出して――！」

今度はアルミナが叫ぶ。

一瞬ウフェイトウが反応する。

後ろめたいところがある。

「今回の我々の任務は、殻兵器の使用だ。お前達と戦う事ではない」
ウフェイトウが言い訳する。

「な・な・な、ぬわんですつてえ――！」

アルミナの頭に血が上る。

正々堂々としたマスクドはどこへ行ったのか。

「俺も失望したぞ。ウフェイトウ……」

アシュマが言う。

誇り高いマスクドとは思えぬ行動だ。

「何とでも言え。マスターの命令は絶対なのだ。レトウ。殻兵器を起動させる」

ウフェイトウが命じる。

「は」

レトウが殻兵器を前に出す。

「もう、その殻兵器は使えません」

その言葉が大広間に響いた。

使えないとはどういう事なのか。

「なに？」

ウフェイトウが言葉を発する。

事と次第によっては捨ておけない言葉だったからだ。

「あなたは、確か、アルルマ・サンファと言ったわね？」

アルミナがその姿に言葉を発する。

「ええ。アルミナさん。その殻兵器はもう使えません。私がその様に致しました」

アルルマ・サンファが言葉を発する。

「馬鹿な！ レトウ！」

ウフェイトウが確認を取る。

「駄目だ！ ウフェイトウ！ 起動しない！ うんともすんとも言わないぞ！」

そんな馬鹿なことがあつてたまるか。

レトウが叫ぶ。

「何だと！？ 貸してみろ」

ウフェイトウが動かこうとする。

「おっと動くな。ウフェイトウ。俺の鬼虎が貴様の首を狙っているぞ」

アシュマが宣言する。

「う……」

ウフェイトウが唸る。

「大人しく帰れば良し。さもなければ……」

アシュマは秘剣・裏・閃光一刀・崩しの構えを取った。

「……………」

ウフェイトウは黙ってしまった。

殻兵器は動かない。

アシュマには狙われる。

良いところがない。

「どうする？ ウフェイトウ」

レトウが訊く。

「皆の者、退くぞ！」

ウフェイトウはとうとう宣言した。

「……………」

イラが黙る。

「どうした!？」

「ナイゲルをそのままにして退くのですか？ ウフェイトウ
イラが責め立てる。」

「安心しろウフェイトウ。お前の仲間の亡骸は、ちゃんと俺が埋葬
してやる」

アシユマがそう言った。

「わかった。者供、退くぞ！」

そうして、マスクド、エルファの騎士団は去って行った。
アシユマがオルバニアンの側に来て、

「よくやったな」

と、言った。

アルステイーンは国元連を通して、オロ・エバス国以下連合国側
に対して、ドメル条約を根拠とする穀査察を要求した。

オロ・エバス国は、ドメル条約に加盟していないから、査察を受
け入れる根拠は無いが、連合国側は、条約の下査察団を受け入れる
必要がある。

が、これを嫌った連合国側は、次々と国元連を脱退。

理由は、

「国元連は最早、国家間の平等の話し合いの場で無くなった」
からだと言う。

当然査察は無視された。

逆に言えば穀兵器、若しくはそれに準じる兵器を持っている、と、
言う事になる。

しかし、レキシタニア、ノリトレア以下、オロの魔手に関わって
いない国々からの激しい非難の中、オロは穀兵器を使う事を控える
事となる。

さて。

アルルマ・サンファである。

この間のマスクドによる殻兵器テロだが、何故殻兵器が無効化されたか。

彼女はこう話す。

「殻兵器に対して語りかけた」と。

つまりは殻兵器自身に語りかけて、殻兵器を発動しないで欲しい。こう言う事らしいのである。

流石はテレパシストと言った所か。

不思議な少女だった。

雰囲気は、どこか、アーチェルに似ていた。

そして、レンヌとシュンマ。

彼らは今まで当たり前の様に戦ってきたのだが、それぞれ王位を継ぐ嫡流、嫡子なのだ。

一つ間違えば、国が危うくなる。

そういう意味合いで、レンヌとシュンマは、今度から戦いから外される事になった。

「何か釈然としないなあ」

そう言ったのはレンヌだ。

「僕もそうなんですよ」

と、シュンマも言う。

「くふふふ。こっちにいらっしやうい」

アルステインが、手招きする。

「僕の気持ち、嫌と言う程分かりますよ？」

アルステインがにんまりと笑う。

オロは、暫らくノリトレアにこだわるのを、止めた。
オロ流に言えば、コストに見合った成果が出ていないとの事。
なので、ノリトレア以外で、未だ手付かずの国々を、平らげる事にした。

つまりはオロは、ノリトレア統合軍を無視して、他の諸国を征服するのに専念する訳だ。
暫らくは。

オロが先ず攻めるは、リスパダハル共和国。

ここは天然資源、鉱物、魔導石をよく産出する。
言わば、天然資源の宝庫だった。

これを奪い取らない訳がない。

オロの魔手は、リスパダハルを鷲掴んだ。

オロの艦隊・魔導騎兵が雲霞の如く沸き起こる。

嵐が孕む黒雲の様だ。

魔導騎兵に至っては、数は二十万を下るまい。

最初は艦対戦だ。

お互い砲を打ち合う。

届くのは専らオロの艦だ。

すでに緒戦で負けが見える。

段々砲撃が激しくなる。

リスパダハルの艦艇は翻られものだ。

徐々に攻撃力を奪われて行く。

意図的に。

見せたいのだ。

圧倒的な力を。

オロは。

リスパダハルに。

そして、屈服させたいのだ。

リスパダハルの民を。

心を。

身体を。

精神を。

折ってしまいたいのだ。

残虐な遊戯だった。

権力を持つ者だけが許される、血の遊戯。

オロは自らの艦隊の行動に、愉悦し酔っていた。

自分の手が動く。

その通りに艦が動く。

その通りに敵を葬る。

これ程愉快的なゲームが、あろうか。

もう一度言う。

オロは酔っていた。

リスパダハル共和国は落ちた。

民も落ちた。

オロの手に。

オロは、リスパダハルの支配者となった。

血の粛清が始まった。

それも、オロの遊戯でしかなかった。

リスパダハルの潤沢な地下資源が、次々と湯水の如く、オロ・エバス国に流れて行く。

そしてその資源は、バヴェル建造に使われるのだ。

オロはリスパダハルに、代官（監察官）を置いた。

オロは益々栄えた。

例えば一体幾人の人間が、バヴェルを建造していると、想像できるだろう？

間近にバヴェルを見た者が、何人いるだろう？

バヴェルは地中深くで、建造されているのだ。

全容を知る者等、誰もいない。

そう、オロでさえ、全容を見る事が出来ないのだ。

ただ、自分の机の上にある、立体映像の出来かけのバヴェルしか。

バヴェルは実の所、六割方七割方が出来ていた。

驚くべき早さである。

八千メートル級の山をひとつ作るのに等しい。

一体どれほどの人材と資材が使われたのか。

金も必要だったろう。

恐るべし、オロの財力。

稼動自体なら、問題は無いだろう。

だが完璧主義者のオロは、勿論完成を待った。

オロは次に、目標を決めた。

東南海洋連合国家群である。

それを知った東南海洋連合国家群は、恐怖した。

リスパダハルの惨状を見て、恐怖したのだ。

多くの血が、流された訳ではない。

国民の威厳と、誇りを踏みにじられた事に、恐怖したのだ。

東南海洋連合国家群は、ノリトリア以下統合軍に、救援を求めてきた。

ノリトリアはこの事を、直ぐに承諾。

艦隊派遣を、すぐさま決めた。

東南海洋連合国家群の東の海で、会戦が行われ様としていた。
ノリトレアはクーロン共和国、イーハン国との統合軍。

東南海洋連合国家群の軍も、加わった。

軍勢凡そ千。

魔導機兵は十万。

対するオロ連合軍。

艦艇は三千。

魔導機兵に至っては三十万。

「これだけで負けそうだ」

ルー・ウィロン自らが、ポロリと言葉に出してしまった。

まあ、側近には、聞かれなかったが。

しかし、この後衝撃の事実が。

なんと、ノリトレア陣営にとどめを刺すべく、コール、ンアー
ル、プット、ガドラ、ブラ、ポガツサ、の六要塞を引っ張ってきた。
オロ陣営は、ノリトレア近海に居る筈の六要塞を、引っ張ってきた
のだった。

加えてノリトレア陣営は、この六要塞を牽制する為、三要塞を残
してきたのだ。

今となつては、こちらの陣営の三要塞を呼ぼうにも、間に合つま
い。

「しまった！ その手があったか」

嘆くのは、ルー・ウィロン。

肺腑の底から、搾り出す様な声で呟いた。

額には、脂汗が流れ出る。

ノリトレアの総旗艦艦である、ハーティアー三世号から無電が入る。
主はもちろんアルステインだ。

『よ！ おっちゃん元気してる？』

軽く声を掛ける。

「アルステインか。この状況で元氣に出来ていたら、それこそ名
将じゃわい！」

ルー・ウィロンが思わず大きな声を出す。

『じゃあ、名將にさして上げましょう』

未だアルステインは軽口を叩く。

現状が分かっているのか。

「どうやって？」

ルー・ウィロンが訊いてみる。

アルステインがそこまで言うのである。

何かあるのだ。

『まずは全艦でオロ一点に、特攻を掛けます。その時におっちゃんには、そのカリスマで必ず勝てると、皆を鼓舞して下さい』

アルステインはヒントを与えた。

「そうか！ アルステインお得意の、錐の戦法か！」

ルー・ウィロンはなるほど思った。

錐の戦法。

全戦力を以ってただ一点に集中してこれを叩く。

特攻的要素の高い戦法ではあったが、今は効果が高いと思われた。

『その気になった兵は強いです。是非そちらの方、お任せしましたよ？』

そう言つて、無線は勝手に切れてしまった。

「ペテン師め！」

そう吐き捨てると、続いて、

「ペテン師の片棒でも、担いでやろうじゃないか！」

と、まず自らを鼓舞して、それから、

「ノリトレア統合軍の諸君に告ぐ。私は総司令官のルー・ウィロンである……！」

これだけで戦士の士気は、昂ぶった。

「統合軍の諸君。われわれは勝てる！ 嘘を言っているのではない！ 合理的な根拠があるのだ！！ 一見すれば敵の数の方が何倍も居る様に見える。が、しかし！！ 敵はその数が多い故に、分散せざるをえなかった！ 対して我々は、まるで、そう……錐の如く密

集し、彼のオロ・エバス一点だけを、落せばよいのである！！これは何を意味しているか？ 局地的に言えば、我らの状況の方が、有利な事この上ない！！ 大将を失った兵はどうなるか？ 右往左往するだけで何も出来はしない！！ 故に我らはこの戦に勝つ事が出来るだろう！！ 如何か？ 諸君！！」

『おおっ！！』

すでに士気は最高潮に高まり、からとき勝鬨の声を挙げる所すらあった。

「貴方つて、ホント口八丁手八丁で生きてきたのね？ ヨディ？」

エファールが熱い吐息で、アルステーンの耳元に囁いた。

「そんな事ないですよ。現にこうして、兵の士気を上げたのは、ルーのおっちゃんじゃないですか」

アルステーンが返す。

「そのルー・ウィロンを乗せたのは、一体誰よ？」

「あれは、おっちゃんが勝手に乗せられただけで、僕は何もしていませんよ？」

「またあ。この策士」

外ではすでに、散発的な戦闘は行われていたが、本格的にノリトレア統合軍が動き出すと、加速度的に戦闘の頻度が高まって行く。

その中を、これもまたノリトレア統合軍が加速度を付けて、一気にオロの居る旗艦アプラスへと突っ込んで行った。

傷ついた僚機や僚艦はそのままに、生き残っている艦艇だけで特攻を掛けて行く。

傍から見れば、非人道的な作戦だろう。

アルステーンが最も嫌う、戦法に違いない。

が、しかしこのままでは、数に頼んで押し潰されてしまうだろう。だから、敢えてこの戦法を取った。

死中に活を見出したのだ。

猛スピードで、オロの旗艦を目指す、ノリトレア統合軍。

それは正に円錐形の陣取りだった。

アシュマはその最先端に居て、念導境界面を張り続けていた。

まるで、巨大なエネルギーの塊の様である。

オロは慌てた。

軍勢五百の大群が、とある一点、それも、この自分を目指して、突っ込んでくるのである。

「壁を作れ！ 押し包んで、潰してしまえ！」

壁を作ったのは作ったが俄か作りの防壁等、直ぐに蹴散らされ、オロに直ぐに迫ってきた。

しかし、壁として立ちはだかったのは、七人のマスクド、エルファの騎士団であった。

七人の作る念導境界面は、ノリトレア統合軍の突進をとめてしまった。

ノリトレア統合軍は大混乱を呈した。

だが、マスクド達も只では済まず、それぞれ力尽き退いて行つた。この大混乱を収める為に、アシュマは気弾を放つ事にした。

居合いの形のまま、氣を出来るだけ集め、敵の氣を持つ者をイメージし、一気に鬼虎を引き抜いた。

すると幾線條の光の束が、敵に目掛けて曲線を描きながら、次々と撃破して行く。

そして敵も大混乱に陥った。

『ルー！！ 大勢を立て直すのは、今しか無いぞ？』

アシュマがインカム越しに叫ぶ。

「分かった！！ 錐の陣形を立て直せ！ 多少いびつでも構わん！！」

ルーの号令は絶対だ何とか錐の陣形を立て直した。

「このまま突っ込め！ オロにぶち当たれ！」
ルーは号令した。

錐の艦隊は、文字通りオロの旗艦に突っ込んだ。それと同時に、一人才口は、脱出艇で逃げた。なりふり構わず。

恐怖に駆られながら。

オロの旗艦アプラスは、瞬く間に、貪り食われた。

砲撃に、瞬く間に、蜂の巣にされた。

そして、爆散した。

「このまま突っ切れ！」

ルー・ウィロンが叫ぶ。

痛み分けだった。

こっちも、向うも、相当の被害を受けた。

ノリトレア統合軍はそのまま行き過ぎた。

後日、東南海洋連合国家群に、オロの軍勢が攻め込んできた。

イーサ教国側から、攻めてきたのだ。

「よくも私に恥をかかしてくれたな」

オロが言う。

東南海洋連合国家群は、瞬く間に攻め取られた。

東南海洋連合国家群は、オロの恨みもあつてか徹底的に破壊し尽くされた。

その上で街の再建が始まった。

代官を置いて。

東南海洋連合国家群は、オロの手に落ちた。

オロの目は、すでに次の国へと、向いていた。

ノーツ連邦である。

北極を介して隣接しあうこの国同士は、オロ・エバス国がまだ、アヘイビア連邦共和国と呼ばれる頃から、まるで水と油の様に忌み

嫌い合っていた。

双方とも、他に並ぶ物の無い、超軍事大国同士。長らく、均衡が保たれて、緊張した関係が続いていた。その均衡が今、崩れ去ろうとしていた。

ノーツ連邦の国境線にそれは近づきつつあった。

これまでに無い規模で、それはやってきた。それは艦隊だった。

オロの新しい旗艦ンディオとともに。

いきなりの来訪者……いや、侵略者にノーツ連邦は慌てふためいた。

前線は延びきっている。

どこから攻められても、対応できる様に、円周に。

だが、それが仇になった。

オロ連合軍は、堂々と最短距離の北極圏を乗り越えて、一路首都のメシエクに向かった。

途中、散発的に戦闘が起こる。

しかし、そんな物は数で圧倒して、粉碎してしまう。

最早敵無し……そんな形容が似合う。

「余に勝てる者が居るのか？」

そこまで言わしめても、違和感が無い。

オロに、王者の風格が、いつの間にか備わっていた。

ノリトレアのアルスティーン国王が、ノーツ連邦のウーリン書記

長に、救援の話を持ちかけるが、書記長はこれを拒否。

書記長の意地なのか、怨讐なのか。

とにかく、救援を受け付けない。

アルスティーンは迷った。

自国民を投入してまで、助けなければいけない相手なのか？
相手は救援を、拒否しているではないか。

自国の戦力を、温存しておく方が、賢くないか？

自問自答していた。

その答えを教えてくれたのは、アーチエルだった。

「人は皆、等しくあるべきです」と。

この言葉にアルステインは、目が見開かれた思いがした。
早速アルステインは、艦隊の体裁を整えて発進させた。

勿論アルステインが、艦隊と一緒に発進する訳ではないが、しかし気持ちは、一緒のつもりだった。

その想いは、イーハンの王、シュンマも同じだったろう。
シュンマ王。

普段は、穏やかな表情を崩さないが、内に秘めたる熱いもの、闘志というものは隠し切れず、好戦的な王として皆に評される様になる。

また、善政を布く王としても、民に慕われる様にもなる。

その王だが、こっそり旗艦に乗って、発進してしまった。

キュポアは止めたが、止めきれるものではないと判断したのか、一緒に乗り込む事に決めた。

そして、レンヌである。

レンヌは身分としてはノリトレア預かりの身だが、青龍号に乗って発進してしまった。

勿論リイナも一緒である。

さて、戦闘だが、小競り合いが、各所で起こっている。

その数、ノーツ連邦は五百の艦艇、約五万の魔導機兵。

対するオ口連合軍は艦艇は三千、魔導機兵に至っては三十万にもなる。

彼我戦力六対一。

絶望的な数字である。

その上オロはコール、ンアール、プット、ガドラ、ブラ、ポガツサの六要塞を引き連れてきた上に、更に……。

「艦長！ こちらの攻撃が全くあたりません！！」

「何だと！？」

と、ノーツ連邦の攻撃が封じられていた。

これは勿論マスケドの恩恵なのだが、相手にはわからない。

無駄な砲撃を繰り返すだが、逆にオロの艦艇に反撃されて、次々と沈んで行く。

多勢に無勢。

その上こちらの攻撃が効かないとあつては、ノーツ連邦軍としては、堪らないだろう。

ノーツ連邦軍の数は、瞬間に減って行つた。

そこに到着する、クーロン軍五百、魔導機兵五万。

オロ艦隊の背後を突いた。

図らずもオロ軍を挟撃する形になった。

そして、オロの旗艦は、クーロン軍からは、丁度丸見えの位置にいた。

「防壁を作れ！ 余を守れ！ そして敵を押し包んで潰してしまえ」
オロはそう命令した。

図らずもオロの軍勢が、二つの球体になって、敵を押し包んで、その中心にオロがいる所に……。

「第三勢力です！」

オロの部下が報告する。

「第三勢力？ 不明瞭な言葉は使うな」

オロが言う。

物事がはつきりしないと気が済まないオロの性格である。

この言葉はオロの気を逆なでした。

「は。どうやらノリトレア・イーハン統合軍の様です」

「『どうやら』?」

オロが眉をひそめる。

「いつ、いえ、ノリトレア・イーハン統合軍です。わが群の側面をついてきます」

オロの部下が慌てて言い直す。

「側面とは……無防備ではないか?」

オロ自体が指摘する。

この間の二の舞だけは避けたい。

部下に訊く。

「はっ……その様で……」

部下もその事を認める。

「ならどうする?」

オロが問い詰める。

一分の矛盾も許さない。

「は。クーロン人民共和国に充てている兵のうち、五割方割いて、ノリトレア・イーハン統合軍に充てるのが宜しいかと……」

部下は緊張しながら答える。

「では、そうせい」

横柄に部下に指示し、自分は椅子に深く座り込んだ。

オロ連合軍は、クーロン人民協和国軍に割いている兵のうち半数を、ノリトレア・イーハン統合軍へと割いた。

艦首を向けて突進してくる艦隊。

砲撃を開始してきた。

プラズマの光の矢は、ノリトレア統合艦隊の手前で阻まれる。

幾度と無く、見慣れた光景だ。

これの主因は彼にある。

アシユマ・アトーだ。

アシユマの作る念導境界面が、なんと約七百五十の大群の攻撃を、一身に受けている。

それでも彼は、平気な顔をする。

アシユマが凄いのか、鬼虎が凄いのか……。
が、こちらの攻撃も、敵には届かなかった。
マスクドが居るのだ。

マスクドがこちらの攻撃の邪魔をしているのだ。
どこのマスクドか？

言うまでも無い。

エルファの騎士団、オロのマスクドだ。
そしてやって来る、エルファの騎士団団長ウフェイトウ。
魔法ウィングを使っている彼は、アシユマの前に舞い降りた。
美男子である彼は、まるで天使のようだ。

「アシユマよ。こうして出会うのは何度目かな？」

ウフェイトウがアシユマに語りかける。

「さあな」

アシユマはそっけなく答える。

どうやらウフェイトウは、一人で来たらしい。

「他の取り巻き連中はどうした？」

アシユマが訊く。

居ないことに不審感を抱いたようだ。

「取り巻き連中と呼ぶな。それを聞いたら怒るぞ？ 奴ら」

ウフェイトウが部下のことを想う。

が、アシユマはお構いなしに、

「他人事の様に言うな。マスクドの結束は固いと思ったが……」
と、言った。

結束の固い彼らだからこそ別行動は取らないと思っていた。
が、少し違うらしい。

「だから我が一人で、お前の所に来ている」

部下を信頼している口調だ。

「信頼の証という訳か」

アシユマが零す。

分からないではない。

仲間というものはそういうものである。

「そうだ。向うでは、我の帰りを待って、皆で念導境界面を張っている」

ウフェイトウは首肯し腕を組み、アシュマの前に佇む。

「何人掛りだ？」

何人でアシュマに対抗して念導境界面を張っているのかと訊いているのだ。

「六人だ」

ウフェイトウはそう答えた。

当初十三人居たマスクド集団、エルファの騎士団はその数を減らし、七人にまでなっていた。

「そうか」

アシュマが感慨深げに呟く。

一応敬意は払っているのだ。

「さて、やるか」

ウフェイトウが組んだ腕を解く。

「結局そうなるのか」

またアシュマはつぶやく。

残念そうに。

マスクドと言う縛りがなければ、ウフェイトウは稀代の剣士だ。

その剣士が倒れてしまいかもしれないことにアシュマは無念さを隠し切れない。

「当然だ。貴様と我とは宿敵同士。戦い合わなければならぬ運命」

ウフェイトウが言い放つ。

さも当然のごとく。

「誰が決めた？」

アシュマが問いを発する。

アシュマはウフェイトウと……マスクドと戦うことに疑問を持っているようだ。

幾らマスクドは戦う者だからといって、何故自分が戦わなければ

ならないのか。

恨みや曰くがあるわけでもなし、納得が行かない。

「『鬼を持つ者』とマスクドの宿業だ」

ウフェイトウは宿業と言った。

怨みや曰くではない。

宿業と。

それは運命と言っても良い。

「だから何故、戦わねばならん!？」

アシュマが叫ぶ。

「『鬼を持つ者』との宿業と言った!! 我らは『鬼』を持つものと戦うように創られている」

ウフェイトウが返してくる。

「宿業か。くだらん」

アシュマは吐き捨てる。

そんな宿業など無視して良い。

「バヴェルは勿論『物』に違いない。だが、鬼を持つ者は『意思』が在った。邪悪な『意思』が。イムフレールの残した生命体が一度にこの世に生を受けて、それら全てが『邪悪な意思』を持ったのだ。ついでしたことは何か? この世を混沌に落とし込んだのだ! その時我等が平和を築いた」

アシュマは言葉を失った。

正義云々で戦ってきた訳ではないが、自分の出自が破壊の限りを尽くす為に生み出されたものであるといわれれば、それなりにシヨツクもあつたろう。

勿論それは真実かどうか定かではないが。

そして、アシュマは口を開く。

「確かに宿業だな。事実ならば」と。

「事実だ」

ウフェイトウも静かに答える。

「ならば、何故オロに付く。オロは悪を成そうとしているのだぞ？
マスクドの理念に反していないか？」

今度はアシュマが訊く。

オロは悪ではないのかと。

「反しておらぬ。勝手気ままに神の如く破壊を愉しんだイムフレ－
レの生命体に比べ、我らは嚴重に管理された統治者の下、その者を
マスターと仰ぎ心を一にし平和の為に邁進したのだ」

「過去においてもお前たちは正義だったのか？」

アシュマは素朴な疑念が湧く。

「当然だ。マスクドのマスターは絶対！ 悪等では無い！ 今も過
去も」

「マスクドの目は節穴か？」

「なに？」

「現実を良く見ろ」

アシュマの言葉にウフェイトウは多少気分を害したようだ。
顔を歪めてみせる。

「少し喋りすぎた様だ。お前を生かす時間が延びてしまう。では、
参る」

ウフェイトウが剣を抜く。

「……………」

アシュマは言葉を失った。
剣を交えるしかないのか。

「最早、喋らぬか……………」

ウフェイトウは正眼に構える。

対するアシュマは居合いに構え相手を待つ。
その間にも艦隊戦は続く。

未だにアシュマの念導境界面は生きており、オロの連合艦隊の攻
撃を、未然に防いでいた。

「恐ろしい奴。我と対峙していて、尚且つ、念導境界面を張ってい
られるとは。我には到底真似できぬ芸当よ」

ウフェイトウがそう言う。

「時間を掛けずに、始末をするぞ」

アシュマがそう宣言する。

「幾ら貴様が『鬼を持つ者』として別格だと言って、思い上がるなよ？ 我はマスクド。『鬼を持つ者』に仇なす者だと言う事を、忘れるな！」

ウフェイトウの気が膨れ上がる。

それに対しアシュマの気はどこか洗練されて行く様な、すうっと透き通る様なそんな感じがした。

アシュマは秘剣・流星を使った。

ウフェイトウは、またかと思った。

流石に何回も、これをやられると辟易したが、アシュマへのやり難さは以前と少しも変わらなかった。

気を抜けばこちらが殺られる。

アシュマは未だ、手ごわい相手だった。

アシュマは、ウフェイトウに効かないかも知れない、秘剣・流星を使用した。

膨れ上がったウフェイトウの気が、アシュマに大きく押し掛かり、押し潰されそうな錯覚に陥る。

アシュマはそれに、動揺しそうになる。

それはアシュマにとっては、致命傷になる。

何故なら秘剣・流星は、集中力を必要とするからだ。

それが動揺しては、集中力が途切れてしまう。

それは詰まる所、秘剣・流星が、敗れる事を意味する。

アシュマは密かに焦る。

しかし……。

アシュマは想う。

無念無想を。

ウフェイトウはこの時、周りの空気が変わった事に気が付いた。

無念無想、無想剣。

秘奥義、無想活殺。

アシュマは秘奥義を使った。

そこまでアシュマは、追い詰められていたのだ。

ウフェイトウは、本能的に危険な物を感じ取った。

アシュマは、一気に間合いを詰めた。

アシュマは車に一刀を放った。

それ以前に、ウフェイトウは恐怖に駆られて、逃げ始めていた。

それが、ウフェイトウの一命を取り留めた。

寸余の差で、アシュマの太刀をかわしたのだ。

「！」

アシュマは、ウフェイトウの恐怖を、見抜く事が出来なかった。

アシュマはこれで、秘奥義、無想活殺まで、破られた事になる。

ウフェイトウは、このまま戦いの場から去った。

「アシュマ！ この場はこれで預ける。決着はこの次にまで持ち越すぞ！」

アシュマは言い様の無い、敗北感に打ちのめされていた。

相手の心の内も読めず、見苦しい一刀を放ってしまった。

しかし今はそれ所ではなかった。

未だ艦隊戦は、続いているのだ。

アシュマは鬼虎に気を溜め、一気に引き抜き光の筋を湧き起こした。

艦隊戦はオロの圧勝だった。

ノーツ連邦艦隊はほぼ全滅。

ノリトリア統合軍もその艦艇数を半減させていた。

負け戦だった。

オロにとって厄介だった、ノーツ連邦もオロの手に堕ちた。

オロにとっては大勝利だった。

オロは祝勝会を開いた。

飲んだ。

食べた。

抱いた。

もう、乱痴気騒ぎだった。

特にオロはナナルを貪る様に抱いた。

「アシュマさま。お帰りなさい」

アーチエルがアシュマを出迎える。

アシュマは青龍号のゴンドラから降りてきた。

「ああ」

アシュマは、そう応えたのみだった。

心なしか表情も暗い。

（アシュマさまの様子がおかしい）

それに気付いたのは、矢張り妻である、アーチエルだけだった。

アシュマは自分のブースに戻る。

ベッドの上に腰をかけ、右手を顔にあて、苦渋の表情を浮かべていた。

アーチエルが後から付いて来る。

「アシュマさま。如何なさいましたか？」

アーチエルは努めて、優しく静かに訊いた。

「アーチエル。……無想活殺が破れた」

アシュマは驚くべきことを言った。

「無想活殺……アシュマさまの秘奥義の？」

無想活殺が破れたとはどういう事なのか。

アシュマの体は大丈夫なのか。

「そうだ。偶然だが……相手の心の動きも、揺らぎも見極められず、無様な一刀を放ってしまった」

どうやら身体には異常が無いようだった。

しかし、アシュマの心には大きな痛手が見受けられた。

「アシユマさま……」

アーチエルはアシユマに掛ける言葉を見失っていた。

「ウフェイトウには何かある。いつもとどめを刺せない。それは何だ？ 何かがある？ このままでは、いつか負ける」

アシユマは焦っていた。

自分が負けるということは、アーチエルを含めて皆が殺されてしまふことだった。

「アシユマ……さま……」

アーチエルが優しく呟く。

「アーチエル。一人にさせて……くれないか」

アシユマは苦悶の表情でそう言った。

「いえ。そういう事なら、一人にさせておく訳には、参りません」

アーチエルがアシユマを優しく見つめ言葉を返した。

「アーチエル？」

アシユマがアーチエルを見返す。

アーチエルは、ゆっくりとアシユマを引き寄せ、胸にアシユマの頭を優しく抱いた。

「アシユマさまは、完璧主義者に過ぎます。たまにはゆっくり、のんびりとして下さりませ」

「今はそれどころでは……」

「それがいけませぬ。さあ、このアーチエルが慰めます故、たと甘えて下さりませ」

「……アーチエル……。俺は邪悪な意思を持つ者だそうだ」

アシユマが瞳を落す。

「まあ、誰がそんなひどい事を。どなたですか？ わたくしのアシユマさまにそんなひどい事を仰るのは？」

「ウフェイトウだ。マスケドの」

アシユマが力なく返す。

「アシユマさま。そんな根も葉もない事を間に受けなくてもよろしゅうございます」

「……………」

アシュマは黙って聞いている。

「そんなに落ち込む必要はないのですよ。アシュマさまはアシュマさま。私の大事な旦那さま」

アーチエルはそう言い、アシュマの頭を抱きしめた。

一夜明けて、アシュマはアルステインと語り合っていた。

「ウフェイトウに、悪だといわれたよ」

と、アシュマ。

アシュマの出自はどうなのか知らない。

アシュマの正体も誰も知らない。

だが、悪だと言われた。

過去『鬼を持つ者』と戦ったマスクド、ウフェイトウに言われた言葉だ。

重みを持った。

それがアシュマにのしかかる。

「アシュマ君。正義も悪も表裏一体。コインの表と裏です。気にしないで良いと思います」

アルステインはそう返す。

「そう言うものだろうか？」

「そう言うものです」

オロは、一旦この空域を去る時に、ノリトレアを国土に封じ込める為、に六要塞を楔として打った。

クーロン、イーハン、ノリトレアの三国の統合軍の要は、ノリトレアである。

このノリトレアに楔を打ち込んでおけば、他の国々は動けない。この楔は非常に効果的に働いた。

オロはこの頃から、その性癖が現れ始める。

友好国、占領国の区別なく、各国から一人ずつ美女を集めだし、自らの愛人としていった。

ナナルはその様を見て、オロには、

「王としては当然の事」

と、言い、本心では、

（丁度言い休息になるわ）
と、思った。

「なあ、アルステイン、頭の上にあんなデッカイ物が乗っかっていてサ、鬱陶しくないか？」

オルバニアンが、アルステインの政務室で話していた。

他にはアシュマがいる。

「確かに。嫌々感じはしますね」

アルステインがそう返す。

動くに動けないのである。

「なんだよ、さらっと返しやがって。どうなんだよ？ 本音は？」

オルバニアンが苛つく。

アルステインのこう言うのんびりしたところには困っていたりもする。

早く結論を言って欲しくもある。

「本音ですか？ 本音はですね……」

「本音は？」

「まあ……」

「本音は、良くなさそうだな」

アシュマが結論を言ってしまふ。

「まあ……ね」

アルステインが渋々認める。

「どうするんだ？」

「叩いちゃおうかと、思っています」

「あの六要塞をかよ！？」

オルバニアンが言う。

「ええ。今の内に」

「今の内？」

オルバニアンが頭を捻る。

「敵艦隊が引き揚げてしまった今の内に。今ならマスクドもいないでしょう。アシュマ君には大いに期待する所です」

「分かった」

アシュマが頷く。

ノリトレア統合軍は、前回の戦いの傷も癒えないまま、発進した。丁度オロの艦隊が、戦場から意気揚々と帰って行った、次の日である。

まさかこうなるとは、誰も想像等しないだろう。

今回の攻撃、オロの六要塞は、全くの想定外であった。

護衛に付いた、僅かばかりのオロの艦隊も驚いた。

その為、六要塞だけで、迎え撃つ事になった。

護衛と言っても、形ばかりのその艦隊も、戦力にはなら無いだろう。

ノリトレア統合軍には、イーハンの三要塞イボラス、ビニラ、ビムラーが付き従っていた。

幾ら艦隊総力戦と言っても、相手は要塞。

それも六基。

こちらにも要塞があるとはいえ、戦力は互角と見ていいだろう。だが、こちらには切り札がいる。

そう、アシュマだ。

今回は相手も油断したのか、マスケドがいる気配は無い。

ノリトレア統合艦隊が、イーハンの三要塞と共に攻撃を開始した。それと同時に、青龍号のゴンドラの上に乗ったアシュマが、鬼虎を引き抜き、幾つもの気弾を発した。

マスケドがいらないだけで、面白い様に攻撃が当る。

しかも敵方からの攻撃は、アシュマの念導境界面で阻まれる。一方的だった。

この光景を見たアーチエルは、

「酷すぎます！ 惨すぎます！ 何とか助けてあげて下さい！」

と、ルー・ウィロンに訴えた。

ルー・ウィロンもそれには同意を示し、オロ側の六要塞に降伏勧告をした。

六要塞はその勧告に乗り、武装を解除して降伏をした。

「なに？ そんな馬鹿な！」

オロは大いに怒った。

「何故そんな事になった！？」

オロは、部下に怒鳴り散らした。

が、しかしこれは、オロの油断から来る失態で、部下達の無能を罵るのは、お門違いと言う物だった。

「マスケド達は何をしていた！？」

オロは、尚も部下達を罵り続けた。

流石にナナルがこれを見かねて、これ以上この事態が続くと、士気に影響すると想ったのか、

「今日は、この辺にしておいて、あげましょう？」

と、オロを、やんわりと止めた。

しかし、六要塞が敵の手に落ちたとなれば、かなりの痛手だった。それから暫くは、穏やかな日々が続いた。

人は、嵐の前の静けさとも言った。

それはその通りで、オロは軍備増強に励んだ。

それはこちらと同じで、軍備増強に努めた。

特にクーロンでは、ノリトレアの技術を取り入れた魔導機兵が、やっとロールアウトしてきた。

クーロンではこの機体の量産化と、艦艇の増強を急いだ。

シュニク・インジャは、何と、ノリトレアにアジトを持って、隠れ住んでいた。

勿論、クロダの六人衆と共にいた。

シュニクはノリトレア、イーハン、クーロンの三国同盟の要ノリトレア、その王たるアルスティーンの暗殺を、目論んでいた。

そして今、シュニクが口を開く。

「アルスティーンを暗殺するなら今だな。平時に近いこの雰囲気だ。油断しているであろう。そうだな？ シシオウ」

シュニク・インジャが訊く。

「御意」

シシオウが頭を下げる。

「ならば、行け。そして、アルスティーンの首を取ってまいるのだ！」

シュニクが命を出す。

「は！」

「死んでも、アルスティーンを潰してくるのだ！」

そして、夜。

クロダの六人衆は、魔法ウィングを使って漆黒の中、一路宮殿へと飛んで行った。

門にいる衛兵を飛び越し、テラスの一角に飛び降りた。

アルスティーンの部屋への道順は、頭の中にしっかりと入っていた。

途中衛兵に見付かるも、声をあげる前に、斬り殺した。

監視カメラは、そのつど破壊してきた。

そして今、アルスティーンの寝室の前に居る。

シシオウは天餓鬼を、ドアの隙間にすうっと差し込んで、鍵を斬り壊す。

鍵は静かに開けられて、ドアをゆっくり開けて行く。

そして、侵入する。

侵入し終えた所で、声が掛けられる。

「ここにアルスティーンはおらん」

アシュマの声だった。

「なに！？」

シシオウが驚く。

ドアが閉まって結界が作られる。

「自分達の力を、過大評価した様だな」

言葉を発したのはアシュマだ。

「アシュマ……貴様……！！」

シシオウが唇を咬む。

「何故分かった？」

「こちらには便利なものが居てな。予知を行うものが居るんだよ」

アシュマはこう語った。

「くっ……」

シシオウは言葉をなくす。

まさかこういう展開になるうとは思わなかったから。

「大人しく帰れば良し。さもなければ討ち取るまで」

アシュマはまだそういうことを言う。

それを聞いたオルバニアンは、

「アシュマ！ そんな甘い事で、良いのかよ！」

と、叫ぶ。

相手はマスクドなのだ。

倒せる時に倒しておいたほうがいい。

そう思う。

尤も倒せるかどうかは分からないが。

「我らも舐められたものよ！　そこまで言われては、引き下がる訳にはいかなー！」

シシオウが激昂する。

マスクドが甘いとまで言われ舐められているのだ。

人間ごときに。

許しておけようか。

「プライドにこだわると死ぬぞ？」

アシュマが指摘する。

いざとなれば、アシュマが全員と対決しようと考えている。

そういうことを言っているのだ。

「死ぬだと？　我が死ぬだと？」

シシオウが怒りでぶつぶつと言っている。

「そうだ」

アシュマが断定する。

マスクドが死ぬ。

有り得ないとシシオウは思う。

「有り得ぬ事を言っな！　我はマスクドだぞ！？」

シシオウがとうとう怒った。

「それが死を呼ぶ！　それが分からぬか！」

アシュマも叫んだ！

こうなつては戦うしかないのか。

シシオウもウフェイトウと同じく稀代の剣士。

失うには惜しい。

「そこまで言うなら戦って、そうではない事を証明して見せよう」

シシオウは、自信たっぷりと言った。

「！？」

アシュマはシシオウが、何かをする気だと察知した。

（一体何をする気だ？）

それが分かるならば、苦勞はすまい。

そうこうするうち、この広い寝室のあちらこちらから、剣戟の音が聞こえて来る。

そして、シシオウの自信の根拠が、何であるか分かった。シシオウの両の目が、黄金色に輝き始めた。戦利眼だ。

「戦利眼か！」

「そうだ。貴様の太刀筋は、既に見切った」
シシオウが言う。

「そうかな？　ならばこれはどうかな？」
アシュマは秘剣・流星を使った。

これで事実上、無限の太刀筋が表された事になる。戦利眼を持つ者にとっては、辛い筈だ。だが、シシオウに、動揺の色は見えない。逆に、肝が据わった様に、見えた。

「アシュマよ。貴様はその剣の弱点を、知っているのか？」
シシオウが言い放つ。

「弱点？」

アシュマが相手の言葉に乗る。

「そうだ。それはこちらが一つの太刀筋を決めると、お前の太刀筋も一つに限定されると言う事だ」

「それがどうした？」

「ならば、二刀を持つ者にとって相手の太刀筋が一つになるとすれば？」

「！」

「しかもこちらは、復活が即座に出来る」
「！」

「動揺が見えるぞ、アシュマ・アトー。どうやら自分では、自らを癒せない様だな」

シシオウはどうやら勝つための理論建てを持っている。それも確実に。

特にアシュマのような相手には。

「……………」

アシュマが黙る。

何かを考えているのだ。

「我が、相討ち覚悟で来るとすれば？」

シシオウが秘剣・流星の弱点についてくる。

「……………」

更に黙るアシュマ。

「だいぶ動揺しているな」

確かに、アシュマは、動揺していた。

ウフェイトウとの悪夢を、思い返していた。

しかし、心を決めた。

先ず動揺を鎮めた。

心を、平静に保つたのだ。

そしてアシュマも、相抜け覚悟で戦いに臨んだ。

「む？」

シシオウは疑問に思った。

自分は先ず一刀目は上段からの打ち下ろしを、二刀目は臨機応変に対応し様としていた。

一刀目で、アシュマの太刀筋が、決まる筈だった。

だが、シシオウの戦利眼は、いまだアシュマの太刀筋が無限に見えた。

（アシュマ！ 貴様、一体何をするつもりだ？）

シシオウは迷いを吹っ切る様に、一刀目を繰り出した。

アシュマはこれを寸余の差でかわした。

シシオウは二刀目を左から車に回し、アシュマを斬りに掛かった。アシュマはこれかわし、居合いに鬼虎をシシオウへ、送り込んだ。

アシュマは又も、シシオウの左腕の肘から先を、斬り飛ばした。

「くっ！ ……おのれ……」

シシオウは悪態をつく

「お前の戦利眼も、あまり役には、立たない様だな」
アシュマが言う。

「何故だ!？」

勝つための方程式は崩れ去った。

何故だ。

絶対の自信を持っていた。

「俺も、相抜けの覚悟を、持ったからよ」
アシュマが種を明かす。

明かせば大した事はなかった。

それだけのことだった。

「そうか。だから無限の太刀筋が、見えた訳か……」
成程と思った。

この男も覚悟が違うのだと悟った。

この男に勝つためには更に相当の覚悟がいる。
今は駄目だ。

手負いになった。

勝つための気力が足りない。

「まだやるか？」

アシュマが血刀をぶら下げて迫る。

「……皆の者! 引き上げるぞ!」

シシオウが叫ぶ。

「逃げるのかよ!？」

オルバニアンが言う。

「いい。行かせろ。オルバニアン」

アシュマが止める。

「何故だよ!? アシュマ!」

「手負いの獣は危険だぞ? オルバニアン」

「う……」

シシオウ達が、窓から逃げ出すのを、アシュマ達は見ていた。

第七節 激闘の会戦

オロは、ノリトレアに攻め込む為の軍備を、増強していた。
殻兵器も用意していた。

艦隊も整備された。

魔導機兵も倍增した。

機は熟した

オロ連合軍は、艦隊を編成して、発進した。

アシュマ達が、緊急招集された。

これまでに無い大艦隊が、こちらに向かってくるとの事。

議題は、これを如何にして叩くかと、言う事だった。

「無理だって！ 叩けだなんて！ 一体敵はこちらの何倍で来ると
思っているんだ！？ 十倍だぞ？ 十倍！ これじゃあ、勝てねえ
よ！」

オルバニアンが叫ぶ。

確かに絶望的な数字の差である。

十倍。

普通では勝てない数である。

「そこをなんとか、勝てる様にしないと……」

アルステインが、溜息混じりに言う。

頭がいたいのだ。

「精神論じゃ、ねえんだぞ！」

オルバニアンが再び呆れて叫ぶ。

「何とかしてアシュマさんの力が、使えれば……」

レンヌが言う。

「無理だって！ きっとマスクド達が来て、アシュマを抑えるだろ
うよー！」

「マスケドって、後、何人残っているんでしょうね？」

シユンマが訊く。

「ウフェイトウだろ、シャケルウだろ、ウゴグロフだろ、ウデイガアだろ、イラだろ、レトウだろ、それにナトイゲフル……七人か」
オルバニアンが数える。

「こちらは？」

「俺だろ、アシユマだろ、アルミナだろ、ガンロクさんだろ、ジークだろ、ビツシユさんだろ……六人だな。何でそんな事訊くんだよ？」

「だってほら、アシユマさんがフリーになれば、アシユマさんは気弾を打てるじゃないですか」

シユンマは意外な事を思いついた。

言われれば単純。

そうなのだ。

「成程！ アシユマ！ 何分フリーになれば気弾をつてる？」

オルバニアンが訊く。

「一分だな」

アシユマが断じる。

「成程……って、相手の数より、こっちの数の方が、少なえじゃねえか！」

「僕が戦線に復帰します」

レンヌがそう言う。

「駄目よ！ レンヌ！ 何て事、言い出すの！？」

リイナが悲鳴を上げる。

「リイナ。別に、死に行く訳じゃないんだ。一分持てばいいんだよ」

レンヌが説明する。

それで納得するかどうか。

「……やっぱり駄目よ。貴方を行かせる訳には行かないわ」

「リイナ。僕を信じて」

「レンヌ……。貴方強情ツぱりなものね。分かったわ。貴方を信じる。絶対生きて帰ってきてね」

「うん。分かってる」

「レンヌさんがそう言うなら、僕も戦線に復帰します」
今度はシュンマが、そう言いだす。

「シュンマ、おぬしまで、何を言いだすのじゃ！」

キュポアが、悲鳴に近い声で叫ぶ。

「僕が戦列に復帰すれば、マスクドと数が合います。そうなればアシュマさんは、フリーになります」

「しかし、だからといって……」

「大丈夫です。レンヌさんも言っていたじゃないですか。一分持てば良いって」

「……おぬしは言葉は、柔らかいくせに、言い出したら聞かぬからのう……。約束してくれるか？ 五体無事で、帰ってきてくれる事を」

「約束します。キュポアさん」

「じゃ決まりだ」

オルバニアンがそう言う。

「でも、誰が、あのウフェイトウに当るんだ？」

ビッシュが言う。

「俺が当る。今、人が余ってるのは、俺だ」

オルバニアンが言う。

「しかし、あのウフェイトウは、アシュマでさえ、怯ませた奴だぞ？ 戦って、一分持つのか？」

「仕方ないですねえ。僕がサポートに付きましよう」

そう言いだしたのは、なんとアルスティーンだった。

「貴方！ 一体何を言いだすの？ 貴方は国王なのよ？」

エファールが怒り出す。

「シュンマだって国王ですよ？」

アルスティーンが言い返す。

「じゃ、じゃあ貴方は……え」と……」

エファールは困った。

アルステインを戦線に出さない理由が思いつかなかったから。
愛する夫を戦線に出したくないのだ。

「エファールさん愛しています。僕も必ず戻ります。信じて下さい」
「ば、ばか。こんな時に何を言いだすのよ……」

エファールは照れて困っている。
頬が赤い。

「重ねて言います。信じて下さい」

「わ……分かったわよ。信じてあげる。その代わり……」
必ず帰って来るのよと言葉を含ませる。

「分かってますよ。こんな感じで良いかな？ オルバニアン」

「おおよ！ 良いぜ、兄ちゃん！」

「今度は、私も、連れて行って下さい」

そう話したのはアルルマ・サンファだった。

「どうかしたので？ 姫」

アルステインが訊く。

「デイー又殿下が、今度は是非にも連れて行ってもらえと、仰るの
で」

「そうなので？ 殿下？」

アルステインが尋ねる。

「嫌な予感がします。彼女の能力が、役に立つでしょう」
ちから

デイー又王子が言葉を添える。

「そうですか。分かりました。でも、青龍号で待機ですよ？」

「はい。それでも構いません」

アルルマ・サンファが頷く。

「皆さん、一つ宜しいですか？」

アーチエルが口を開く。

「おう、何でい。アーチエルの姫さん」

オルバニアンは相変わらずアーチエルを姫呼ばわりする。

「皆さん。最初から戦線にいる人も、戦線に復帰される方も、皆々

様、無事に帰ってきて下さいね。待っている人を、悲しませる事の無い様に、お願い致します」

「アーチエル……」

アシュマが感慨深げに言う。

「アシュマさま。いつもならば、無駄に命を殺めぬ様言う所ですが、今回はそれが叶いそうもありません。残念です」

「アーチエル」

アシュマが言葉に詰まる。

「どうかご武運を」

「有難う。アーチエル」

アルステインを総大将とする統合軍は、ノリトレアを発ち、オロ連合軍の待つ空域へ移動を開始した。

数刻後、二つの勢力が、ボグロムの海の上で衝突した。

こちらは千の艦艇、十万の魔導機兵。

対するオロ軍は、五千の艦艇五十万の魔導機兵。

「殻兵器は、持ってこなくとも、良かったかな？」

オロは、この数の艦隊をもってすれば、ノリトレア統合軍等、容易く勝てると踏んだのだろう。
易く勝てると踏んだのだろう。

思わず、そういう言葉が、口に出た

今日は、オルバニアンやアルミナも、魔導機兵で出撃せず、サイコ・フライヤー青龍で待機していた。

アシュマがゴンドラで上に昇って行く。

アシュマはゴンドラごと外に出た。

アシュマは鬼虎に気を溜める。

いざ、放つといった時、頭上から声が掛かる。

「待て。それは放つな」

ウフェイトウだ。

「先ずは我と戦え」

ウフェイトウがアシュマに命じる。

「いや。今日、貴方が戦うのは、僕達ですよ」

ウフェイトウに声がかかる。

「……貴殿は？」

ウフェイトウが振り向く。

戦装束の棒を持った見知らぬ青年が宙に浮いていた。

「アルステイン・エト・テルドリニアナと申します」

アルステインは名乗った。

「なんと！ ノリトレアの王であるか！」

相手は驚いたようである。

なにせ、この青年を倒せば戦争は勝ったようなものであるから。

国家元首なのである、

「まあ、そう言う立場でもありますか」

アルステインは軽く言う。

自分の立場を忘れているのか。

「成程。だが、悪いが、立会いは直ぐに終わりますぞ？ お命頂戴

仕り候」

ウフェイトウはアルステインに敬意を払った。

剣を抜こうとする。

「おっと待った。俺もいるぜ！」

オルバニアンが宣言する。

「オルバニアンと言ったか……貴様もか？」

ウフェイトウが睨む。

「おうよ」

オルバニアンが見返す。

「なんと二人掛かりで来ると言うか？」

「如何にも」

アルステインが返す。

「卑怯よな」

「ハンデと言つて下さい」

アルステインが、そう言った。

アルステインは、わざと会話で、時間を延ばそうとしていた。アシュマの言った、一分間を稼ぐ為である。

一方アルミナは、シャケルウと対峙していた。

立会いに際して、アルミナは右目の眼帯を、むしり取った。

「また、戦利眼か！」

シャケルウが辟易する。

「『また』は無いでしょう？ 『また』は。アタシに言わせりゃ、アンタなんかまたかつて感じよ！ いい加減、やられて頂戴！」
辟易しているのはシャケルウだけではない。

アルミナもそうなのだ。

「いや、今日こそ、お前を倒してやる」

シャケルウが宣言する。

「いかにも悪役が吐く様な台詞ね」

「何を言うか！ 行くぞ！」

「早くいらっしゃいな。相手してあげるわよ」

アルミナのロンリーストラ이프と、シャケルウの大槍が空中で交錯した。

ガンロクはウゴグロフと対峙していた。

以前味わった敗北感を糧にして、ガンロクは剣士として、一際大きくなった様だ。

ウゴグロフの攻撃も、かわす事が出来る様になり、また攻撃も出来る様になった。

「ちっ！」

今では、ウゴグロフを舌打ちさせる程にまで成長した。

「今度は勝つべ！」

ガンロクは大鉈を振り上げた。

イラは喜んだ。

宿敵が戻ってきた事に。

「待ちかねたわ、レンヌ。寂しかったわ。私の愛しい人」

イラは微笑んだ。

かなり嬉しいらしい。

「僕はいつから貴方の愛人になったんですか？」

レンヌが困る。

「最初に戦ってから」

イラはいけしゃあしゃあと言つてのける。

余程気に入っているようだ。

「はぁ。そうですか。それより行きますよ？」

レンヌは呆れつつもそう言う。

「そうね」

イラが微笑む。

そして、レンヌが呪文を唱え始める。

『秘めたる聖剣、内より溢れん！

愛するものを、護る為

六つの星に、六つの剣、

額に印を表す時に、

両の手、両の目聖剣握まん！

出でよ聖剣、汝の敵を切り刻まん！

ヘブンスソード！！』

レンヌはヘブンスソードを唱えた。

「コマンド、オールソード、六剣乱舞！！」

レンヌは最初から切り札を使ってきた。

『風切る翼、銀翼よ。』

気高き心、天かける。

汝に問おうその心。

風切る翼、剣とならん。

サイクロンスラッシャー！！！！』

シユンマは初^{しよっぱな}端から呪文を唱えてきた。

優位に立とうとしてである。

「甘いわ！」

対するレトウは、大鎌を眼前で回し、ウィンドスラッシャーの風の刃を防いだ。

そして、レトウは一気に間合いを詰めて、大鎌を振るった。

「くっ！」

シユンマは、寸での所で大鎌をかわす。

「ほう！ 今の一撃をかわすか」

レトウが感心する。

鎌は受けにくい。

かわすしかないのである。

「受け止めては、こちらが傷を、負いかねませんからね」

「よく分かっているな。では行くぞ！」

レトウが鎌で斬りかかる

対するシユンマは、呪文を詠唱し始めた。

『我は禁忌を見た者、犯したもの。』

我が憎しみは、汝の快楽。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール！！！！』

今度は、よくよく狙って、ブラックホールを放った。

「ぐあっ！」

レトウは、まともにブラックホールを、食らった。

（チャンスか！？）

シュンマは剣を振り上げ、突進しかけた。

「『磨羯鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

レトウは癒され復活した。

「！」

シュンマは突進をやめた。

「残念だったな。シュンマ」

レトウが言う。

「くそっ！」

シュンマが悪態をついた。

「我らが、『鬼を持つ者』を、狩る者だと言う事を、忘れるなよ？」
レトウが言い放つ。

自分達の実力を披瀝しているのである。

ナトイゲフルの、金剛棒が唸る。

ナトイゲフルの、頭上で回っている。

ビッシュはその金剛棒を、じつと見ていた。

不意にナトイゲフルの金剛棒、『天秤鬼』がビッシュの顔面を狙う。

それを僅かに、首を捻ってそれ避ける。

ビッシュは間合いを詰め、ナトイゲフルの胸を打つ。

が、強力な念導境界面に阻まれて斬れない。

「矢張り斬れんか」

ビッシュが呟く。

「我を、見くびり過ぎの様だな」

ナトイゲフルが、間合いを取り、再び金剛棒で打つ。
それをかわす、ビッシュ。

「くっ！ 一筋縄ではいかんか……」

ナトイゲフルが呟く。

ジークフリートは秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改の構えでウデイガアの出方を伺っていた。

ウデイガアは戦斧を握って、矢張りジークフリートの出方を待っていた。

ジークフリートは、何かをぶつぶつと、呟き始めた。

ウデイガアは緊張した。

あのオルバニアンとやらが、ナイゲルに行った、ブーストとマジックブレイドの魔法を、使用するのかと思ったからだ。

ウデイガアは、魔法を唱えられる前に、勝負を決しようとした。
誘いであるにも拘らず、突き出した左肩に戦斧・巨蟹鬼を、送り込んだ。

「ブースト！」

ジークは一気に間合いを詰め、超高速の秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改からの剣を車に回した。

「マジックブレイド！！」

そしてマジックブレイドを唱えた。

巨大な剣は強力な破壊力と相まって、ウデイガアの胴体を真っ二つにした。

マジックブレイドの効力はそこで失われたしまったが、大質量の剣を、左からの車に回し、今度はウデイガアの首根を断った。

何故、断てたか？

マジックブレイドで胴を断たれ、ウデイガアの気が、失せたからである。

「ウ、ウデイガア！」

それはウデイガアが絶命した直後だった。
ウフエイトウが叫んだのだ。

「ウ、ウデイガア！」

残りのマスクド達も皆それぞれ叫んだ。

「さて、そろそろですかね？」

アルステインが、そう言う。

「？ 何がそろそろなのだ？」

ウフエイトウが訊く。

それはここよりはるか上空、アシュマが登りつめた所だった。
アシュマは存分に鬼虎に気を集め、そして一気に引き抜いた。
幾千もの光の条が、オロの連合艦隊に襲い掛かる。

「しまった！ 貴様らは、時間稼ぎの為の罠か！」

ウフエイトウが叫ぶ。

「さあ？ どうでしょう？ 本気で貴方を、倒すつもりかもしれま
せんよ？」

アルステインが棒を構えそう言う。

アシュマは遙か上空へ昇って気弾を放った。

膨大なエネルギーの奔流があった。

オロ艦隊のものが次々と落とされていく。

オロ艦隊では全滅ではないが、殆どの艦艇と、殆どの魔導機兵が、
落とされていた。

その中で、オロは運良くも、生き残っていた。

「ああっ！ そんな馬鹿な……私の艦隊が……！ 私の魔導機兵が

……！ エルファの騎士団は何をしていたのだ……！ ……おのれ、

アシュマ・アトー……！ こうなったら……！ 穀兵器、全弾用意！ 目
標ノリトレア統合艦隊」

「……！」

その時、アルルマ・サンファの様子が、変わった。目を閉じ、手を胸の前で組み、何かを念じている様だった。その様子を、アーチエルが不審に思い、声を掛けようとした。それをディーヌ王子が、手を取って、

「大丈夫です。見ていて下さい」
そう語る。

（殻兵器の皆さん、どうか聞いて下さい。その力を封印して下さい。お願いします）

アルルマは念じていた。

「オロ様！ 殻兵器の安全装置が、解除されません！」
部下の一人が叫ぶ。

安全装置が解除されねば殻兵器は効力を持たない。

「なに！？ どういう事だ！！」

オロが叫ぶ。

「それが……！ あ、いかん！」

「どうした！」

「殻兵器が、皆、アポトシスしていきます！」

「何だと！？」

殻兵器が使えない。

これでは、話しにならない。

オロの旗艦ンディオは、艦首を回頭して、戦線を離脱しつつあった。

アシユマは急ぎ、エルファの騎士団のいる所へ、戻って行く。皆が心配だった。

特にウフェイトウと対峙している、オルバニアンとアルステインが、気がかりだった。

「何故マスターである、オロに忠誠を誓う？」

アルステインが、ウフェイトウに訊く。

「マスターには、忠義を尽くすが、マスクドと言うものだ」
ウフェイトウが返す。

「では、マスターが悪でも、忠誠を誓うのか？」

「従う！」

「もし、マスターが悪だとしたら、それを諫めるのが真の忠義と、思わないのか？」

「我らは、マスターに忠誠を誓った。それがマスクドの正義だ」

「ならば、アシュマ君を悪と決めつけ、つけ狙うのは、それこそお門違いと言うものじゃないのかね？」

「マスターが、悪だとも言うのか？」

「自分の欲望の赴くままに、世界を私し、自らの手に入れんとする者を、悪でなくて何と言う！？」

「私しているのではない！ 平定しておられるのだ！」

「そこまで目が曇っているのか！ マスクドともあるう者が！」

「貴様に、マスクドの、何が分かる！」

「マスクドとは、もっと誇り高い者だと思っていたぞ！」

「では、何をしろと言うのだ！？」

「オロの下を去れ！ 民の為に生きる！」

「具体的にはどうしろと？ お前の下に、付けとでも言うのか？」

「そこまでは言わん。だが、オロの下を去れ。それとも、お前もオロのやっている事が、正義だと思うのか？」

「……………」

「即答できまい？ 悪い事は言わん。オロの下を去れ！」

アルステインが言葉でウフェイトウを圧倒していた。

ウフェイトウは何も言えなかった。

「皆の者、引き上げるぞ！」

ウフェイトウが叫ぶ。

「ウフェイトウ！」

アルステインも叫ぶ。

「ウフエイトウ！ ウデイガアが殺られたんだぞ！ このままで良いのか！」

レトウがさけぶ。

悔しいだろう。

マスケドが人間に屠られて。

あつていいことはない。

「私の命令が聞けないと言うか？」

「……いや」

こうしてマスケドも去って行った。

オロは戦力の内、九割方を失った。

この事を受けて、各国では、オロに対して、反乱の兆しが見えた。オロの執政に関して、反対の意を示す、デモ行進が行われたのである。

オロは各地のデモに対して、武力を以って当った。

各地に、流血の惨劇が、繰り広げられた。

オロへの非難は、更に広がりを見せた。

オロはそれ等に際しても、武力を持って鎮圧した。

流血の大惨事。

恐怖政治。

これを見て、レキシタニアのエースティ王、ノリトレアのアルステイン王は、非難する。

先の戦いで、ノリトレアは、浮き足立っていた。

特に英雄視されたのは、アシュマに、アルステイン。

アシュマは、直接敵を叩いたと言う事で、特に英雄視されていた。「困る！」

アシュマは、ただそう言った。

そして、アーチエルも、心沈んでいた。

「あの様な形で、決着を付けてしまつてよい物なのかしら。私は…

…」

しかし、皆は、心浮かれていた。

アシュマとアーチエルとアルステインを除いて。

「今、ノリトレアは戦勝で、浮き足立っている。アルステインを狙うなら今だ。行け！」

アジトに隠れているシュニクが、クロダの六人衆に命を下す。

「はっ」

クロダの六人衆は、一陣の黒い風となつて、王宮市に向かった。

ノリトレアの王宮は今、祝勝会で賑わっていた。

城中浮かれていた。

油断しきっていた。

「アシュマ君」

アルステインが口を開く。

「どうした？ アルステイン」

アシュマが返す。

「いえ。なんか、こう、落ち着かなくて……」

「何故？」

「僕が敵だったら、今、この時を逃さないでしょう」

皆の油断を指摘しているのだ。

この状態は正に千載一遇の機会。

またとない。

「そうか。でもオロは今動けないぞ？」

「でもマスクドは動けるでしょう？」

アルステインが指摘する。

寧ろその方が合理的か。

身軽である。

「成程。ではエルファの騎士団が動くと？」

アシュマが訊く。

「クロダの六人衆もいます」

マスクドはエルファの騎士団だけでは無い。

アルスティーンは色々な事を想定していた。

ともかく今の状態は危険な気がした。

「ふむ。オルバニアン達には、騒ぐのは、そこそこにさせておこうか？」

アシュマが行きかける。

「そうですね。お願いします」

その背にアルスティーンが声を送る。

アシュマは意外に思った。

普段のアルスティーンならば、

『それまでには及びませんよ』

これが、アルスティーンの言葉だと思っていたからだ。

それがそうでは無い。

マスクドと言うものを警戒している証拠だ。

「じゃあ、行つて来る」

「はい」

アシュマはパーティー会場にやって来たが皆、浮かれていた。

確かに、これは危ないと思った。

夜半、宴もたけなわ、皆楽しんでる所、クロダの六人衆は王宮のテラスに、密かに降り立った。

以前は、ここで裏をかかれた。

今度はこちらが裏をかく番だとシシオウは思った。

アルスティーンは恐らく自分の寝室にはいないだろう。

もしかしたら、マスクドの到来を予想して大広間に居るかも知れない。

早速大広間に行ってみる。

大広間の窓から中へと侵入する。

果たして、そこにはアシュマがいた。

アルステインはいなかった。

また、レンヌとシュンマも、いなかった。

「矢張りここに集まっていたか。アルステインはいないな」
シシオウが辺りを見回す。

今回の標的はアルステインだ。

そのアルステインは居ない。

「わざわざ危ない目に晒す訳には行かんな」
アシュマも返す。

「そうか。今日は勝つまで帰らん」
シシオウが覚悟を述べた。

前回の戦いではアシュマの覚悟を見せられた。

今度はこちらの覚悟を見せる番だ。

「ならば、我らも負ける訳にはいかん」
アシュマも決意を見せる。

「なら、我らと勝負をするべし」
シシオウが前へ出る。

決意と共に。

「致し方なし」

アシュマも前に出る。

「さあ、勝負だ！」

エヴユが言う。

「お前の相手はこの俺だ！」
オルバニアンが言う。

少し酒臭い。

「そうだったな。多少酒が過ぎる様だが、大丈夫なのか？」
酔っ払いから勝ちを得ても何の称号にもならないからだ。
誇りにも何にもならない。

「敵から心配されるなんて、思わなかったぜ」

オルバニアンが酔っ払いながら言う。

「酔っ払った相手から、勝ちを得ても、自慢にならんからな」

エヴユが吐き捨てる。

「言ったな？」

オルバニアンが睨む。

「おうよ！」

エヴユも返す。

「もう、オルバニアン！ 敵と親しそくに話さないでよ」

アルミナが怒る。

半ばは呆れているのだが。

「お前も、よそ見しないで、こっち見ろ」

そう言ったのはアジャオだ。

「調子に乗るんじゃないよ」

「じゃあ、お前の相手はこの俺だ」

ナイシーがガンロクに言う。

「じゃあ、やるべ！」

「ああ」

ナイシーは鉤爪・金餓鬼を掲げながら間合いを詰めて行く。

ガンロクも大鉈を二刀に掲げながら、爪先で間合いを刻む様に、

詰めて行く。

暫く睨み合いが続いた。

ガンロクは、何かをぶつぶつ呟き始めた。

これは、魔法ブーストと、魔法マジックブレードを唱えているの

は、アシュマ達の間では周知の事実。

一気にトリガーキーを言い、瞬く間に相手を葬る戦法である。

「何をぶつぶつと！」

ナイシーは鉤爪を振るってきた。

ガンロクは二刀で鉤爪を弾いた。

その時に初めてガンロクは

『ブースト！ マジックブレイド！』

と二つのトリガーをいっぺんに言った。

「な、なに？」

超高速の攻撃が、ナイシーを襲う。

ナイシーは、この攻撃に対応できない。

鉈の刃が迫る。

ナイシーは超高速で首根を斬られた。

ナイシーの頭は飛び、床に落ちて転がった。

ガンロクは力尽きて、大鉈を杖に方膝付いて喘いだ。

「お、おのれ、よくもナイシーを！」

シシオウが激昂して、言った。

それを見てアシュマが、

「お前の相手は、この俺だ！」

と、言う。

「どけ！ アシュマ！」

シシオウが怒る。

「それなら、俺を倒してから行け」

いま、ガンロクは立っているのもやつとの状態だ。

とても戦えない。

アシュマがガンロクの盾となる。

「ナ、ナイシー！」

叫んだのは、アジャオだった。

首の無い死体からは、今も血が流れ出ている。

アジャオは、思わず、そっちに気を逸らされた。

その時アジャオは、背中に強い衝撃を覚える。

「アンタの相手はこのアタシ。余所見なんてすんない！」

アルミナが言う。

「くそっ！」

アジャオは悪態を吐きながら振り向く。

「あ、平気だ」

アジャオの念導境界面にアルミナの刃が阻まれたのだ。

「当たり前だ」

アジャオが怒る。

通常で刃が通ると思われること自体に誇りが傷つく。

人間とは違うのだ。

「やっぱり、マジックブレイドを使わなきゃ、貫通しないのね？」

アルミナは自問自答をする。

「何を言っている？」

「しょうがないわね」

アルミナはそう言ってから、何かをぶつぶつと呟き始めた。

「何を、ぶつぶつ、言っていやがる！？」

アジャオは槍を持って、アルミナに迫った。

アルミナはロンリーストラライフを以ってして、アジャオの槍を、

捌いていた。

アルミナは戦利眼を用いていた。

その為にマスケドの攻撃を、何とか凌いでいたのだ。

アルミナは、アジャオの槍を弾いた。

アジャオの体勢に隙が出来る。

居ついたのだ。

『ブースト！ マジックブレイド！』

「！」

驚くアジャオ。

したが、もう遅い。

アルミナは間合いを詰め、一気にアジャオの首根を断ち斬った。

「アジャオ——！」

続いてアジャオが倒され、悲鳴に近い声でシシオウが叫んだ。

「おのれ！ 女！ 待っている今に殺してやる！」

「シシオウ。今の相手はこの俺だ」

アシュマが再度言う。

「アジャオ……お前まで」

エヴユが呟く。

「よう、俺の相手だろ？　ちゃんとこっちを、見てくれよ」
オルバニアンが言う。

「くっ！　お前等。大体、酔っ払って戦いに望む等、失礼にも程がある！」

誇り高い戦いにはならないと思った。

「しょうがねえだろ？　お前らが呑んでいる時にやって来たんだからよ。それで失礼だのなんだのって、こちらの都合も考えないで来る、お前達の方が失礼なんじゃねえのか？」

オルバニアンは怒っていた。

折角のいい気分なのである。

それをぶち壊しにされた。

「言っただな！？」

エヴユが怒る。

こちらはこちらで怒っている。

「おうよ、言ったださ」

「おのれ小童！」

エヴユは、鎖鎌の分銅を回しながら、機会をうかがっている。
対するオルバニアンは、剣を高く突き上げていた。

「天刀稲妻斬！」

オルバニアンが、静かに呟く。

そして何かを、ぶつぶつと言いだめた

「また、ブーストとマジックブレイドか」

エヴユが断じる。

エヴユが分銅を投げる。

分銅はオルバニアンの、逸鉄に絡みついた。

「ちっ！」

オルバニアンは、舌打ちをする。

エヴユは手と鎌とで、鎖を手繰り寄せる。

手繰り寄せられては、離され、バランスを失う。

そうなるのではないかと言う恐怖に駆られながら、オルバニアンは、エヴユと対峙していた。

オルバニアンは決意した。

切り札を使うのだ。

『ブースト！ ウィング！ マジックブレイド！』

オルバニアンはこの時に三つのトリガーを使ってきた。

「な……なに！？」

オルバニアンは高速で飛翔し、エヴユの首根を斬り刎ねた。

オルバニアンはそのまま、エヴユの死体を引き摺りながら、ソファに突っ込んだ。

「エヴユ……」

シシオウが呟く。

「クロダの六人衆も、とうとう貴様一人となったな」

アシュマがそう言う。

鬼虎はまだ鞘の内だ。

「アシュマ。せめて貴様だけでも討ち取って、仲間の手向けにしてやる。例え相打ちになってもな！」

アシュマは、ウフェイトウの事が、頭によぎる。

アシュマは、ウフェイトウの事をあえて引き摺りながら、シシオウと対峙した。

正直に言って、それは恐怖以外の何ものでもなかった。

しかしそれを乗り越えないと、目の前のシシオウはおるか、ウフェイトウを倒す事は敵わないと思ったからだ。

「む！」

シシオウの動きが止まる。

アシュマの変化に気付いたからだ。

アシュマは秘剣・流星を使っていた。

だが、シシオウに怯む気配は、全くなかった。

自らの死を覚悟して、アシュマに突っ込むつもりなのだ。ここに来て、アシュマも、死を覚悟した。

生死の狭間を超え、そこへ至る境地。

明鏡止水。

無想剣。

アシュマはいつの間にか、自分でも気付かぬ内に、秘奥義、無想活殺を用いていた。

「おおおおおおつー！」

シシオウが雄叫びを上げて、突っ込んでくる。

アシュマはあくまで平静だ。

シシオウの二刀の天餓鬼は、空を斬った。

アシュマの姿は、そこになかった。

が、アシュマは、確かにそこにいたのである。

そこに有り、且つ、そこに無し。

全ての物と同化しつつ、個を維持し続ける。

アシュマは、シシオウを袈裟に斬った。

この瞬間アシュマの頭の中で、何かがはじけ飛び、呪縛から開放された様な気分になった。

「お前の負けだ。シシオウ」

アシュマが言い放つ。

「その様だな。早く首を斬れ」

シシオウはおびただしい血を流しながらその場に座り込む。

癒しの言葉は掛けないのか。

その気配は無い。

「何か言い残す事は、あるか？」

アシュマは、シシオウが観念したと見て言葉を掛ける。

「……シュニクの居所を教えよう」

「！？」

アシュマがありえないであろう事に一瞬驚く。

マスクドが主を裏切るのだ。

マスクドの行動理念から外れていた。

「アシュマ、乗るな！ この期に及んで、罫を仕掛けるつもりだぜ、

「コイツ！」

オルバニアンが言う。

「いや、それはあるまい」

アシュマが断じる。

「何で分かるんだよ！？」

「もののふ武士の最期の言葉だ。嘘は言うまい」

マスケドと見込んで敬意を払ったのだ。
かたじけな

「忝い……」

シシオウが応ずる。

「で、どこだ？」

「アンコーだ」

「アンコー？ 別荘地街のか？」

オルバニアンが問う。

「そうだ」

「何故、教えるんではない？」

「主人としても、人間としても、最低の男だ。そんな居場所を教える俺も、最低の男がな。さあ、もう良いぞ。首を刎ねてくれ」

シシオウ最期の言葉だった。

「相分かった」

アシュマが淡々と言う。

鈍い音がして。シシオウの首が飛ばされる。

ここにクロダの六人衆は壊滅した。

数日後。

アシュマ達は、シシオウの最期の言葉に従って、ノリトレア有数の保養地、アンコーに来た。

アンコーは、商業地や街中と違い、穏やかな、そして静かな佇まいを見せていた。

アシュマ達の行き先は、決まっていた。

アンコーの、はずれの小さな屋敷。

ここにシュニク・インジャは居る筈だった。

回りからとり囲み、徐々に包囲の輪を狭めて行く。

警護の兵にも、ましてやシュニク・インジャ本人にも、会う事は無かった。

本当にここでいいのか？

皆が皆、疑問に思っただけで始めている。

アシュマが、臙霞でドアに近づく。

警報機、監視カメラ、そのほかのセキュリティ装置は一切無い。
アシュマは臙霞を解く。

（本当にここなのか？）

オルバニアンは思い始める。

アシュマはどうやら、行く気の様だ。

何か気配があると、身振りで教える。

アシュマが、再び臙霞を使う。

ゆっくり中に入る。

暫らくすると、中で、人同士が争う声や音が、聞こえてくる。

そして静かになった。

オルバニアンらが、入って行く。

そこには、アシュマに組み敷かれた、シュニクが居た。

他の者は、居ない様だ。

「アシュマ！ シュニクだけか？」

オルバニアンが訊く。

「さあな。気配はしないが」

アシュマが答える。

「他の所にも、居ないわよ？」

アルミナが他の部屋から声をかける。

「まさか、コイツ影武者じゃ……！！」

「どうだろうな？ 訊いてみるか」

アシュマは押さえていた膝を、人間の急所から外す。

「ぶはっ！」

途端に呼吸を取り戻す、シュニク。

「お前、本当にシュニク・インジャか？」

オルバニアンが問う。

「違う！ 私は影武者だ！ 本物はとうに逃げてしまった」

その者がそう話す。

「どうするよアシュマ？」

「安心しろ。オルバニアン。本物のシュニク・インジャだ」

アシュマがそう断じる。

ニヤリと笑いながら。

「なんだって？ 何で解るんだよ？」

オルバニアンが訊く。

「人が嘘をつく時の、気の色を発している」

「アシュマに掛かつちや形無しだな。おい」

オルバニアンがにんまりと笑う。

「おのれアシュマ！ 覚えている」

「お前に次は無い。人民法廷で裁かれて、おそらく死ぬ事になるだろう。あつけないもんだ」

アシュマが淡々と話す。

「大人しくしろい！」

オルバニアンが、シュニクに手錠を噛ます。

「くそっ！ おのれえっ！ 忘れんぞ！ この恨み！ わすれんぞ
おお！」

シュニク・インジャが恨みの言葉を並べ立てる。

「この場に、アーチエルが居なくて、正解だったな」
アシュマが言う。

「どうしてさ？」

アルミナが訊く。

「この場にアーチエルが居ると、あの呪いの言葉に、あてられそうだからな」

「うーん。言いえて妙」
ガンロクとビツシュが、シュニク・インジャの両脇を固める。
そのままシュニクは運ばれて行った。

オロの国は今軍需産業が活況だ。
ちよつとした、バブルになっている。

次々と新しい戦艦、魔導機兵がロールアウトしてくる。
オロの旗艦ンディオも、修理が完了した。

まだ無傷な、各国の艦艇もある。

兵力は前回の決戦前の、七割五分まで回復した。
が、それだけではない。

バヴェルの建造が、あと僅かで完了するのだ。

オロはこの余勢を駆って、ノリトレア統合軍の内、最も被害の酷かったクーロン共和国へ、攻め込もうとしていた。

雲霞の如く空を覆って、クーロンへ攻め込むオロ連合軍。

クーロン軍は、統合軍三国の内、最も被害の大きかった国である。
国土には直接被害が及ばなかったものの、国軍は大きく疲弊した。
もうそろそろ、新しい魔導機兵や、艦艇がロールアウトすると言
う時に、オロの連合軍が攻め込んだのである。

国の西から攻めいれられた。

すぐさま、そこへ行かねばならない。

しかし、そこでクーロン軍は、ノリトレア統合軍と分断される。

つまり、クーロン軍は、先行し過ぎたのだ。

クーロン軍は包囲されて、壊滅してしまった。

これを見て、クーロンの若き宰相、リン・シャオリンは、

「ああ！　なんて事を！」

そう叫んだと言う。

ノリトレア・イーハン統合軍はこれを見て、クーロンに攻め込む
のを一時中断した。

今、闇雲に突っ込んでも、負けは目に見えていたからである。
クーロン共和国では、オロの降下部隊が、政府の要所要所を押さえ、政府高官を次々と捕らえた。
だが、リン・シャオリンはなんとか逃げ切り、今は地下に潜んでいるらしい。

ノリトレア統合軍は、ノリトレアの西海岸に集結し、様子を伺っていた。

オロの連合艦隊も、クーロンの東海岸に集結していた。
今回もオロは、旗艦ンディオに乗っている。

ノリトレア艦隊が敗れる。

そんな光景を見たくて、乗り込んでいるのだ。

ノリトレア統合軍は、五百の艦艇、五万の魔導機兵。

対するオロ連合軍は、三千五百の艦艇、四十万の魔導機兵。
圧倒的な、数字の差である。

が、しかし、ノリトレア連合軍には、心強い味方があった。

イボラス、ビニラ、ビムラーの三要塞である。

それに、恐らくオロ連合軍も、最後の艦艇であろう。

これ以上は生産数のキャパシティを、超えるだろう。

絶対に、負けられない筈だった。

今回はアルスティーンも戦場に出た。

皆の反対を押し切って。

アルスティーンも必死なのだ。

ここを突破されれば、敵は本国に到達する。

それだけは、避けねばならなかった。

オロの艦隊は、ノリトレア統合軍を、押し包む様に進軍してきた。
方やノリトレア統合軍は、ハーティアー三世号を先頭に（厳密に言えば更にその先に青龍号が陣取っているのだが）錐の陣形を取ってきた。

アルステインの得意の陣形である。
狙いは一つ。

オロの乗る旗艦、ンディオだ。
以前にも、この戦法を取って勝った。

しかし今度は、敵は、オロへの防御を厚くした。
艦艇の壁を、何倍にも増して、築いたのである。
戦いは、いつ始まっても、おかしくなかった。

ウフェイトウ率いるエルファの騎士団は、当初十三人いた者が今
や数を半減させ、六人となっていた。

マスケドは義を重んじ、仲間を重んじる為、アシュマ達に戦いを
望む物と思われた。

アシュマ達も、アシュマ、オルバニアン、アルミナ、ジークフリ
ート、ビツシュ、ガンロクと精鋭を集めていた。

両陣営がゆつくりと動き出す。

戦端が開かれたのだ。

ノリトレア統合軍は、加速度を増す。

スピードが、何より大事な戦法なのだ。

半円球状の一番奥に居る、オロを目指す。

周囲から、攻撃が、統合軍に集中する。

それでも被害が出なかったのは、アシュマの念導境界面のなせる
業である。

今日もゴンドラの上で、念導境界面を張っていた。

しかし、案の定と言うべきか、ウフェイトウ率いるエルファの騎
士団が現れる。

「アシュマ。貴様を葬りに来た。覚悟せよ」
ウフェイトウが、そう言う。

「そう、簡単に行くかな？」

アシュマが返す。

「我が倒す。それでお仕舞いだ。後の者は雑魚。造作も無い」

ウフェイトウが言い切る。

所詮は人間。

何事があるうか。

「雑魚っていうなあ！！ その雑魚に何人のマスクドが、倒された
と
思っているんだ？」

オルバニアンが割って入る。

他のメンバーも後部ハッチから飛んでくる。

「そうだな。油断だった」

「そう思っているうちは、永遠に勝てんだろうよ」

アシュマが言った。

そこがマスクドの弱点だ。

自分達が絶対者だと思い込み相手を侮る。

そこに油断ができるのだ。

アシュマはそれを言った。

「言っただな？ ならば、試して見るまで。者供、かれ！」

「おう！」

ウフェイトウ以下、エルファの騎士団は、アシュマ達に踊りか
つた。

アシュマは、ウフェイトウと対峙した。

「アシュマよ、今日こそお前を葬る！」

「出来るかな？」

「お前の言う事等、聞く耳もたん！ 行くぞ！」

ウフェイトウは、アシュマに突進しかかった。

その途端、ウフェイトウは、突進をやめた。

アシュマの周りの空気だけが、違うのだ。

アシュマを見ると、無念無想の境地に居る様だ。

「アシュマ……」

これは以前、ウフェイトウを恐怖させた、あの境地である。
秘剣・流星とは位が違う。

どう動いても斬られる気がした。

手足が硬直する。

頭の芯が痺れる。

目が霞む。

ウフェイトウはあの時の恐怖を、思い出した。

相抜け等と言う位では無い。

全く違うのだ。

ウフェイトウは、死を覚悟した。

アシュマは、少しずつ間合いを詰めた。

間合いを詰めた分だけ、ウフェイトウは、無意識に後退した。

オルバニアンはレトウと、対峙していた。

「いつもの魔法剣士の兄ちゃんは、どうしたよ？」

レトウが訊く。

「ああ、シュンマなら、今日は出てこないぜ？ 何せ王子様だからな。出て来れないのサ。…… っといっても、俺も王子さんだけだなあ…… まあ、いいや」

オルバニアンが逸鉄を上段に構える。

その構えは、少し独特で、刀の切っ先が天を衝く様に、構えていた。

「天刀稲妻斬！！」

オルバニアンはそう言った。

「あら、今日はあの可愛い坊やじゃないのネ」

イラはそう言って、スモールソードとスモールシールドを、構えた。

「今日は、レン又は来ないそうだ」

ジークフリートが答える。

「あら、そう。私は貴方も好みだからいいんだけど。どう？ 今度お姉さんと付き合わない？」

浮気性の女だ。

良い男なら何でもいいのか。

「下らない冗談だな」

ジークフリートが冗談だと吐き捨てる。

「あら、後悔しても知らないわよ？」

イラが表情を変えて剣を抜く。

その表情は険しい。

怒ったのだ。

「後悔するかしないかは俺の勝手だ。お前には関係ない」

「そう。じゃあ行くわよ？」

イラがそう言った時、ジークフリートが構えてこう言った。

「秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改」

その間にノリトレア統合軍は、ダメージを受けずに敵陣の中枢、オロの旗艦ンディオをめざす。

三基の要塞イボラス、ビニラ、ビムラーは敵陣の右翼から敵陣を崩しに掛かっている。

敵陣は端と中央から陣形が壊れ始めた。

「今だ！ 敵陣は総崩れだ！」

アルステインが叫ぶ。

旗艦前に、幾重にも陣を張っていたオロ連合軍だが、ノリトレア統合軍が錐の様に穴を開け、広げていった。

「おのれ！ アルステインめ！！ 急速反転百八十度！ 全速でこの空域から離脱！ まだ壁が生きている内に逃げ切るのだ！」

オロが乗っているンディオは、その場から逃げる様に去ろうとし

ている。

「まで！ オロ！」

アルステインが叫ぶ。

聞こえる訳が無い。

ンデイオは逃走に掛かっている。

「くそ……逃げられてしまう……アシュマ君……アシュマ君達は！？」

アルステインはブリッジに有って、オペレータにそれを告げた。
「艦前方、青龍号近辺で、戦いを継続中の様です！」

「そうか。手詰まりだな。いや、アシュマ君達がいてくれたからこそ、ここまで追い詰める事が出来たのかも知れん」

アルステインは呟く様に言った。

「いや、諦めるのは、まだ早い！」

オルバニアンは指揮官席からオペレーターに向けて言葉を発する。

「魔導砲用意！ オペレーター魔導砲発射の旨、射軸上に居る青龍号に伝達。なお青龍号上で戦っているアシュマ諸氏にも直接伝達。

注意を促せ！ 尚、魔導砲発射トリガーは私が取る。艦体左右に開け！ カウントダウン始め！」

ゴクン！

と、いう鈍い音と共にハーティアー三世号の艦体が開いた。

そして巨大な砲が現れた。

魔導砲だ。

「敵艦！ 魔導砲反応です！」

オロ艦隊旗艦ンデイオのオペレーターが告げる。

「魔導砲だと！？」

オロが叫ぶ。

「はい！」

「ブリッジ、切り離し！ 高速飛行モードへ移せ！ 急げよ！」

「は、はい！」

アシュマは今、尚も、じりじりとウフェイトウへ間合いを詰めていた。

最早、ここまで来たら、恐怖は無い。

それとは対照的なのが、ウフェイトウだ。

彼は恐怖に駆られ、今にも逃げ出しそうだった。

しかしそれは許されない。

彼のマスクドとしてのプライドが、それを許さなかったのである。その時ンディオのブリッジが切り離された。

「！」

一瞬我を疑う光景だった。

ンディオのブリッジが切り離されたと言う事は、自分達が見放されたと言う事と、同義ではないか。

アシュマ達にも、アルスティーンから魔導砲発射の報が入る。

傾く青龍号。

魔導砲の発射線軸から、離れようと言うのだ。

「者供、退くぞ！ このままではマスターに見放される」

マスクド達は皆、動揺を隠せないで居る。

が、仕方が無い。

時が時、場合が場合。

時間がなかった。

これによってウフェイトウのプライドは保たれた。

仕方が無いのだ。

そう、仕方無いのだ。

マスクド達が青龍号から去る。

青龍号は射線軸から離れる。

同時に魔導砲が発射された。

響く轟音。

粉碎される艦艇。

その中には旗艦、ンディオも含まれていた。
主の居ない。

兎にも角にも、旗艦がいなくなった事で、艦隊は大混乱になった。
そこへアルステインの名で降伏勧告が伝えられる。

降伏するか、それともしないか。

もし降伏勧告を吞まねば、アシュマ・アトーが、君達を攻撃する
だろうと。

逃げ帰るも良しとした。

これには、参謀達等から異論も出た。

逃がすとは、一体どういう事かと。

答えるには、制限時間を設けた。

一時間だ。

オロ連合艦隊は答える間も無く、一斉に逃げ始めた。

オロ艦隊は凡そ五百の艦艇、五万の魔導機兵を失っていた。

クーロン共和国は、オロの占領期間が、僅か一日と言う事もあり、
短い期間であった為、すぐさま元の政治体制を取り戻した。

早速、クーロンは、敵の次の来襲に備えて、軍備を増強し始めた。

オロは政権基盤を強くするどころか、却って各地で抗議デモやテ
ロ、はたまた小規模な反乱が起こり、政治的求心力の弱さ、脆さを
露呈してしまった。

第八節 オロとバヴェルとアルステーンと

オロは敗北をした。

これを機に、世界中の不満が爆発した。

オロは世界各国で起こりつつある、反オロ運動に対して、怒りと武力で以って、これを鎮圧するつもりでいた。

しかし、今まで力で押さえつけられていた各国が、揃い合わせた様に一斉にオロ・エバス国に対して、反旗を翻した。

今のままでは、オロは孤立し圧倒されてしまう。

「おのれ、虫けら共が！」

オロは怒り心頭に達した。

折角手に入れた、世界の筈だった。

それが、今や、オロの王国を包囲して、押し潰そうとしている。

国の外だけでは無い。

国の中でも、大規模な抗議デモや、抗議行動が、日々勢いを増している。

オロは決心した。

バヴェルを起動するのだ。

反攻する者供には力で押し付ける。

それがオロの流儀だった。

そしてバヴェルがその手段だった。

バヴェルの起動には、前回バヴェルを起動した時の、データを流用した。

これに関して、ナナル・エコリコは反対しなかった。
むしろ遅すぎると思ったくらいだった。

始めからバヴェルを使って、現生人類を滅ぼせば良かったのだ。

「ここで勝たねば、『携拳』のリストから外れますよ？」

ドートネーゼ最高評議会評議委員は、オロの政務室でこう言った。
その言が、オロの気に障った。

「お前らが居ると、世界が益々醜くなるばかりだ」

オロは小銃の銃口を、ドートネーゼ評議委員全員に向けた。

「え、永遠の命は、欲しくはないのか？」

評議委員の一人が叫ぶ。

「我々の今の技術でそんな事は十分可能だ」

オロが冷たく突き放す。

「き、貴様、我々を、裏切るつもりか！！」

「裏切るも何も、仲間になった覚えは無い。これ以上の話し合いは無意味だ。さらばだ、ドートネーゼ最高評議会、評議委員の諸君」

「お呼びでしょうか？ マイマスター」

ウフエイトウが、オロの政務室に呼び出された。

血の匂いがする。

何か有ったのだろうか？

「うむ。バヴェルを起動するにあたり、邪魔な者がいる。そいつらの始末を頼む」

ついにオロはバヴェルの起動を決意した。

「……アシュマ・アトーですな？」

「そうだ。貴様らが何度も苦渋を飲まされ続けたアシュマだ。これで最後だ。次は無いぞ？」

オロが念を押す。

せつかくのバヴェルもアシュマが居てはその効力を発揮できないかもしれない。

不安要素は取り除いておくべきだ。

尤も、そのバヴェルでアシュマを踏みつぶしてしまえば良いのかもしれないが。

「はい。分かっております。背水の陣で当たります」

ウフエイトウはそう答えた。

「最初からそうしてくれれば良いものを」

「申し訳ありません」
「分かったなら行け」

バヴェルの建造現場の最上階。

神人が、バヴェルのコアに制御装置として組み込まれるのを、ナナル・エコリコは見ていた。

ドートネーゼ評議委員達が殺された事実も、知らされないままに後ろから、オロがやって来た。

気配を殺して。

驚くナナル。

「な、何でしょう？ 後ろから急に？ 驚きますわ」

美しい顔が恐怖に歪む。

何故かは知らない。

嫌な予感がする。

「今日までよく、余に仕えてくれた」

オロがナナルに声を掛ける。

何のことか。

「え？」

理解出来ない。

「が、今日からナナル。君は自由だ」

オロはそう言った。

「な、何を言つて……？」

未だ、ナナルはオロの言っていることに理解を得られていなかった。

だがオロは、そんなナナルを無視して、剣を取り出してナナルの鳩尾みぞおちから心臓目掛けて突き刺した。

「うぐっ！ …… な、何故？」

ナナルは信じられなかった。

今まで、オロを支配していたのは、この私。

ドートネーゼのこの私。

その私がオロに刺される。

どう言う事か。

何かの間違いではないのか。

絶望感がナナルを支配していく。

「新しい世界を作るのはドートネーゼではない。余、オロ・エバスだ。さらばだ」

「ぐっ！ かはっ！」

オロはとどめとばかりに、剣に力を込めた。

ナナルはその場で、崩れ落ちた。

オロは、バヴェルに乗り込む。

「バヴェル起動！」

バヴェル復活の報は、すぐさまアルスティーンの耳にも届く事になる。

「なに？ バヴェルが……？」

「はい。急ぎ報告せよと、お爺様じいちゃんが」

報告しているのはキララ・ムラサキである。

ここは、アルスティーンの政務室。

アルスティーンの他にアシュマ等がいた。

「うむ。よく知らせてくれた。ゆっくり休んで戻るが良い」

「いえ、休んでいる暇等ありません。直ぐにでも戻ります。では」

ムラサキは去った。

「まるで嵐だな。所でどう思う？ アシュマ君」

アルスティーンがアシュマに訊く。

「どちらにしても、放って置く訳には行くまい」

アシュマが答える。

「幸い、各国がオロに対して反旗を翻しています。その戦力を結集して当たれば勝てるんじゃないかと思っています」

アルステインが思っていることを話す。

「魔導砲の集中攻撃じゃな？」

ルー・ウィロンが言う。

「ええ。その方法もあるでしょう。細かい戦術は任せます。私は各国の首脳に働きかけて、戦力を結集します」

アルステインは決意を述べた。

アルステインは各国に戦力の結集を呼びかけた。

が、結集どころか、各国は手前勝手に、攻撃すると言つ事が露呈された。

アルステインは、与えられた時間が短い中、必死に各国に訴えかけた。

だが、駄目だった。

皆、自分の国の事しか頭になく、聞く耳を持たなかった。各国の戦力を結集しなければ、勝てないのに。

アルステインは、バヴェルに勝つ別の方法を模索した。

「それは、コアを潰す事だな」

アシュマがそう言った。

「コアですか」

アルステインが返す。

「まあ、そこまでに至るまで苦労するがな。念導境界面。ビーム砲。プラズマ放電。鉄ミミズ。そして、『漆黒の門、裁きの扉』。どれも強力だ。特に念導境界面とビーム砲は鬼虎の念導境界面でも防ぎきれるかどうかが微妙な所だ」

アシュマがバヴェルを分析する。

かつて戦った者の言葉だ。

重みを増す。

「そうですか」

「だが……」

「だが？」

「俺が、無念無想の境地に至れば、鬼虎の力も無限になる。そうすれば活路も見出されるかも知れん」

そうとも言った。

アシュマも鬼虎に賭けたのだ。

「そうですか」

アルステインは少し喜色を示した。

彼らは昼日中、正々堂々と、正面からやって来た。

正門の警備を退け、堂々と通り抜けて行く。

正門広場で、足を止めた。

衛兵が攻めても、軽くあしらわれるだけだった。

「アシュマ！ 最後の決戦だ！ 出て来い！」

彼らの一人がそう言った。

そう、彼らはマスクド、エルファの騎士団だった。

そしてそう言ったのは、団長のウフェイトウだった。

政務室の窓から、それを見ていたアシュマは、

「行つて来る」

と一言残して、部屋を出ようとしていた。

「アシュマさま……」

アーチエルは、何かを言おうとしたが、言葉が出てこなかった。

アシュマが振り向く。

「ウフェイトウにまで、最後の無想の一刀を見せてしまった。奴に

は秘奥義は効かないかも知れん」

アシュマがアーチエルに向けた言葉だ。

自分は負けるかもしれないと言っているのだ。

アーチエルは必死でアシュマを見つめる。

それしかできないのだ。

言葉はでない。

「アシュマさま……」

アーチエルは涙で目が潤んできた。

「しかし、森羅万象、無想の一刀、無想活殺に賭けるしか、最早、手は無し」

アシュマは決意を述べる。

アシュマもそれしかないのである。

「アシュマさま！」

アーチエルが声音を大きくする。

「大丈夫だ。必ず戻る」

そう言つてアシュマがアーチエルを抱きしめる。

「アシュマさま……どうぞ武運を」

アーチエルもアシュマを抱きしめそう言つ。

「有り難い。千万の味方を得た気分だ」

そう言つて部屋を出た。

そしてオルバニアンやアルミナ、ガンロク、ジークフリート、ビツシュと部屋を出て行こうとした。

戦士六人はマスクド達の待つ広場へと向かう。

マスクドの周りには死体が幾体が転がっている。

マスクド達はアシュマ達を認めた。

ウフェイトウが叫ぶ。

「決着をつけに来たぞ！！ アシュマ！！」

「こちらもそのつもりだ！ ウフェイトウ！！」

アシュマは居合に構えをとった。

ビツシュは刀を正眼に構えていた。

対するナトイゲフルは金剛棒を頭上に回してビツシュの攻撃を待っていた。

ビッシュは何事かをぶつぶつと呟いていた。

「どうした？ 待ってるだけじゃ、勝てないぞ？」

ナトイゲフルが言う。

ビッシュは、あの金剛棒は、ビッシュの刀を破壊するだけでなく、ビッシュの頭蓋をも砕く力を、秘めていると見た。

また、ナトイゲフルも下手に棒を繰り出せば、その隙を突いて棒を両断されると見ていた。

お互い実力が拮抗して動けなかった。

幾度か立会いが行われたが、双方の睨み合いが、この立会いまで、ずっと続いていたのだ。

ビッシュはゆっくりと正眼から、下段に構えを変えて行った。

「む？」

ナトイゲフルは疑問に思った。

ビッシュがこの構えをするのが、初めてだったからである。

いつもは、正眼のまま微動だにせず、隙を見せなかったからである。

ナトイゲフルは攻撃を、してみようと思った。

マスケド達には、後が無い。

自分が動かなければ、事態は動かないのである。

ナトイゲフルは頭上から、ビッシュの顔面目指して、棒を繰り出した。

その直後、ビッシュは首を捻って棒をかわし、ビッシュの下段からの刀は後の先を取って、ナトイゲフルの棒を襲った。

棒は、ビッシュの刀によって、中ごろから切り分けられた。

「！ なんと……！！」

ナトイゲフルは驚いた。

次の瞬間、

「マジックブレイド」

ビッシュはそう呟いた。

刀身は白銀色に輝いて、返す刀でナトイゲフルの、頭蓋に吸い込

まれて行った。

ナトイゲフルは、頭頂から顎の先まで斬り割られた。こうあっては、自らを癒す言葉を発する事は叶わない。

ナトイゲフルは絶命した。

ビツシュは力尽きてその場にうずくまった。

が、

「フィナ……勝ったぞ」

と、呟いた。

ジークフリートは何かをぶつぶつと呟いていた。

今、ジークフリートはイラと対峙していた。

「秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改……」

ジークはそう呟いた。

その構えは右の脇構えだが、左肩を異様に突き出していた。

「またその構え？ はつきり言って、やりにくいんだけど。それ」

イラはそう言った。

この構えに入ると、イラはついジークの左肩目掛けて突進したくなる衝動に駆られる。

だが、この構えがジークの誘いである事をイラは知っている。

「駄目よ。誘ったって。いけない子ね」

「じゃあ、これならどうだい？」

ジークフリートは左手を前へ突き出し、こう言った。

「秘剣・裏・閃光一刀・崩し・改・一の太刀」

剣の切っ先は軽く地面に着いた。

「駄目よ。そんなに誘って。お姉さん、つい乗りたくなるじゃない？」

「乗りたければ、乗ってみるのはどうだ？」

「初めて言葉らしい言葉を、話したわね？」

「無駄口は好きじゃない」

「片腕一本じゃその剣は振り切れないわ」

「御託はいい」

「そう。じゃあ行くわよ？」

イラは疾走した。

ジークフリート目掛けて。

その時ジークの剣が唸りだした。

ジークの右腕一本で、その大剣を車に振り出したのだ。
途中、左腕も加わり加速度を増す。

「！」

イラは、自分の判断が、間違った事に気が付いた。

加速度がついた剣を、かわす事が出来ない事を、一瞬にして悟ったからだ。

「マジックブレイド！」

ジークフリートはマジックブレイドのトリガーキーを発動した。

「！」

イラは絶望感に襲われた。

ジークフリートの剣は白銀色に輝きイラの盾を割り、イラの腕を引きちぎり、イラの首を刎ねた。

「終わりだ」

ジークフリートはその場にしゃがみ込んだ。

「以前より、出来る様になったんじゃないのか？」

そう言ったのは、ウゴグロフだった。

「さあ、そんなのは分からねえべ」

ガンロクはそう言う。

ガンロクは二刀の大鉈。

ウゴグロフはクレイモア。

大剣だ。

二刀の有利を生かして、ガンロクは幾つか有効打を、ウゴグロフ

に与えていた。

だが、ウゴグロフに痛手が与えられた気配は、一向に無い。
ガンロクは呪文を唱え始めた。

『紛う事なき汝らの、

誓いたてたる信条は、

天の神に伝わりたもう、

悪鬼に対する天罰の、

怒りをそこに打ち秘めん。

……』

「マジックブレイドか……それを食らう訳にはいかな」

「食らってもらわねばこっちが困るべ」

「そうかい」

ウゴグロフは、クレイモアを、拝み打ちに斬って来た。

ガンロクは大鎧を交差して、打撃を受け止めた。

それ程の打ち込みだ。

「ぐっ……」

力自慢のガンロクが、圧されている。

ガンロクは、もう一つの切り札を、切ってきた。

『我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに。

無にして全、全にして無。

無限の力、その一端を見せん。

我を死の淵から救いたまえ。

纏え漆黒の羽根、

……』

「ブーストか……それも食らう訳にはいかな」

「もうおそいべ！」

そう言っただけでガンロクは、ウゴグロフを足蹴にして、間合いをはずすと、

『ブースト！』

と、言って超高速の攻撃に出た。
重い二刀の高速攻撃。

これにはウゴグロフも堪らなかった。

「おのれ！」

ウゴグロフが悪態をついた所で、足元を蹴られ、四つんばいになった。

『マジックブレイド！』

このタイミングでガンロクはマジックブレイドを使った。

ガンロクの大鉈は、ウゴグロフの首の後ろを斬りつけ、そして刎ねてしまった。

首のなくなったウゴグロフは、血管から何間も血液が飛び出した。
ちくた

「ふう、やったべ。アンさん。喜んでくんろ」

ガンロクは、その場に倒れこんでしまった。

アルミナと、シャケルウが戦っている。

ある意味、もう馴染みになっている。

「マスケドと呼ばれる様になってから、ここまでしぶとく生き残っているのは、お前が始めてだぞ。名は何と言ったかな……あゝ」

「アルミナよ！ アルミナ・ラ・シア！ 覚えて置きなさい……よっ！」

アルミナの上段からの斬り付けだ。

「甘いな」

シャケルウはアルミナの右手に避けて、大槍を突き入れてきた。

「甘いのはそっちょよ！」

アルミナは、ロンリーストライフを、横に叩きつける様にして、シャケルウを打ち据えた。

シャケルウは何間も先に、吹き飛ばされた。

そこからのアルミナは、容赦がなかった。

アルミナは刃筋を立てて、何度も何度もシャケルウを打ち据えた。

反撃の暇も与えぬくらいに。

その間にアルミナは呪文を唱え始める。

『紛う事なき汝らの、

誓いたてたる信条は、

天の神に伝わりたもう、

悪鬼に対する天罰の、

怒りをそこに打ち秘めん。

マジックブレイド！』

最後の一撃は、シャケルウの首筋に決まった。

その後、首は刎ねられ、ロンリーストライフは地に突き刺さった。

「やったあ…… やっと決着がついたあ…… もう駄目。動けないい…

…」

レトウは、大鎌を持っていた。

この大鎌が厄介だと、オルバニアンは思っていた。

なにせ、普通の受け止め方が、出来ないからだ。

鎌の軸の部分で受け止めても、刃の部分が飛び出ている為、こちらを切り裂くのだ。

故に、相手の間合いから外れて、様子を見なければならぬ。

だが、早々時間を、掛けてももらえない。

大逸鉄を持つて来れば、良かったとも思った。

その間にもレトウの攻撃は続く。

「どうした？ 全然攻撃してこないじゃないか？」

その間にもオルバニアンは、何かをぶつぶつと呟いていた。

途端にレトウの攻撃が、ぱったりやんだ。

オルバニアンの雰囲気、がらりと変わったからだ。

オルバニアンは、切っ先を天を衝く様に、真上に立てた。

「天刀稲妻斬！」

オルバニアンの必殺技だ。

胸がから空きだった。

隙だらけだ。

だが、これはオルバニアン誘いのものだ。

それはレトウにも、分かる。

分かるが、そこを攻めずには、いられなかった。

レトウは、から空きのオルバニアンの胸を狙い、鎌を繰り出した。

『ブースト！ マジックブレイド！』

オルバニアンは切り札を使ってきた。

鎌の間の内に入り込み、上段からの稲妻の様な一撃。

レトウは頭の天辺から、心の臓辺りまでを斬り割った。

返り血が、オルバニアンを襲う。

即死だった。

「ふう」

オルバニアンはそのままそこに倒れこんだ。

アシュマとウフェイトウの睨み合いが、続いていた。

じりじりと、時間が流れる。

アシュマはのっけから、秘剣・流星を使っていた。

それに対してウフェイトウは、どうか？

ウフェイトウが失う物等、何も無かった。

ウフェイトウに、最早恐れる物は、何も無かった。

背水の陣だ。

死等、もう恐れていなかった。

アシュマを倒す事のみに集中した。

死をも恐れぬ立ち振る舞いのウフェイトウを見て、アシュマは悟った。

最早、秘剣・流星が、ウフェイトウに通用しない事を。

その時点でアシュマは、無意識に秘奥義・無想活殺を発現させていた。

「そうだ！ その剣だ！ 我をおびえさせたもの！ しかし、その技はもう我には通用せん！」

「そうか。なら試してみるか？」

アシュマは生死の境の境地を越えた。

ウフェイトウも死を恐れない。

剣の腕は両者互角。

後は位がものを言った。

二人は剣を放った。

両者の剣と刀が、光芒を放ち、交差した。

生死の境は、紙一重。

ウフェイトウは、腹部をほとんど切り裂かれていた。

だが、癒しの言葉は言えなかった。

言えば、その瞬間、鬼虎がのど笛を、掻っ斬ったであろうから。

「何故だ？ この差は何だ？ 今一步の所で、お前に勝てぬ。その差は何だ？」

「あえて言うならば、お前は死しか見ていなかった。おれは死中に活を見た。たったそれだけの事よ。正に紙一重だったな」

まさに生死は紙一重だったのである。

「しかし、天は、お前を選んだ！ 紙一重等とは言うが、手の届かぬ境地に、ぐほっ！ さあ、とどめを刺せ！ アシュマ・アトーよ」

ウフェイトウがどつかと腰を落す。

アシュマはウフェイトウの後ろへ回る。

刀を高く上げた。

「アシュマよ！ マイ・マスター……オロ・エバスを止めてくれ！」
「！？」

アシュマは驚いた。

この期に及んでウフェイトウがマスクドラしからぬ言葉を吐いたからである。

「オロは己の私利私欲の為に、バヴェルを動かそうとしている！ それを止められるのはもうアシュマ、お前しかおらん！」

「何故俺なんだ？」

「お前にしか……くほっ！……出来ん事だからだ。頼む」

「俺がお前を生かす。お前が止める。それでは駄目なのか？」

「そんな生き恥を晒してまで、止め様とは思わん！」

「マスケドよのう」

「そうだ。マスケドだ」

「相分かった。後の事は心配するな。きっちりカタをつけてやる！

心安らかにあれ、ウフェイトウよー！！」

「忝い！！」

ウフェイトウは首を切り下ろされた。

それは全く見事な斬り口だった。

「そうですか。エルファの騎士団も壊滅しましたか」

アルステインが、感慨深げにそう言う。

「決着を付けてくれと言っていたが……」

アシユマがそう報告をする。

「ああ。余程オロに、我慢ならぬものがあつたのだらう。悔しそうだった……」

「そうですか。今度は僕も出陣しようかと思っているんですよ」

と、アルステインが言った。

「それは、エファールが許すまい？」

「しかし、あのオロがバヴェルに乗っているのです。誰が止め得る事が出来ましょう？」

「それこそ、アンタを止めるのは、至難の業だわよ！」

玉座の後ろにエファールがいた。

アシユマは気づいていたが。

気づいていて言わないのも意地が悪い。

ところで、アルステインは驚いた。

「げ！ エファさん！」

「『げ!』じゃないわよ、『げ!』じゃ!」

「こ、今度ばかりは、幾らエファさんの頼みでも、聞きませんからね!」

「分かっているわよ! 今度は私も出るわ!」

「エ、エ、エ、エファールさん!」

また、アルステインが驚いた。

こればかりは許せない。

「駄目よ。行くわ。ワタシ」

「エファさん、いけません!」

「どう? いつも引き止める側の、気持ちが分かった?」

「そんな気持ち分かったって、エファさんを引き止められなきゃ、どうしようも無いじゃないですか!」

「『分かったって』って何よ? 大事な所じゃない! 私の気持ちも少しは汲んでよ!」

「……す、済みません」

「で、行くわよ! 良いわね?」

「……はい」

「エファールさんが行くなら、私も行きます」

アーチエルだった。

「アーチエル様、いつの間に?」

アルステインが辛うじて言う。

「さっきから居たよな? アーチエル」

アシユマが言う。

「ええ」

にこやかに微笑むアーチエル。

(いつから居たのよ)

そう思うエファールとアルステインだった。

「だが、駄目だよ、アーチエル。付いて来ちゃ」

アシユマが優しく言う。

「何故で御座いますの?」

アーチエルが聞き返す。

「何故って……危ないからだよ。駄目だよ。アーチエル」

「足手まといなのは分かっています。でも……でも、お願いします！
！ 連れて行って下さい！！」

「駄目だ！」

「行きます！」

「……………」

アシュマは、いつに無いアーチエルの気迫に、気圧された。

「分かった。その代わり、俺の傍から離れない事。いいね？」

「はい！」

アーチエルは満面の笑みでそう答えた。

バヴェル突入に関しては、青龍号単独での突入で、という事になった。

大艦隊で行っても、被害が増すばかり、と考えたからである。

オロ国軍は、テロリスト掃討と称して、反オロ派の思想家や、政治家等を、手前の軍を以ってして、粛清し始めた。

オロは後悔した。

やって後悔したのではない。

初めに、これをしてあげば、よかったのだと。

自分が、殺したいくらいだ。

下では、ちまちまと、殺し合いをやっている。

苛苛としてきた。

何をやっているのかと？

バヴェルの望遠レンズは、実によく辺りの風景を、映し出してくれた。

オロはもう我慢できなかった。

そのテロリスト（と、呼ばれる一家）は、オロから何としても逃げ出そうとした。

が、オロはちよつと、バヴェルを動かしてみた。
そのちよつとが大事おおごとだった。

風をまき、木をなぎ倒し、建物を巻き上げ、人を飲み込んで行く。
これを街中で、やられたのだから、堪らない。

これはバヴェルの外周であるにも拘らず、ちよつとしたハリケー
ン災害の様な物になってしまった。

オロは後悔した。

この惨状ではない。

これでは、狙いの一家の生死が、分からぬでは無いか。
これでは意味が無い。

なので、オロは街ごと、『漆黒の門、裁きの扉』を使用する事に
した。

街ごと葬りさえすれば、後腐れも無く、さっぱりする。

オロはそう考えた。

オロは『漆黒の門、裁きの扉』を使用した。

それも、ごく初期段階の、グレードでだ。

それでも街は、跡形も無く吸い取られ、地球上から消え去った。
凄まじい威力である。

これを大都会でやったら、どうなのか？

想像すると、身震えがおきた。

歓喜の震えだ。

だが、これでは、いかにも大味だ。

もつと細かい物は無いか？

オロは閃いた。

オロのアバターを作成すればいいのである。

簡単だ。

バヴェルのケーブル群で、作ればいいのである。

オロとは、イメージスキャナで、繋がっている。

思いのままで。

次の街に行く。

反オロ勢力が潜伏しているとの情報を得て、オロのアバター様、御自らご出陣。

一体ではない。

千や二千で出陣している。

街の、出口に向く。

バヴェルが当然近くに来ているので、皆逃げる。

車で逃げる者。

バイクで逃げる者。

自転車で、電車で、自分の脚で逃げる者。

逃げる者に対してオロは一斉に発砲した。

指の先から、プラズマの塊が、飛び出るのだ。

それを絶え間なく、撃ち続ける。

飛び散る肉片。

まき散る骨片。

快感だった。

自らの眼の前で、人間がミンチになって行く。

その後、逃げる者は、居なくなる。

全滅した訳ではない。

市民自ら、反オロ勢力の者を、差し出したのである。

オロはその者を、躊躇なくミンチにした。

オロは笑った。

オロの敵を差し出した者も、引きつった笑いをしていた。

中にはその光景を見て戻す者、失禁する者、気を失う者、その様

な者も多数居た。

そんな光景をオロ（のアバター）は一通り見回すと、

「につ

と、笑って飛び去ってしまった。

「もう二度と来んな！ バカヤロウ！」

そついった若者がいた。

その若者は、超長距離射撃で額を打ち抜かれて、絶命してしまっ

た。

「オロは、殺戮を愉しむ男に、なってしまった」

アルステインは、嘆く様に言った。

「あれに乗れば、誰でもそうなる」

アシュマがそう言う。

「早く彼を止めねば……」

アルステインの真意が、何処にあるか誰も知らない。

友にこれ以上罪を被せたくないのか、罪も無い人がこれ以上死んで逝くのを見ていられないのか、それはアルステインにも判然としない所だった。

ただ、一致していたのは、オロの凶行をこれ以上、許してはいけない、と言う事だった。

「なんだって！？ 行くのはアシュマとアーチェルの姫さんとアルステインとエファールだけか！？」

オルバニアンが驚いて言う。

「ああ」

アシュマが返す。

「『ああ』じゃねーよ、『ああ』じゃようー！」

「もう決めた事です」

アルステインが割って入った。

「水臭え事、言ってんじゃねえよ！ 何の為の仲間なんだよう！」

オルバニアンが喚く。

「だからこそ言っているんです」

「俺達や、足手纏いつてか！？」

「そうは言っていないせん」

「同じだろう！？」

「違います」

「同じだろう！？」

「あー、もう水掛け論は止めましょう。確かにこれは、私の我俣です。でも私の我俣の為に、大勢の人間を巻き込む訳には、行かないんです！」

「それが水臭いって言ってるんだよ！」

「……駄目です！」

「アルステインー！」

「大人しく待っていないさい！ 衛兵！」

アルステインは近衛の兵を呼んだ。

「はっ！」

「この者達を、余が帰るまで、ここに止め置きなさい」

「はっ！」

「俺達や軟禁かよ！？」

「そう言う事です」

「あのー武器は取り上げなくて……」

兵が訊く。

「それは構いません」

アルステインが答える。

「では、言つてまいります」

青龍号のコクピットに乗るアルステイン。

なにやら感慨深い物がある。

「久しぶりのコクピットはどお？」

エファールがからかって言う。

「えもいわれぬものがあります」

アルステインが答える。

「そう」

アーチエルは既に半球板の前だ。

アシュマは三基の魔導石の真ん中に座って念を送っている。

「では皆さん発進しますよ？」

アルステインが号令をかける。

「いいわよ」

「はい」

「分かった」

三者三様の反応を見せて、青龍号が発進する。

オロはその日の気分で、街を消したり、銃撃戦を楽しんだり、やりたい放題、し放題だった。

オロはまだアヘイビア大陸から出ていない。

できれば洋上で叩きたかった。

が、このまま放置すれば、人的被害が増すばかりである。

幸いにも、広大な砂漠地帯に、バヴェルが出た。

それいまだ。

と、言う事で、青龍号はオロのコックピットを目指し、突っ込む。
ステルス仕様だ。

近くに来るまで気付かれていない筈だ。

だがバヴェルは、ビーム砲群で攻撃してきた。

万事休す！

ゴンドラ上には、アシュマが居る。

アシュマは、バヴェルのビーム砲群の攻撃を、受け切れるのか。

これは、剣の境地と一緒だった。

一剣が万剣となり万剣が一剣へと帰る。

無限の境地。

無為無想。

無想剣。

その時にこそ、全ての物と一体になる。

幾多の強敵との戦いが、アシュマをその境地へと導いた。

最早、バヴェルのビーム群等、怖れるに足らず。

アシュマはバヴェルのビーム群を全て呑み込んだ。

アルステイーンの操縦する青龍号は、オロが乗るコクピット前に、悠々と着陸をした。

そのぐらいの広さがあるのだ。

四人は青龍号から降りて、コクピットを見上げた。

アルステイーンは、棒ではなく、魔導石製の長槍を携えていた。

アシユマが見ると、下のコクピットには、神人^{かみびと}が格納されていた。

「神人！ まだ居たとは！！」

アシユマが叫ぶ。

「よく来たな。アルステイーン」

オロが言った。

「友として、お前を止めに来た」

アルステイーンがオロを見上げる。

「笑止！ 世界の王たる余には、友等要らぬ！ ただ、下僕が付き従うのみ」

するとオロのアバターが、多数現れた。

「悪ふざけは止める！ オロ！」

アルステイーンは、一喝した。

すると、アバターは消えてしまった。

「その有様を止めに来た。もはや、法廷に出ても極刑は免れんだろ。せめてもの手向けに『俺』が、お前に引導を渡してやろう」

「出来るのかな？ 脆弱な人間であるお前に」

「まるで、神が如き言い様だな」

「そう、その通り。余がこの世に舞い降りた神である。それが証拠に……」

オロは何かを成そうとしていた。

『集え彼の地に刻印求め、

探せ、天の眼この世の秘法。

聞け、七つのラッパを吹き鳴らし、

血の色、臙脂に緋のマント。

馬は蒼ざめ死を司り、

淫婦にその身を堕されて、
鬼神、悪神、加護を受け、
血の刻印の契約によりて今、
汝の約束いざ果たさん。

出でよ冥界！

アポカリプス！！」

なんと、オロまでが、究極の召喚呪文、アポカリプスを唱えた。
すると、地の底から湧き出す様に、世界の色が血に染まった様に
赤くなり、地上と言わず空と言わず水中と言わず悪鬼・ドラゴン・
魔獣の類の大群が押し寄せた。

それも、全世界規模で。

オロはその膨大な念の増幅器に、バヴェルを使った。

「アポカリプスだと！ オロ！」

アシユマが叫んだ。

「わははははは！」

オロは笑った。

勝者の笑いだ。

「オロを倒すしかないのか……」

アルステインが呟く。

アルステインがオロに近づく。

その時一匹の竜がアルステインを食らおうとした。

「！！！」

驚くアルステイン。

そこに巨大な三日月型の飛来物。

アシユマの鬼虎の光の刃だ。

竜は頭を割られ、絶命した。

アルステインはオロを、アシユマは神人を目指した。

神人は、バヴェルと完全に一体化して、動けなかった。

その代わり、バヴェルが強力な念の増幅装置として働いて、神人の
念導境界面たるや、それはもう凄まじい物があった。

マスクド等は、可愛い物で、鬼虎で斬り付けても、傷一つ付かない。

オロの方かというと、やはりバヴェルの強力な念導境界面で守られていて、傷一つ付かない。

「オロ！ 何故こんな事をする！？ 何の為にこんな事を！？」

アルスティーンが叫び声を上げる！！

「何故？ 何の為に？ 痴れた事。わが王国を作る為よ！」

「オロ！ こんな野獣と悪鬼に埋もれた世界が、お前の望みなのか？」

「余の……俺の望み……」

「そうだ！ 望みだ！ お前はこの殺戮に埋もれた世界が、望みなのか！？ これこそ正に地獄ではないか！」

「……………」

「オロよ！ これがお前の世界なのか！？」

「違う！」

「何が違う！？ この様な殺戮の世界を築き上げ、何が違う！？」

「俺は美しい世界を作りたいだけなのだ。美しい自然、美しい生き物、美しい草花……そして美しい人間。美しく調和の取れた世界。

しかし、今のこの世はどうだ。混乱を極めているではないか。人間は地球を食い物にし、自然を破壊しつくしている。だから俺は立つた。後世の歴史家になんと言われてもよい。今は膿だしの時期なのだ。この世から美しくない物を一掃する。それが私の使命なのだ！」

「下を見る！ 足元を見る！ そして聞け！ 地上の人々の阿鼻叫喚の声を！ ようく聞け！！」

「……………」

「それでも清浄な世なのか？ オロよ……」

「俺は……俺は……俺はあーっ！っ！！」

『オロよ、そなたは神なのだ。何を躊躇している』

その時、神人が、口を挟む。

「余計な時に余計な事を！」

アシユマが言う。

「そうだ！ 俺は神だ！！ 神なのだ！！ はあっはっはっは！！」

「オロよ！ お前はそれでいいのか？ 愛する物も無く、愛される訳でもなく、一人孤独で」

「それが世界の覇者たる者よ！！」

「愛あればこそ、清らかな世界ではないのか？」

「愛あればこそ……」

「そうだ！ オロ！」

そこで神人がまた呟こうとする。

『神なればこそ……』

「お前は黙れ！！」

アシユマは一喝した。

すると、オロの念導境界面や、神人の念導境界面までも、弱くなつてしまった。

どうやら、オロの精神状態に、強く反応するらしい。

「さあ、殺れよ。アルスティーン。そのつもりだったんだろ？」

「……………」

「その代わりに約束してくれ。この世を、この世界を美しく清らかに……………」

「分かった。出来る限りの事はしてみよう」

「お前らしい答え方だ。さあ、殺ってくれ」

「オロ……我が友よ……………」

「お前はまだ、俺の事を友と……………」

「当たり前だ。友以外の何者だ？ 俺は」

「ふふふ。昔はよくお前にこうして叱られたものよ。さあ、時間だ。もうこれ以上、神人を押さえつけていられない」

「オロ……………」

「さあ、殺れ！ 心臓目掛けて！ さあ！！」

オロはカプセルの中で両手を広げた。

「オロ……………」

アルステイーンは躊躇^{ちゅうちう}する。

「さあ、アルステイーン！ 時間が無いんだ！」

「オロ……！」

アルステイーンは目を瞑りながら、オロの心臓目掛けて槍をついた。

鈍い感触が手に伝わる。

「流石だ……寸分の狂いも無い」

オロが言う。

「オロ……」

同時に、念導境界面が、オロに同調して弱まっている神人に、アシユマは斬りかかった。

『ピギヤツ……！』

奇妙な叫び声（？）をあげて両断されてしまった。

アポカリプスは、いつの間にか掻き消えていた。

「これで終わっただんですね？」

アルステイーンが言う。

「いや、両断面が綺麗過ぎる。直ぐに復活するぞ」

「そうなの？」

いつの間にかエファールが来ていた。

「ああ、そうだ。邪魔だからどいている。復活前にケリをつけてやる！」

「さあ、エファール様、少し下がりましょう？」

アーチエルが言う。

「鬼虎よ。無限の力を我が前に示せ……！」

アシユマは凡そ半径三メートル、直径六メートルの黒色の塊を作る。

そしてそれが消えた時にはぽっかりと空洞が出来て跡形も無くなっていた。

「これでお仕舞い？」

エファールが訊く。

「いや、後は本体の処理が残っている」

アシュマが言う。

「本体の処理？」

「そうだ」

アシュマは三人を青龍号へ返し、安全な所まで退かせると、例の眩い光を起こした。

その眩い光は暗転し巨大な黒い球形になったかと思うと、急速に収縮した。

終節 星誕祭

今年からスコラでは、星誕祭と言う催しが開かれる事になった。これはアシュマ達が、この星を守った事に対して行われる、感謝の催しだった。

スコラの校庭でもあり、王宮公園の一角であるその広場に、皆めいめいに夜空の星を楽しんだ。

オロ・エバス国（社）は解体。

国名はアヘイビア共和国連邦に戻る事に。

オロ・エバス国の重職に就いている者達は、皆、悉く捕らえられた。

世界は今はまだ、混沌の中だ。

ノリトレアは王国を解体し、共和国に移行した。

アルステイン国王は国の象徴として、政治の第一線から退いた。憲法も改正された。

今も、アルステインは、エファールと共に星を見ている。

オルバニアンと、アルミナは星誕祭を待たずに旅立った。

また、フリーのバウンティーハンターとしての途に就いた。

イーハンは王、シュンマ・イーハニアを迎えるに先立って、筆頭家老オムロ・セタが政権を維持する事が決まった。

シュンマがまだ、スコラで学んでいる為だ。

今では、キュポアと仲良く授業に出ている。
そして今も二人は手を繋いで星を見ている。

レンヌはリイナと手を繋いで星を見ていた。
レンヌの兄であるディーヌ王子とアルルマ・サンファは故郷である
アールヌーに帰って行った。

まだまだ混迷を深める地帯であり時期である。
が、レンヌには色々と学んでもらいたいのとディーヌの願いであった。
そして、こうしてレンヌはリイナと星を見ていた。

ガンロクとアンは明日帰るそうだ。
レキシタニアのあの谷に。
その前に星誕祭を二人で楽しんだ。

ビッシュ・ノマンとフィナは子供が生まれるのを待ちわびる日々を送っている。

そんな事も話題に上りながら、アシュマとアーチエルは、肩を抱き合い、夜空を見ていた。

大都会なので、決して星を見るのに適した環境ではないが……。
それでも二人は会話を楽しんでいた。

「矢張りオロ様は、美しい世界を、望んでいたのでしょうか？」
アーチエルが訊く。

「今となっては分からない。オロだけが知っているだろうさ」
「そうですね」

「果たしてそれは、人の領分だったのだろうか？」

「え？」

「いや、何でもない」

「アシュマさま」

「アーチエル……」

二人は口付けをする。

優しいキスを。

いつまでも、いつまでも。

第十三話 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4548k/>

閃光のアシュマ 第十三話 美しき世界

2011年11月23日15時52分発行